

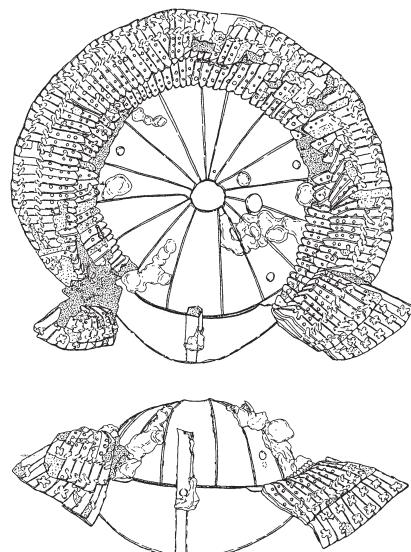
埼玉県加須市

騎西城跡

KB15区調査

－中近世編－

遺物 1



2022
加須市教育委員会

埼玉県加須市

きさいじょうあと
騎西城跡

KB15区調査

－中近世編－

遺物 1

2022

加須市教育委員会



*左吹返しの下辺はかくれている

兜 上面・前面

口絵 2



兜 右側面



兜 左側面



兜 背面・内面

図絵4



左

右



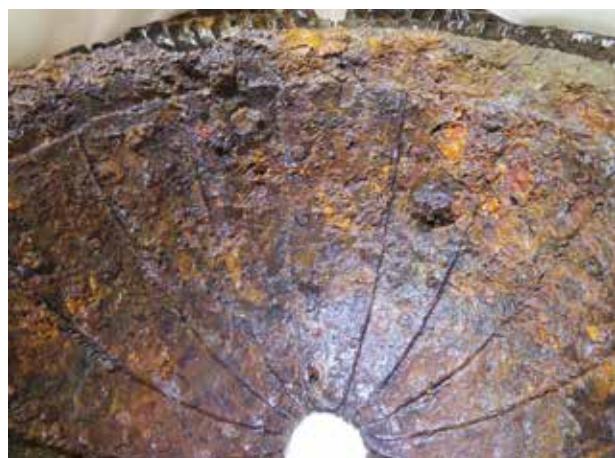
天辺の穴



前部



右部



後部



左部

鉢 内面



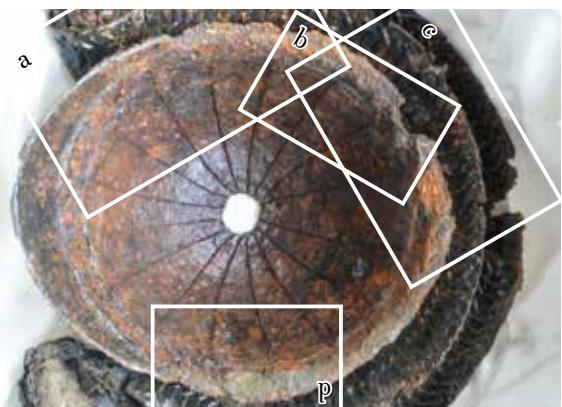
a 鉢付鉄 第103図3 の (5)



同左 拡大



b 鉢付鉄か 第103図3 の (6) ?



c 不動鑲跡か



同左 拡大



d 鉢付鉄か (4)



同左 拡大

図絵 6



腰巻板 左前部 孔 第103図3 の (2)



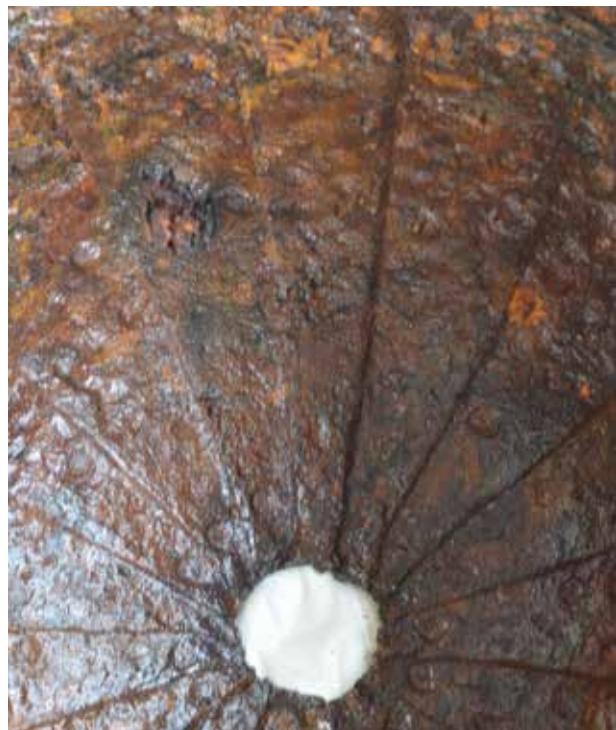
同左 拡大



腰巻板 前部 孔 第103図3 の (9)



同左 拡大



前正中板 周辺

鉢 内面



後正中板 周辺



青磁

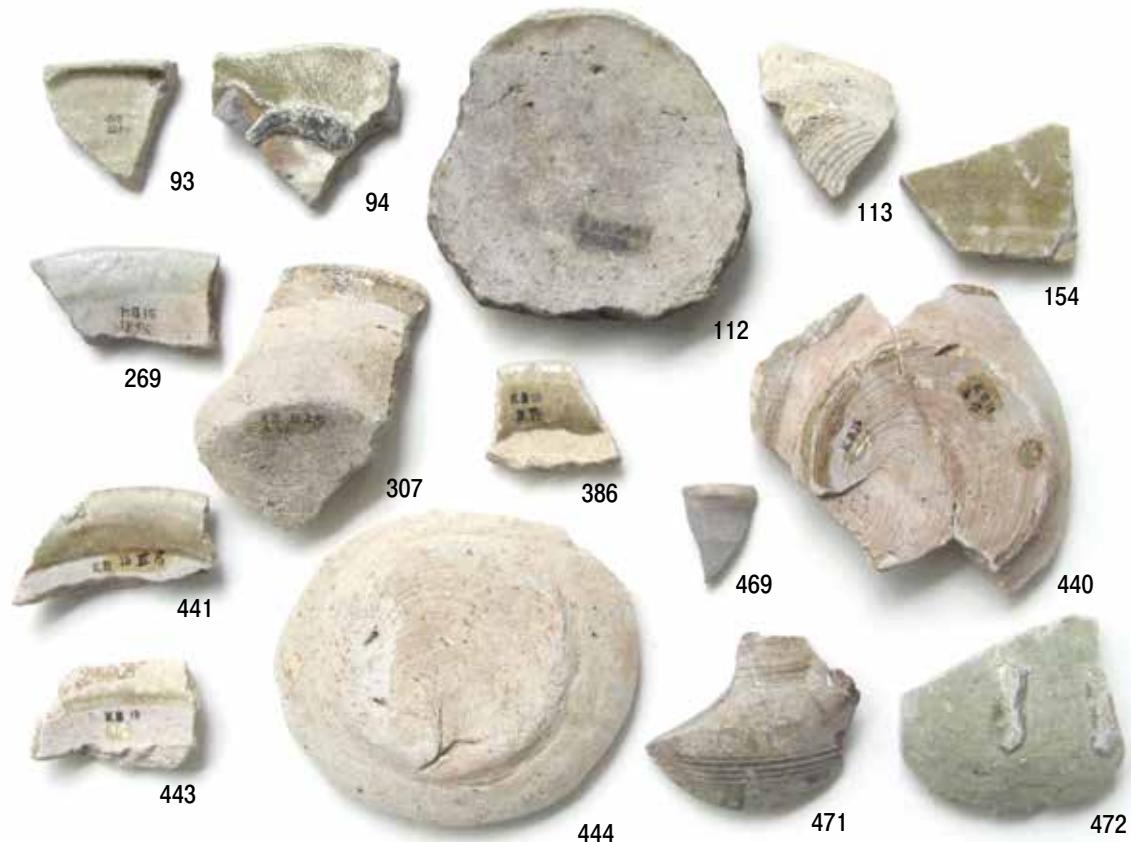


白磁



染付

口絵 8



古瀬戸



志野・織部・黄瀬戸



肥前陶器



口絵 10



|



119



122



170



38



212



284



336



448



59



38



92



39



290

皿・天目茶碗



220



245



225



468



233



291



234



352



235



436

碗

口絵 12



13

肥前陶器瓶



24



45

水滴



瀬戸美濃大鉢



63

鬼形水滴



64

志野向付



82

在地香炉



31

備前カ壺



270

入子



櫛



下駄



下駄の歯



下駄



下駄



木製品 1

口絵 14



5



6



8



9



11



12

下駄

木製品 2



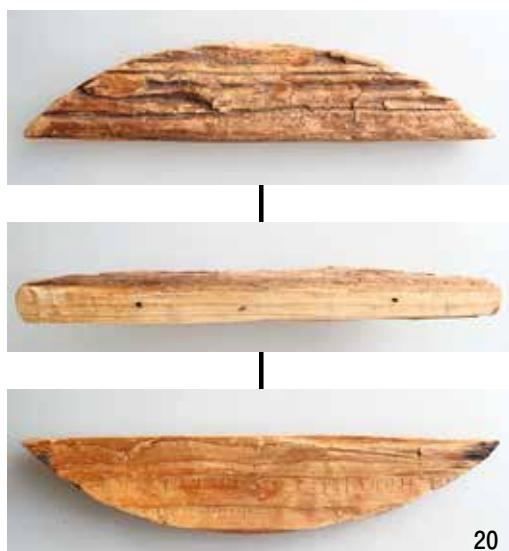
13

自在鉤カ



18

桶一側板



20

桶一底板



19

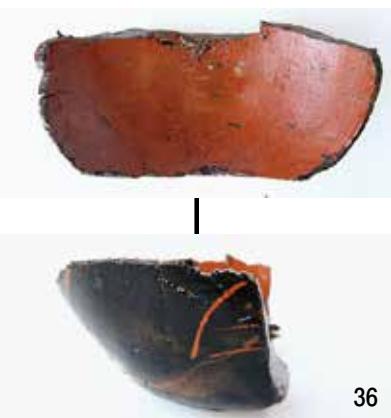
桶一側板



25

桶一側板一式

口絵 16



漆椀

木製品 4



漆椀

木製品 5

口絵 18



48



49



|



|



50



51



|



|



52



53

漆椀

木製品 6



56



54

漆椀



55

漆椀



58

漆椀一高台



60

折敷一底板



59

漆鉢



62

腰刀カ

口絵 20



15・16

湯釜



湯釜 底部



1-2

鉄鍋



1-6



薙鎌



轡

口絵 22



袋入り錢貨（保存処理後 錢貨はレプリカ）



非鉄金属

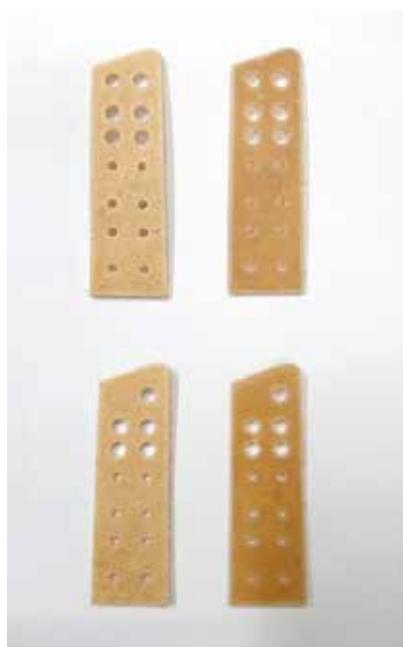


図4 鞘の札 上段は四目札。下段は並札



図6 試みに自作櫛引八幡宮白糸摺取威鎧鞞札を当該兜に重ね大きさを比較した。

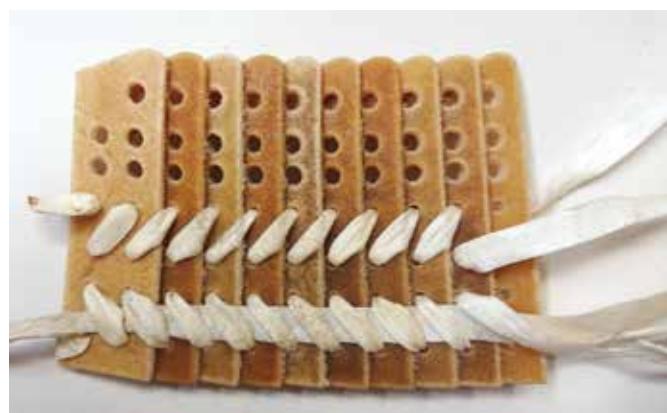


図5 上下二本取りの綴じ 下段には同じ材料で敷を加えた。



図7 組紐による素掛威及び菱縫の例を示す。騎西城兜と粗同時代の腹巻の残欠。

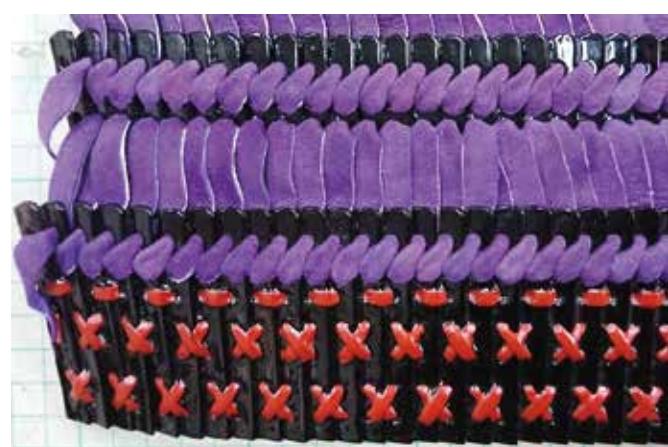


図8 著者作品による韋の毛引威および描菱の組み合わせを示す。

図絵 24



図9 新潟県立歴史博物館所蔵 兜眉庇裏側
腰巻板の継ぎ合わせ・留鉢の処理・要害板の設けが無い事が確認できる。また画像上部左右に金銅製の不動鑓が見える。



騎西城跡出土兜



図10 個人蔵 三十間星兜
「越後之國住村松作宗吉」の銘が鉢裏に刻まれている。
四段下がりの板札を紺糸で素掛威としている。なお
この鞆は鉢よりも幾らか新様なようである。



図11 新潟県立歴史博物館所蔵 六十間筋兜
鉢裏に「永禄六年癸亥八月吉日越後之國村松作」の
銘を刻む。鉄板叩き出しの板札三段下がりの鞆。

序

加須市は埼玉県の北東部に位置し、利根川をはじめ多くの河川を擁する豊かな田園地帶です。

市の南部に位置する騎西地域はその中央に騎西領48カ村の総鎮守といわれた久伊豆神社（玉敷神社）が鎮座し、源頼朝の上洛に従った多賀谷氏や道智氏という武藏武士を擁した歴史のある地域であります。

地域には、旧石器時代から江戸時代までの遺跡が多数所在しております、進行する都市化にともなう開発により事前に発掘調査を実施しております。

今回の調査報告は、平成元年から2年に掛けて実施された根古屋地区に所在する騎西城跡KB15区調査の記録です。調査の結果、城郭部を囲む障子堀、当時の橋や土壙・井戸の跡、いくさに使用した兜・轡・薙鎌や茶の湯の湯釜・袋入り銭貨など貴重な遺構・遺物が検出されました。なかでも、障子堀の底から出土した兜は、吹返し・鞞が遺存し、出土品としては非常に希少なもので、保存処理を施し、市の指定文化財として保存公開をしているところでございます。

これらの調査成果は城館跡の研究をする上で、騎西城の重要性を再認識することとなりました。

本報告が文化財の保護に対する理解の一助として、また郷土資料として広く活用されることを望んでおります。

最後になりましたが、調査の実施、本書の刊行に当たりまして深いご理解と多くのご協力をいただきました関係各位の皆様に対しまして深く感謝申し上げます。

令和4年3月

加須市教育委員会

教育長 渡邊 義昭

例　　言

- 1 本書は埼玉県加須市騎西地域内遺跡の発掘調査報告書である。紙数の都合により遺構等は、次年度報告する。
- 2 発掘調査は根古屋外川土地区画整理に先立つもので、平成元・2年に実施したものである。
- 3 本書の刊行に際して次のように作業に当たった。
 - (1) 執筆
　　第Ⅰ・Ⅱ章、Ⅲ章第1・3～6節　嶋村英之
　　第Ⅲ章第2節　木製品　　　　　　嶋村薰
　　第Ⅳ章　騎西城跡出土十六間筋兜については、
　　豊田勝彦氏より玉稿を賜った。
 - (2) 写真撮影は現場は調査担当者が、その他は嶋村英之のもと遺物整理者が行った。
 - (3) 出土品の整理・基礎データ・図版の作成は下記の指導者のもと、遺物整理者・整理協力員が行った。

指導者

土器類・金属製品・兜　嶋村英之
土器類の一部　島村範久（～平成23年度）
錢貨　坂本征男（～平成23年度）
※木製品は嶋村薰が担当した
兜の下面実測・写真撮影のための逆位設置には、朝重嘉朗氏のお手を煩わした。

『騎西町史考古資料編1・2』掲載のものは本報告を優先する。

土器類・木・金属製品の一部は『騎西町史考古資料編1』を修正転載した。

- 4 本書の編集は嶋村英之が行った。
- 5 資料は加須市教育委員会が保管している。
- 6 「騎西」城は「私市」城とも記すが武家屋敷が存在していた時期の絵図により「騎西」城とする。
- 7 スラグという語は既報告では「金属加工に伴う非金属製のカス」を指していたが、スラグ（鉱滓）は本来「鉱石を溶鍊する際に生じるもの」とされ、不適切な用語と考えられるため今後「金属加工滓」とする。
- 8 調査及び報告に際して下記の方々からご指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。
(敬称略)

伊澤昭二　今福匡　上田治男　宍戸昭彦　藤本正行
前島敏　三浦一郎　水口由紀子　豊田勝彦
守屋（嶋村）薰
桶川市東部遺跡群発掘調査会
(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
(株)東都文化財保存研究所　代表取締役　朝重嘉朗
新潟県立歴史博物館

調査組織

- 1 発掘調査組織　(平成元・2年度)
　　調査主体者　騎西町教育委員会
　　担　当　者　主査　島村範久　主事　嶋村英之
　　　　　　　主事　坂本征男
　　調査協力員
　　青木のい　赤羽根松吉　秋池角藏　梓沢ユキ子
　　新井富子　五十嵐喜一郎　五十嵐米太郎　石井たね
　　石井寿美子　伊藤ツネ　今井竜吉　大熊文
　　岡田金之助　岡田光子　小川征子　金久保りき
　　栗原政子　国分敏明　国分良吉　小久保衛
　　小坂忠一　小森谷アサ　小森谷二三子　齊藤健一郎

齊藤年治　齊藤ふ志　佐藤ヨシ　須永春雄
関口しげ　関口信幸　関口のぶ　関口義雄
関口守男　関口千代　田口ふみ　田口島藏
田島汀七　土屋とよ　内藤ふく　中島かづ江
日下部秀美　福島清作　福島幸蔵　福島利男
松永鶴子　松村一枝　山口保雄　柳田典子
吉野武一　若林クニ子　渡辺サヨ　若林美知子
　　整理協力員
　　秋山ノリ子　佐藤道子　金久保玲子　方波見良子
　　松本千歳　吉田美津

2 整理組織（令和3年度）

整理主体者	加須市教育委員会
教育長	渡邊義昭
生涯学習部	部長 江原千裕 副部長 石井幸子
生涯学習課	課長 鳥海和彦

文化財担当 主幹 坂本征男

主査 岩渕美恵
再任用主任 嶋村英之
遺物整理者 小川美津子 嶋村薰 長谷川恵 松村順子

凡例

1 本文および表について

- () の数値は残存値である
- ※は不確定な推定復元値
- 煩雑な記載を避けるため下記の通り略した。
 □号堀→□堀。 □井戸状遺構→□井戸・□井。
 □号溝→□溝。 □号土壙→□壙
- 銭貨の文字は欠損等しているが確定できるものは明記した

2 插図について

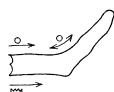
- 縮尺は以下の通りである
- 遺物 土器類 1／3～4 木製品 1／3
金属製品 1／1～3 (銭貨 1／1)
- 遺物の図ナンバーは製品毎に通しとした。必要に応じて遺物のNoに種別の略号を冠した。土器類(土)、木製品(木)、金属製品(金)

磁器



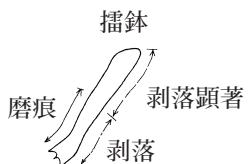
▲ 軸際

かわらけ

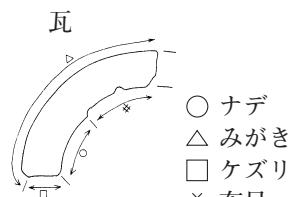


○ 指頭ナデ
■ 板ナデ

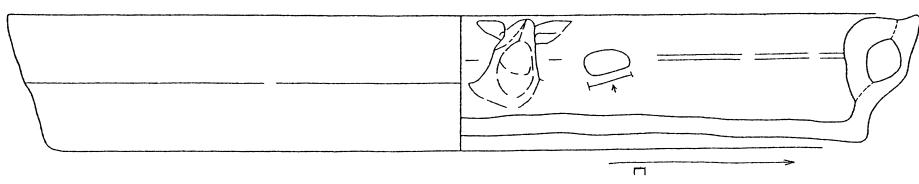
擂鉢



瓦



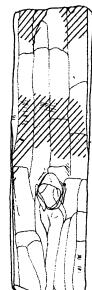
ほうろく



□ 板状痕

↑ 指頭押圧

木製品



アミは
炭化部分

3 遺物IDについて

加須市騎西地域の遺物については、個体識別のため下記のとおり遺物IDを付した。（報告では木・金属・石製品の一覧表に掲載する）

※ただし、町史及び調査次ごとに簡略なIDを付しているものもある。（主に土器類）

IDの構成は、「時代+遺物名-遺跡No.+調査種別-調査次数-ナンバーリング」とする

時代

1 旧石器／2 繩文／3 弥生／4 古墳／5 奈良平安／6 中近世／7 近現代／8 -／9 不明

遺物名

● 0 X (01石器／02土器／03土製品／04石製品／05瓦／06板碑／07埴輪／08石造物／09他) ● 1 X- ● 2 X
- ● 3 X- ● 4 X 生産遺物 (41鋳物類／42漆付着) ● 5 X (51銭貨) ● 6 X 木・金属製品 (61木製品／
62鉄製品／63銅製品) ● 7 X 陶器 (71碗(碗・平碗)／72皿／73鉢(平鉢・鉢・擂鉢・捏鉢・片口鉢・大
皿・火鉢・小鉢)／74香炉／75天目・小天目／76-／77袋(甕・徳利・壺・梅瓶)／78ほか(茶入・汁注・
水滴・小壺)／● 8 X 磁器 (81貿易青磁／82貿易白磁／83貿易染付／84肥前／85瀬戸・美濃／89不明)
● 9 X 素焼土器 (91皿(かわらけ)／92壺・甕／93片口鉢／94擂鉢／95鍋(内耳鍋-土鍋・ほうろく)／
96-／97土釜／98火鉢／99ほか(向付・香炉・風炉など)

遺跡No. (調査名)

010私市城跡／020多賀谷氏館跡／030道智氏館跡／070私市城武家屋敷跡／080戸崎城跡／090修理山遺跡／
100萩原遺跡／110保寧寺中世墓址／120長宮北遺跡／131三重堀遺跡／132観音堂遺跡／133長宮遺跡／134道
南遺跡／140道北遺跡／150中郷遺跡／160種垂城跡／171三番遺跡／172小沼耕地遺跡／180五番遺跡／999不
明／000遺跡外

※KB14・15・18・19区は本来010であるが、KB（私市城武家屋敷跡の略称）を受け070とした。

調査種別

0 ほか(妙光寺)／1 表面採集／2 分布調査／3 試掘調査／4 個人住宅等／5 区画整理(KB)／9 不明

調査次数

1 次=0001 読替(0000=表採／0020=大英寺区／9901=シ-99-1／9999=不明)

ナンバーリング

通し番号 0001～

遺物ID 例

中近世+木製品	KB15 (私市城跡15区)	0001
6 6 1	- 0 7 0 5 - 0 0 1 5	- 0 0 0 1

4 製品別分類について

木・金属製品については、報告に当たり、下表のとおり大・小の分類を行い、順に掲載した。

大分類	木製品 〈革・繊維〉	金属製品	
		鉄製品	銅製品 (非鉄金属)
生活			
衣	下駄／櫛	毛抜き	鏡／毛抜き／簪
調理	鍋敷／鍋蓋／(堅杵)	鉄鍋／包丁／刀子	
貯蔵	桶／柄杓	蓋	
食膳	皿／椀／杓子／折敷／箸		曲物状容器
暖房／灯り		火箸／火打金	
住		釘／鎚／鉗	釘／飾り金具／把手
喫茶	茶器	湯釜	
遊び	将棋の駒／羽子板／(煙管)		煙管
文具			
生業			
耕作	箕／田下駄	鎌	
加工	横槌／木錘／堅杵	紡錘車／小刀／鉄	紡錘車
鍛冶			
信仰			
まじない	護符 (蘿民将来符) ／呪符／舟形		
弔い	位牌／数珠	香炉／鈴／鏡	錢貨／銅鏡／鈴／香炉
経済／流通			
貨幣	錢貨の袋	錢貨	錢貨
流通	荷札		分銅
いくさ			
甲冑	(兜) ／前立	兜／小札	笄金物／鞋／鎧／八双鉗
刀		腰刀／小柄刀身／笄	刀装品／小柄／笄
槍		槍先	
弓矢		鎌	
火縄銃	竹束	(火打金) ／弾丸	火縄挿／弾丸
馬具	馬鐙／おもがい	轡／四方手	馬面／野沓
ほか	(蘿鎌)	蘿鎌	

目 次

序／例言／目次	
第Ⅰ章 遺跡の立地・環境	
第1節 遺跡の位置	1
第2節 遺跡の地理的環境	1
第3節 遺跡の歴史的環境	2
第Ⅱ章 調査に至る経過	9
第Ⅲ章 出土した遺物	17
第1節 土器類	17
第2節 木製品類	67
(1) 概要	67
(2) 自然科学分析	93
第3節 繊維製品	99
(袋入り銭貨・布・繩)	99
第4節 金属製品	101
(1) 鉄製品	101
(2) 非鉄金属	102
(3) 銭貨	102
第5節 金属の生産	135
第6節 兜	136
(1) 発掘調査	136
(2) 取り上げ	136
(3) 開梱・保存処理	140
(4) 兜の実測及び写真撮影	140
(5) 兜の概要	140
第Ⅳ章 兜考察	155
騎西城跡出土十六間筋兜について	155
図版／報告書抄録	

挿図目次

第1図 遺跡の位置 (騎西地域)	1
第2図 周辺の微地形分類と縄文・古墳時代遺跡	3
第3図 周辺の微地形分類と城館跡	3
第4図 騎西城を取り巻く勢力図	6
第5図 調査区の位置	8
第6図 周辺の調査	10
第7図 遺構位置図 (上層)	11
第8図 遺構位置図 (下層)	13
第9図 トレンチ位置図	15
第10図 土器類1	20
第11図 土器類2	21
第12図 土器類3	22
第13図 土器類4	23
第14図 土器類5	24
第15図 土器類6	25
第16図 土器類7	26
第17図 土器類8	27
第18図 土器類9	28
第19図 土器類10	29
第20図 土器類11	30
第21図 土器類12	31
第22図 土器類13	32
第23図 土器類14	33
第24図 土器類15	34
第25図 土器類16	35
第26図 土器類17	36
第27図 土器類18	37
第28図 土器類19	38
第29図 土器類20	39
第30図 土器類21	40
第31図 土器類22	41
第32図 土器類23	42
第33図 土器類24	43
第34図 土器類25	44
第35図 土器類26	45
第36図 土器類27	46
第37図 土器類28	47
第38図 土器類29	48

第39図	土器類30	49	第73図	金属製品類8（鉄8）	110
第40図	土器類31	50	第74図	金属製品類9（非鉄金属）	111
第41図	土器類32	51	第75図	金属製品類10（錢貨1）	112
第42図	土器類33	52	第76図	金属製品類11（錢貨2）	113
第43図	木製品類1	71	第77図	金属製品類12（錢貨3）	114
第44図	木製品類2	72	第78図	金属製品類13（袋入り錢貨1）	115
第45図	木製品類3	73	第79図	金属製品類14（袋入り錢貨2）	116
第46図	木製品類4	74	第80図	金属製品類15（袋入り錢貨3）	117
第47図	木製品類5	75	第81図	金属製品類16（袋入り錢貨4）	118
第48図	木製品類6	76	第82図	金属製品類17（袋入り錢貨5）	119
第49図	木製品類7	77	第83図	金属製品類18（袋入り錢貨6）	120
第50図	木製品類8	78	第84図	金属製品類19（袋入り錢貨7）	121
第51図	木製品類9	79	第85図	金属製品類20（袋入り錢貨8）	122
第52図	木製品類10	80	第86図	金属製品類21（袋入り錢貨9）	123
第53図	木製品類11	81	第87図	金属製品類22（袋入り錢貨10）	124
第54図	木製品類12	82	第88図	金属製品類23（袋入り錢貨11）	125
第55図	木製品類13	83	第89図	金属製品類24（袋入り錢貨12）	126
第56図	木製品類14	84	第90図	金属製品類25（袋入り錢貨13）	127
第57図	木製品類15	85	第91図	金属製品類26（袋入り錢貨14）	128
第58図	木製品類16	86	第92図	金属製品類27（袋入り錢貨15）	129
第59図	木製品類17	87	第93図	金属製品類28（袋入り錢貨16）	130
第60図	木製品類18	88	第94図	金属製品類29（袋入り錢貨17）	131
第61図	木製品樹種同定試料	95	第95図	金属製品類30（袋入り錢貨18）	132
第62図	木製品光学顕微鏡写真1	96	第96図	金属製品類31（袋入り錢貨19）	133
第63図	木製品光学顕微鏡写真2	97	第97図	袋入り錢貨錢種別点数	134
第64図	木製品光学顕微鏡写真3	98	第98図	鞆の羽口	135
第65図	纖維製品（袋入り錢貨）	100	第99図	兜1（正面・側面・上面・内面図）	145
第66図	金属製品類1（鉄1）	103	第100図	兜2（背面・断面図）	147
第67図	金属製品類2（鉄2）	104	第101図	兜3（出土状態）	149
第68図	金属製品類3（鉄3）	105	第102図	兜4（各部名称・地板矧ぎ合わせ）	151
第69図	金属製品類4（鉄4）	106	第103図	兜5（鉢間隔・地板・腰巻板）	152
第70図	金属製品類5（鉄5）	107	第104図	兜6（鉢内面の鉢と穴・札板）	153
第71図	金属製品類6（鉄6）	108	第105図	兜7（鉢各部計測値）	154
第72図	金属製品類7（鉄7）	109			

表目次

第1表	遺構一覧表	16	第15表	土器類一覧表14	66
第2表	土器類一覧表1	53	第16表	木製品一覧表1	89
第3表	土器類一覧表2	54	第17表	木製品一覧表2	90
第4表	土器類一覧表3	55	第18表	木製品一覧表3	91
第5表	土器類一覧表4	56	第19表	木製品一覧表4	92
第6表	土器類一覧表5	57	第20表	木製品樹種同定結果	95
第7表	土器類一覧表6	58	第21表	金属製品一覧表1（鉄製品）	110
第8表	土器類一覧表7	59	第22表	金属製品一覧表2（非鉄金属）	111
第9表	土器類一覧表8	60	第23表	金属製品一覧表3（錢貨）	114
第10表	土器類一覧表9	61	第24表	金属製品一覧表4（袋入り錢貨）	133
第11表	土器類一覧表10	62	第25表	鉢内面の鉢間隔	152
第12表	土器類一覧表11	63	第26表	地板の長さ	152
第13表	土器類一覧表12	64	第27表	鉢各部計測値	154
第14表	土器類一覧表13	65			

図版目次

図版1	出土遺物 呪1		図版21	出土遺物 土器類8	
図版2	出土遺物 呪2		図版22	出土遺物 土器類9	
図版3	出土遺物 呪3		図版23	出土遺物 木製品1	
図版4	出土遺物 呪4		図版24	出土遺物 木製品2	
図版5	出土遺物 呪5		図版25	出土遺物 木製品3	
図版6	出土遺物 呪6		図版26	出土遺物 木製品4	
図版7	出土遺物 呪7		図版27	出土遺物 木製品5	
図版8	出土遺物 呪8		図版28	出土遺物 木製品6	
図版9	出土遺物 呪9		図版29	出土遺物 木製品7	
図版10	出土遺物 呪10		図版30	出土遺物 木製品8	
図版11	出土遺物 呪11		図版31	出土遺物 木製品9 繊維製品1	
図版12	出土遺物 呪12		図版32	出土遺物 繊維製品2	
図版13	出土遺物 呪13		図版33	出土遺物 金属製品1	
図版14	出土遺物 土器類1		図版34	出土遺物 金属製品2	
図版15	出土遺物 土器類2		図版35	出土遺物 金属製品3	
図版16	出土遺物 土器類3		図版36	出土遺物 金属製品4	
図版17	出土遺物 土器類4				
図版18	出土遺物 土器類5				
図版19	出土遺物 土器類6				
図版20	出土遺物 土器類7				

第Ⅰ章 遺跡の立地・環境

第1節 遺跡の位置（第1図）

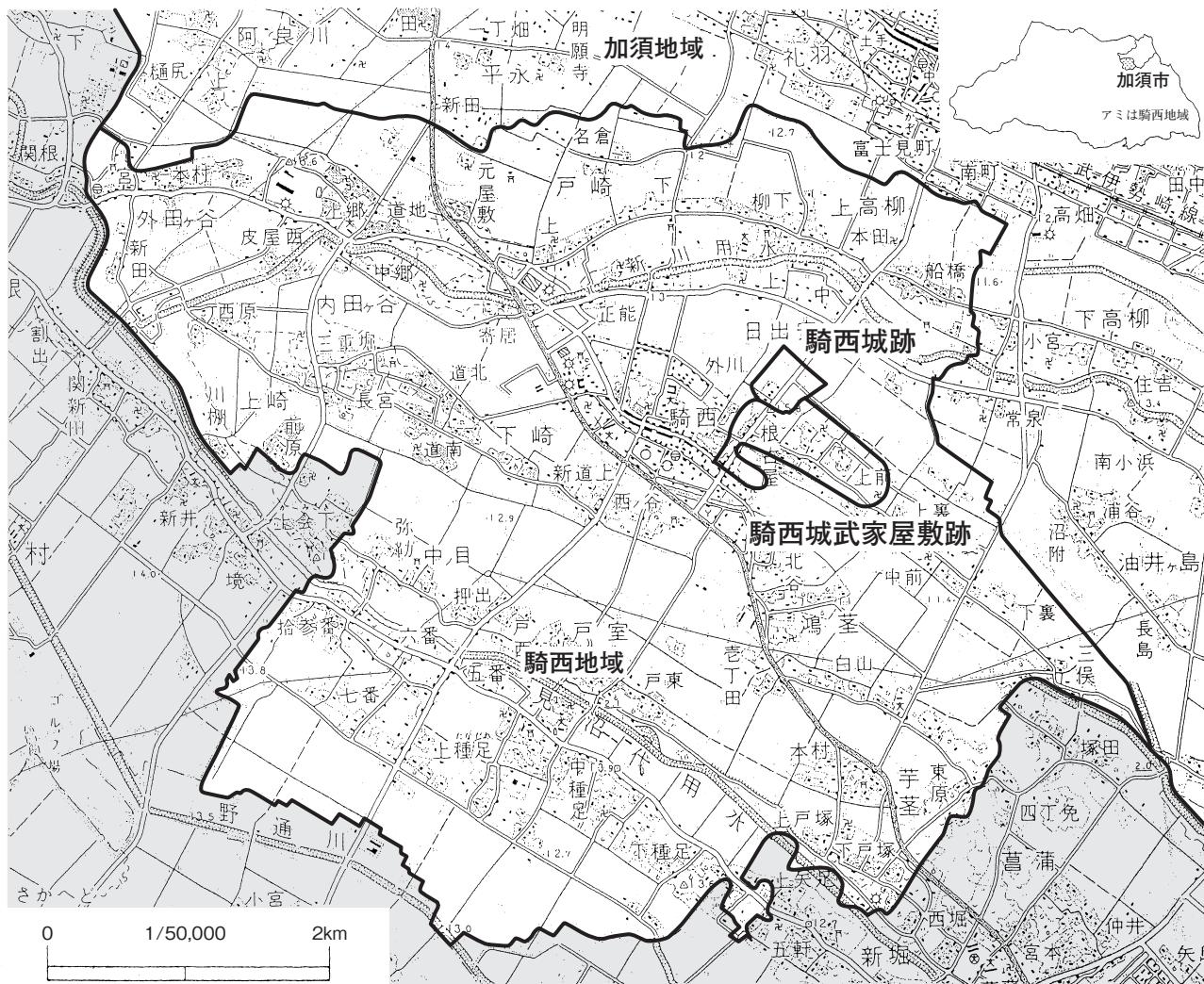
加須市騎西地域は埼玉県北東部に位置し騎西城武家屋敷跡はそのほぼ中央にある。行政上では加須市根古屋字道上・中宿・前・道下、牛重上前・中前・上裏その他に所在する。戦国から江戸時代の城跡で、昭和56年度実施の騎西町遺跡詳細分布調査や明治9年の「地引番号全図根古屋」、江戸時代に描かれた「武州騎西之絵図」などにより城の形状や武家屋敷の範囲が明らかである。遺跡の範囲は騎西文化・学習センターから南東へ1.2km、南西へ約0.5kmである。

第2節 遺跡の地理的環境（第2図）

大宮台地の北東から南東方向には肥沃な水田地帯

である加須低地・中川低地が広がっている。加須低地には、騎西島状台地群をはじめとして笠原支台より断続的に続く埋没ローム台地がいくつか存在し、造盆地運動によって台地や低地が沈降した。その上に利根川などの氾濫による河成堆積物が堆積し、自然堤防・埋没ローム台地・後背湿地・沼澤地が形成されたものである。

現在騎西地域内で確認されている原始から近世までの遺跡は埋没ローム台地と自然堤防上に立地していると言わってきた。しかし発掘調査では、旧石器時代から奈良・平安時代の遺跡は自然堤防とされている見沼代用水両岸に位置し、いずれもローム台地上に展開している。



第1図 遺跡の位置（騎西地域）

第3節 遺跡の歴史的環境(第2・3図)

※(遺跡名)は『騎西町史考古資料編1』に準じたものである。城館跡名では不適切となるため小字による遺跡名を付け直したものである。

1 旧石器時代

約2万年前以降、ナイフ形石器や尖頭器が盛行した頃、萩原遺跡をはじめ(前)・(中宿)遺跡で該期の遺物が出土している。(前)遺跡では尖頭器及び剥片の集中箇所が2カ所確認されている。

細石刃石器群が出現した約1万5千年前以降では下崎中郷遺跡で北方系の削片、(道上)遺跡では同系の荒屋型彫刻器が出土している。

2 縄文時代

草創期に(中宿)遺跡で有舌尖頭器が見られるのみで土器は発見されていない。早期は修理山・小沼耕地・(前)・(道上)遺跡で撚糸文系土器、(前)遺跡では集石遺構が、(道上)遺跡で沈線文系土器、条痕文系は修理山・(前)・(中宿)・(道上)遺跡で土器が出土しており、特に修理山・(中宿)遺跡では炉穴が確認された。

前期では前半花積下層・関山・黒浜式土器が小沼耕地・(前)・(道上)で出土している。後半諸磯から十三菩提式期までは前半に加え萩原遺跡で諸磯式土器が、小沼耕地遺跡では県内では希少な花積下層式期の住居跡状落ち込みが検出されている。

中期前半に(道上)・萩原遺跡で五領ヶ台式・勝坂式が確認されている。後半は加曾利E式期その後半に(中宿)遺跡で柄鏡形住居・(道上)遺跡で竪穴住居が、萩原・修理山遺跡では集落が展開した。修理山遺跡では10軒の竪穴住居、萩原遺跡では4軒の住居跡と墓壙などが見つかっている。

両遺跡は後期前半堀の内期までは集落を継続し少數ながら住居跡や貯蔵穴が検出された。後半になると再び遺物のみの出土となるが萩原・中郷・(前)・(中宿)・(道上)遺跡で加曾利B～後期安行式が出土している。晚期では安行3a～3d式が修理山・町並・(道上)・(前)・(中宿)遺跡で出土している。

3 弥生時代

騎西地域内ではこのころの遺跡は少なく、中期では小沼耕地(※町史では上種足三番)遺跡で磨製石鎌が、(道上)遺跡では後期の壺や器台の破片が出土しており、中種足五番遺跡の絵画土器や小沼耕地遺跡の土器片は弥生時代終末期から古墳時代初頭のものである。

4 古墳時代

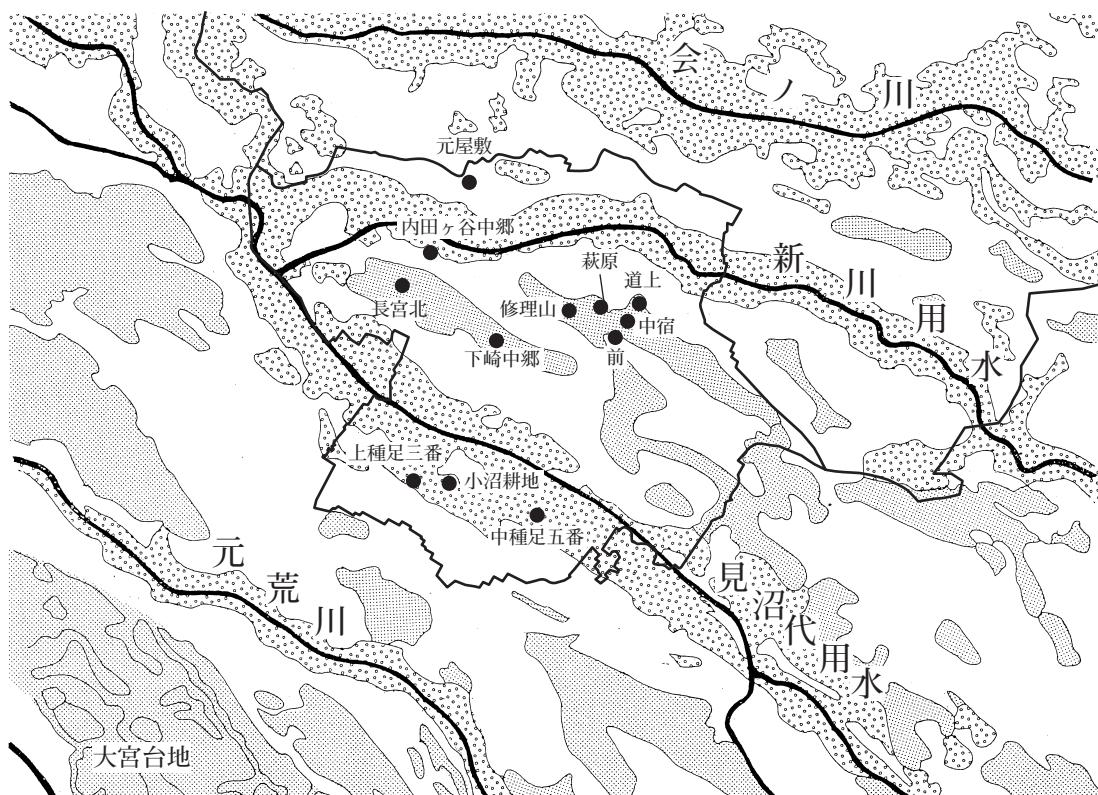
古墳跡は小沼耕地遺跡※で6～7世紀の前方後円墳1基・円墳5基が確認されている。また、(内田ヶ谷中郷)遺跡で勾玉や埴輪片、(前)遺跡の埴輪片や隣接する(中宿)遺跡の切子玉・さらにその周辺で出土したと伝えられる石棺部材(市内の玉敷神社所在)等からこれらの地域にも古墳が所在していたものと考えられる。また、集落は前期の住居跡が小沼耕地遺跡・(中宿)遺跡、中期の住居跡が萩原遺跡、後期の住居跡は萩原遺跡・(道上)遺跡・(中宿)遺跡で確認されており、なかでも萩原遺跡は地域内屈指の集落遺跡である。そのほかにも古墳時代の土師器が中種足五番遺跡・觀音堂遺跡から出土し集落の所在を予想させる。他に古墳時代前期の方形周溝墓が修理山遺跡・小沼耕地遺跡で確認されている。

以上のように現在遺跡が確認されている台地には古墳及び集落がそれぞれ所在するものと考えられる。

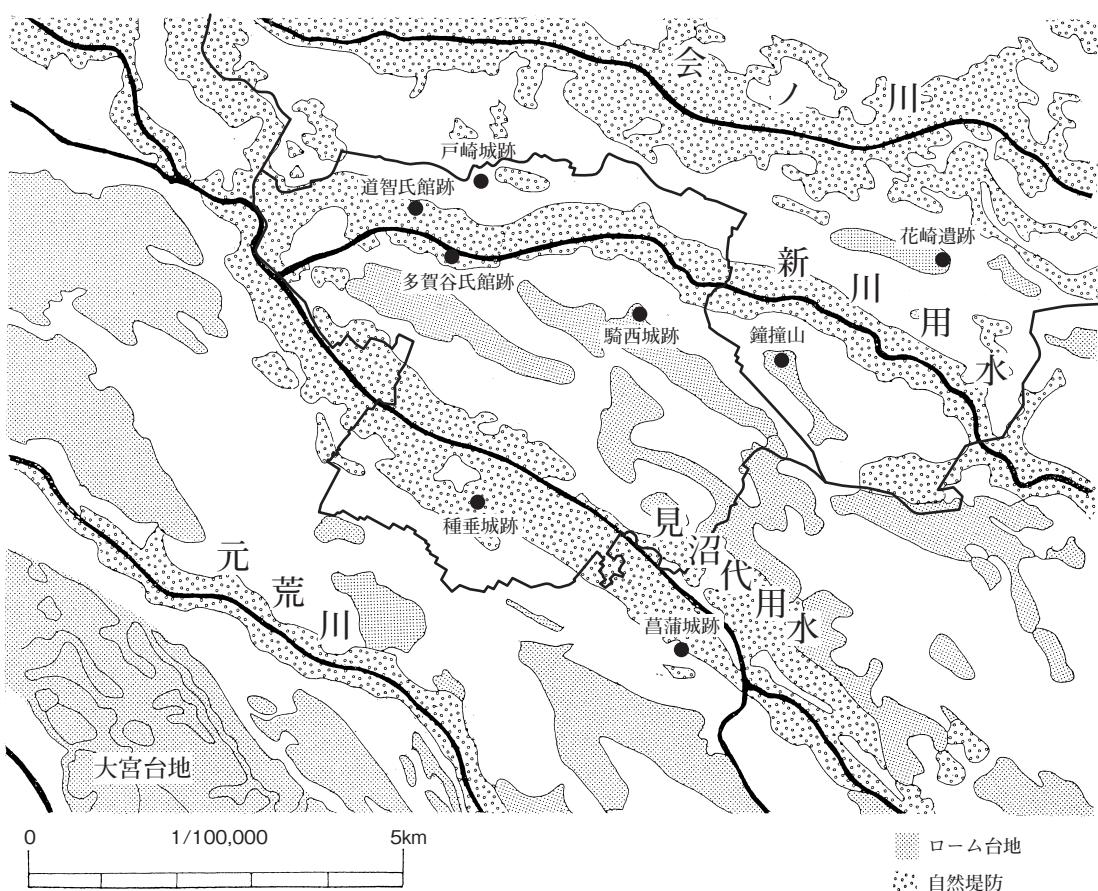
※町史の上種足三番遺跡を含む

5 奈良・平安時代

住居跡が確認されているのは(道上)遺跡・小沼耕地(※町史では上種足三番遺跡)で8世紀代のものである。下崎中郷遺跡では湖西産とみられる須恵器が、觀音堂・中種足五番遺跡で須恵器や土師器が、(中宿)遺跡では小金銅仏が出土している。元屋敷遺跡では墨書き土器や瓦が出土している。



第2図 周辺の微地形分類と縄文・古墳時代遺跡



第3図 周辺の微地形分類と城館跡

6 中近世

騎西地域内には平安末から鎌倉時代にかけて武藏武士野与党の道智氏・多賀谷氏が館を構えたといわれる。

多賀谷氏館は、内田ヶ谷の大福寺を中心にあったものと思われ、建久元年(1190)多加谷小三郎が源頼朝の上洛の随兵を、建長3年(1251)多賀谷弥五郎重茂が鎌倉由比ヶ浜での御弓始の射手を務めている『吾妻鏡』。永享年間(1429-41)初め頃に結城に移ったといわれる多賀谷光義は敬神の念厚く郭内に稻荷明神を勧請した『多賀谷旧記』。発掘調査では館跡の東端(1次調査)で、溝から12~14世紀の同安・龍泉窯系青磁碗・常滑広口壺が出土しており、館跡のほぼ中央にある大福寺の北(4次調査)で、土壙から12~13世紀の同安・龍泉窯系青磁とともに刀身先端や鉄鏃が出土している。

道智氏館は、道地の成就院周辺に所在したものと思われる。建久元年(1190)道智次郎が源頼朝の上洛の随兵を務め、承久3年(1221)の宇治橋の合戦では道智三郎太郎が討ち死にしている『吾妻鏡』。発掘調査では館跡のほぼ中央で13~14世紀の龍泉窯系青磁が、西端で12~13世紀の龍泉窯系青磁などが出土地にいる。

種垂城跡は、上種足種垂城址公園から東へ広がり百石・シロンチ(城の内?)等の地名が残る。雲祥寺縁起には騎西城主小田顕家が養子の助三郎(忍城主成田親泰の子)に家督を譲り種垂村に隠居したという。発掘調査では、溝・井戸・土壙・火葬跡を検出し、漆椀・小柄や13~17世紀の陶磁器類が出土している。

隣接する**旧上種足三番遺跡**(現小沼耕地遺跡)では、溝・土壙・井戸・集石墓が検出されており、12世紀の白磁水注・13世紀の龍泉窯系青磁・常滑甕・在地の蔵骨器・籠状木製品が出土している。

小沼耕地遺跡では、県埋蔵文化財調査事業団の調査で、掘立柱建物跡・基壇状遺構・溝・井戸などが検出され、12~13世紀を主体とする陶磁器類が出土している。種足は、中世前半の弘安10年頃(1287)伊賀光清が所領としており、また応永24年(1417)に日英上人が種垂の講演御堂(布教道場)等の講演職を

弟子に任せている。三番・小沼耕地遺跡の成果はそれに関わるものとも思われる。

南方の中種足五番遺跡では12~13世紀の龍泉窯系の青磁や15~16世紀の染付、13~17世紀の古瀬戸・常滑・在地の陶磁器類が出土している。

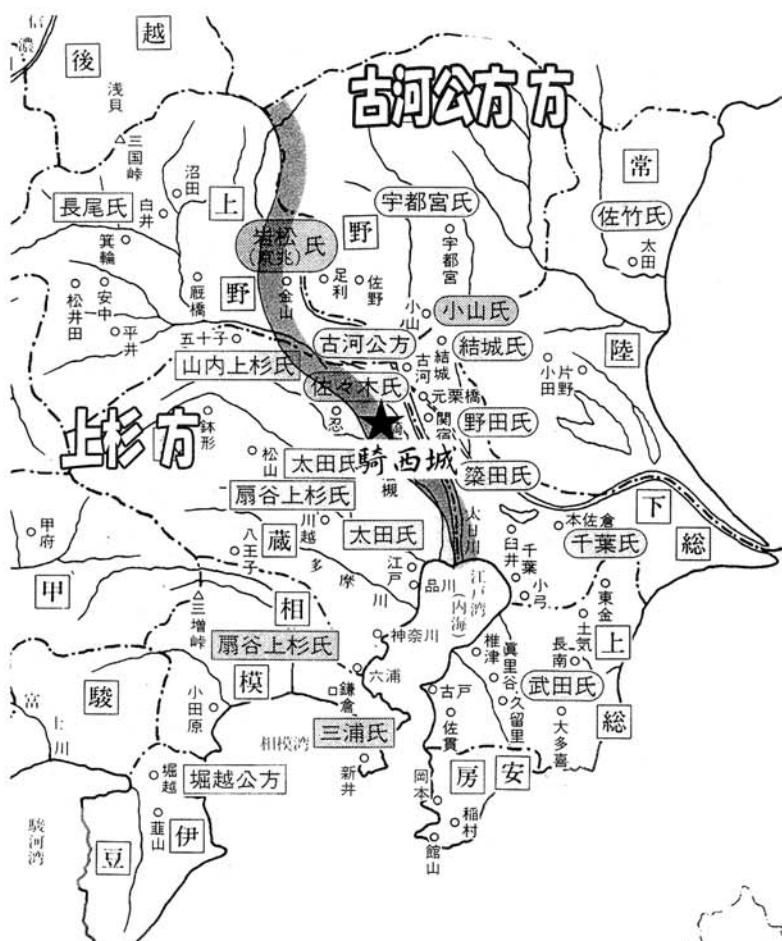
戸崎城跡は、『新編武藏風土記稿』に戸崎右馬允居跡なりとある。また、『吾妻鏡』に戸崎右馬允国延が寿永3年(1184)源頼朝の御前の射手となるとある。発掘調査では土壙跡や13世紀の鉢や17・18世紀の陶磁器類が出土している。

騎西城(騎西城周辺年表参照)は、文献や江戸初期の『武州騎西之絵図』など城の絵図が遺る。遺構は現在土壙跡が僅かに残るだけであるが、昭和55年から80次を超えて発掘調査されており、主に土地区画整理に伴い城郭部や武家屋敷跡西部の成果が顕著である。これまでに溝400条・土壙1600基・井戸状遺構200基・障子堀5ヶ所・橋跡4ヶ所が確認されている。遺物は戦場及び生活・生産の場として武器武具・生活・生業・信仰・流通に関する多様なものが出土している。特に水位が高いことから木製品の遺存がよい。武器武具では、兜・前立・刀装品・鉄鏃・火縄挟み・弾丸・馬甲・轡・四方手・野呂・腰刀・薙刀など、生活品では、下駄・鏡・豎杵・鉄鍋・桶・漆椀・杓子・折敷・火打金・天目茶碗・湯釜・将棋の駒など、生業では、砥石・紡錘車・鋏・溶解炉・鋳型・坩埚・熔融物付着土器(金・銀・亜鉛・鉛・ビスマスを検出)など、信仰では護符・呪符・舟形・位牌・銅鏡・数珠など、流通では金貨・袋入り銭貨・荷札などがある。年代を比定できる陶磁器は12世紀から19世紀にかけてのもので、主体は16~17世紀前半である。瀬戸美濃をはじめ中国染付・唐津・志戸呂・初山・在地産かわらけ・ほうろく・播鉢などがある。

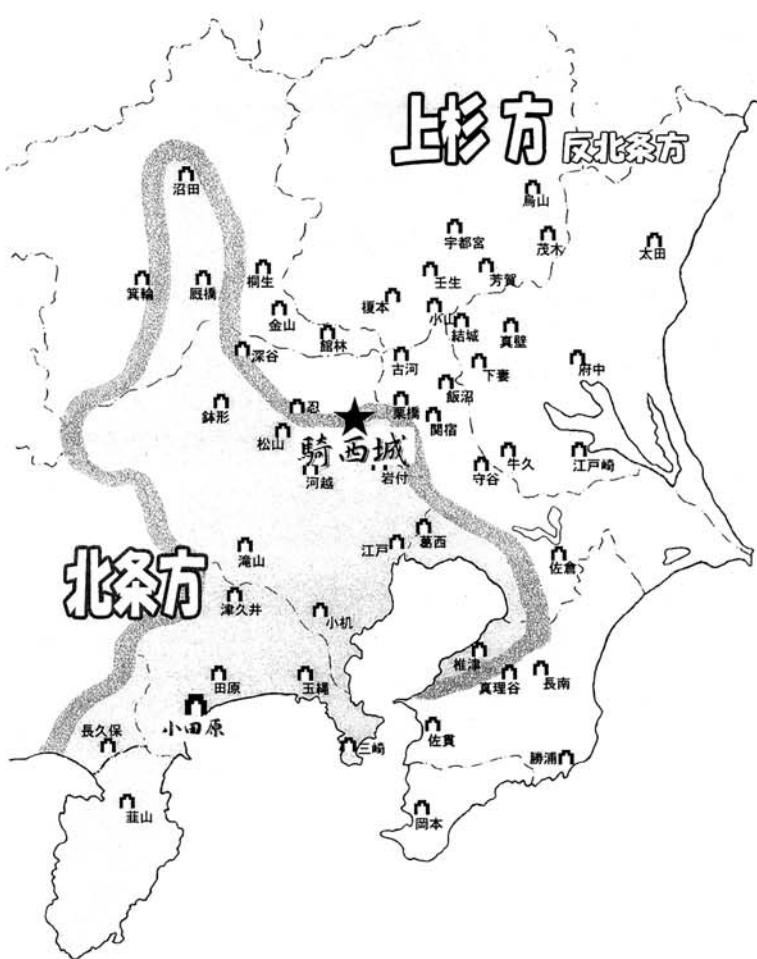
このほかに、日出安の保寧寺中世墓址では、大量の川原石や板碑、12~14世紀の常滑の甕・壺、13世紀の布目瓦が出土している。墓域の成立は中世前半に遡るものか。また、下崎の道南遺跡で工事の際1978枚の北宋錢が出土している。

騎西城周辺年表

- 康正元年（1455） 足利成氏、崎西郡(騎西城)に集結する上杉勢（上杉・序鼻和氏など）を攻略する
- 文正元年（1466） 足利成氏、南多賀谷（田ヶ谷）と北根原（鴻巣市）で上杉勢と合戦に及ぶ
- 応仁元年（1467） ★応仁の乱
- 文明3年（1471） 上杉方に対峙する足利成氏の戦略配置に私市（騎西）の佐々木氏あり
- 文亀2年（1502） 騎西城主小田顕家、上会下（鴻巣市）の雲祥寺を再興。忍城（行田市）主成田親泰の子助三郎（朝興）を娘婿とし騎西城を譲り、自らは種足村に隠居する
- 天文8年（1539） 騎西城主小田顕家没、雲祥寺に葬られる
- 天文12年（1543） ★鉄砲伝来
- 永禄3年（1560） 長尾景虎（上杉謙信）関東の北条方諸城を攻略
- 永禄4年（1561） 騎西城主小田助三郎、兄の忍城主成田長泰と共に景虎の小田原攻めに参加する。長泰、鶴岡八幡宮で上杉政虎（謙信）に辱められ、北条方となる。助三郎も離反
- 永禄6年（1563） 北条氏康・武田信玄連合軍が松山城（吉見町）を攻略。報復に上杉輝虎（謙信）、騎西城を攻略
- 永禄12年（1569） 上杉と北条の講和成立（越相同盟）。上杉方は武藏北部を支配
- 天正2年（1574） 上杉謙信、羽生の関宿城を救援。騎西・古河・栗橋・館林・菖蒲・岩付城を焼き払う
- 天正4年（1576） 成田泰喬（あるいは氏長）、家臣に知行を宛がう
- 天正5年（1577） 小田大炊頭、古河公方への年頭の挨拶を行う
- 天正6年（1578） 小田大炊頭、足利義氏に年頭の挨拶。謙信没
- 天正18年（1590） ★徳川家康、関東へ入国。松平康重に騎西領二万石を与える
- 天正19年（1591） 松平康重大英寺を開基、日出安の保寧寺に田畠1町歩を寄進する
- 文禄2年（1593） 松平康重、朝鮮出兵のため騎西領民を召し連れる
- 慶長元年（1596） 根古屋の金剛院、日出安から移転する
- 慶長4年（1599） 松平康重の奥方、城内にて死去、大英寺に葬る
- 慶長5年（1600） ★関ヶ原の戦い
- 慶長7年（1602） この頃大久保忠常、騎西領二万石を拝領する
- 慶長8年（1603） ★徳川家康、江戸に幕府を開く
- 慶長11年（1606） 騎西藩の家臣、領内（正能村）を検地する
- 慶長16年（1611） 忠常病死。子の忠職、父の遺領騎西領二万石を拝領する
- 慶長19年（1614） 大久保忠隣改易となり小田原・羽生を没収、孫の騎西城主忠職は閉門に処せられる
- 寛永2年（1625） 忠職、赦免される
- 寛永4年（1627） 大久保忠職、久伊豆大明神（玉敷神社）に社領を寄進する
- 寛永9年（1632） 忠職、三万石加増され、美濃の加納へ転封し五万石を拝領する。騎西城廃され、代官所が置かれる



享徳の乱初期の関東
(1454～)



氏康×謙信の頃の関東
(永禄・天正年間)

『古河公方展』古河歴史博物館
『中世・下町再発見』葛飾郷土と天文の博物館
掲載の図を改変

第4図 騎西城を取り巻く勢力図

騎西城周辺の歴史的経過（年表・第4図）

当遺跡では濃密ではないが中世を通して遺物が出土している。12世紀代の常滑甕、舶載白磁、渥美製品、また古瀬戸陶器等が見られる。騎西城以前にも集落・館等が存在していたようである。

【享徳の乱】

文献では騎西城は、康正元年（1455）に初出し寛永9年（1632）廃城となり姿を消す。享徳の乱では、関東公方足利成氏が古河に移り、関東管領上杉氏と対峙する。その争いの中に騎西郡を舞台として争う場面がある。これが騎西城とされる。残念ながら現在のところ当該期に相当する遺構は確認されていない。だがこの時期に騎西城の前線基地としての重要性は格段に高まり、戦闘の拠点としての城の整備がされたものと思われる。関東管領家臣の太田道灌が岩付城・河越城・江戸城の防衛ラインを張ったとき騎西城はすでに古河方の足場として機能していたのではないだろうか。

【永禄・天正期の軍事的緊張】

また、永禄から天正年間にかけての後北条氏対上杉謙信の覇権争いにおいても境の城であった。騎西城は何度となく厳しい立場に追い込まれている。特に謙信が関東の足掛かりとした羽生城を間近にしており、2度の戦火を被っている。



土橋 周辺

文献では、永禄6年、北条氏康・武田信玄が松山城を包囲したが、その救援に間に合わなかった謙信は攻める方向を転じ騎西城を陥落させた。その後、謙信は武田信玄との敵対関係から北条氏康との和睦（越相同盟）を成し、しばし平安であった。しかし北条氏康没後、甲相同盟の復活によりまた北条・上杉の合戦が再開された。天正2年には謙信が羽生・関宿城援護のため出陣し、古河・栗橋・館林・菖蒲・岩付城とともに騎西城を焼き討ちにしている。

当該期の遺物・遺構は豊富で、城郭部周辺の障子堀（KB15区・騎13次）から炭化物・遺物が多量に出土している。これらはこの頃の戦火に伴う戦後処理のものと思われる。

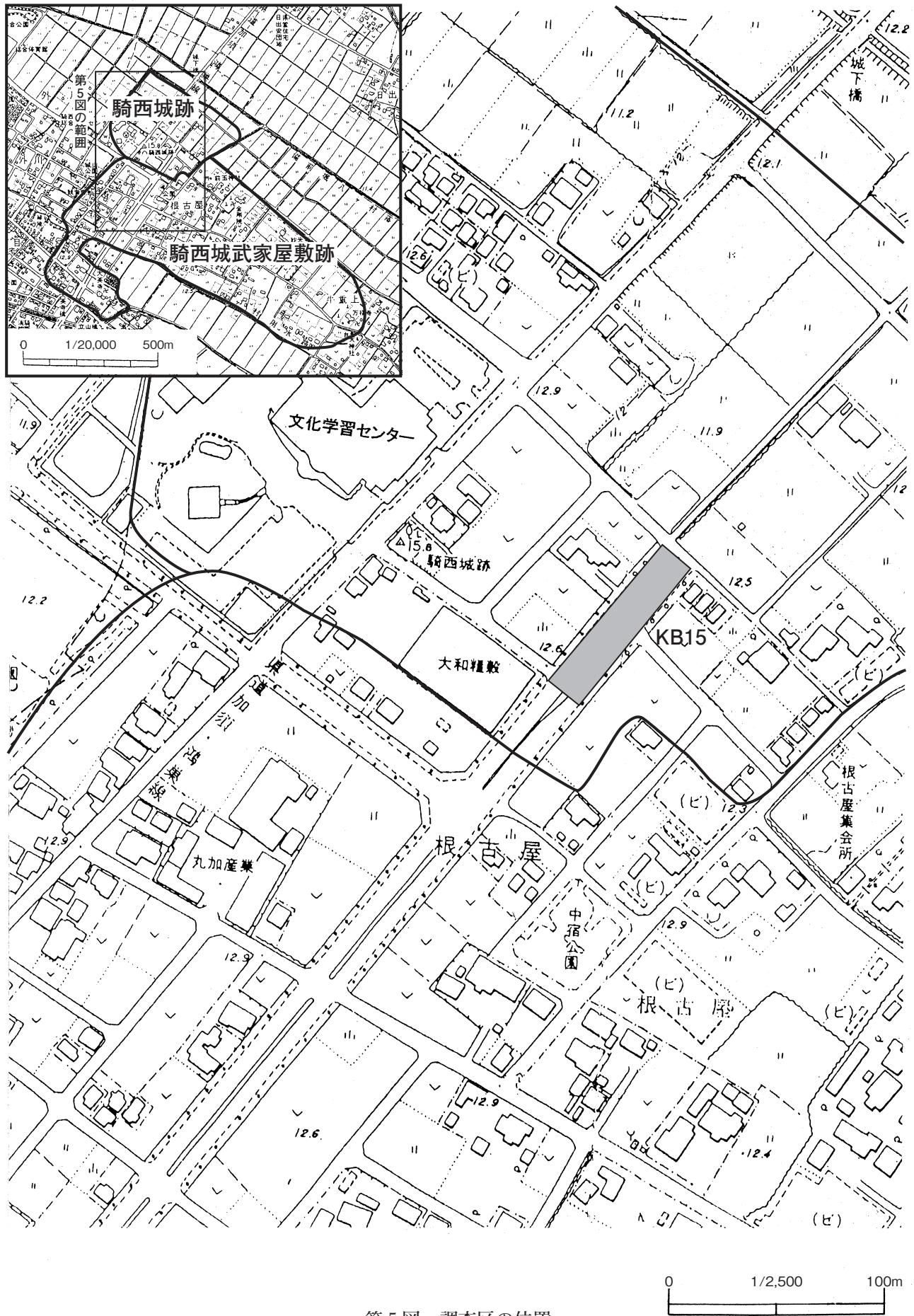
【秀吉の小田原攻めと家康の関東入封】

豊臣秀吉が小田原城を攻めたとき、忍城も石田三成に水攻めを受けている。騎西城も備えとして城の拡張・改良を行っているものと思われる。

その後家康が関東に入り、騎西城には松平康重、大久保忠常・忠職が藩主となっている。その際に城郭部の縮小や城下の再編成を行っているものと思われる。実際『武州騎西之絵図』に載る御蔵屋舗には外側に障子堀を備えており、戦乱時は城郭部であったことを物語っている。



1～3 堀周辺



第5図 調査区の位置

第Ⅱ章 調査に至る経過

旧騎西町は首都圏50km圏内に位置し、急激な人口の増加に伴う開発が見込まれていた。それに対し計画的な都市整備の一環として大字根古屋及び外川において土地区画整理事業が計画されていた。

町教育委員会では昭和56年度に実施した町内遺跡群分布調査によって町内に15ヶ所の遺跡が所在することを確認しており、とくに区画整理対象区域に所在する騎西城については小田原市に所蔵されていた。

『武州騎西之絵図』と対照すると城の南側に江戸初期に武家屋敷が広がっていたことが明らかとなっている。さらに昭和54年に実施した騎西城跡の発掘調査では、和鏡や武具などの出土により城の存在を実証し、その内容を具体的に明らかにしたものであった。僅かに残る土塁や水田と畠地に見られる郭の形など遺存状態は良く、地下に埋蔵される遺構は特に

期待されるものであった。

しかしながら、長年の懸案であった根古屋・外川地区土地区画整理事業は町の重要施策であり、計画の中止及び変更は困難な状況であった。

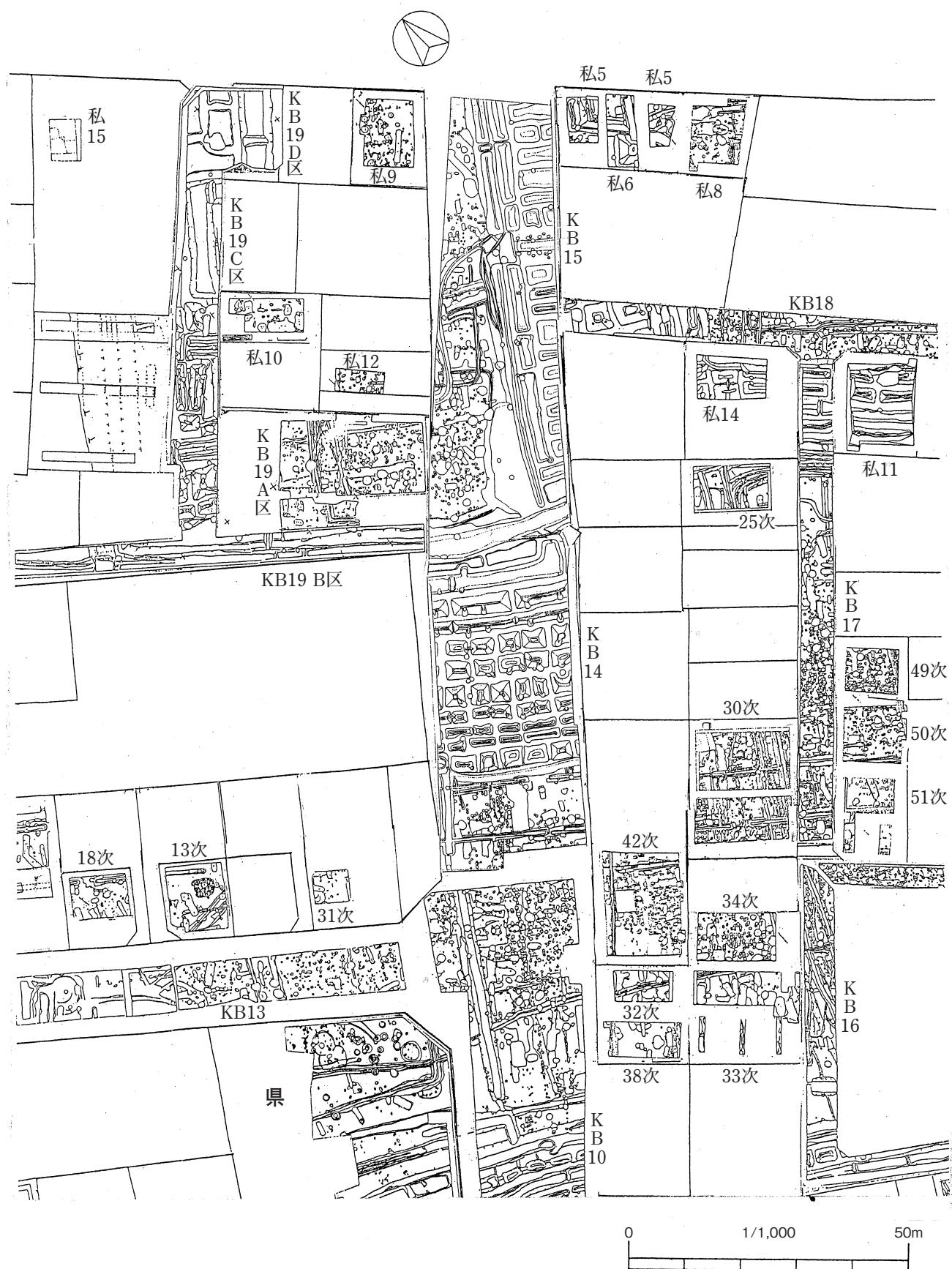
そこで町教育委員会では町部局と協議を重ねた結果、区画整理施工に先立ち破壊される道路分について順次発掘調査を実施することとした。また、区画整理により発生する保留地についても町が原因者として発掘調査をすることとした。

文化財保護法に基づき騎西町から埋蔵文化財発掘通知、騎西町教育委員会から埋蔵文化財発掘調査通知を文化庁長官に提出した。

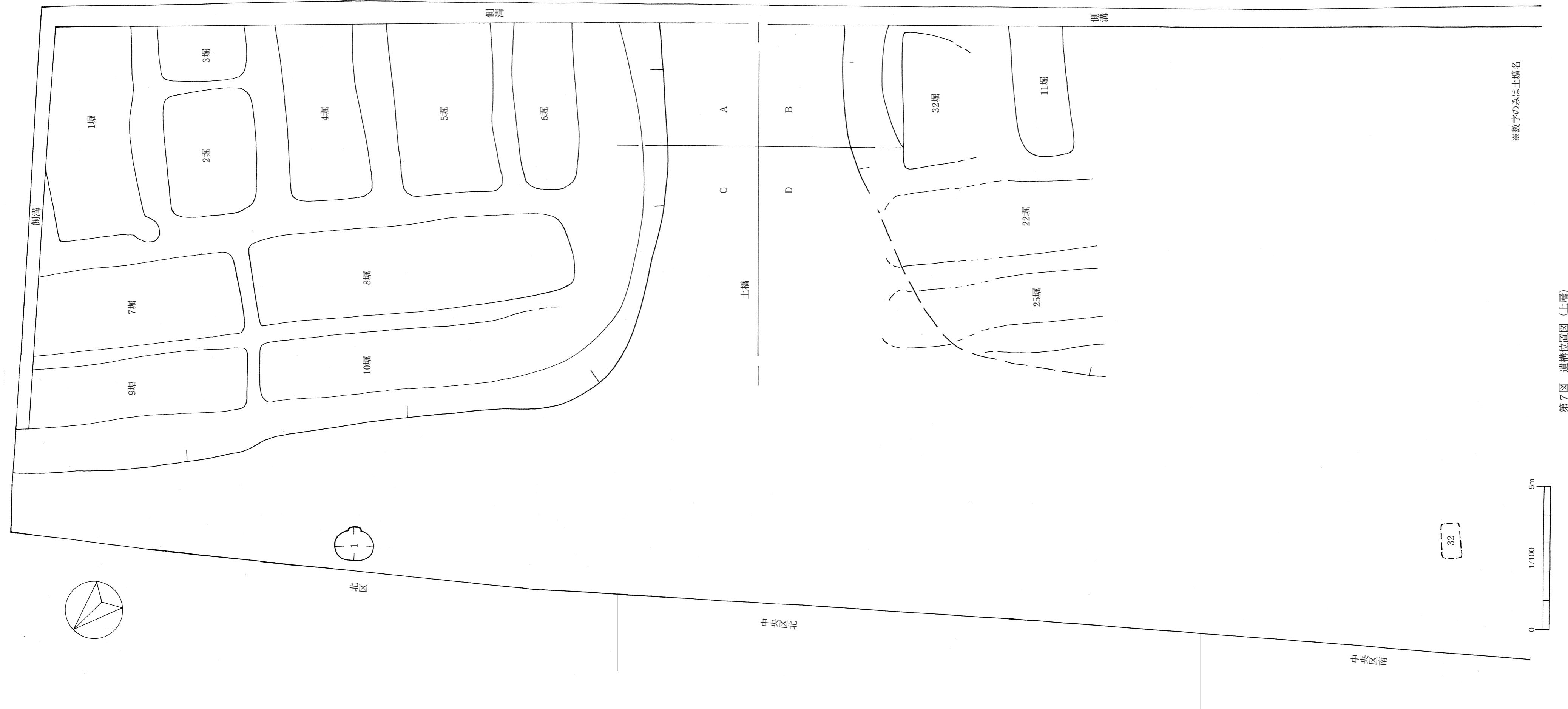
調査は昭和58年2月9日（騎2次）から開始し、平成7年（騎武48次）までの13年に亘るものであった。今回の報告は、調査実施区域の北端、調査名ではKB15区、所在地は大字根古屋317-1、318、319-1、319-2、320、321-1である。



KB15区 完掘

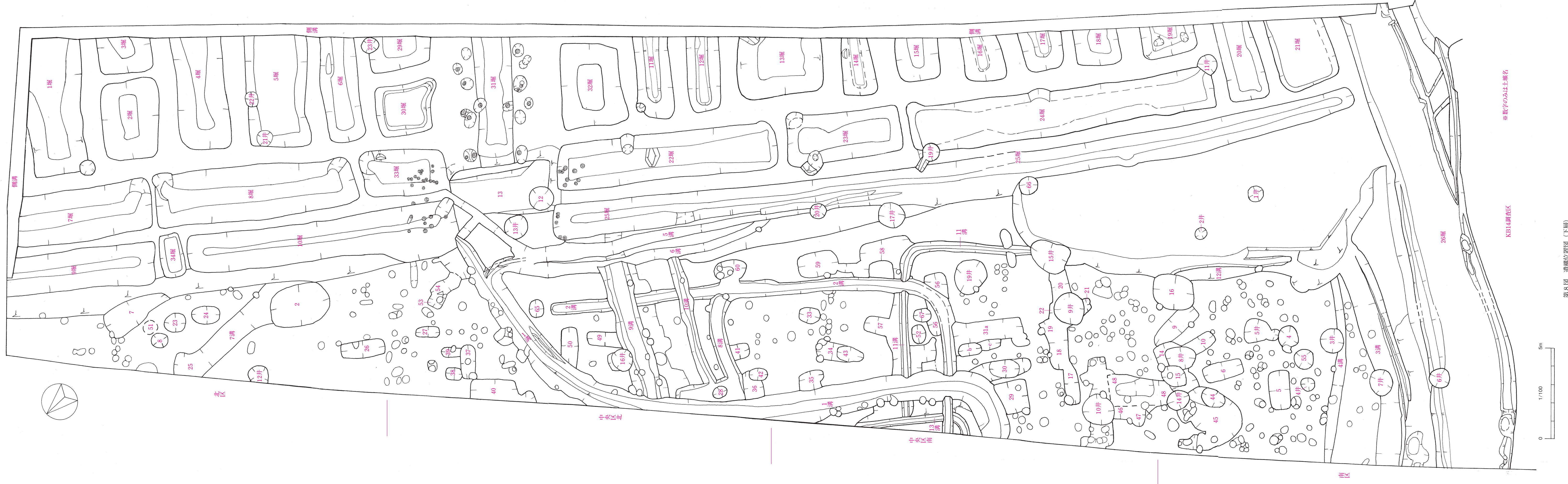


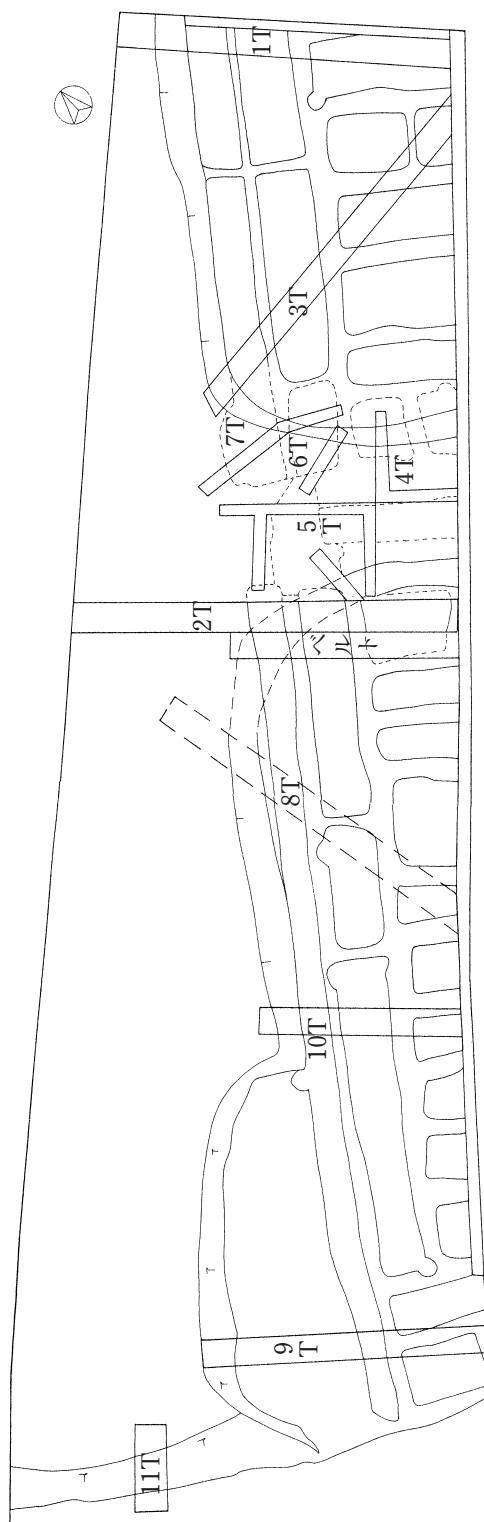
第6図 周辺の調査



第7図 遺構位置図(上層)

※数字のみは土壙名





第9図 トレンチ位置図



4～6T周辺



4～7T周辺

遺構名	位置	備考
1号堀	北区	旧1T3堀を含む
2号堀	北区	旧3T2堀を含む
3号堀	北区	旧3T1堀を含む
4号堀	北区	旧3T3堀を含む
5号堀	北区	
6号堀	北区	
7号堀	北区	旧1T2堀を含む
8号堀	北区	旧3T4堀を含む
9号堀	北区	旧1T1堀を含む
10号堀	北区	旧3T5堀を含む
11号堀	中央区北	
12号堀	中央区北	
13号堀	中央区南	
14号堀	中央区南	
15号堀	中央区南	
16号堀	中央区南	
17号堀	中央区南	
18号堀	中央区南	
19号堀	中央区南・南区	
20号堀	南区	
21号堀	南区	
22号堀	中央区北	旧2T2堀を含む
23号堀	中央南	
24号堀	中央南・南区	
25号堀	南区・中央南北	旧2T3堀を含む
26号堀	南区	
27号堀	欠番	
28号堀	欠番	
29号堀	中央区北・北区	
30号堀	中央区北	
31号堀	中央区北	
32号堀	中央区北	旧2T1堀を含む 旧26堀
33号堀	中央区北・北区	
34号堀	北区	整理時命名
土橋	上層／中央北	
橋跡	上層／中央北	
1号溝	中央区南・北	
2号溝	中央区南・北	
3号溝	南区	
4号溝	南区	
5号溝	中央区北	
6号溝	中央区北	
7号溝	北区	
8号溝	中央区北	
9号溝	中央区北	
10号溝	中央区北	
11号溝	中央区南	
12号溝	南区	
13号溝	中央区南	
1号井戸	南区	
2号井戸	南区	
3号井戸	南区	
4号井戸	南区	
5号井戸	南区	
6号井戸	南区	
7号井戸	南区	
8号井戸	南区	

遺構名	位置	備考
9号井戸	中央区南	
10号井戸	中央区南	
11号井戸	南区	
12号井戸	北区	
13号井戸	中央区北	
14号井戸	南区	
15号井戸	中央区南	
16号井戸	中央区北	
17号井戸	中央区南	
18号井戸	中央区南	
19号井戸	中央区南	
20号井戸	中央区南	
21号井戸	北区	
22号井戸	北区	
23号井戸	北区	
1号土壙	上層／北区	
2号土壙	北区	
3号土壙	欠番	
4号土壙	南区	
5号土壙	南区	
6号土壙	南区	
7号土壙	北区	
8号土壙	北区	
9号土壙	南区	
10号土壙	南区	
11号土壙	不明	図面なし
12号土壙	中央北	
13号土壙	中央北	
14号土壙	南区	範囲不明瞭
15号土壙	南区	
16号土壙	南区	縄文時代 カ
17号土壙	中央南区	
18号土壙	中央南区	
19号土壙	中央南区	
20号土壙	中央南区	
21号土壙	中央南区	
22号土壙	中央南区	
23号土壙	北区	
24号土壙	北区	
25号土壙	南区・中央区南北	
26号土壙	北区	
27号土壙	中央区北	
28号土壙	中央区北	井戸 カ
29号土壙	中央区南	
30号土壙	中央区南	
31a号土壙	中央区南	
31b号土壙	中央区南	
31c号土壙	中央区南	
32号土壙	上層／中央区南	土層図のみ。位置 不明瞭
33号土壙	中央区南	
34号土壙	中央区南	
35号土壙	中央区南	
36号土壙	中央区北	
37号土壙	中央区北	
38号土壙	中央区北	
39号土壙	中央区北	
40号土壙	中央区北	

遺構名	位置	備考
41号土壙	中央区北	
42号土壙	中央北	
43号土壙	中央区南	
44号土壙	南区	
45号土壙	南区	
46号土壙	中央区南	
47号土壙	中央区南	
48号土壙	南区	
49号土壙	中央区北	
50号土壙	中央区北	
51号土壙	北区(7・8壙の間)	遺物のみ
52号土壙	中央区南	
53号土壙	中央区北	
54号土壙	中央区北	
55号土壙	南区	
56号土壙	中央区南	
57号土壙	中央区南	
58号土壙	中央区南	
59号土壙	中央区南	
60号土壙	中央区北	
61号土壙	欠番	
62号土壙	欠番	
63号土壙	欠番	
64号土壙	欠番	
65号土壙	中央区北	
66号土壙	中央区南	
67号土壙	中央区南	

第1表 遺構一覧表

第Ⅲ章 出土した遺物

第1節 土器類

騎西城跡で出土している土器類は大略以下の通りに分類できる。

胎質では磁器・陶器・土器、生産地では国外産である輸入品、国内産に大別できる。また、器種は多様である。

これらの要素により時代等を加味し、掲載順は、輸入品では青磁・白磁・陶器・染付・朝鮮陶磁・その他、国産品では渥美・常滑・瀬戸美濃・肥前系陶器・志戸呂・初山・備前・丹波信楽・京都信楽・ほか・産地不明・肥前系磁器・瀬戸美濃系磁器・在地産土器とする。その他で土製品を扱う。

以上、分類・年代等はいずれも暫定的なものでいざれ整理をしたい。さて、今回の調査で報告する土器類は主に以下の通りで細片は省略している。

※1溝5溝6溝重複地点出土は、本文では1.5.6溝と、図・一覧表では1・5・6溝と表記した。

【輸入陶磁】

〈青磁〉 碗が外堀（317・318）で、稜花皿が10溝（254）で出土した。

○龍泉窯系 碗が9堀（57）・32堀（166）・2溝（206）・7壙（266）・外堀（311～316）・遺構外（406～411）で、稜花皿が10堀+外堀（69）・遺構外（412）で、水瓶カが遺構外（413）で出土した。

〈白磁〉 菊皿が5堀（17）・遺構外（414・417）で、端反皿が8堀（37）・25堀（117・118）で、皿が外堀（319）・1T（377）・遺構外（415・416）で、壺が2溝（207）・外堀（320）で、香炉が5溝+KB19（209）で出土した。

〈染付〉 碗が外堀（321・322）・2T（382・383）・遺構外（418～420）で、皿が7堀+33堀（28）・25堀（119）残存75%・土橋C（283）・土橋下（289）・2T（384）・8T（399）・遺構外（421～426）で、端反皿が外堀（323）・遺構外（427）で、小壺が遺構外（428・429）で出土した。

○漳州窯系カ 皿が土橋A（278）・2T（385）で

出土した。

【国産】

〈渥美〉 甕が9堀（58）・25堀（120）・26堀（152）で、壺が1溝（175・176）・9溝+外堀（253）・13井（259）・60壙（276）・1T（378）・遺構外（430）で、片口鉢が外堀（324）で出土した。

〈常滑〉 甕が1堀（1）・10堀（70）・11堀（84）・33堀（169）・1溝（178）・外堀（325・326）・遺構外（433・434）で、壺カが遺構外（432）で、片口鉢が32堀（167）・1溝（177）・18井（262）・土橋B（281）で、擂鉢が遺構外（431）で、広口カ片口鉢が26堀（153）で出土した。

〈瀬戸美濃〉

○古瀬戸前期 水滴が遺構外（471）で出土した。

○古瀬戸前期～中期 入子が18壙（270）・遺構外（469）で出土した。

○古瀬戸後期 天目茶碗が9堀（59）で、卸皿が22堀（93）で、縁釉小皿が25堀（122）残存95%・18壙（269）・土橋上層（307）・2T（386）で、盤が26堀（154）で、四耳壺が（472）で出土した。

○古瀬戸後期～大窯 縁釉小皿が22堀（94）・24壙（112・113）・遺構外（444）で出土した。

○古瀬戸後期カ 縁釉小皿が遺構外（440・441・443）で出土した。

○大窯前半 天目茶碗が10堀（71）・25堀（121）・外堀（327）・遺構外（435）で、縁釉小皿が22堀（95）・25堀（123）・遺構外（442・445・446）で、丸皿が22堀（96・97）で、端反皿が24堀（114）残存95%・33壙（170・171）170は残存95%・遺構外（453）で、皿が23堀（110）・土橋上層（308）・外堀（335）で、水滴が8堀（45）で、擂鉢が25堀（125）・1.5.6溝（243）・遺構外（462）で出土した。

○大窯後半 天目茶碗が8壙+10壙（38）・8壙+土橋下（39）で、内禿皿が1堀（5）で、丸皿が9壙（61）・10壙（72・73）共に残存100%・2T（387）で、志野皿が10壙（74）・外堀（334）・1T（379）・遺構外（448・449・451）・遺構外+KB19（450）で、折縁皿が23壙（109）・遺構外（455）で、稜皿が2

T (388) で、鼠志野鉢が5堀+KB14+KB18+KB19+私5(19)で、志野向付が7堀(30)・8堀(46)・9堀+KB19(64)・22堀(100)・5.6溝(227)・遺構外(474)で、擂鉢が8堀(44)・9堀(62)・25堀(124)・土橋C(285)・外堀(338・339)・遺構外(463~465・467)で、志野鉢が22堀+11堀+私5(101)・遺構外(459)で、茶入が遺構外(470)で出土した。

○大窯皿が11堀(85)・8T(402・403)で、擂鉢が25堀(126)で、筒形香炉が遺構外(475)で出土した。

●登窯期 天目茶碗が5堀(18)・7堀(29)・9堀(60)・22堀(92)・土橋下(290)で、鉄絵碗が1堀(3)で、碗が1溝(179)で、京焼風碗が土橋下(291)で、総織部丸碗が遺構外(436)で、柳茶碗が遺構外(437)で、せんじが遺構外(439)で、志野皿が6堀(23)・8堀(40・41残存80%)・22堀(98・99)・土橋C(284)残存75%・土橋下(292)・外堀(330~333)・遺構外(452)で、鉄絵皿が8堀(42)・8堀+KB19(43)で、灯明皿が5溝(212)残存75%・5.6溝(226)・外堀(337)で、織部皿が土橋A(279)・1T(380)で、反り皿が遺構外+KB19(454)で、皿が13壙が(268)・外堀(336)・遺構外(456・457)で、大鉢が6堀+KB19(24)で、鉄絵鉢が1溝(180)で、鉢カが土橋下(293)で、擂鉢が遺構外(466)で、片口が1溝(182・183)・6溝(223)で、煙硝擂が26堀(155)で、兎型水滴が9堀(63)で、志野小坏が25堀(127)で、小坏が遺構外(468)で、蓋が1溝(184)で、志野向付カが遺構外(473)で、水注が1溝(185)で、甕が5溝(213)・5.6溝(228)で、花生カが外堀(340)で、有耳壺が外堀(341・342)で、徳利が外堀(343)で出土した。

〈肥前系陶器〉 碗が外堀(344)・遺構外(476・477)で、皿が2堀(11)・1溝(186・187)・遺構外(479~481)で、鉄絵皿が2堀+10堀+22堀+土橋下+外堀+KB19+私5(12)・5堀(20)・8堀(47~49)・22堀+25堀(102)・22堀(103・104)・外堀+KB19(345)・5.6溝(229)・遺構外+KB19(478)で、瓶が2堀+3堀+10堀+22堀+土橋下

(13)で、大皿が11堀(86)で、向付が外堀(346)・遺構外(482)で、鉄絵鉢が1堀+13堀+KB19(6)で、鉢が遺構外(483)で出土した。

〈志戸呂〉 碗が5.6溝(230)・外堀(348)で、筒形碗が外堀(347)で、灯明皿が2堀(14)・外堀(349)で、茶入カが外堀(350)で、擂鉢が8T(404)で出土した。

〈備前〉 建水カが5堀(21)で、備前丹波の壺が7堀+8堀+33堀+外堀+5溝+1.5.6溝+土橋下+KB18+KB19+私5+私6(31)で、備前系の擂鉢が土橋下(294)・外堀(351)・遺構外(484)で、備前カの大皿が6堀(25)で、同擂鉢が1溝(188)・5溝+外堀(214)・5.6溝(231)で出土した。

〈京都信楽〉 杉形碗が5.6溝(232)で、小碗が1.5.6溝(244)で、京都の碗が1堀(7)で出土した。

〈ほか〉 塚の擂鉢が2堀(15)で、萩系の碗が5溝+外堀+2T+KB14(215)で出土した。

〈産地不明〉 山茶碗カが土橋(309)で、片口鉢が遺構外(485・486)で出土した。

〈肥前系磁器〉 碗が1溝(190)・5溝(216・217)・5溝+5.6溝(218)・1.5.6溝(250)で、端反碗が5.6溝+1.5.6溝+外堀(233)・外堀(352)残存75%で、筒形碗が5.6溝+1.5.6溝(234・235)で、小碗が5溝+5.6溝(219)・5.6溝(236)・1.5.6溝(245)で、広東碗が1.5.6溝(249)で、染付皿が1溝+1.5.6溝+外堀(191)・1溝(192)・外堀(355~357)355は残存80%で、皿が5.6溝(237)・8T(405)で、白磁小坏が3堀(16)で出土した。

○波佐見 碗が1溝(189)で、くらわんか碗が1.5.6溝(246~248)・外堀(353・354)で、皿が遺構外(487)で出土した。

〈在地産土器〉

○かわらけ ほぼすべての遺構から出土した。

残存100%のものは10堀(75)・25堀(128・136・141)・30堀(163)・2井(255)・53壙+10堀(274)で出土した。

残存90~95%のものは10堀(76)・22堀(106)・25堀(130・132・134・140)・30堀(164)・53壙(272・275)・53壙+10堀(273)・67壙(277)・土橋A(280)・土橋下(297)・外堀(359)・遺構外

(489) 出土した。

残存75%以上のものは8堀(51)・10堀(77)・25堀(131)・33堀(173)・土橋B+外堀(282)・遺構外(488・491)で出土した。

灯芯油痕が認められるものは、10堀(75)・26堀(157)・30堀(163)・33堀(172)・2井(255)・土橋下(297)・3T(397)・遺構外(489・490)で出土した。

スス付着は、5.6溝+1.5.6溝(238)・1T(381)。

黒色物質が付着するものは、遺構外(488)で出土した。

墨書きが底部内面に見られるものは土橋下(296)で出土した。

○ほうろく ほぼすべての遺構から出土した。内耳が残るもので、底部まで掛かるものは1溝(195・197・198)・5溝(221)・外堀(365・367~369)で、そのほかは、体部に収まるものである。

○火鉢 7堀+9堀+33堀(36)・1溝(199)・土橋下カ(303)・外堀(372)・遺構外(505・506)で出土した。

○擂鉢 8堀(56)・22堀(108)・25堀(150・151)150は残存95%・8井(258)・15井(261)・外堀(371)・遺構外(504)で出土した。

○片口鉢 1堀(9)で出土した。



8堀 濑戸美濃鉄絵皿(土-42)

○土鍋 外堀(370)・遺構外+KB14(503)で出土した。

○香炉 10堀(82・83) 82は完形・2井(256)で出土した。

○甕 26堀(161)で出土した。

○土釜 遺構外(507)で出土した。

○瓦 1溝(200~205)・5溝(222)・6溝(224)・5.6溝(240~242)・1.5.6溝(252)・7壙(267)・土橋下(304~306)・外堀(373~376)・遺構外(508~523)で出土した。そのうち、雲母を含むものが200・202・204・240・241・304・305・373・376・508~512・514~517であり、なかでも多量に含むものが、200・204・305・373・510・516である。

【その他】 同安窯系青磁碗を加工した土製円盤が外堀(524)で、常滑甕を加工したものが遺構外(525・526)で、瀬戸美濃の擂鉢・天目を加工したものが22堀(527)・33壙(528)・1溝(529)・土橋上層(530)・外堀(531~533)・1T(534)・遺構外(535~538)で、志戸呂天目を加工したものが3壙(539)で、ほうろくを加工したものが土橋下(540)・遺構外(541)で出土した。土器が遺構外(542)で、土壁片が5堀(543)・25堀(544~546)・遺構外(547)で、泥面子が遺構外(548)で出土した。



10堀 濑戸美濃丸皿(土-72・73)

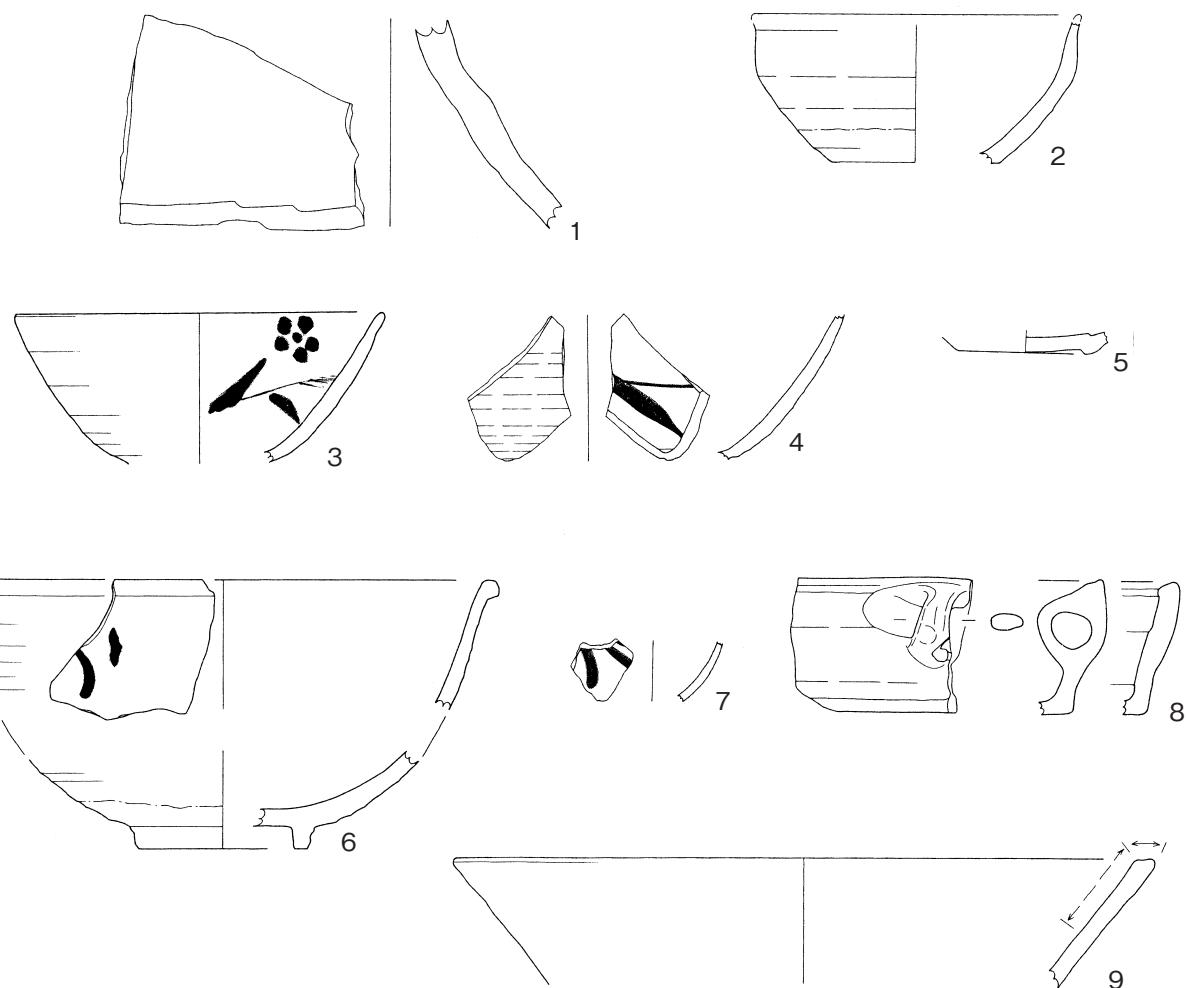


8井 在地擂鉢(土-258)

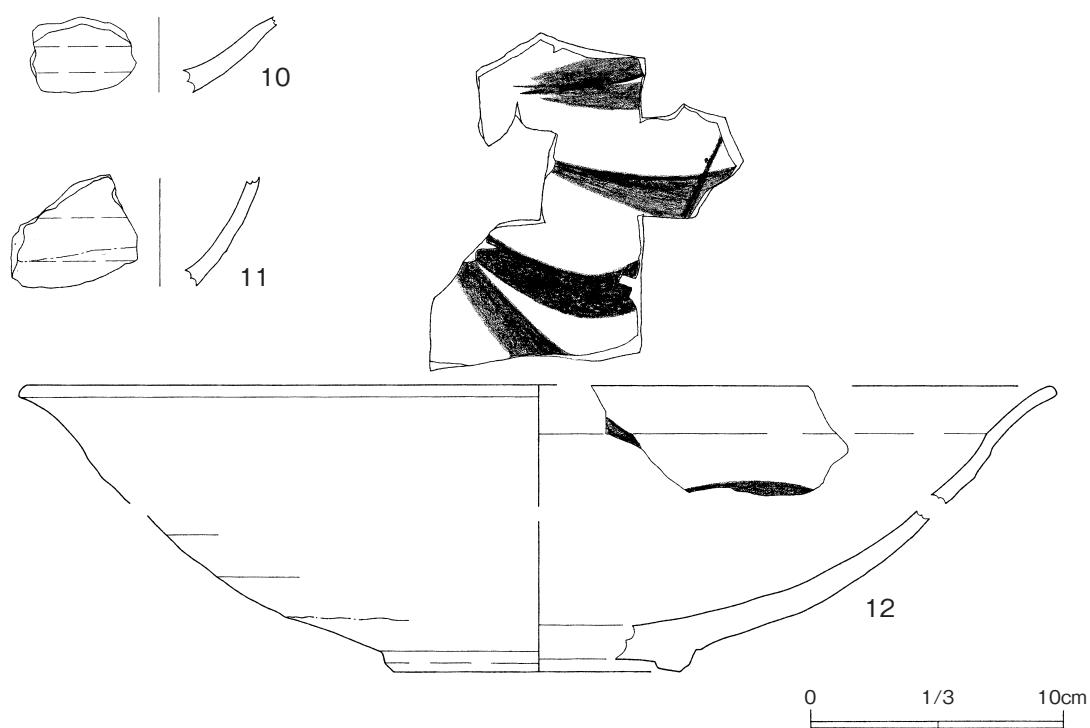


53壙 かわらけ
(上から土-272・275・273)

1堀

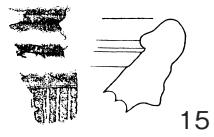
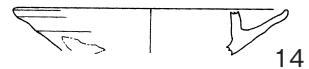
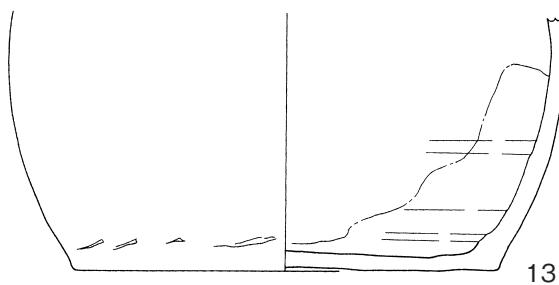


2堀-1

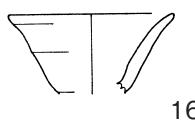


第10図 土器類1

2堀-2



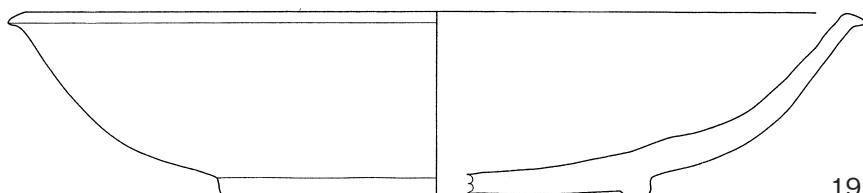
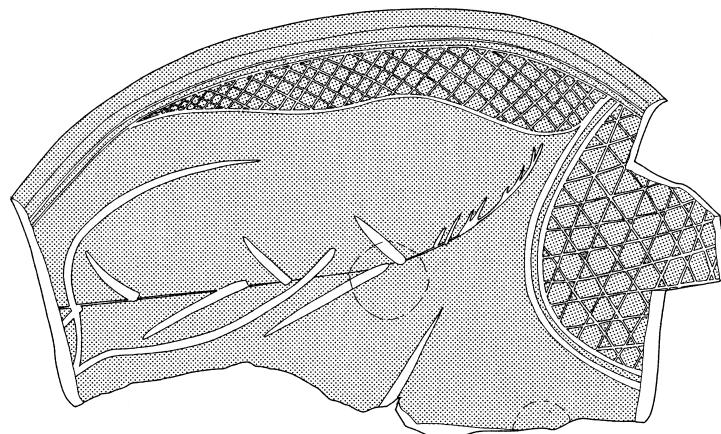
3堀



5堀



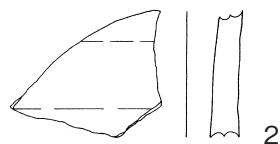
18



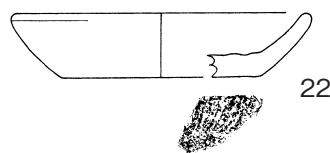
19



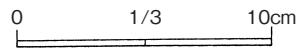
20



21

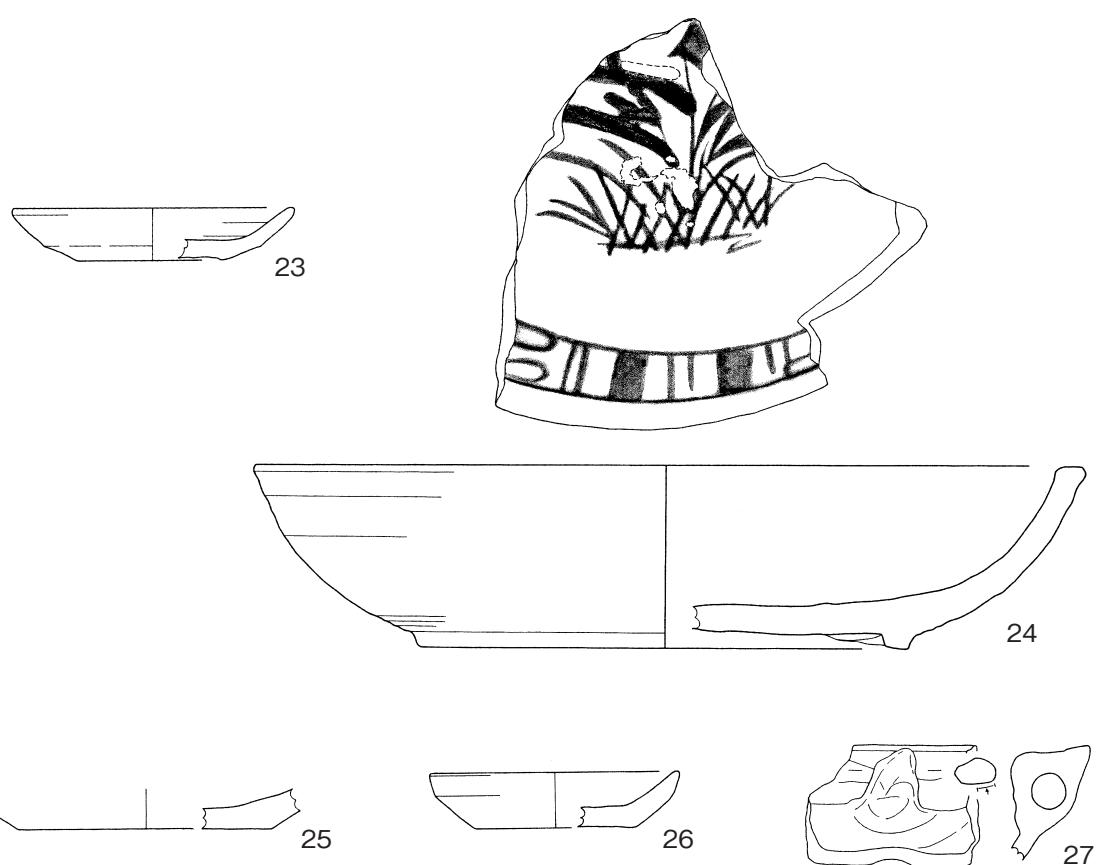


22

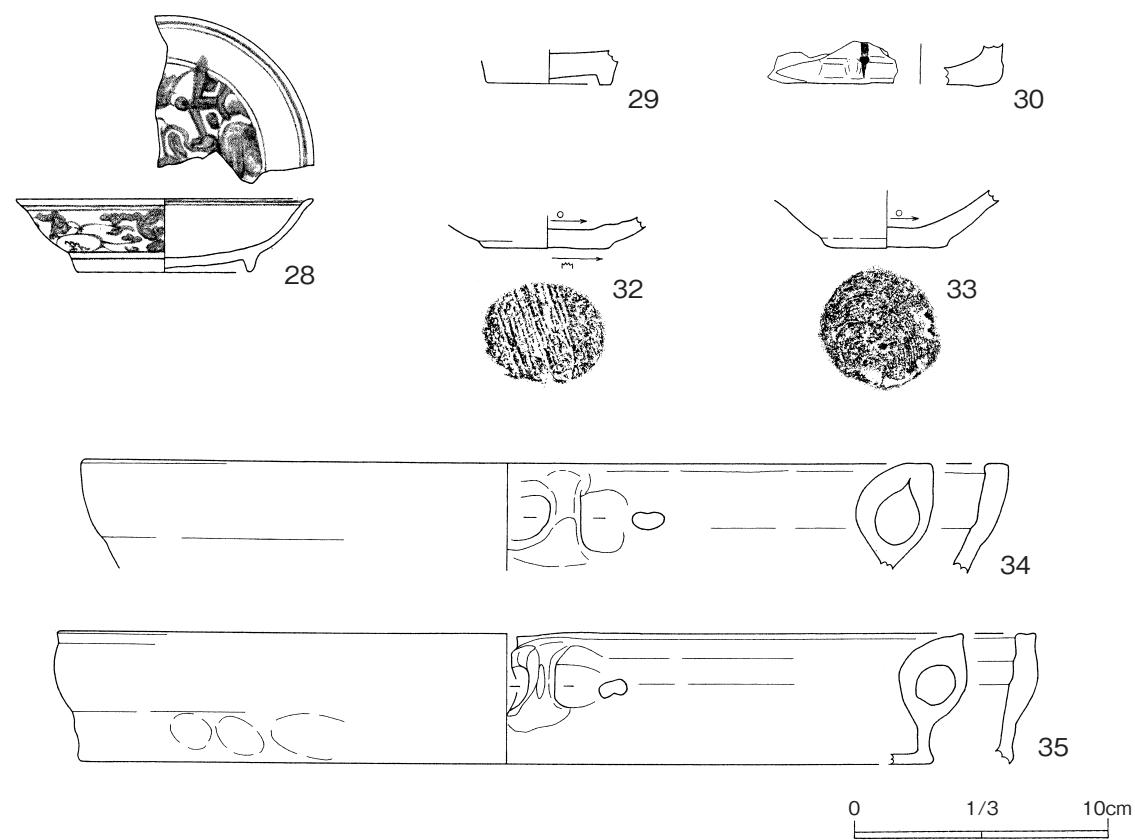


第11図 土器類 2

6堀

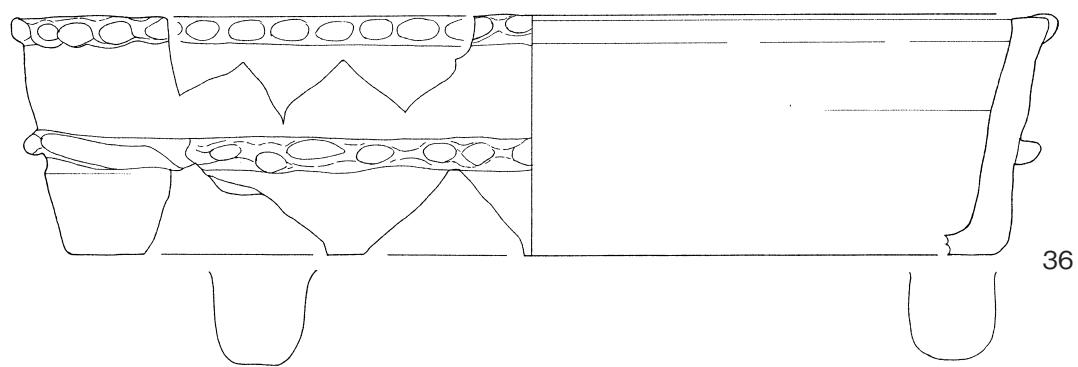
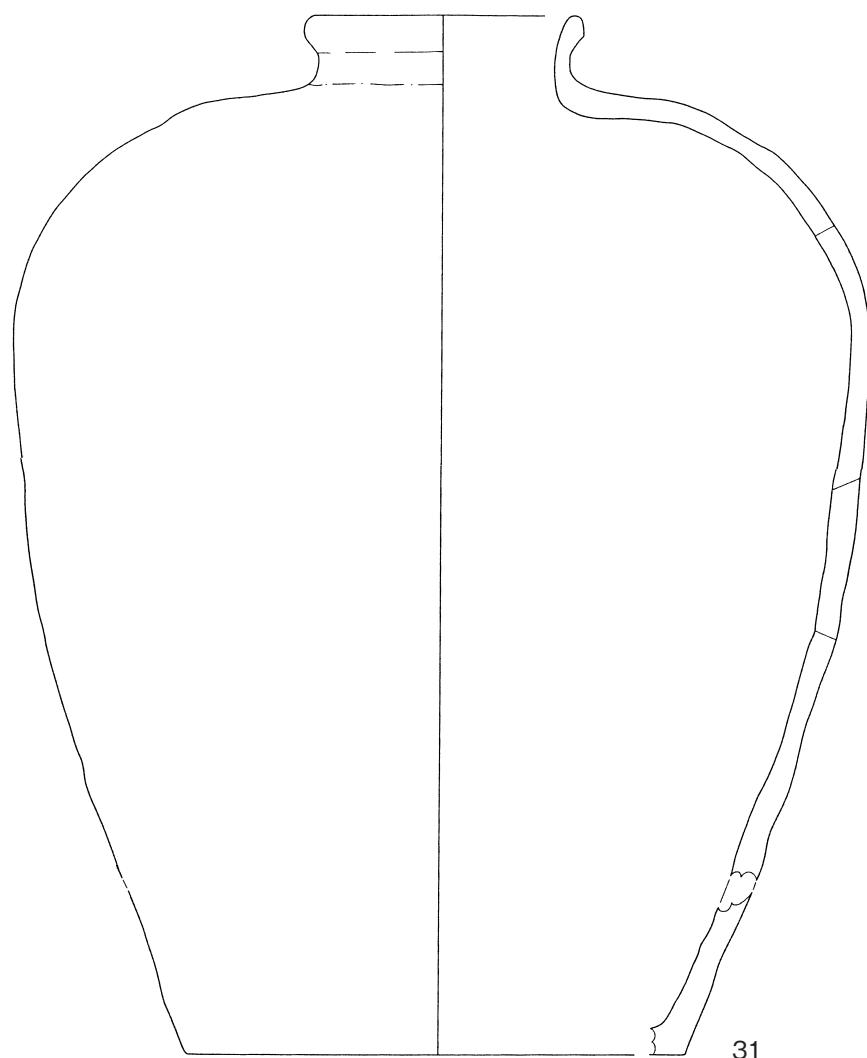


7堀-1



第12図 土器類3

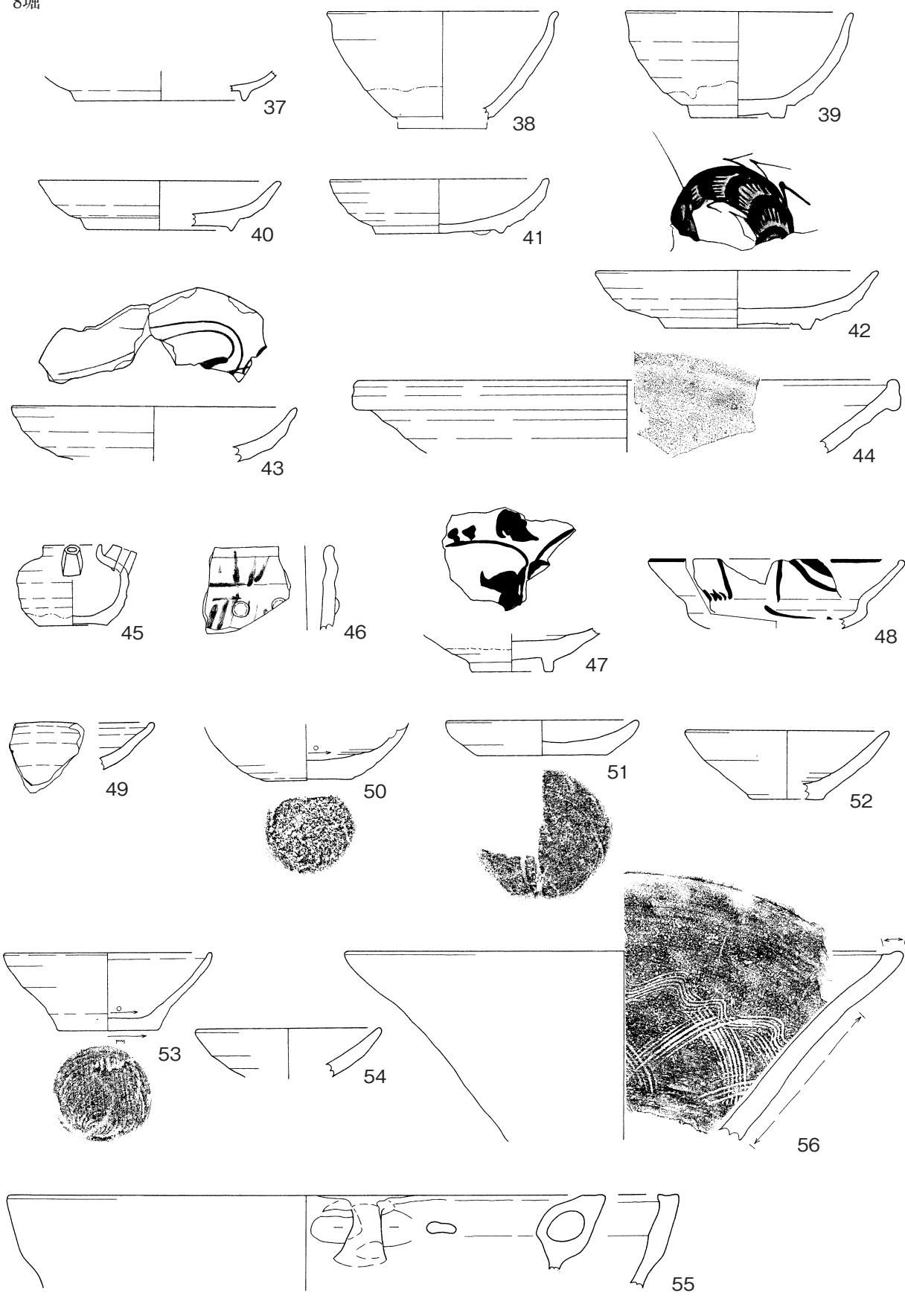
7堀-2



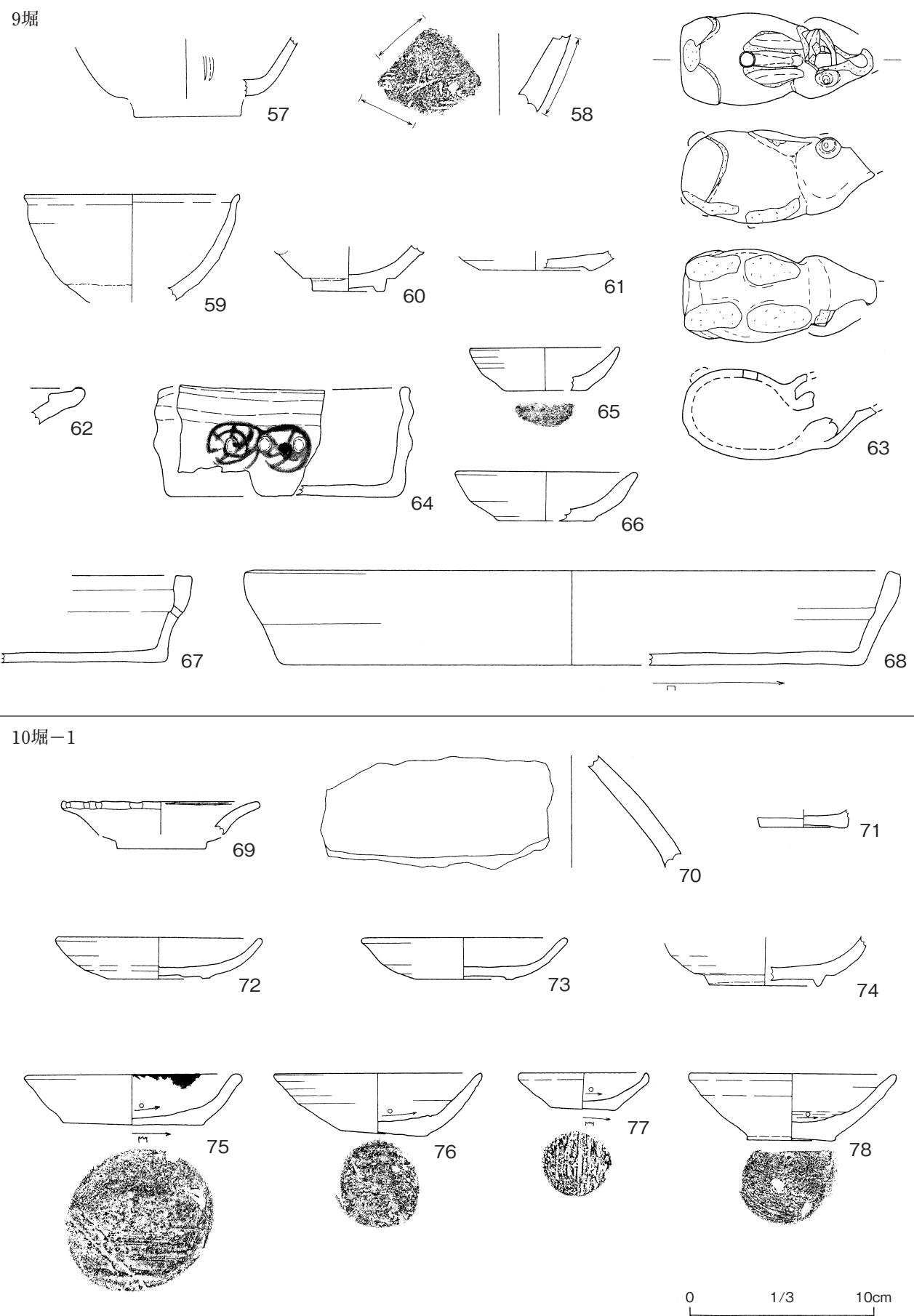
0 1/3 10cm

第13図 土器類 4

8堀

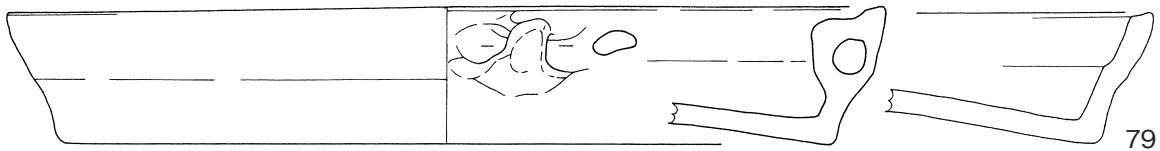


第14図 土器類5

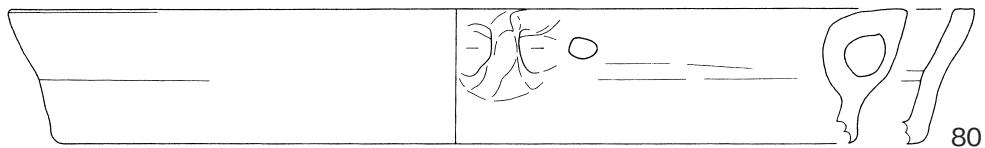


第15図 土器類 6

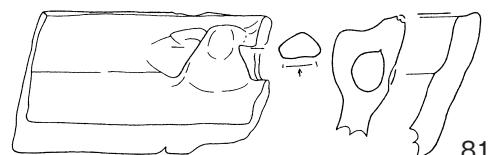
10堀-2



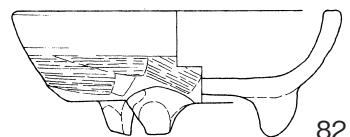
79



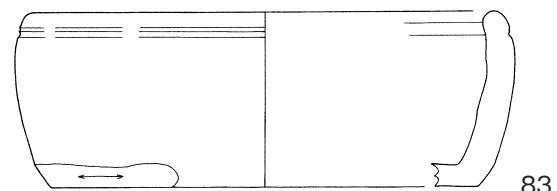
80



81

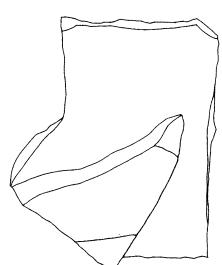


82

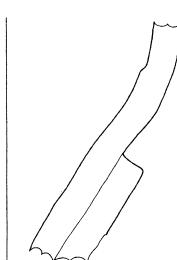


83

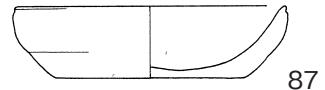
11堀



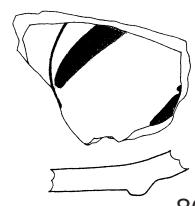
84



85



87

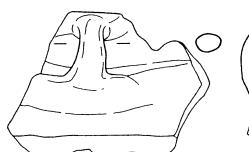


88



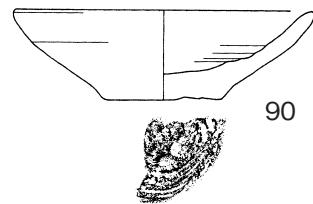
88

12堀



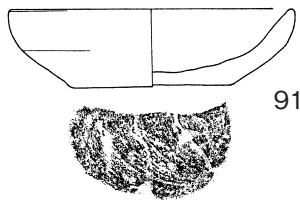
89

20堀



90

21堀

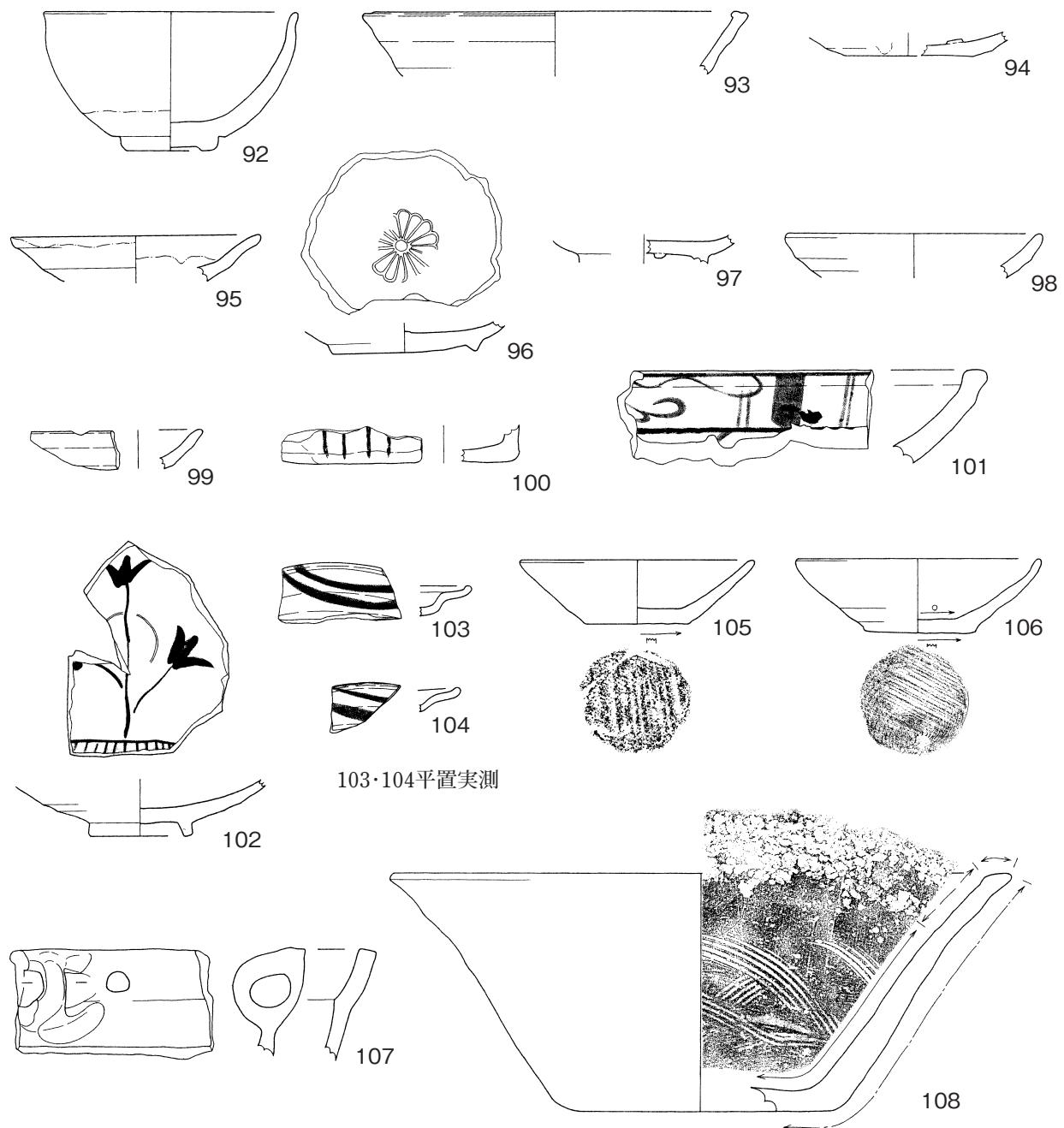


91

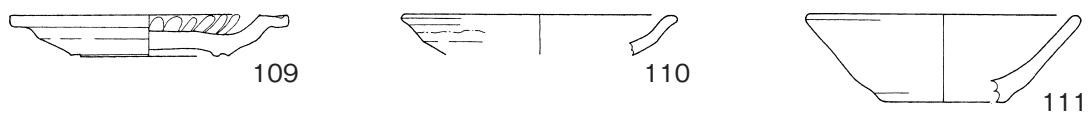
0 1/3 10cm

第16図 土器類 7

22堀



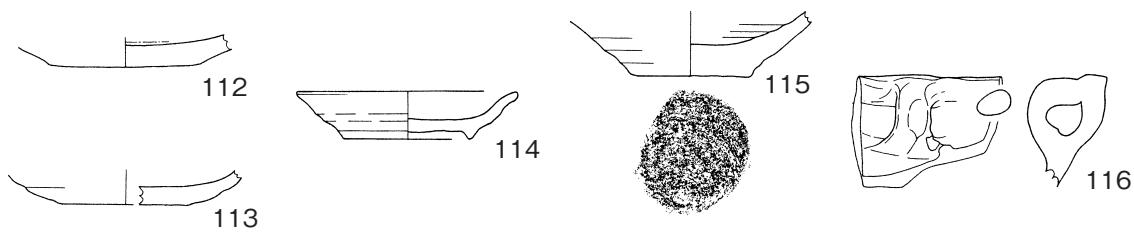
23堀



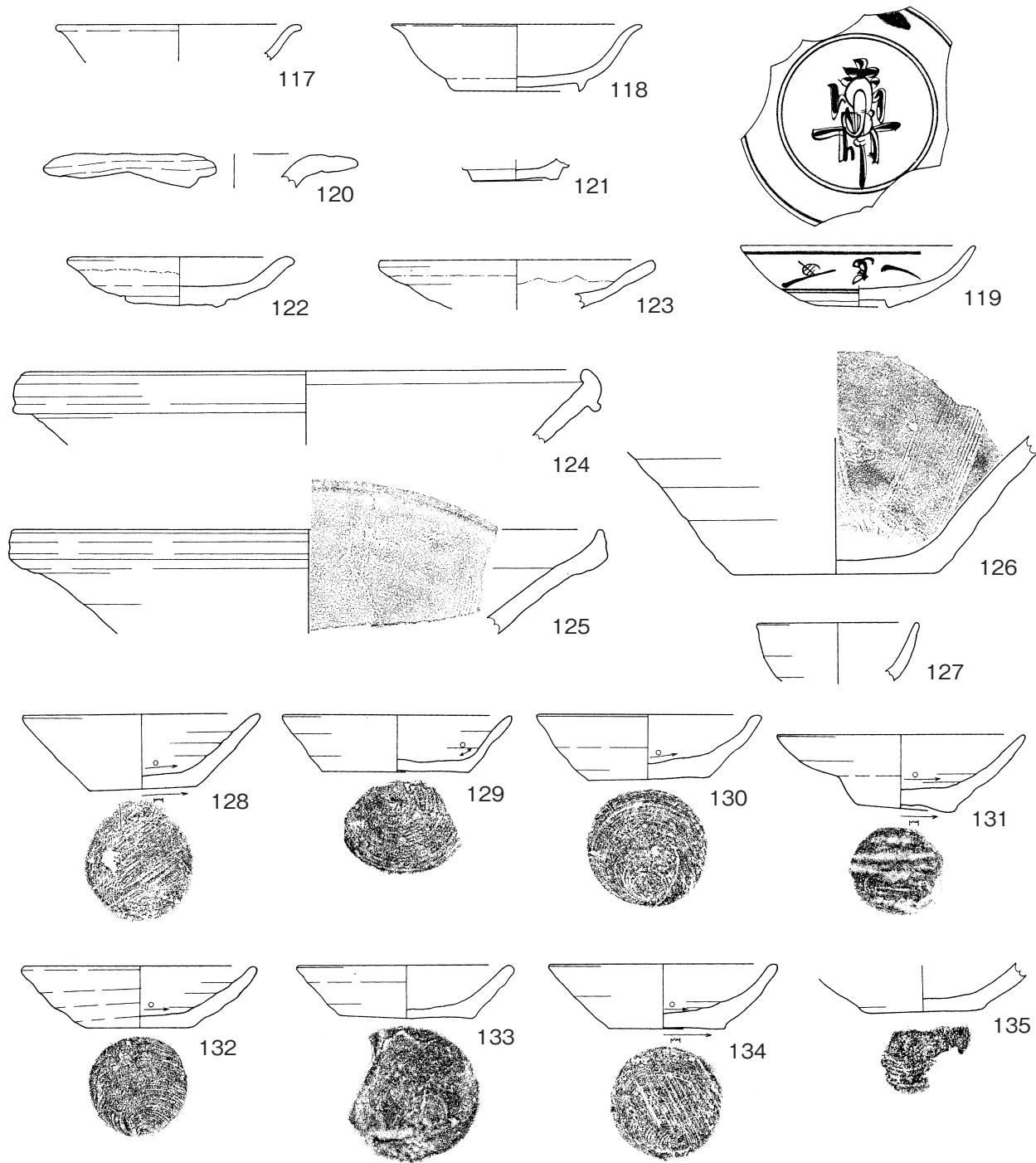
0 1/3 10cm

第17図 土器類 8

24堀



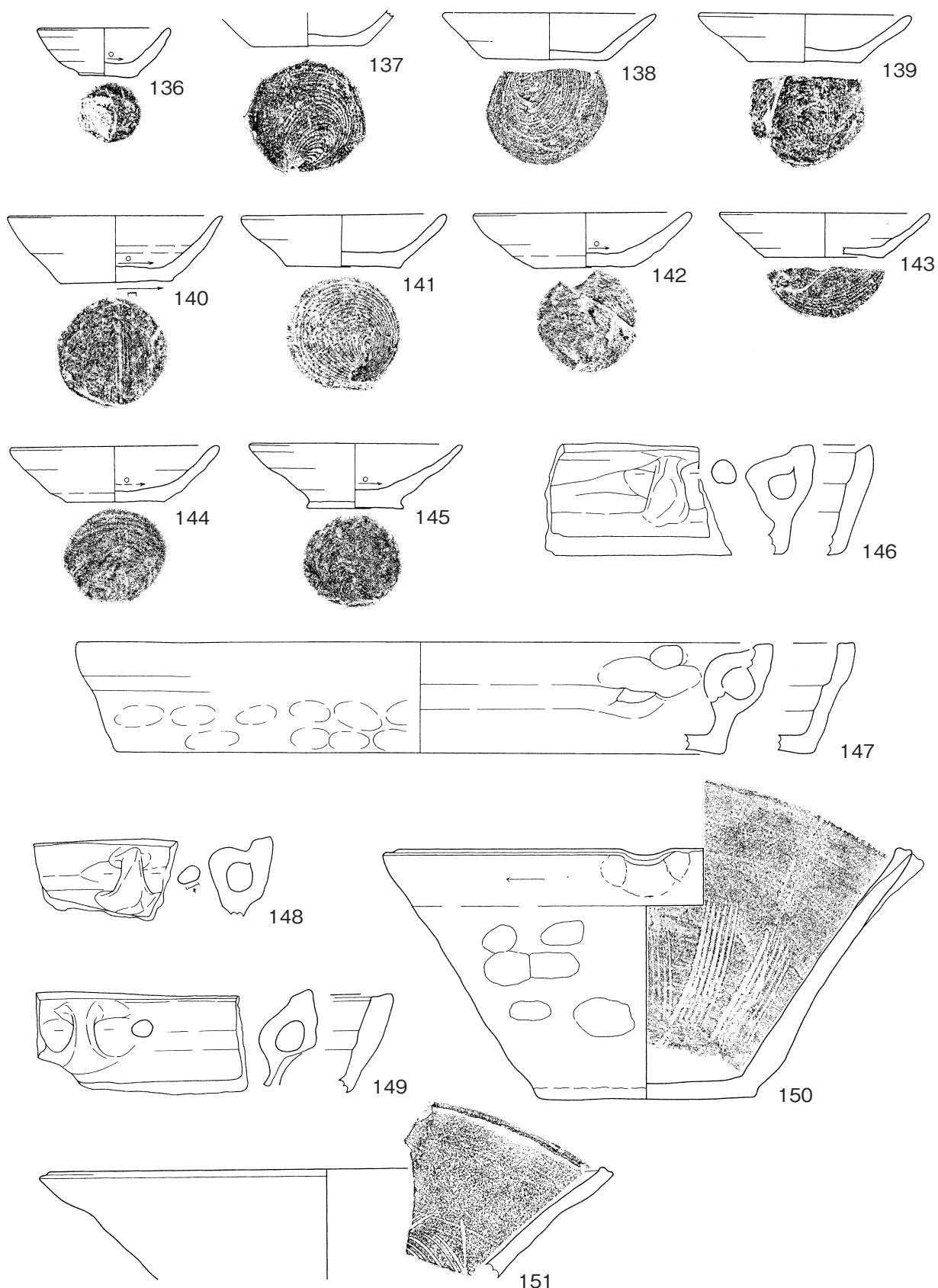
25堀-1



0 1/3 10cm

第18図 土器類 9

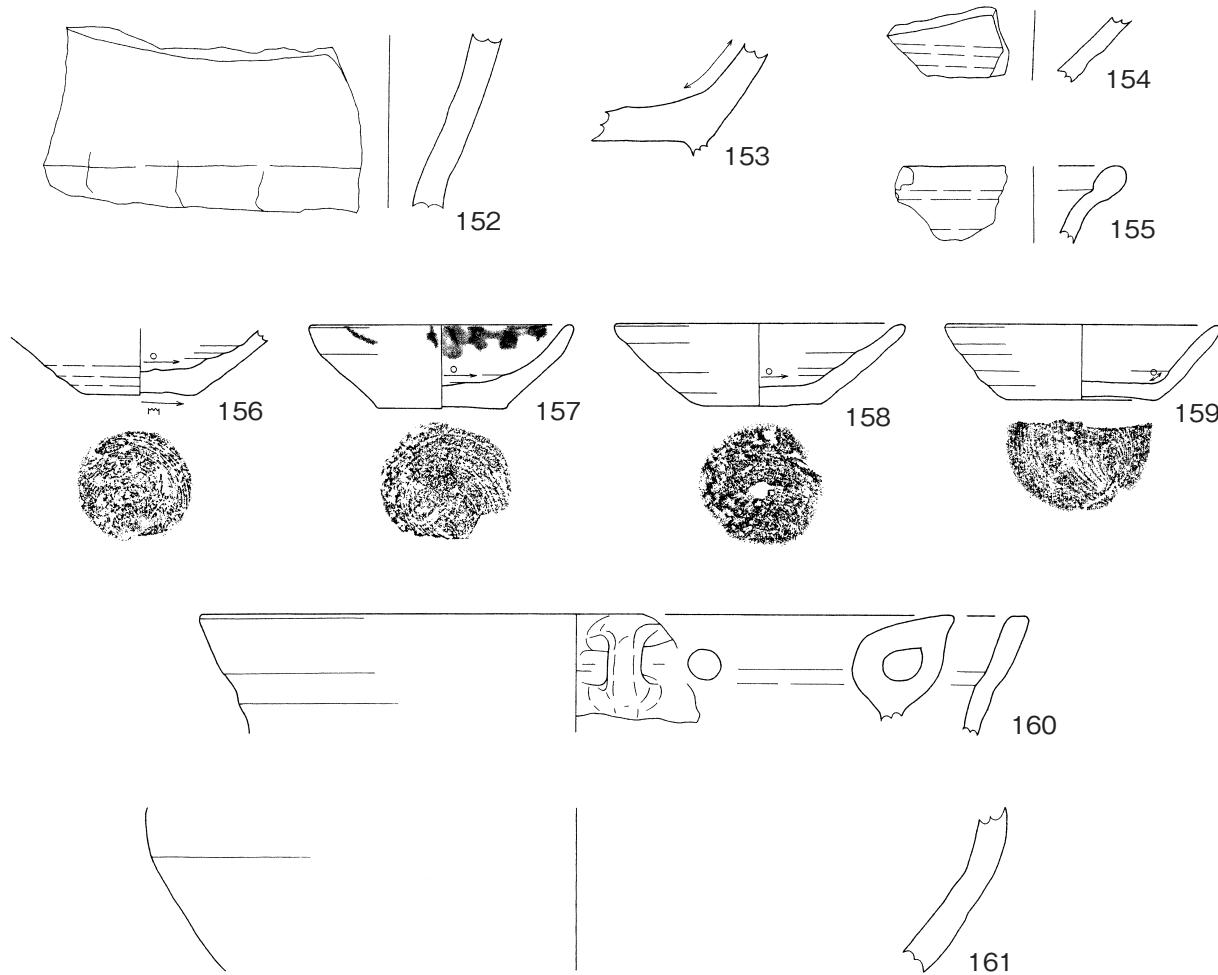
25堀-2



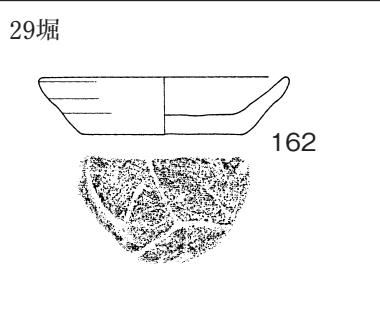
0 1/3 10cm

第19図 土器類10

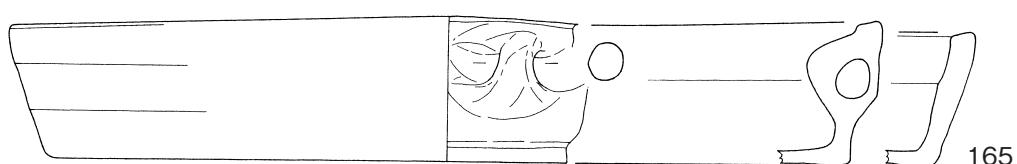
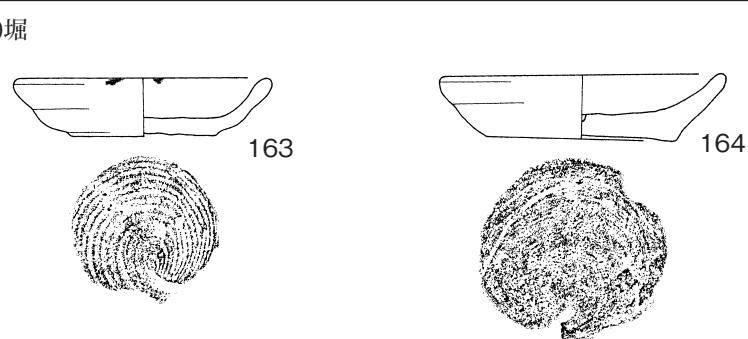
26堀



29堀



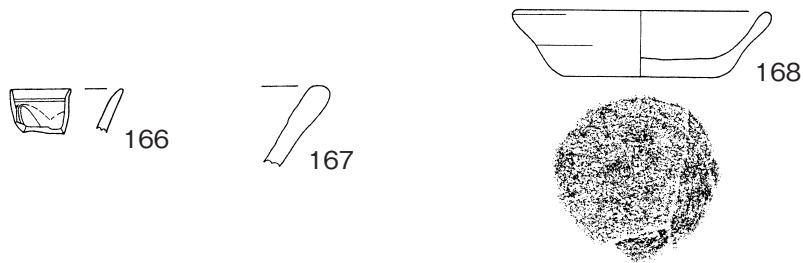
30堀



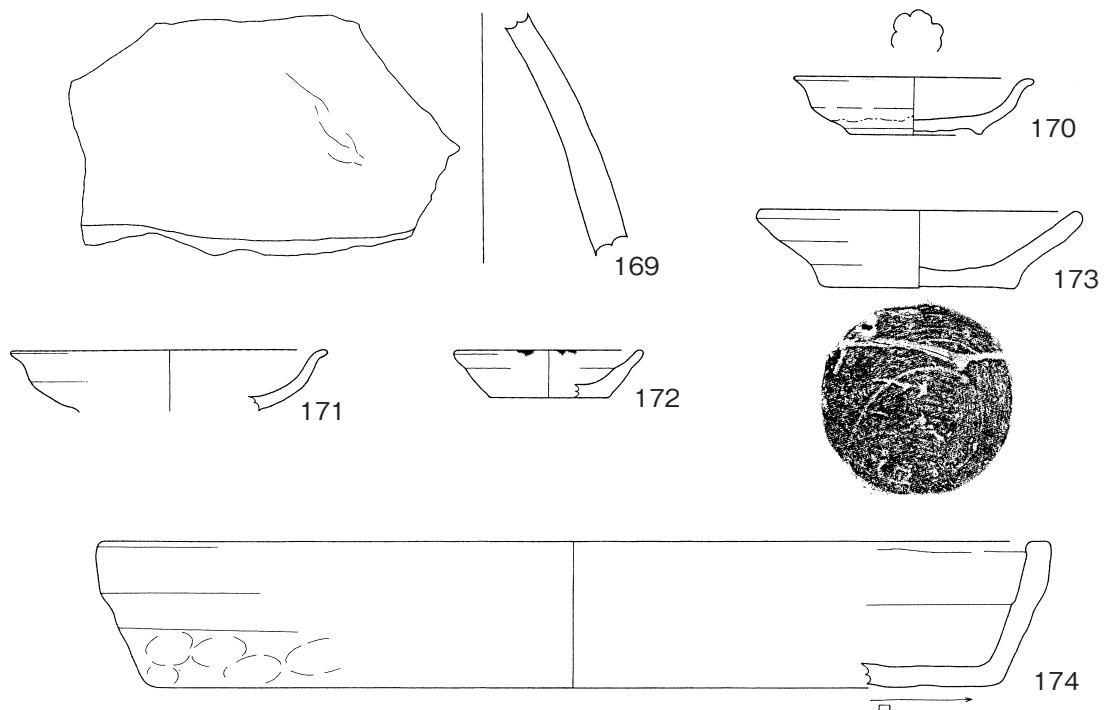
0 1/3 10cm

第20図 土器類11

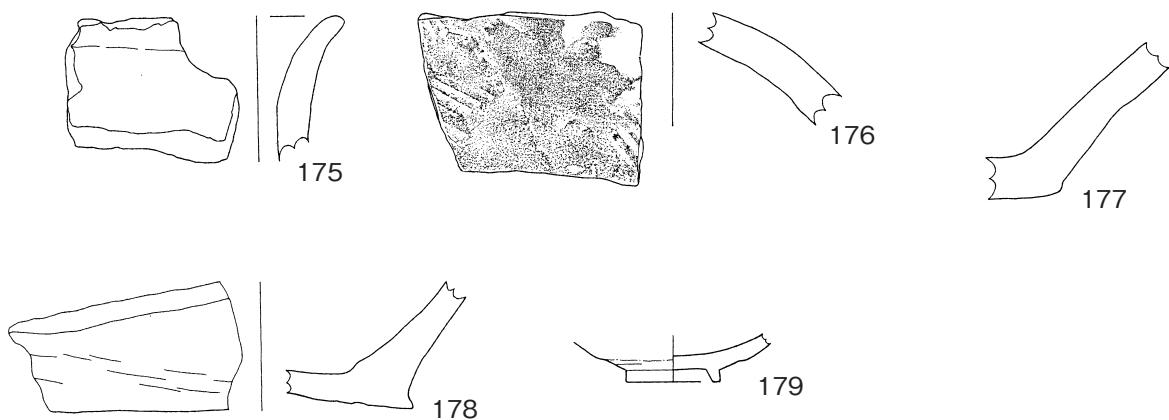
32堀



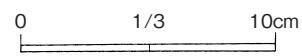
33堀

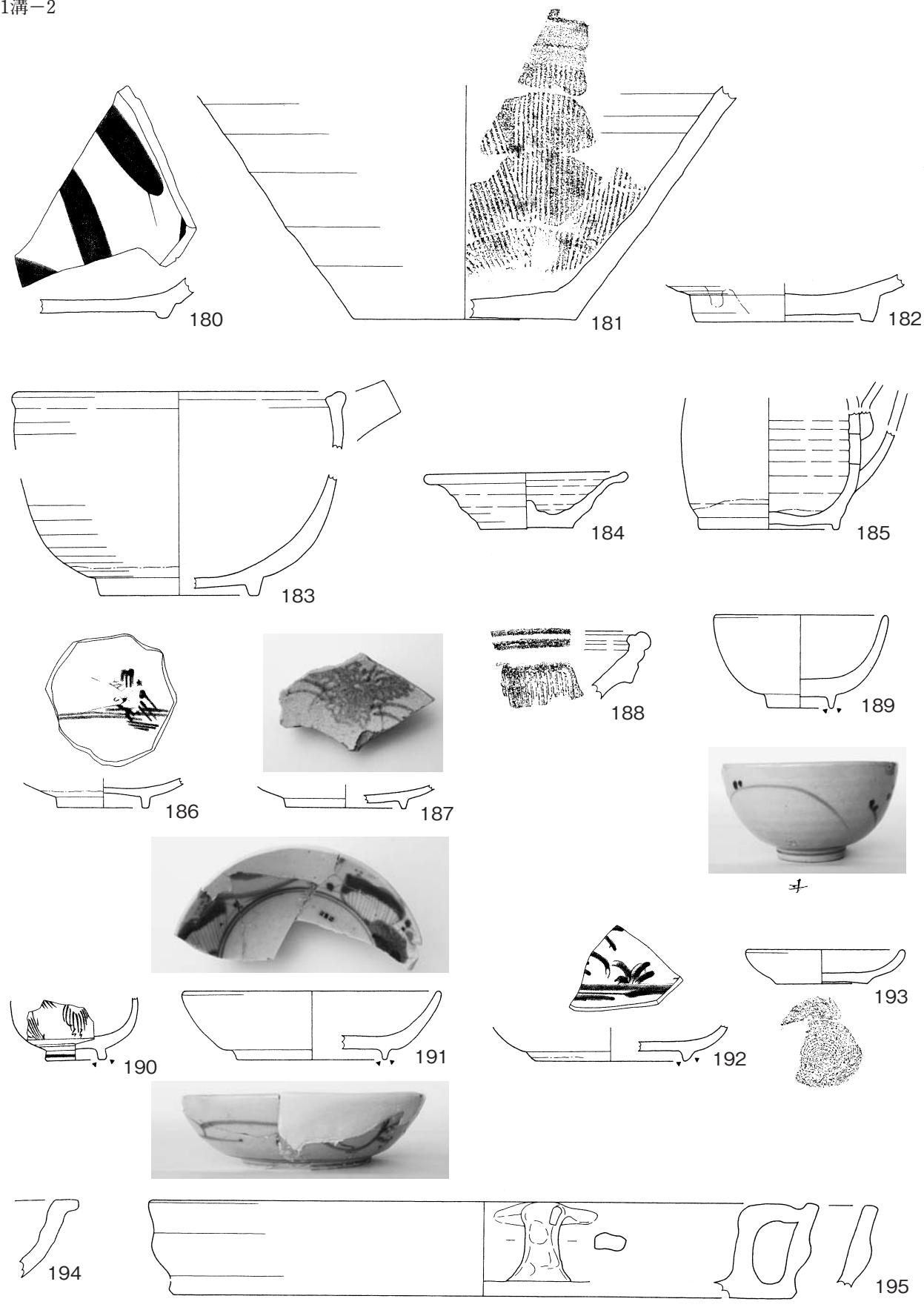


1溝-1



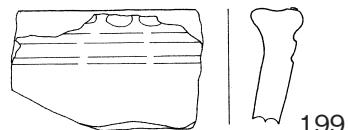
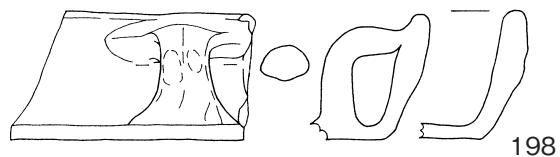
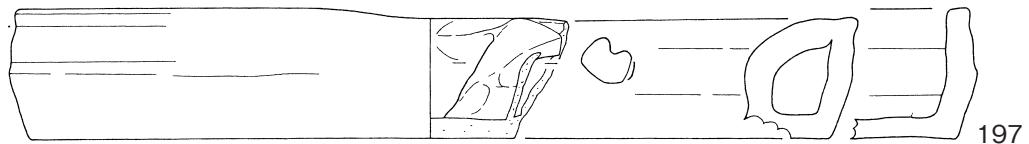
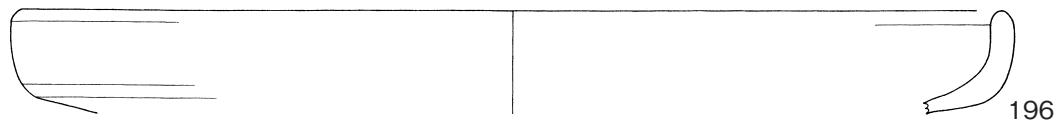
第21図 土器類12



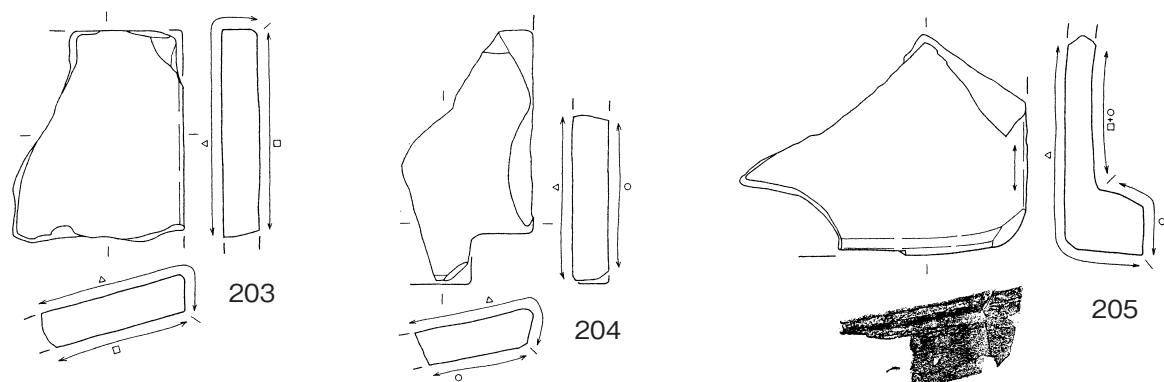
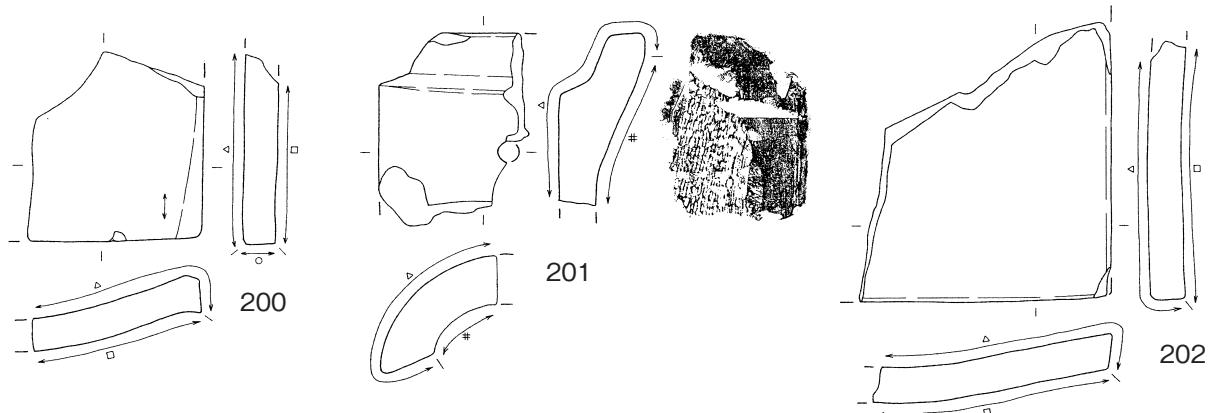


第22図 土器類13

1溝-3



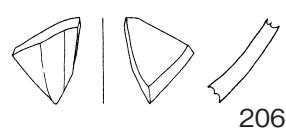
0 1/3 10cm



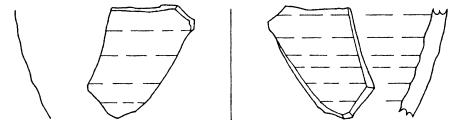
0 1/4 10cm

第23図 土器類14

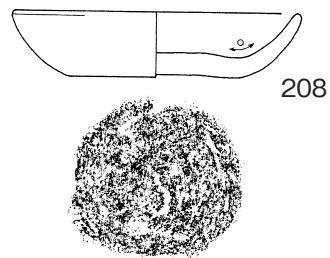
2溝



206

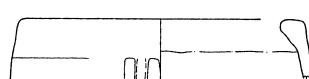


207

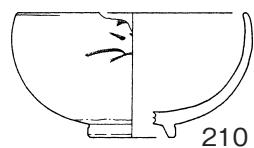


208

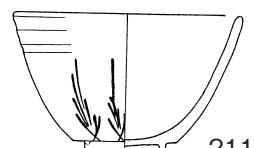
5溝-1



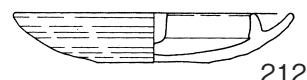
209



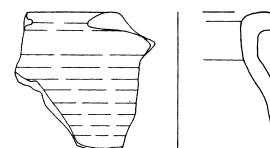
210



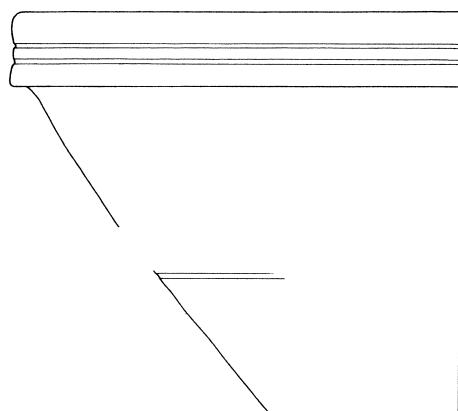
211



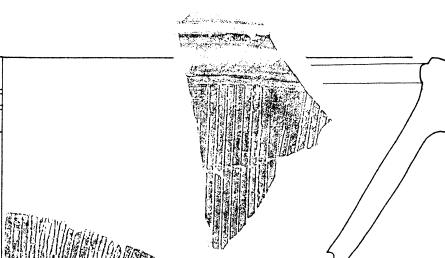
212



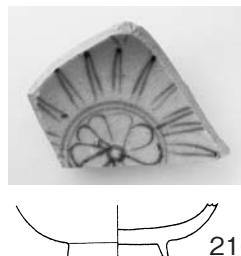
213



214



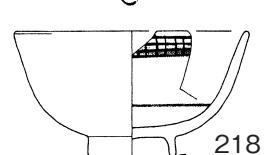
215



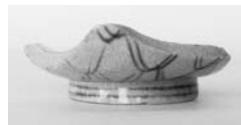
216



217



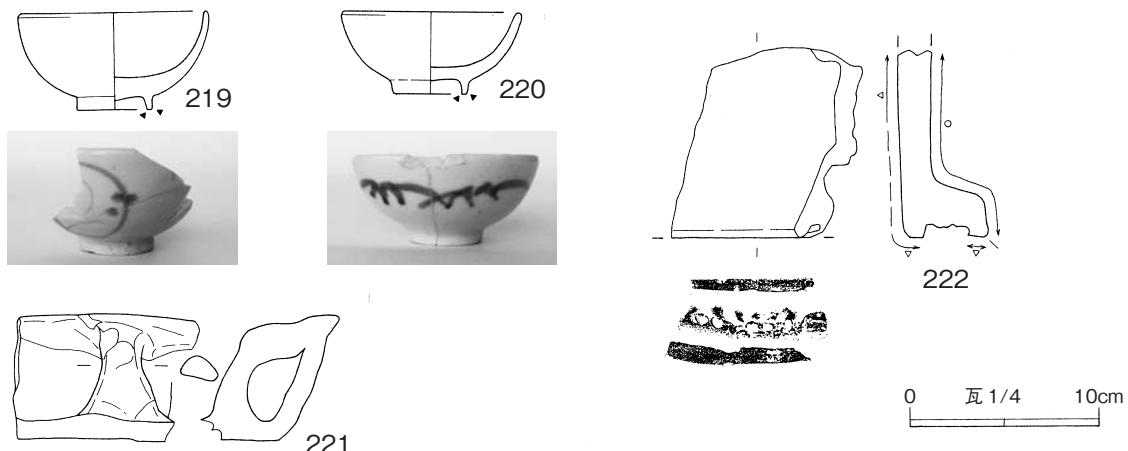
218



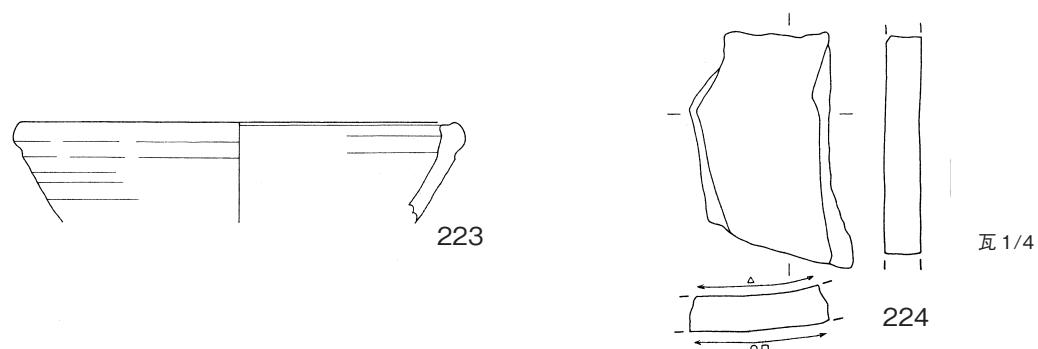
0 1/3 10cm

第24図 土器類15

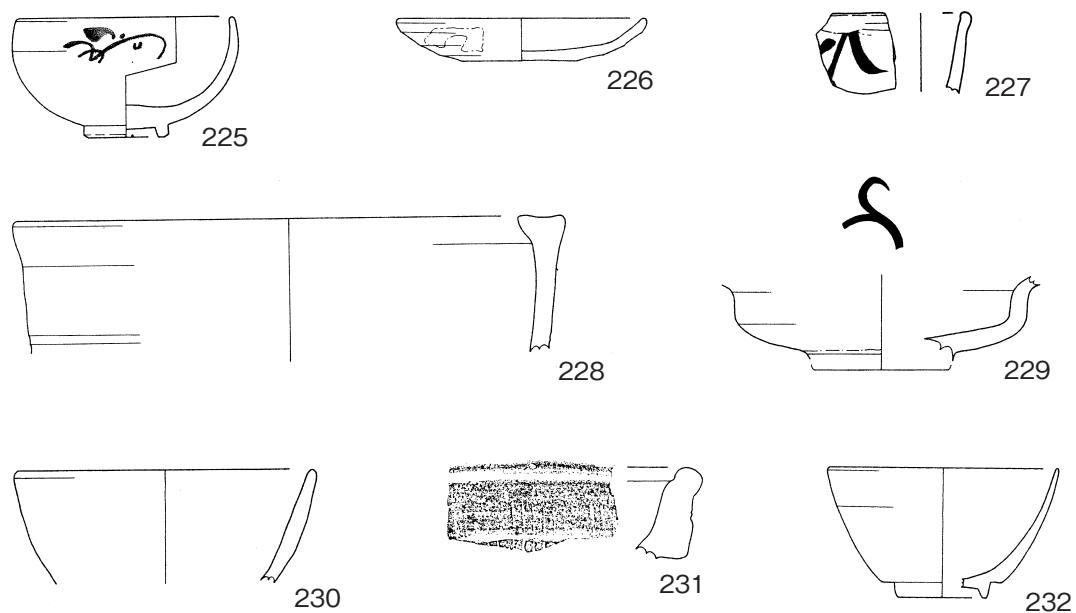
5溝-2



6溝

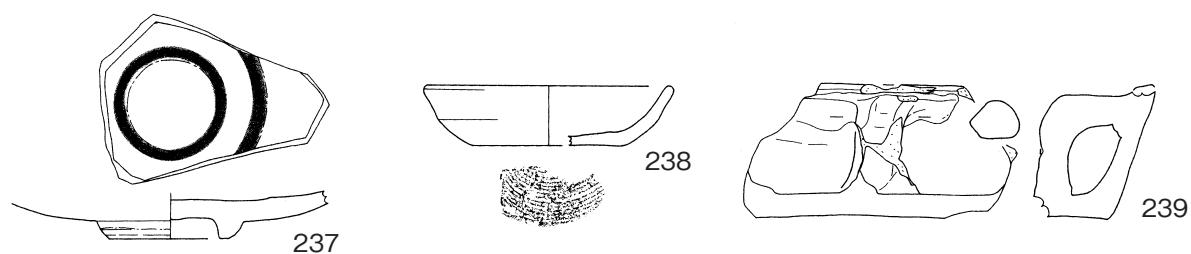
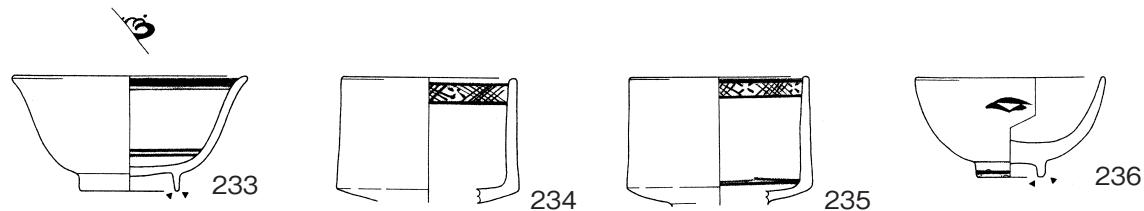


5・6溝-1

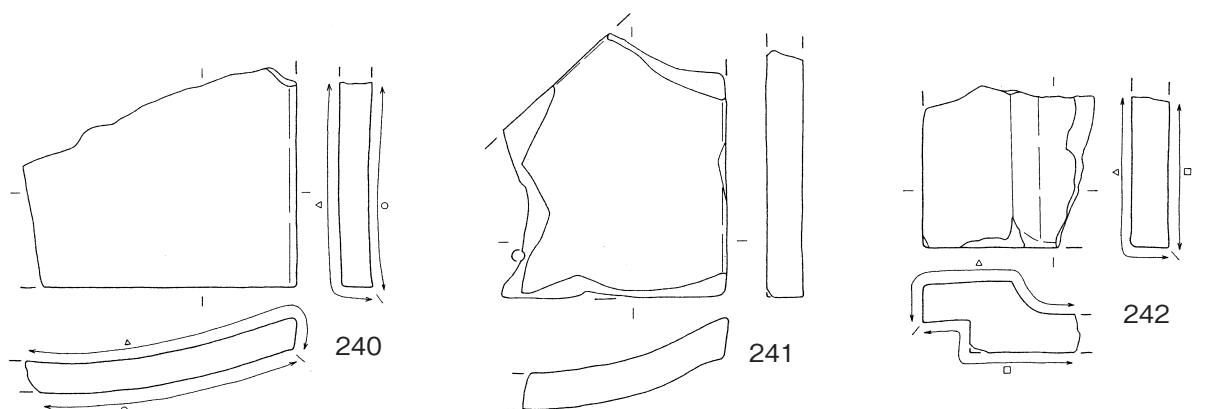


第25図 土器類16

5・6溝-2



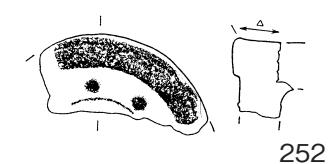
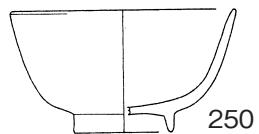
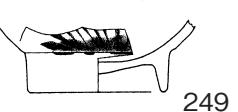
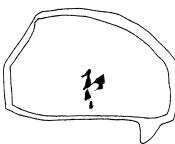
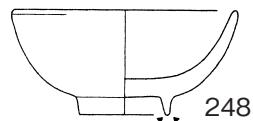
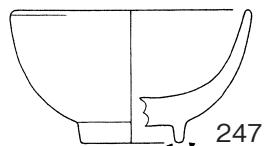
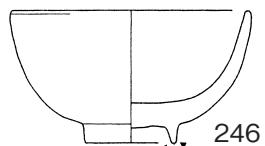
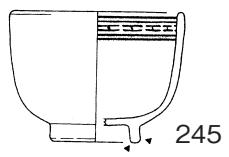
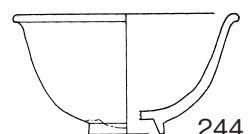
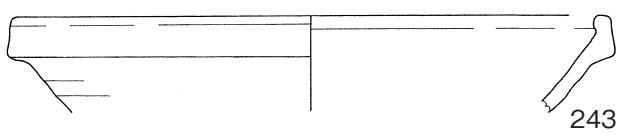
0 1/3 10cm



0 1/4 10cm

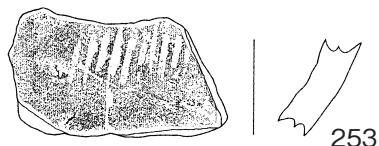
第26図 土器類17

1・5・6溝

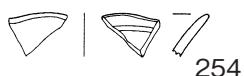


0 瓦 1/4 10cm

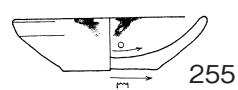
9溝



10溝



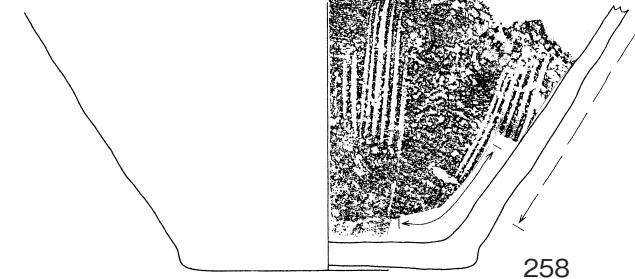
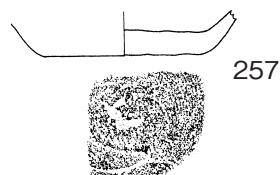
2井



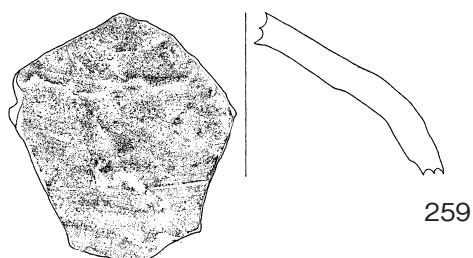
0 1/3 10cm

第27図 土器類18

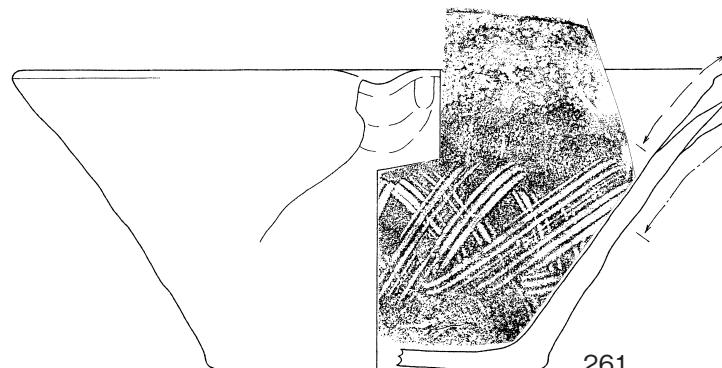
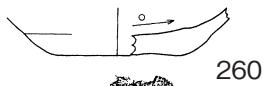
8井



13井



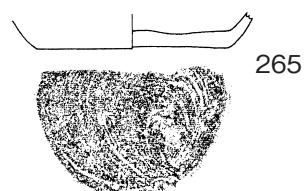
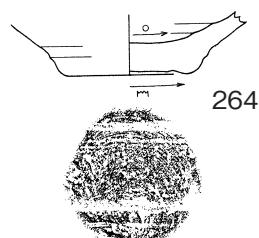
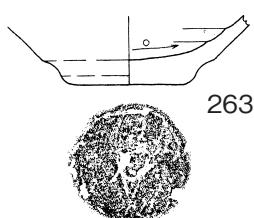
15井



18井

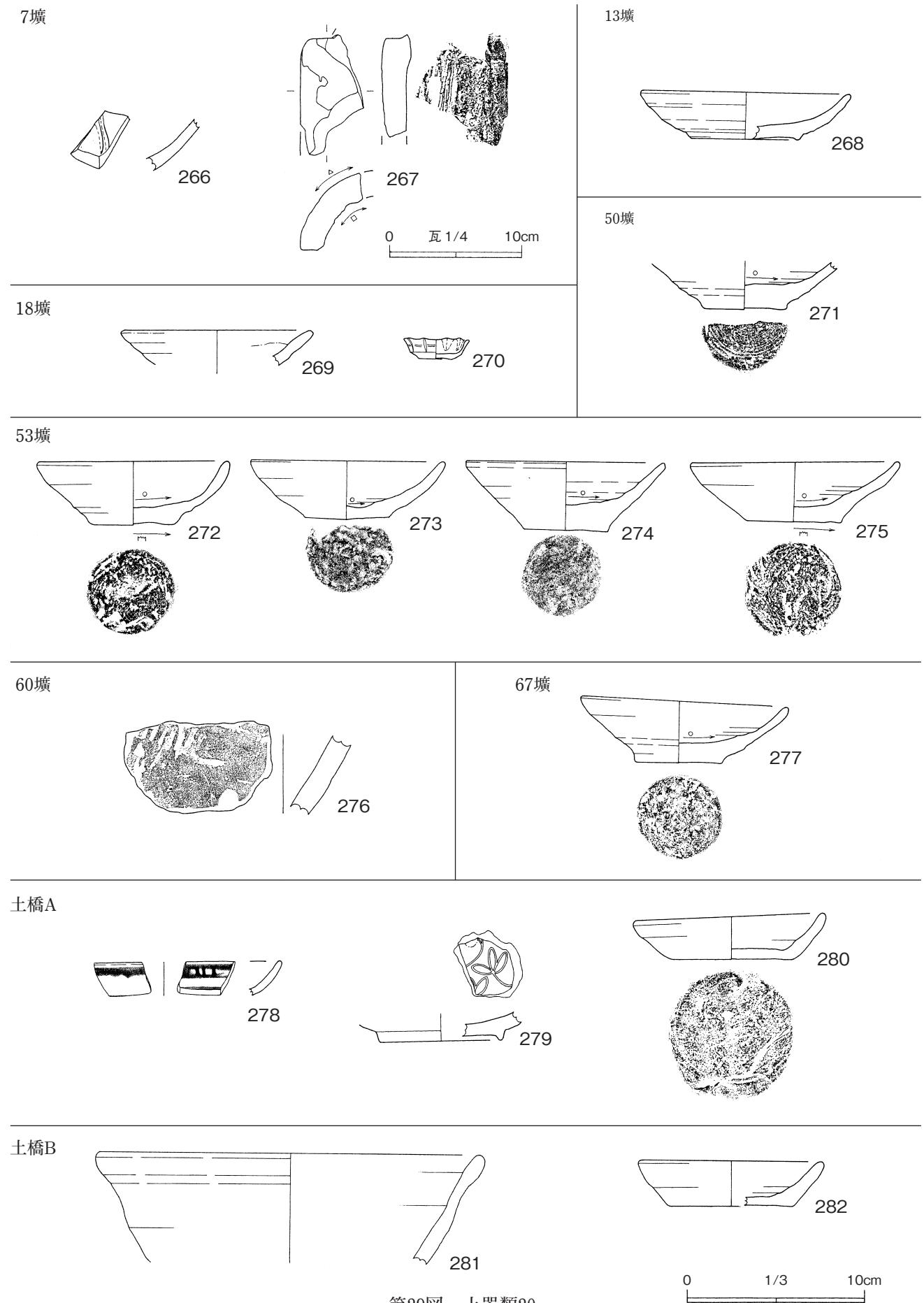


2壙



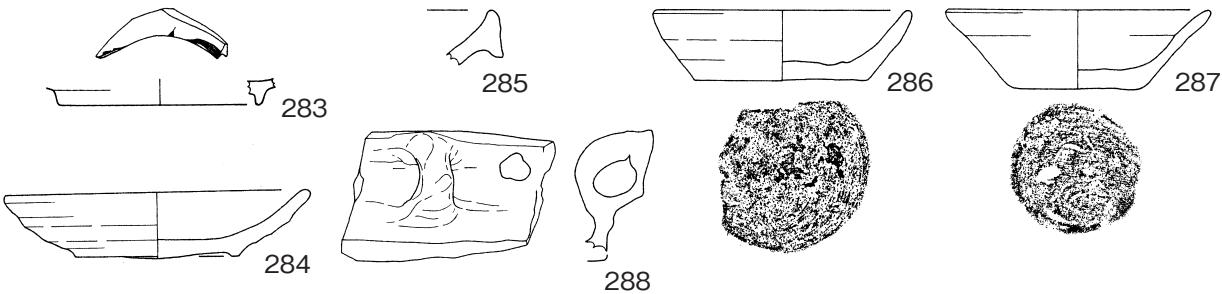
0 1/3 10cm

第28図 土器類19

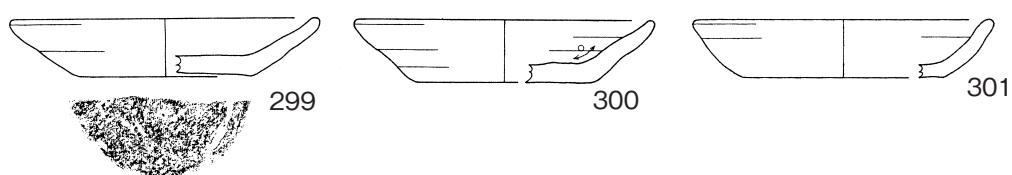
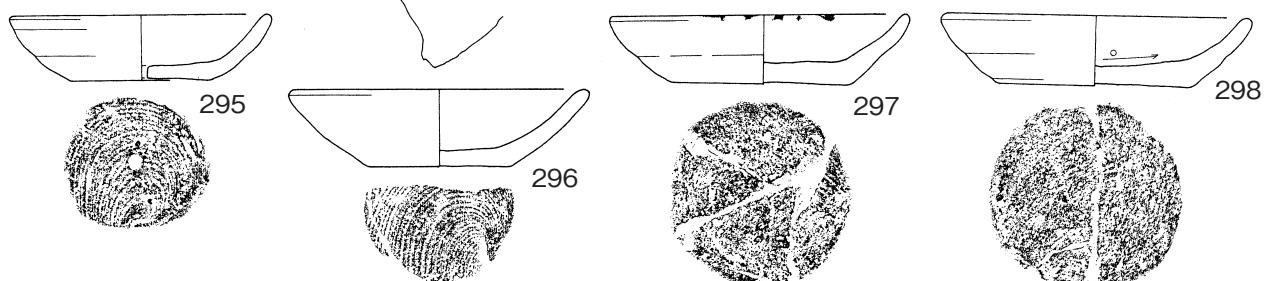
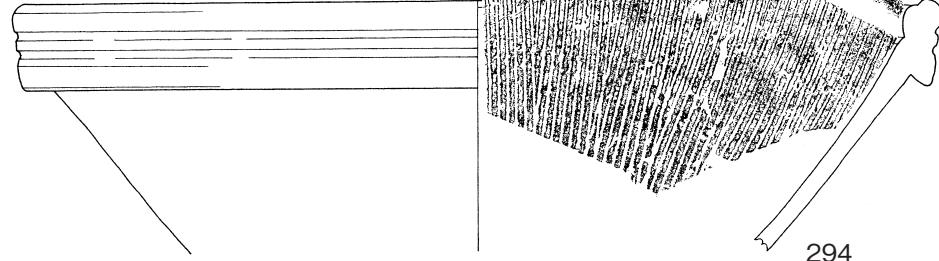
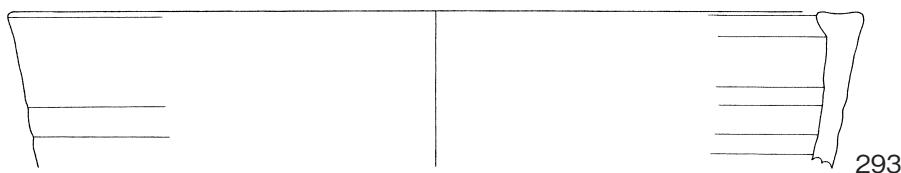
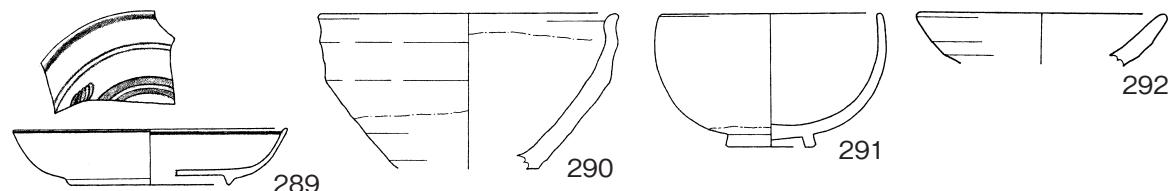


第29図 土器類20

土橋C



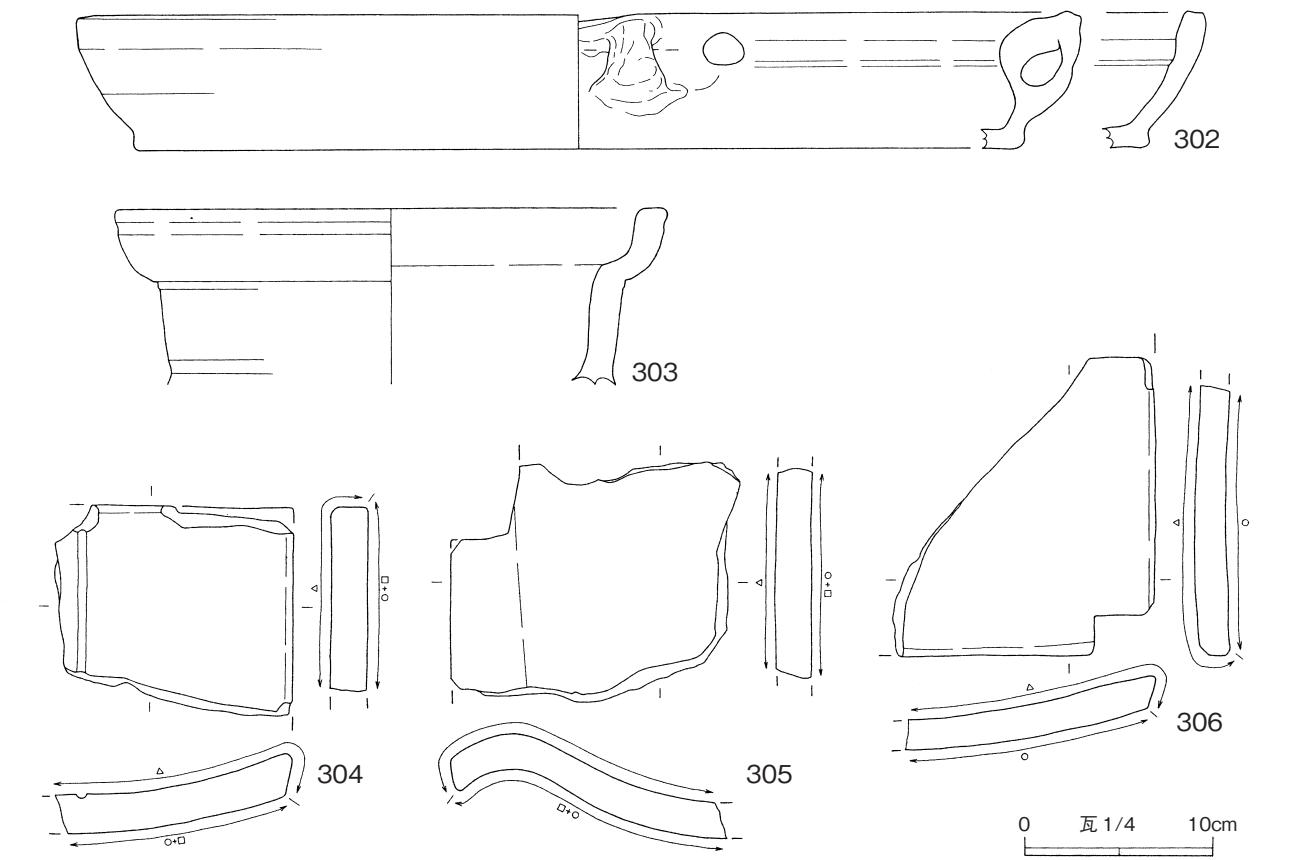
土橋下-1



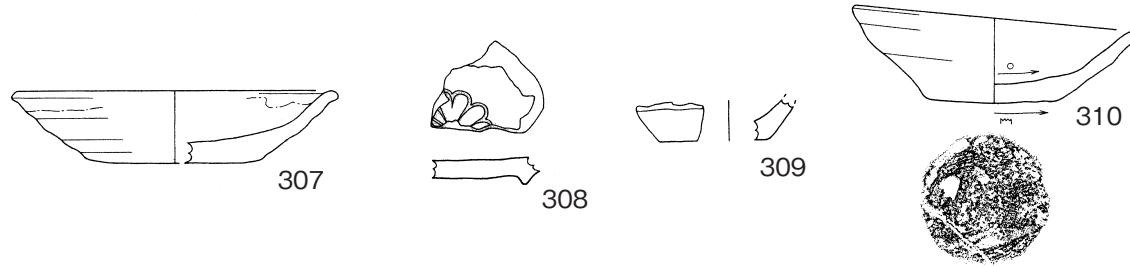
0 1/3 10cm

第30図 土器類21

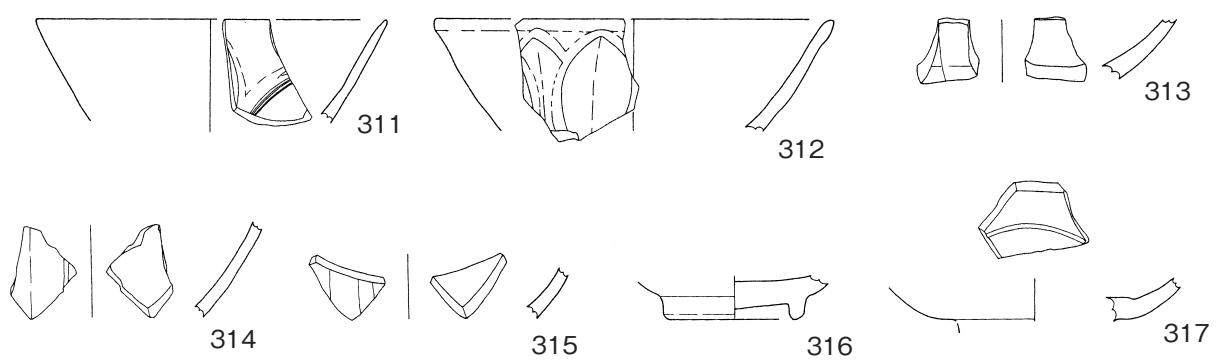
土橋下-2



土橋

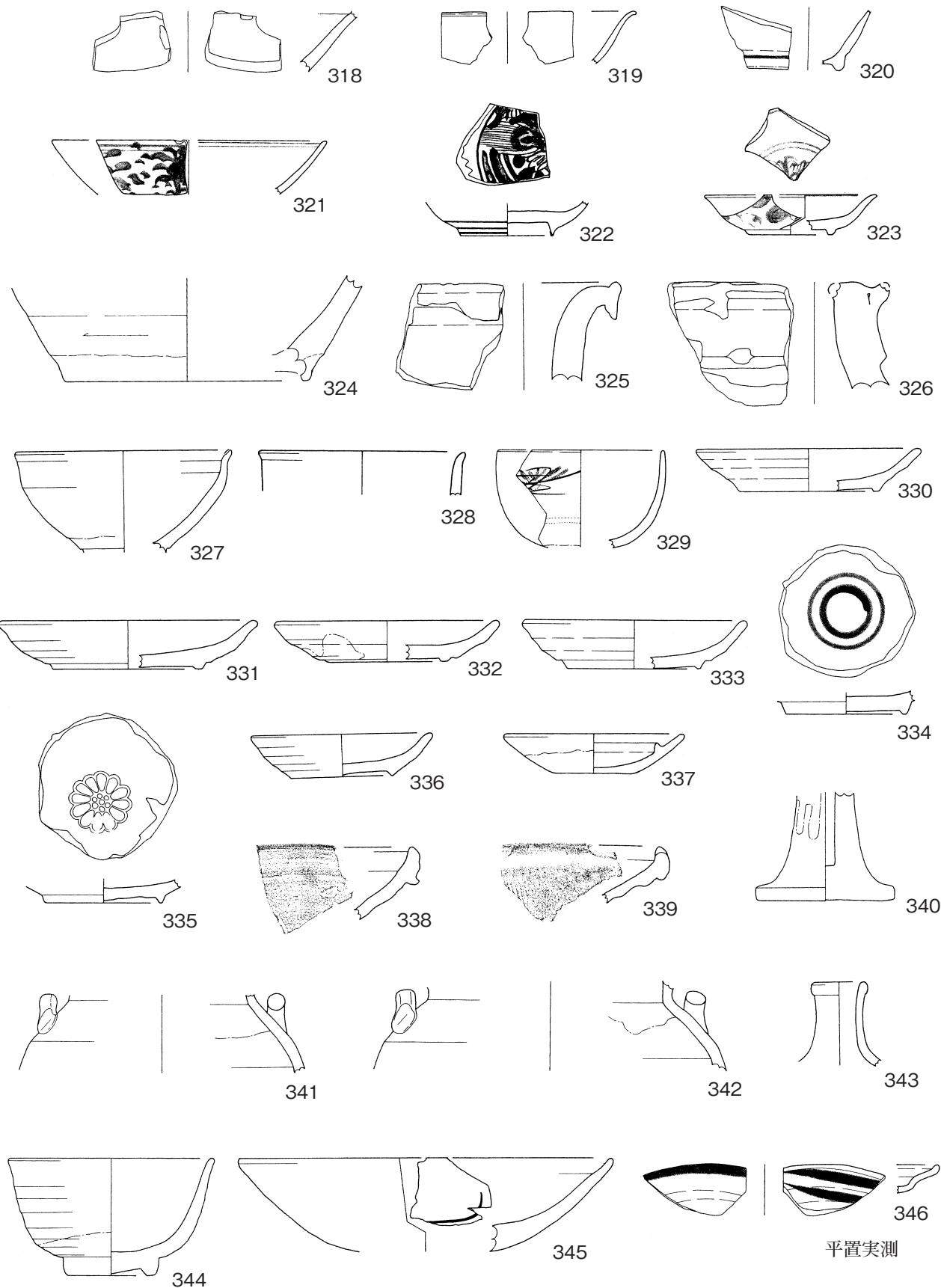


外堀-1



第31図 土器類22

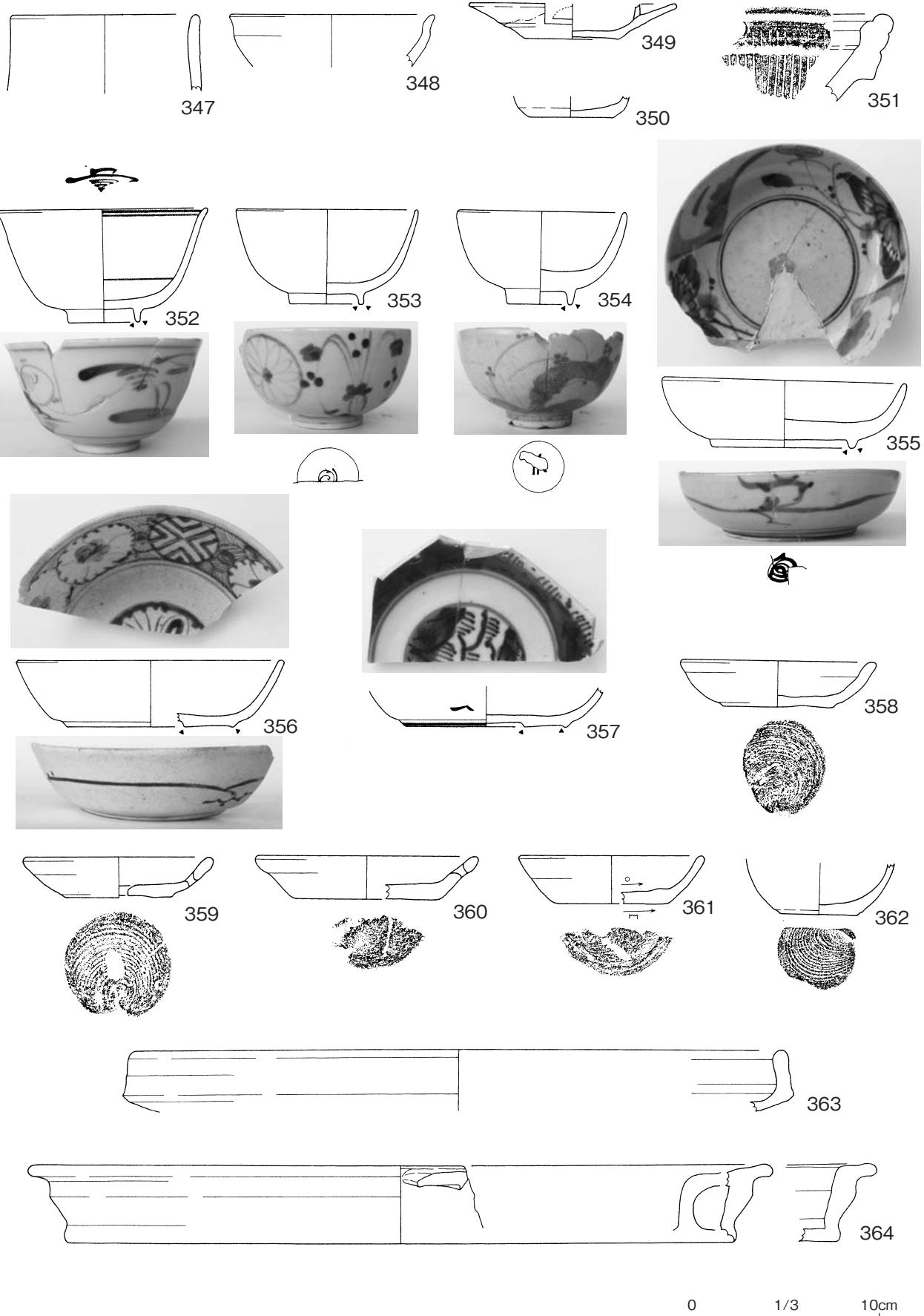
外堀-2



第32図 土器類23

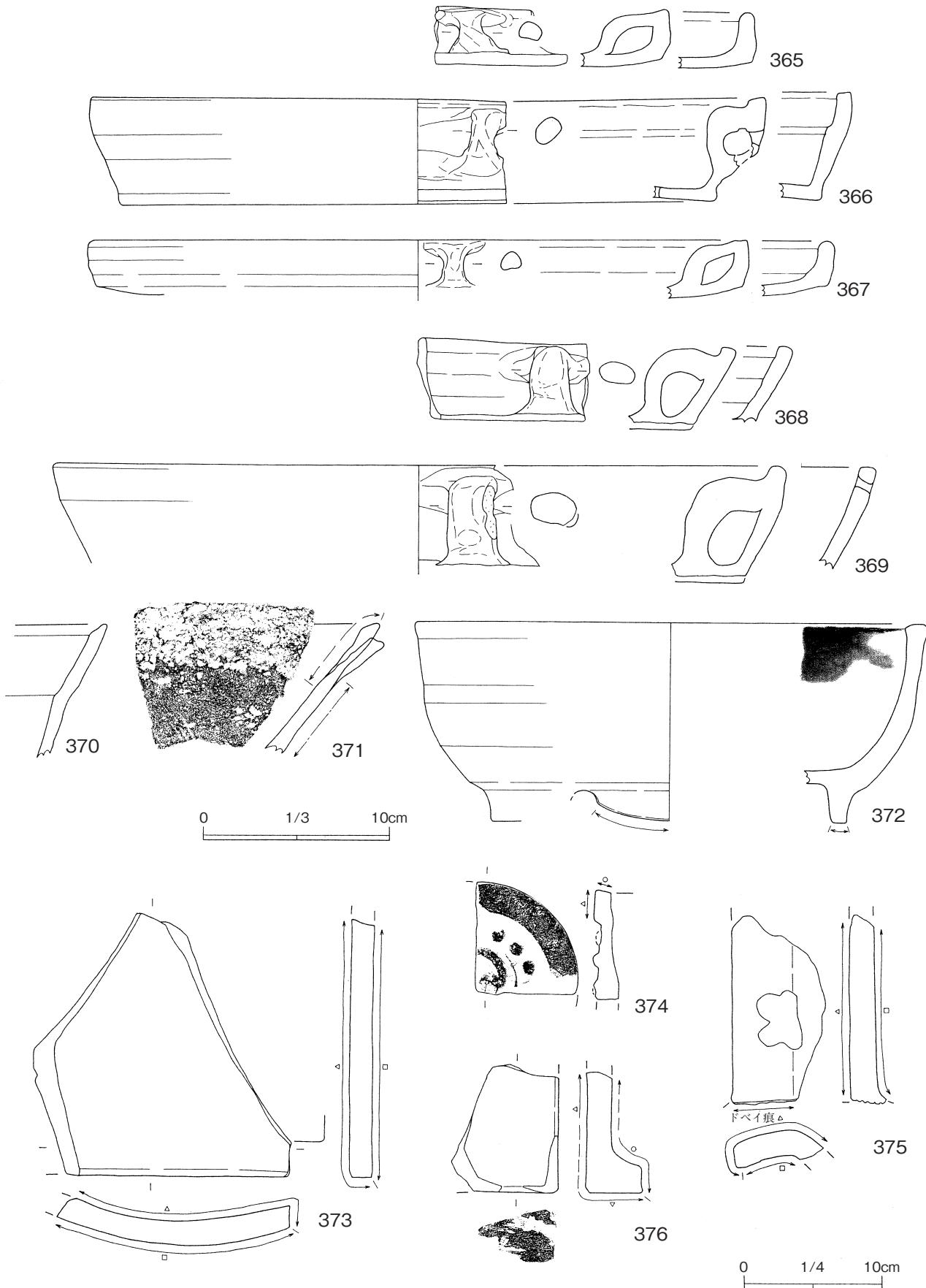
0 1/3 10cm

外堀-3



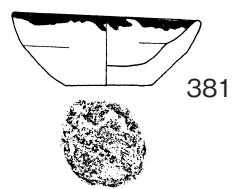
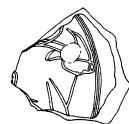
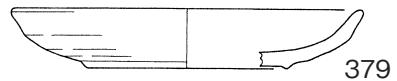
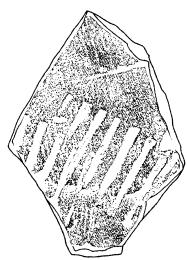
第33図 土器類24

外堀-4

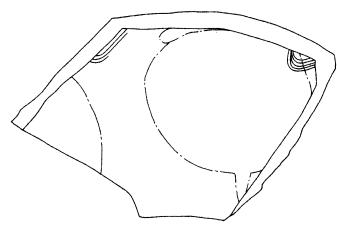
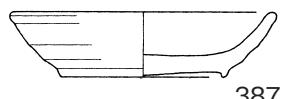
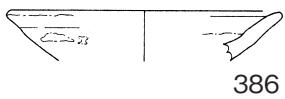


第34図 土器類25

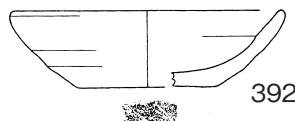
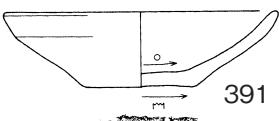
1T



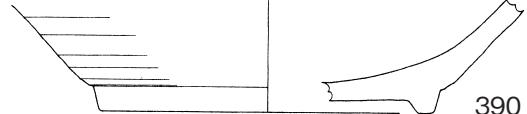
2T



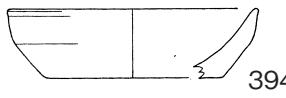
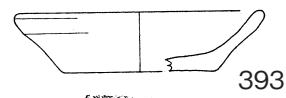
389



391

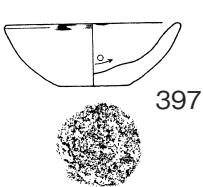
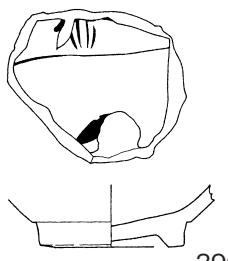


392

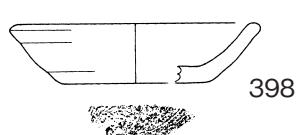


394

3T



7T

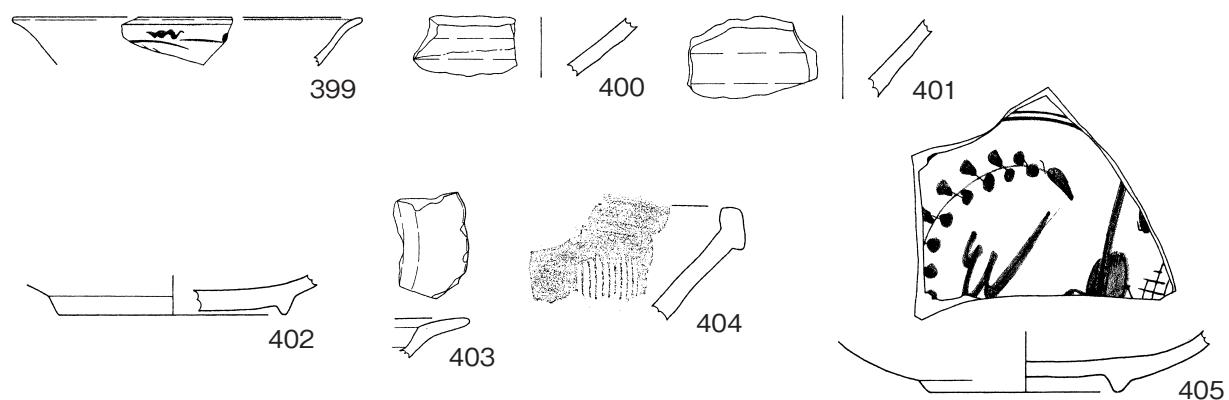


397

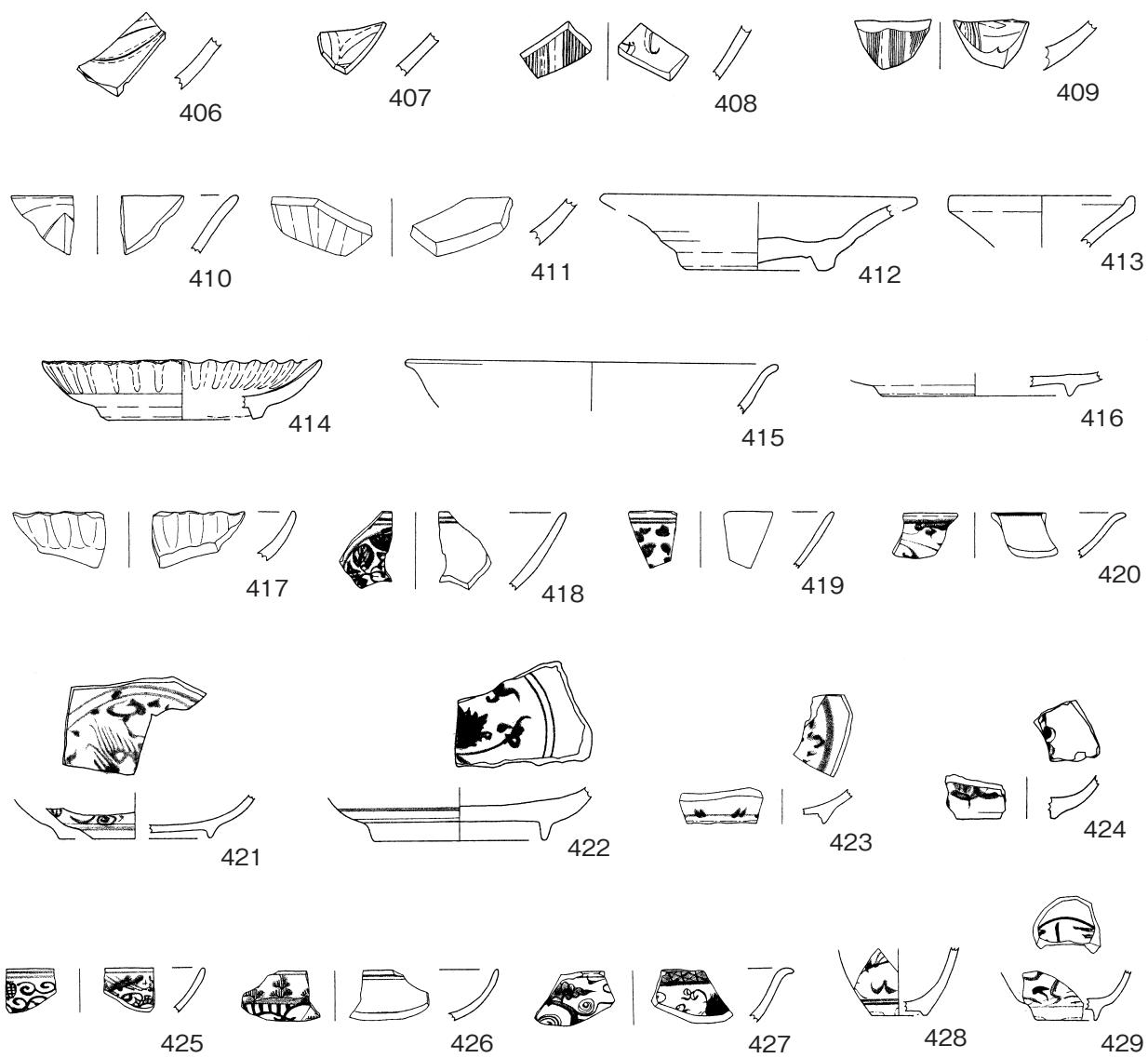
0 1/3 10cm

第35図 土器類26

8T



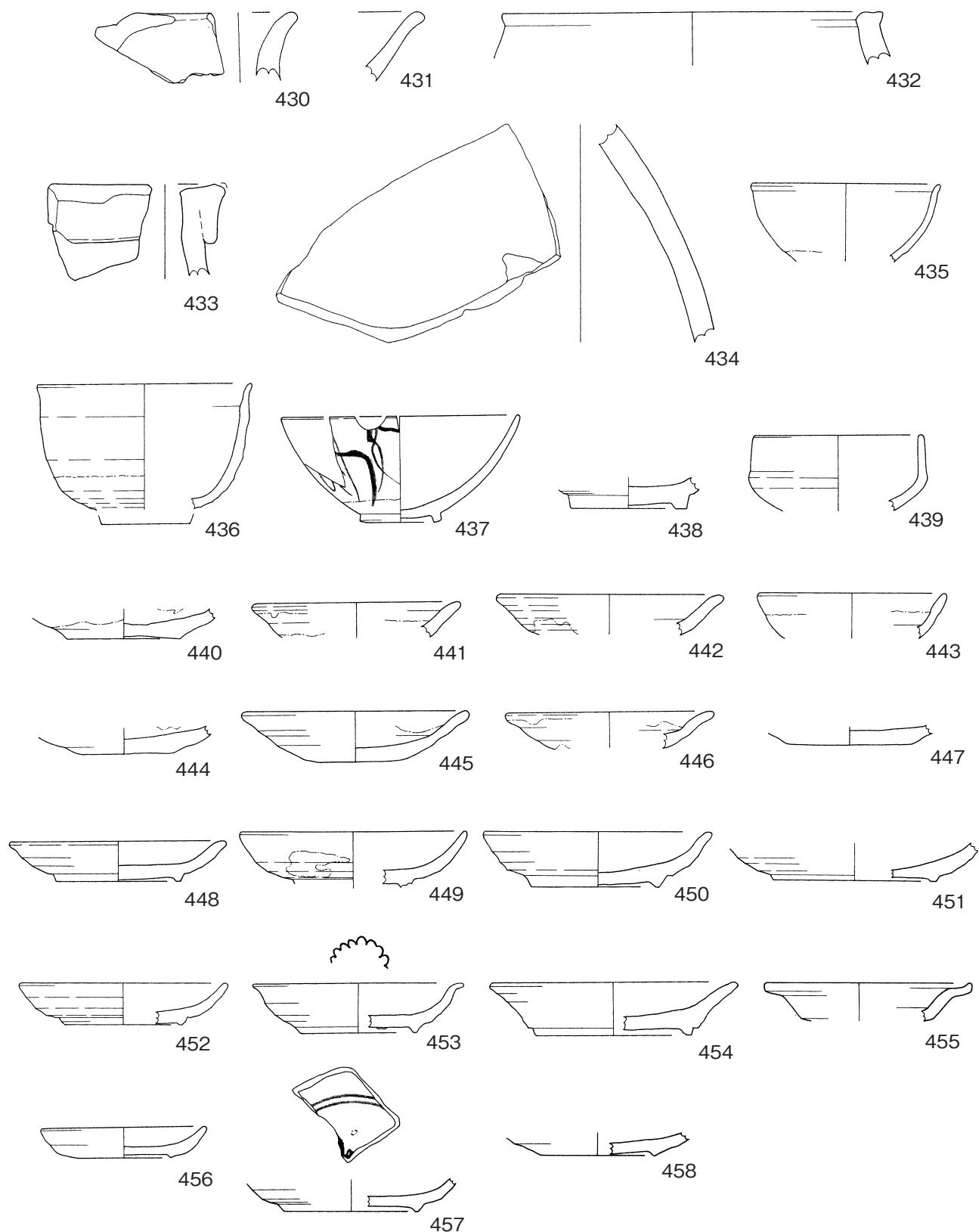
遺構外



0 1/3 10cm

第36図 土器類27

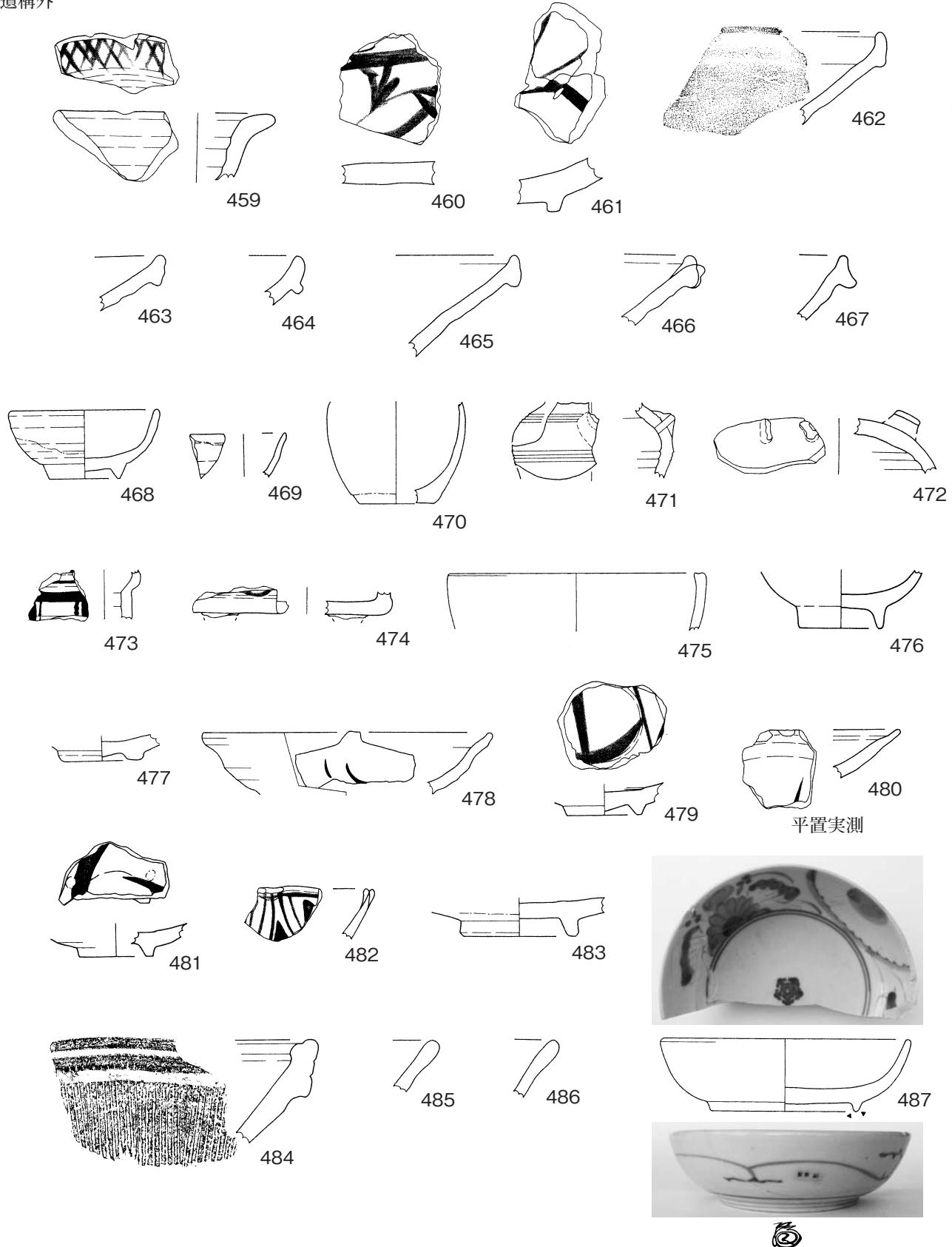
遺構外



0 1/3 10cm

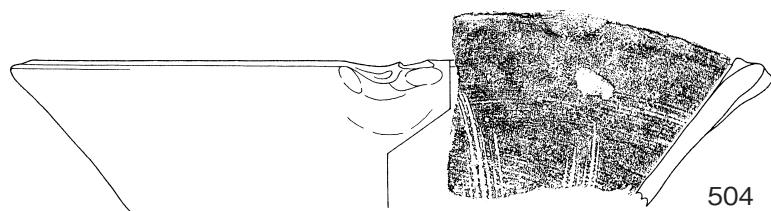
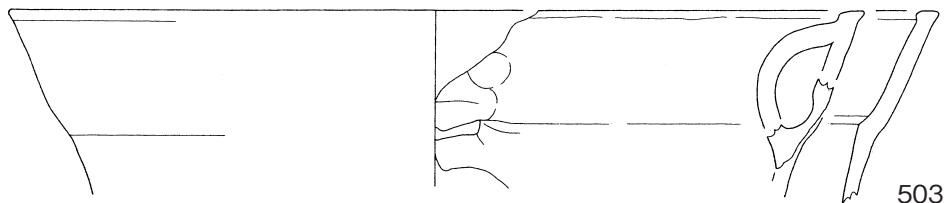
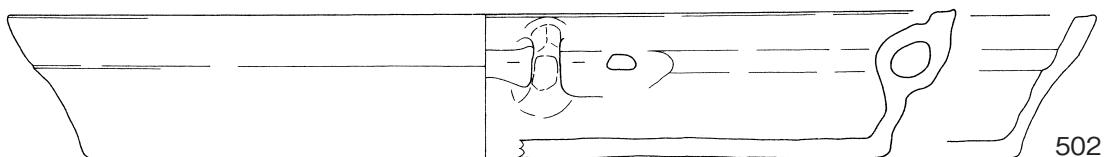
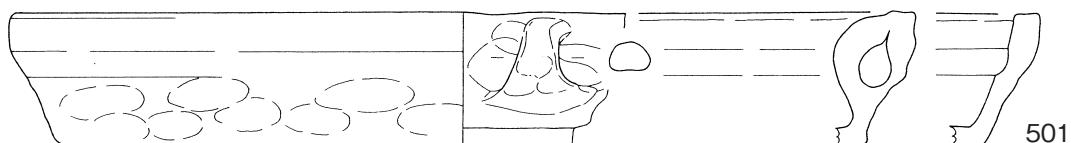
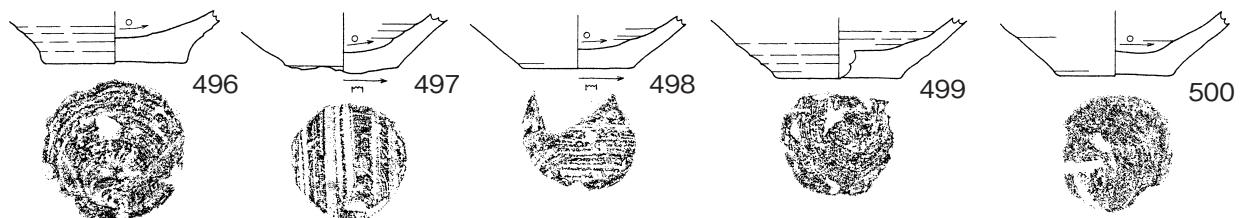
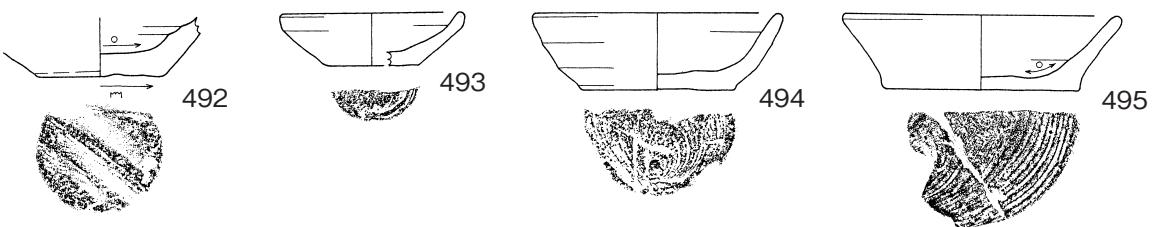
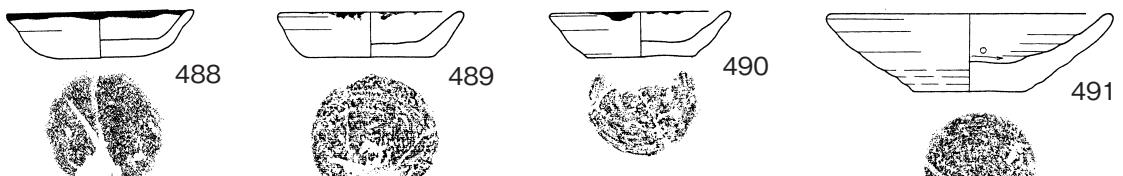
第37図 土器類28

遺構外



第38図 土器類29

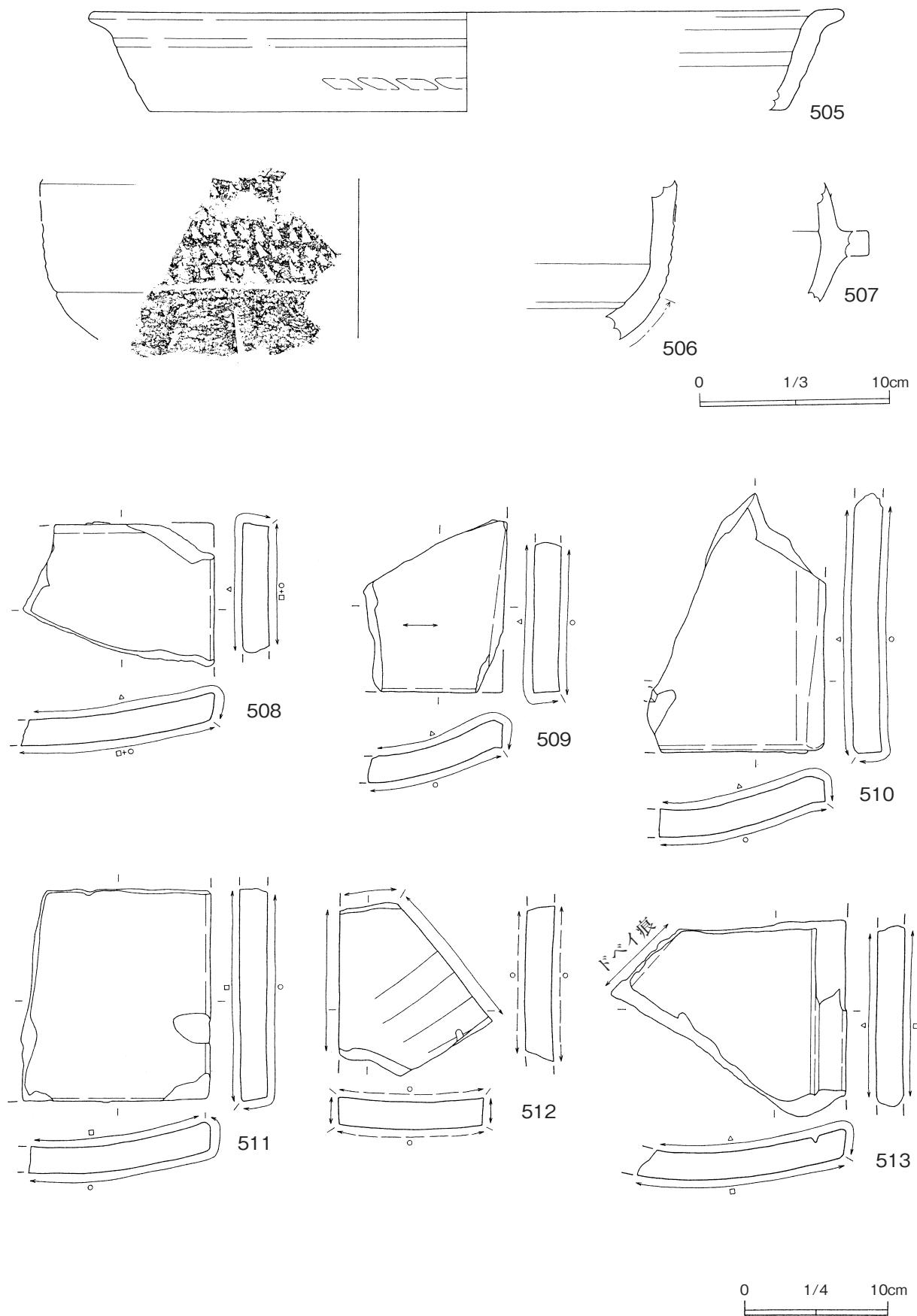
遺構外



0 1/3 10cm

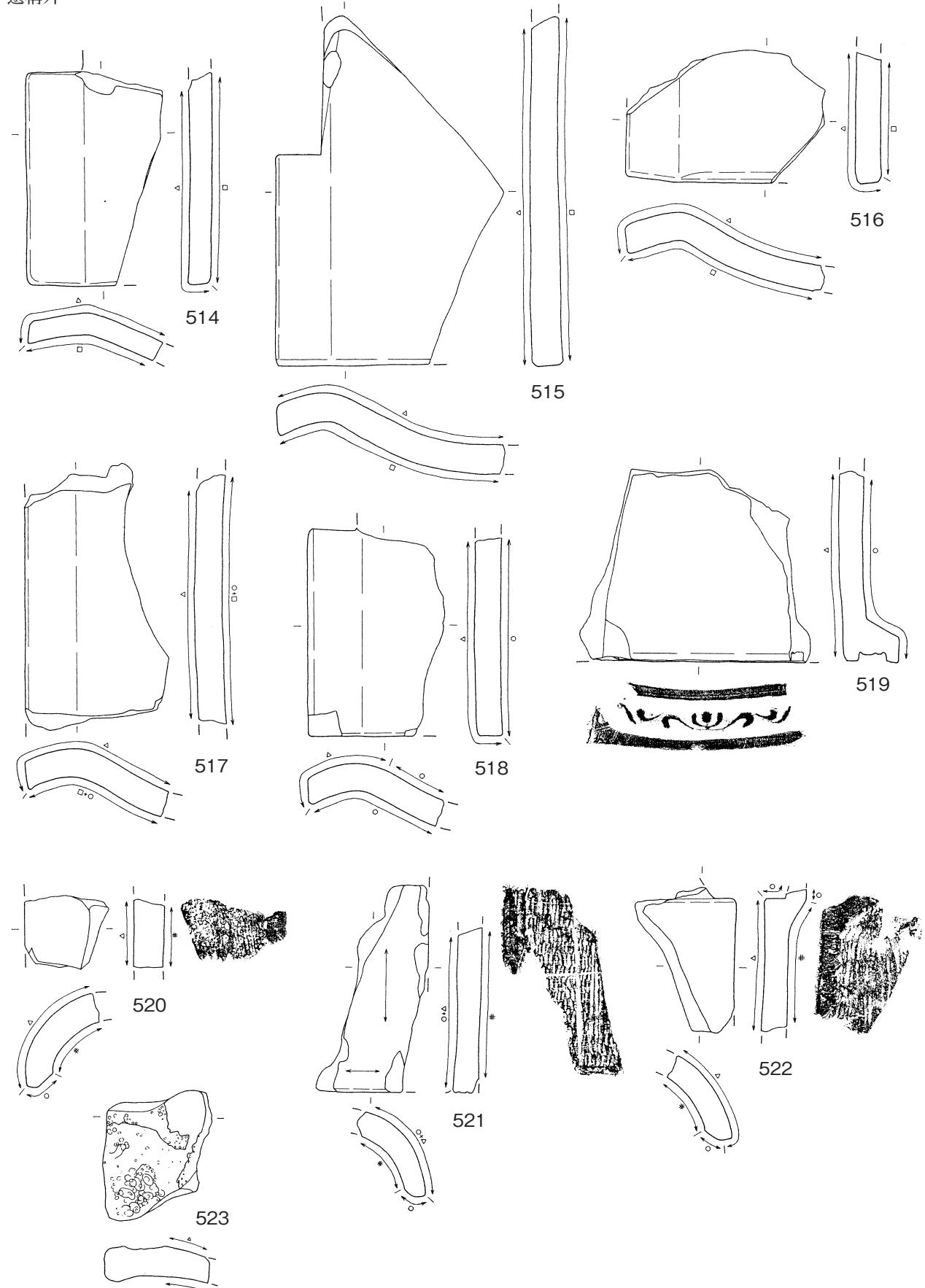
第39図 土器類30

遺構外



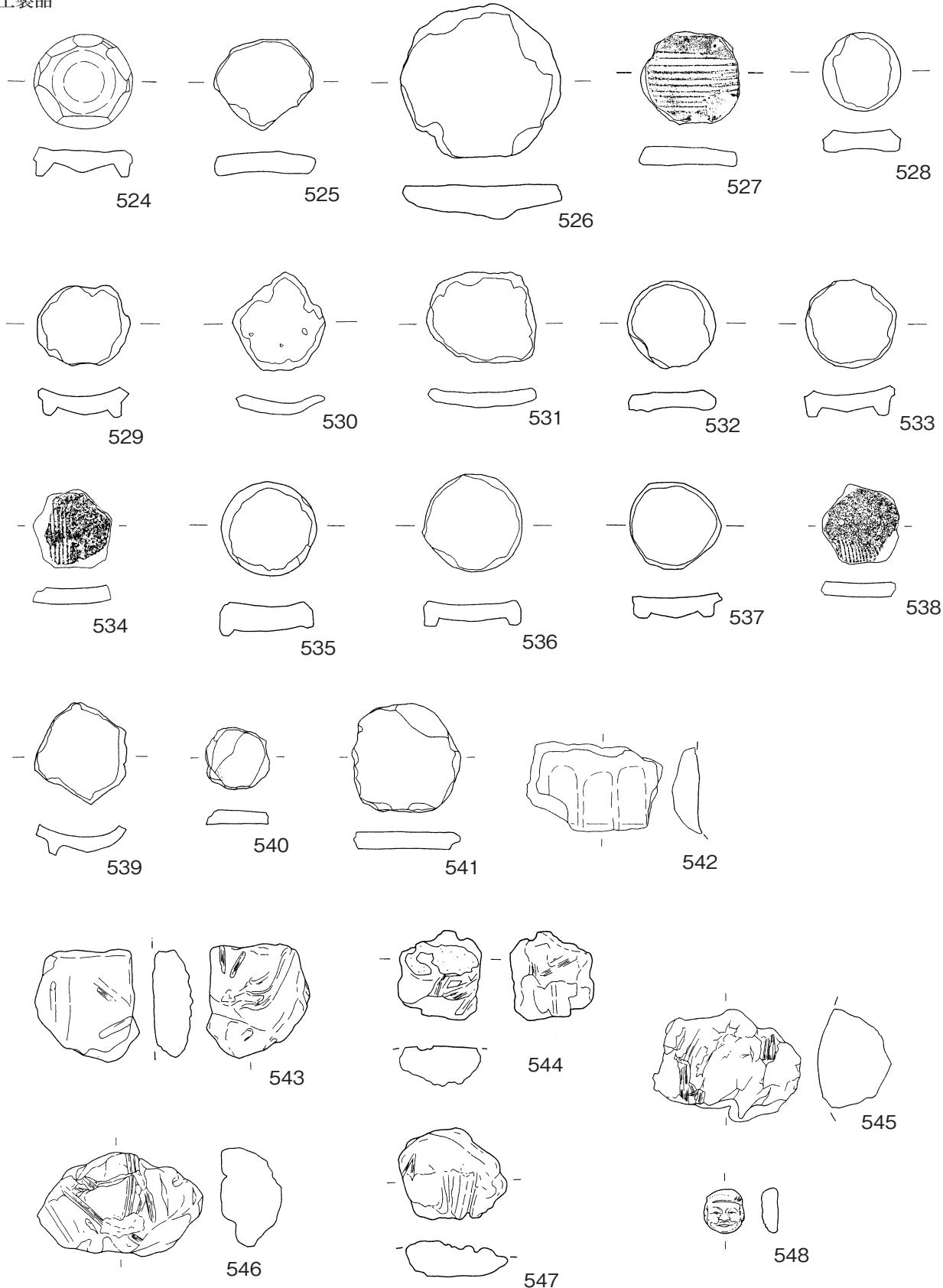
第40図 土器類31

遺構外



第41図 土器類32

土製品



0 1/3 10cm

第42図 土器類33

*は不確定な推定復元値、()は残存値、法量の単位はcm (東)(九)はP66参照 <10は10%以下

図No.	器種	产地	出土地点	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	時期・ 形式	年代	遺物ID	備考	残存率 (%)
1	焼締陶器・甕	常滑	1壙上層	-	-	-			袋01	外面自然釉/内面横整形 痕/肩部	<10
2	陶器・碗/天目	瀬戸美濃	1壙上層	-	-	-	登カ		碗20	内外鉄釉・腰部露胎	10
3	陶器・碗/鉄絵碗	瀬戸美濃	1壙上層	*14.8	-	-	登1	17c初	町碗023	鉄で植物文	20
4	陶器・碗/織部碗	瀬戸美濃	1壙上層	-	-	-	登カ		碗03	内外透明釉/鉄で植物文/ 外面口クロ成形痕	<10
5	陶器・皿/内秃皿	瀬戸美濃	1壙	-	*5.0	-	大3後	16c後	皿03	高台周辺灰釉/底部外面 輪ドチ/削込高台	<10
6	陶器・鉢/鉄絵鉢	肥前(唐津)	1壙上層、13壙 No6上層、 KB19C区6壙2層No596	*21.4	*6.8	-		16c末~17c前	町鉢029		10
7	陶器・碗	京都	1壙上層	-	-	-		19c	碗04	内外透明釉/外面緑色釉 上絵付・文様不明	<10
8	土器・ほうろく	在地	1壙	-	-	5.3			H02		<10
9	土器・片口鉢	在地	1壙下層	-	-	-			鉢28	口唇部磨痕・口縁部内面 剥落顯著	<10
10	陶器・碗/織部碗	瀬戸美濃	2壙上層	-	-	-	登カ		碗05	内外緑釉・腰部露胎	<10
11	陶器・皿	肥前(唐津)	2壙上層	-	-	-			皿02	内外長石釉/土製円盤カ	<10
12	陶器・皿/鉄絵皿	肥前(唐津)	2壙、10壙上層、22壙上層、 土橋下、外堀、3T、II層、III 層、一括、KB19 C区、私5 次1壙 No119・151	*41.4	*11.5	-		16c末~17c前	町皿117		25
13	陶器・瓶	肥前(唐津)	2壙、3壙、10壙、22壙上層、 土橋下 No111・113・120、No 158、2T、一括	-	*17.0	-			袋15	内外一部藁灰釉カ/底辺部 外面成形が雑で接合時の 凹みが残る	20
14	陶器・皿/灯明皿 (受皿)	志戸呂	2壙上層	*11.0	-	-			皿01	内外鋸釉	<10
15	陶器・擂鉢	堺	2壙上層	-	-	-		18c~	鉢29		<10
16	磁器・小杯/白磁小 杯	肥前	3壙	*6.6	-	-		18cカ	伊27		20
17	磁器・皿/白磁菊皿	中国	5壙 No9下層	-	-	-		16c	白08		10
18	陶器・碗/天目	瀬戸美濃	5壙上層	-	4.0	-	登1	17c初	天01	内面鉄釉/高台糸切後削 込/土製円盤カ	10
19	陶器・鉢/鼠志野	瀬戸美濃	5壙上層 No6、KB14 39壙 上層、KB18、KB19、KB19 C区、私5	*34.2	*17.0	7.4	大4後	17c初	町鉢49	KB14 土64	40
20	陶器・皿/鉄絵皿	肥前(唐津)	5壙 No4 上層	*12.4	-	-		16c末~17c前	町皿101		10
21	陶器・建水カ	備前	5壙上層	-	-	-			他02		<10
22	土器・かわらけ	在地	5壙上層	*12.0	*8.0	2.6			K15		10
23	陶器・皿/志野丸皿	瀬戸美濃	6壙 No3 上層	*11.2	*5.3	2.1	登1	17c初	町皿180		40
24	陶器・鉢/大鉢	瀬戸美濃	6壙、II層、III層、KB19(C 区No223、D区2層、D区4層 No86)	*33.2	*19.5	7.3	登1	17c初	町皿164	内外長石釉/鉄で文様	25
25	陶器・鉢/大皿	備前カ	6壙上層	-	*10.0	-			鉢01	内外鋸釉	<10
26	土器・かわらけ	在地	6壙上層	*10.0	*6.5	2.2			K05		30
27	土器・ほうろく	在地	6壙 No8下層	-	-	-			H03		<10
28	磁器・皿	中国	7壙(No18・19)下層、33壙 No18下層	*11.8	*6.9	3.0	皿B1群	15c後~16c後	町染025		25
29	陶器・碗/天目	瀬戸美濃	7壙 No6上層	-	5.0	-	登1	17c初	天02	内面鉄釉/円形成形後被 熱/土製円盤カ	10
30	陶器・向付/志野向 付	瀬戸美濃	7壙(1T)	-	-	-	大4後	17c初	他03	内外長石釉厚い/鉄で文 様	<10
31	焼締陶器・壺	備前丹波	7壙 No5下層、8壙(3T)、33 壙下層、外堀、5溝、1・5・6 溝、土橋下(No105・162)、1 T、3T、8T、II層、III層、一 括、KB19(B区ト、オチキワ)、 KB18(西 堀 No33 II層、西 堀、一括)、私5 1壙(No87・ 95、下層、一括)、私5 1壙 No29、私6(3溝、3T、一括)	*11.0	*20.0	*41.5		15c	町袋041		25
32	土器・かわらけ	在地	7壙 No11下層	-	5.0	-			K06	底部内面指頭ナデ/底部 外面板ナデ	25
33	土器・かわらけ	在地	7壙 No20下層	-	5.0	-			K07	底部内面指頭ナデ	50
34	土器・ほうろく	在地	7壙 No14上層	*34.0	-	-			H04	外面スス付着	10
35	土器・ほうろく	在地	7壙 No22上層	*36.0	*34.0	5.2			H05		10
36	土器・火鉢	在地	7壙(1T)、7壙上層、9壙上 層、33壙、II層、3T	*41.6	*37.0	-			町鉢303		25
37	磁器・皿/白磁端反皿	中国	8壙	-	*9.0	-	E類	15c~16c	白04	高台端部露胎	<10
38	陶器・碗/天目	瀬戸美濃	8壙 No5上層、10壙 No14下層	*12.4	-	-	大3前	16c後	町天034		25

第2表 土器類一覧表1

*は不確定な推定復元値、() は残存値、法量の単位はcm (東) (九) はP66参照 <10は10%以下

図No	器種	産地	出土地点	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	時期・ 形式	年代	遺物ID	備考	残存率 (%)
39	陶器・碗/天目	瀬戸美濃	8壙(No54・71・一括)上層、土橋下No103	*12.2	5.0	5.7	大4	16c末～17c初	町天040		50
40	陶器・皿/志野丸皿	瀬戸美濃	8壙 No43上層	*12.0	*7.7	2.7	登1	17c初	町皿187		25
41	陶器・皿/志野丸皿	瀬戸美濃	8壙 No68上層	14.8	6.8	2.9	登1	17c初	町皿078		80
42	陶器・皿/鉄絵皿	瀬戸美濃	8壙 No55上層	*15.2	8.0	3.1	登1	17c初	町皿084		40
43	陶器・皿/鉄絵皿	瀬戸美濃	8壙 No57上層、KB19 C区	*15.3	-	-	登1	17c初	町皿086		10
44	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	8壙 No31下層	*29.4	-	-	大3後、I類	16c後	町鉢164		40
45	陶器・皿滴	瀬戸美濃	8壙 No6下層	*2.8	3.0	4.3	大1・2	15c末～16c中	町他009		50
46	陶器・向付/志野向付	瀬戸美濃	8壙上層	-	-	-	大4後	17c初	町鉢265		<10
47	陶器・皿/鉄絵皿	肥前(唐津)	8壙 No9上層、Ⅲ層	-	4.3	-		16c末～17c前	町皿108		30
48	陶器・皿/鉄絵皿	肥前(唐津)	8壙 No39上層、Ⅱ層	*13.4	-	-		16c末～17c前	町皿105		20
49	陶器・皿/鉄絵皿	肥前	8壙上層	-	-	-	I-2期	1594～1610	皿47	内外透明釉/鉄で文様	<10
50	土器・かわらけ	在地	8壙 No24下層	-	4.8	-			K09	底部内面指頭ナデ	25
51	土器・かわらけ	在地	8壙(No57か・58)上層	10.4	7.0	1.9			K08		75
52	土器・かわらけ	在地	8壙Ⅲ層	*11.0	*4.0	3.7			K10		10
53	土器・かわらけ	在地	8壙下層、9壙上層、1T	*11.2	5.4	4.2			町K199	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ	40
54	土器・かわらけ	在地	8壙	*10.0	-	-			K04	旧 3T4壙	10
55	土器・ほうろく	在地	8壙(No34・37・72)下層	*32.0	-	-			H06		10
56	土器・擂鉢	在地	8壙(3T)	*30.0	-	-			鉢30	口唇部磨痕・体部外面剥落顯著/櫛目8本	20
57	磁器・碗/青磁碗	龍泉窯系中国	9壙上層	-	-	-	I-4		町青093		10
58	焼締陶器・甕	渥美	9壙上層	-	-	-		12cカ	袋02	外面・周縁一部磨耗	<10
59	陶器・碗/天目	瀬戸美濃	9壙(1T)	*11.8	-	-	古後IV(新)	15c後	町天029		45
60	陶器・碗/天目	瀬戸美濃	9壙上層、Ⅲ層	-	4.0	-	登1	17c初	天03	内面鉄釉/胎土粗く釉が染み出る	10
61	陶器・皿/丸皿	瀬戸美濃	9壙上層	-	*6.0	-	大4後	17c初	皿04	内外灰釉/底部内面円錐ビン痕カ削込高台	10
62	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	9壙上層	-	-	-	大4後、II類	17c初	町鉢165		<10
63	陶器・兎型水滴	瀬戸美濃	9壙(No1・24)下層	-	-	-	登1カ	17c初カ	町他027		75
64	陶器・向付/志野向付	瀬戸美濃	9壙 上層、KB19(A区2溝・A区・A区西・C区南・9T・一括)	*13.8	*13.0	6.1	大4後	17c初	町鉢031		40
65	土器・かわらけ	在地	9壙 No10下層	8.2	4.6	2.4			町K200		30
66	土器・かわらけ	在地	9壙下層	*10.0	*5.4	2.7			K12		10
67	土器・ほうろく	在地	9壙 No14・19下層	-	-	-			H07	体部に補修孔	<10
68	土器・ほうろく	在地	9壙上層	-	-	-			H08	底部外面板ナデ	10
69	磁器・碗/青磁稜花	龍泉窯系中国	10壙 下層、外壙、壙南、■壙	*10.9	-	-		15c～16c	町青007		30
70	焼締陶器・甕	常滑	10壙上層	-	-	-			袋03	内面横刷毛目・外面綺整形/肩部カ	10
71	陶器・碗/天目	瀬戸美濃	10壙 No1下層	-	5.0	-	大1後カ	16c前カ	天05	内面鉄釉	10
72	陶器・皿/丸皿	瀬戸美濃	10壙 No6下層	11.1	5.1	2.3	大3	16c後	町皿002	内外鉄釉 底部内面周辺厚い・高台周辺薄い・底部内面・高台内輪ドチ痕	100
73	陶器・皿/丸皿	瀬戸美濃	10壙 No7下層	11.2	5.6	2.2	大3	16c後	町皿001	内外鉄釉 底部内面 高台周辺薄い・底部内面・高台内輪ドチ痕	100
74	陶器・皿/志野皿	瀬戸美濃	10壙 No37上層	-	*6.0	-	大3～4	16c後～17c初	皿05	内外長石釉	20
75	土器・かわらけ	在地	10壙 No42上層	11.9	7.8	2.7			町K194	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ/口唇部内面灯芯油痕	100
76	土器・かわらけ	在地	10壙 No62下層	11.4	4.7	3.2～3.5			町K150	底部内面指頭ナデ	95
77	土器・かわらけ	在地	10壙 No68上層	7.2	3.6	1.8～2.2			K11	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ	75
78	土器・かわらけ	在地	10壙 No75か下層	11.4	4.8	3.7			町K151	底部内面指頭ナデ	50
79	土器・ほうろく	在地	10壙(No74下層・一括)、33壙(No20・21)下層	*35.0	*31.0	5.2～5.7			H11		40
80	土器・ほうろく	在地	10壙(No10・19)下層	*35.6	*32.0	5.4			H10	外面スス付着	10
81	土器・ほうろく	在地	10壙下層	-	-	5.7			H09		<10
82	土器・香炉	在地	10壙 No12下層	13.2	8.8	5.1			町素他02		100
83	土器・香炉カ	在地	10壙 3T	*20.0	*17.0	7.0			素他03	内面上部黒化	10

第3表 土器類一覧表2

*は不確定な推定復元値、()は残存値、法量の単位はcm (東) (九)はP66参照 <10は10%以下

図No.	器種	産地	出土地点	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	時期・ 形式	年代	遺物ID	備考	残存率 (%)
84	焼締陶器・甕	常滑	11堀 No10上層	-	-	-			袋04	外面自然釉/陶片熔着/膨らみ部横ナデ	<10
85	陶器・皿	瀬戸美濃	11堀上層	-	*6.6	-	大		皿06	釉葉無し・2次焼成によるものか	<10
86	陶器・鉢/大皿	肥前(唐津)	11堀上層	-	-	-	(九) I -1 ～II期	16c末～17c前	鉢02	鉄で文様	<10
87	土器・かわらけ	在地	11堀上層	*11.0	*7.5	2.8			K13		25
88	土器・ほうろく	在地	11堀上層	-	-	5.7			H12		<10
89	土器・ほうろく	在地	12堀上層	-	-	-			H13		<10
90	土器・かわらけ	在地	20堀 No2上層	*12.0	*4.8	3.0～4.0			K16	内面ロクロ目顯著	30
91	土器・かわらけ	在地	21堀上層・29堀	11.4	6.4	2.0～2.2			K14	内外やや光沢あり(胎土緻密のためか)	60
92	陶器・碗/天目	瀬戸美濃	22堀 No12上層	*11.8	4.2	6.4	登1	17c初	町天039		75
93	陶器・皿/鉢皿	瀬戸美濃	22堀	*18.0	-	-	古後I	14c後	町皿179		<10
94	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	22堀 上層	-	*6.0	-	古後I～ 大3	14c後～16c後	皿09	内面灰釉/内面輪ドチ痕/ 底部外面糸切	<10
95	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	22堀	*11.6	-	-	大1	15c末～16c前	町皿178		10
96	陶器・皿/丸皿	瀬戸美濃	22堀 No27下層	-	6.6	-	大1～2	15c末～16c中	皿07	内外灰釉・被熱により白味 がかる/印花/付高台カ	50
97	陶器・皿/丸皿カ	瀬戸美濃	22堀	-	-	-	大1～2カ	15c末～16c中	皿12	内外灰釉・底部内面釉4 mm/底部外面輪ドチ痕	10
98	陶器・皿/志野皿	瀬戸美濃	22堀上層	*12.0	-	-	登1カ	17c初カ	皿13	内外長石釉	<10
99	陶器・皿/志野皿	瀬戸美濃	22堀	-	-	-	登	17c初～	皿14	内外長石釉	<10
100	陶器・向付/志野向付	瀬戸美濃	22堀上層	-	-	-	大3～4	16c後～17c初	他04	内外厚い長石釉/鉄で文様	<10
101	陶器・鉢/志野大鉢	瀬戸美濃	22堀上層・11堀上層・2T・7T・私5	-	-	-	大4～登	16c末～	鉢22	内外長石釉/鉄で文様/町 皿164類似	10
102	陶器・皿/鉄絵皿	肥前(唐津)	22堀上層・25堀	-	*4.8	-		16c末～17c前	町皿087		40
103	陶器・皿/鉄絵皿	肥前(唐津)	22堀上層	-	-	-			皿15	内外透明釉/鉄で文様	10
104	陶器・皿/鉄絵皿	肥前(唐津)	22堀	-	-	-			皿16	内外透明釉・口縁内面鉄 釉/鉄で文様	<10
105	土器・かわらけ	在地	22堀 No1上層	*11.0	5.0	3.0			K17	底部外面板ナデ	50
106	土器・かわらけ	在地	22堀 No24下層	11.5	5.2	3.5			町K193	底部内面指頭ナデ/底部 外面板ナデ	95
107	土器・ほうろく	在地	22堀 No10下層	-	-	-			H14	外面スス付着	<10
108	土器・擂鉢	在地	22堀(No5下層・2T)	*29.0	*12.0	11.1			鉢31	口縁部内面剥落顯著・外 面剥落・他磨痕顯著・口唇 部砥石として使用カ/外面 底部周辺黒化/櫛目5本	40
109	陶器・皿/折縁皿	瀬戸美濃	23堀 No13上層	*11.0	*5.5	1.7	大4後	17c初	町皿095		40
110	陶器・皿/端反皿カ 縁釉小皿	瀬戸美濃	23堀下層	*11.0	-	-	大1カ	15c末～16c前 カ		内面・口縁部外面灰釉	<10
111	土器・かわらけ	在地	23堀 No10下層	*11.0	*5.0	3.5			K18		10
112	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	24堀 No32下層	-	6.0	-	古後I～ 大1	14c後～16c前	皿08	内面周縁灰釉/内面平滑/ 外面黒化/底部外面糸切	50
113	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	24堀	-	*5.0	-	古後I～ 大2・3	14c後～16c後	皿10	一部灰釉/底部外面糸切	<10
114	陶器・皿/端反皿	瀬戸美濃	24堀最下層	8.8	5.2	1.9	大2	16c中	町皿127	内外灰釉 底部内面・高台 内外厚め/高台内輪ドチ痕 /スス付着	95
115	土器・かわらけ	在地	24堀 No18上層	-	5.0	-			K19	内外ロクロ目	40
116	土器・ほうろく	在地	24堀	-	-	-			H15		<10
117	磁器・皿/端反皿	中国	25堀 No43	*11.8	-	-			町白1・28		10
118	磁器・皿/端反皿	中国	25堀 No54最下層	*12.0	*6.0	3.2			町白004		25
119	磁器・皿/染付皿	中国	25堀 No57下層	11.3	3.5	3.0	皿C群	15c後～16c後	町染013	碧箭底皿	75
120	焼締陶器・甕	渥美	25堀	-	-	-	3型式		町袋011		<10
121	陶器・碗/天目	瀬戸美濃	25堀 No89上層	-	4.1	-	大1	15c末～16c前	町天049		10
122	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	25堀 No119下層	10.9	4.8	2.4	古後IV(新)	15c後	町皿062		95
123	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	25堀	*13.3	-	-	大1	15c末～16c前	町皿193	臼 2T3堀	<10
124	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	25堀上層	*28.3	-	-	大3後、I 類	16c後	町鉢100		<10
125	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	25堀(No121・124)下層	*28.8	-	-	大2前、I 類	16c中	町鉢163	櫛目9本	10

第4表 土器類一覧表3

*は不確定な推定復元値、()は残存値、法量の単位はcm (東)(九)はP66参照 <10は10%以下

図No	器種	産地	出土地点	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	時期・ 形式	年代	遺物ID	備考	残存率 (%)
126	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	25堀 №135下層	-	*9.8	-	大		町鉢015		20
127	陶器・小坏/志野小坏	瀬戸美濃	25堀上層	*7.8	-	-	登1	17c初	町他026		10
128	土器・かわらけ	在地	25堀 №8上層	11.8	5.2	3.5			町K038	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ	100
129	土器・かわらけ	在地	25堀 №11下層	*11.0	7.0	2.8			町K149	内面体底部境ナデ	70
130	土器・かわらけ	在地	25堀 №19上層	10.8	5.8	3.0~3.2			町K186	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ	95
131	土器・かわらけ	在地	25堀 (№21上層・№150カ下層)	12.0	4.5	3.5~3.8			町K191	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ	75
132	土器・かわらけ	在地	25堀 №30下層	11.2	5.1	3.0			町K087	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ	95
133	土器・かわらけ	在地	25堀 №32下層	10.4	6.5	2.6			町K195		60
134	土器・かわらけ	在地	25堀 №35下層	11.0	5.6	3.2			町K187	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ	95
135	土器・かわらけ	在地	25堀 №48上層	-	*6.0	-			K20	外面剥落・断面剥落面磨耗	40
136	土器・かわらけ	在地	25堀 №82下層	7.0	3.0	2.5~2.7			町K148	底部内面指頭ナデ	100
137	土器・かわらけ	在地	25堀 №84下層	-	6.0	-			K21		50
138	土器・かわらけ	在地	25堀 №96最下層	11.2	6.3	2.5			町K037		60
139	土器・かわらけ	在地	25堀 (№102・104)下層	*11.2	*6.0	2.5			K22	胎土粉ぼい	25
140	土器・かわらけ	在地	25堀 №103下層	11.2	5.8	3.6			町K188	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ	95
141	土器・かわらけ	在地	25堀 №105下層	10.8	6.0	2.9			町K192		100
142	土器・かわらけ	在地	25堀 №107上層・堀	11.4	5.2	2.9			町K196	底部内面指頭ナデ	60
143	土器・かわらけ	在地	25堀 №108下層	*11.0	*6.3	2.3			町K147		40
144	土器・かわらけ	在地	25堀 №131下層	*11.0	*5.0	2.9			町K198	底部内面弱い指頭ナデ	30
145	土器・かわらけ	在地	25堀 №134下層	11.2	5.1	3.4			町K197	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ	60
146	土器・ぼうろく	在地	25堀 №68下層	-	-	5.8			H18	外面スス付着	<10
147	土器・ぼうろく	在地	25堀 (№122・127・132・137)下層	*36.4	*32.0	5.8			H17	内耳剥落後被熱	25
148	土器・ぼうろく	在地	25堀上層	-	-	-			H19		<10
149	土器・ぼうろく	在地	25堀 2T	-	-	-			H16	外面スス付着	<10
150	土器・擂鉢	在地	25堀 (№1・13・22・24、一括)上層	27.6	11.3	13.2			町鉢071		95
151	土器・擂鉢	在地	25堀 №153下層	*30.0	-	-			町鉢013		10
152	焼締陶器・甕	渥美カ	26堀 №85	-	-	-		12c	袋06		10
153	焼締陶器・鉢/広口 か片口鉢	常滑	26堀 №82	-	-	-			鉢05	外面自然釉/内面磨耗	10
154	陶器・盤(皿皿カ)	瀬戸美濃	26堀	-	-	-	古後		他05	内外灰釉	<10
155	陶器・鉢/煙硝擂	瀬戸美濃	26堀	-	-	-	登4~5	17c後~末	鉢03	内外鉄釉	<10
156	土器・かわらけ	在地	26堀 №9最下層	-	4.5	-			K24	内外ロクロ目顯著/底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ	60
157	土器・かわらけ	在地	26堀 №11	*10.6	5.2	3.3			K23	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ/口縁内外芯油痕	40
158	土器・かわらけ	在地	26堀 №72下層	*12.6	5.0	3.2~3.7			K25	底部内面指頭ナデ	60
159	土器・かわらけ	在地	26堀	*11.0	*6.0	3.0			K27	内面体底部境ナデ	40
160	土器・ぼうろく	在地	26堀 №101	*30.0	-	-			H20	外面スス付着/内耳紐状・側面丸味	10
161	土器・甕	在地	26堀	-	-	-			袋21	胎土に石英含む小石含む	<10
162	土器・かわらけ	在地	29堀 (№6上層・一括)	*10.0	*6.6	2.3			K28		40
163	土器・かわらけ	在地	30堀 №2上層	10.3	5.8	2.3			K29	口唇部一部黒化(灯芯油痕)・外面一部黒化(被熱によるもの)	100
164	土器・かわらけ	在地	30堀 №4上層	11.4	7.5	2.3~2.8			K30	底部内面中央に3mm程の穴・ロクロ目	95
165	土器・ぼうろく	在地	30堀 №15上層	*35.0	*32.0	5.3~5.8			H21	外面スス付着/内耳下幅広・内壁凹・側面三角	10
166	磁器・碗/青磁碗	龍泉窯系中国	32堀	-	-	-	A-2		町青094		<10
167	焼締陶器・鉢/片口 鉢	常滑	32堀	-	-	-		12c~13c	鉢04	口縁周辺自然釉/旧 2T 26堀	<10
168	土器・かわらけ	在地	32堀	*10.3	6.2	2.6			K26	旧 2T26堀	60
169	焼締陶器・甕	常滑	33堀	-	-	-			袋07	内面横ナデ・外面縦ハケ/肩~胴部カ	10

第5表 土器類一覧表4

*は不確定な推定復元値、()は残存値、法量の単位はcm (東)(九)はP66参照 <10は10%以下

図No.	器種	产地	出土地点	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	時期・ 形式	年代	遺物ID	備考	残存率 (%)
170	陶器・皿/端反皿	瀬戸美濃	33堀 No29下層	9.6	5.2	2.3	大1後	16c前	町皿059	内外灰釉/印花かたばみ/高台内輪ドチ痕/欠損後被熱による貫入/逆三角形の付高台	90
171	陶器・皿/端反皿	瀬戸美濃	33堀下層	*12.6	-	-	大1	15c末～16c前	町皿177	内外灰釉/口縁内面・外面白色被熱	10
172	土器・かわらけ	在地	33堀 No43下層	*7.6	*4.8	1.9			K31	内外灯芯油痕	10
173	土器・かわらけ	在地	33堀 No46下層	13.0	8.0	3.1			K32	底部内面中央凸、粉っぽい	75
174	土器・ほうろく	在地	33堀 No10下層	*38.0	*34.0	5.8			H22	外面スス付着/底部外面板ナデ	10
175	焼締陶器・壺	渥美	1溝	-	-	-			町袋079		10
176	焼締陶器・壺	渥美	1溝	-	-	-			町袋080		10
177	焼締陶器・鉢/片口鉢	常滑	1溝	-	-	-	6a～11型式	1250～1550	鉢11	胎土に石英含む	10
178	焼締陶器・甕	常滑	1溝	-	-	-			袋08	内面自然釉・長石吹出/外面縦ヘラ削り	10
179	陶器・碗/丸碗	瀬戸美濃	1溝	-	3.8	-	登6カ	18c前カ	碗06	内外灰釉・高台周辺露胎	40
180	陶器・鉢/鉄絵鉢	瀬戸美濃	1溝	-	-	-	登1～6	17c初～18c前	鉢07	内外透明釉/鉄で文様/底部内面・高台に團子トチ痕	10
181	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	1溝、5・6溝、一括	-	*12.0	-		18c後カ	鉢09	内外銷釉/底辺部内面团子トチ痕カ/欄目18本	25
182	陶器・鉢/片口	瀬戸美濃	1溝	-	*9.6	-	片口II類・ 登3～9	17c中～19c初	鉢08	内外灰釉・高台周辺露胎	10
183	陶器・鉢/片口	瀬戸美濃	1溝、5・6溝、5T、一括	-	*8.6	-	片口II類・ 登	18c	鉢06	内外灰釉・底部周辺露胎/内面2ヶ所トチン痕カ/外面重ね痕	20
184	陶器・蓋	瀬戸美濃	1溝	*11.0	5.0	3.0	登3・4	17c中・後	他07	内外に薄い銷釉が斑に掛かり、灰釉が降る/内面ろくろ目つまみ/底部外面糸切	50
185	陶器・水注	瀬戸美濃	1溝	-	7.5	-	(東) IIIa～ Vla期、登	1650～1760	他06	内面灰釉・外側灰釉+緑釉流し掛け	25
186	陶器・皿/京焼風陶器	肥前	1溝	-	5.0	-		1650～1690	皿17		40
187	陶器・皿/陶胎染付皿	肥前	1溝	-	*6.4	-		18cカ	皿18	内外白色の釉/植物文	10
188	焼締陶器・鉢/擂鉢	備前カ	1溝	-	-	-		中～近世	鉢10		<10
189	磁器・碗	肥前(波佐見)	1溝	*9.4	3.5	5.0	(東) JB-1 - v (九) V-2期	(九) 1750～ 1770	伊14	植物文	50
190	磁器・碗	肥前	1溝	-	3.2	-			伊15	サギ文カ/高台端部丸味	30
191	磁器・皿/染付皿	肥前	1溝、1・5・6溝、外堀、一括	*14.0	*8.0	3.7	(東) JB-2 -g	(九) 1680～ 1740	伊13	高台端部露胎/扇面文+半菊文・唐草文	30
192	磁器・皿/染付皿	肥前カ中国	1溝	-	*8.0	-			伊16	高台端部露胎/焼成やや不良	15
193	土器・かわらけ	在地	1溝	8.6	5.0	2.8			K01		25
194	土器・ほうろくカ	在地	1溝	-	-	-			H01		<10
195	土器・ほうろく	在地	1溝	*36.0	*33.0	5.1			H24	外面下部未整形	10
196	土器・ほうろく	在地	1溝	*40.0	*38.0	-			H25		<10
197	土器・ほうろく	在地	1溝	*33.5	342.0	4.8～5.2			H28	外面下部工具ナデ	10
198	土器・ほうろく	在地	1溝	-	-	5.0			H29	外面下部工具ナデ/胎土緻密	<10
199	土器・火鉢	在地	1溝	-	-	-			火鉢01		<10
200	瓦・平瓦	在地	1溝	-	-	-			瓦02	灰色/雲母多量/下面左右削り/上面前後板ナデ	10
201	瓦・平瓦	在地	1溝	-	-	-			瓦04	黒灰色/焼成前穿孔	10
202	瓦・平瓦	在地	1溝	-	-	-			瓦15	黒灰色/雲母	20
203	瓦・平瓦	在地	1溝	-	-	-			瓦05	表面板ナデ痕/裏面スス付着	10
204	瓦・棟瓦	在地	1溝	-	-	-			瓦03	灰色/雲母多量	10
205	瓦・軒瓦	在地	1溝	-	-	-			瓦28	黒灰色	10
206	磁器・碗/青磁蓮弁文碗	龍泉窯系中国	2溝	-	-	-	B-I類	13c末～14c初	青10	内外暗緑色の釉	<10
207	磁器・壺	中国	2溝	-	-	-			町白033		<10
208	土器・かわらけ	在地	2溝	*13.6	7.0	2.6			K03	内面体底部境げ	60
209	磁器・香炉	中国	5溝、KB19	*11.4	-	-			町白41		遺物無
210	陶器・碗	瀬戸美濃カ 京・信楽	5溝、外堀	*9.0	*3.5	5.0			碗10	内外透明釉/鉄で文様	40

第6表 土器類一覧表5

*は不確定な推定復元値、() は残存値、法量の単位はcm (東) (九) はP66参照 <10は10%以下

図No	器種	産地	出土地点	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	時期・ 形式	年代	遺物ID	備考	残存率 (%)
211	陶器・碗/小杉茶碗	瀬戸美濃	5溝、5・6溝、1・5・6溝、一括	9.2	3.2	5.5	(東) TC-1-w		碗02	内外灰白色釉・高台周辺露胎/鉄で若松文	60
212	陶器・皿/灯明皿 (受皿)	瀬戸美濃	5溝	11.2	4.5	2.0	登1~4	17c初~後	皿20	内面・口縁外面鉄釉/内面受上端・底部外面重ね焼き痕	75
213	陶器・甕	瀬戸美濃	5溝	-	-	-	登8~11	18c後~19c後	袋10	内外鉄釉	10
214	焼締陶器・鉢/擂鉢	備前カ	5溝、外堀	*33.0	*15.0	*16.0			鉢14		10
215	陶器・碗	萩系	5溝、外堀、2T、一括、KB14	*8.6	3.7	5.7	(東)VIII期	(東) 1800~1860	碗01	内面透明釉/高台渦巻状に削込み/ビラ掛け・白色黒色のイッヂン	40
216	磁器・碗	肥前	5溝	-	4.0	-	(九)IV期	1700~1750	伊25	高台端部露胎/菊文+斜格子目・二重網目文・渦「福」銘	20
217	磁器・碗	肥前	5溝	-	-	-			伊26	コンニャク印判	10
218	磁器・碗	肥前	5溝、5・6溝、一括	*9.4	3.5	5.0	(九)V期	(九) 1850~1860	伊03	格子文・斜格子文	40
219	磁器・碗/小碗	肥前	5溝、5・6溝、一括	*7.6	3.0	3.9		18cカ	伊18	高台端部露胎/草花文	40
220	磁器・小壺	瀬戸美濃カ	5溝、5・6溝、一括	7.2	2.9	3.3			他01	高台端部露胎/竹文カ	90
221	土器・ぼうろく	在地	5溝	-	-	5.1			H27	外面下部工具ナデ	<10
222	瓦・軒瓦	在地	5溝	-	-	-			瓦30	灰色/唐草文	15
223	陶器・鉢/片口	瀬戸美濃	6溝、一括	*18.0	-	-	登	18c~19c	鉢12	内外灰釉 2次焼成	10
224	瓦	在地	6溝	-	-	-			瓦36	上面カーボン付着・みがき/下面ナデ削り	10
225	陶器・碗	瀬戸美濃カ 京・信楽	5・6溝	8.7	3.4	4.8		19c	碗07	内外透明釉/鉄で文様	70
226	陶器・皿/灯明皿 (油皿)	瀬戸美濃	5・6溝、一括	*10.0	*4.4	1.7	(東) V b ~VIII d、登	1770~1860	皿19	内面・口縁外面鉄釉	20
227	陶器・向付/志野向付	瀬戸美濃	5・6溝	-	-	-	大4末		他18	長石釉厚い/鉄で文様	10
228	陶器・甕/半胴甕	瀬戸美濃	5・6溝	*22.0	-	-	登5~11	17c末~19c後	袋09	内外鉄釉	10
229	陶器・皿/鉄絵皿	肥前(唐津)	5・6溝	-	-	-		16c末~17c前	町皿112		10
230	陶器・碗	志戸呂	5・6溝	*12.0	-	-		16c末~17c初	町碗021		10
231	焼締陶器・鉢/擂鉢	備前カ	5・6溝	-	-	-	(堀) III-a 1類	1760~1870	鉢13		10
232	陶器・碗/杉形碗	京・信楽系	5・6溝	*9.0	*3.6	5.2	V a ~VIII c・IX期	1710~1830・ 明治	碗09	内外透明釉・高台周辺露胎	10
233	磁器・碗/端反碗	肥前カ	5・6溝、1・5・6溝、外堀、一括	9.4	4.0	4.6		19c	伊07	高台端部露胎	75
234	磁器・碗/筒形碗	肥前	5・6溝、1・5・6溝	7.0	-	-	(東) JB-1 -1 V b ~ IX期 (九) IV ~ V期	(東) 1730 ~ 1830(九) 1740 ~1810	伊06	四方擲・2条の斜区画植物文	75
235	磁器・碗/筒形碗	肥前	5・6溝、1・5・6溝、一括	7.2	-	-	(東) JB- 1-1 V b ~ IX期 (九) IV ~ V期	18c	伊08	四方擲・松文	75
236	磁器・碗/小碗	肥前	5・6溝	*7.6	2.8	4.0			伊19	高台端部露胎/染付三角文	25
237	磁器・皿	肥前	5・6溝	-	4.8	-	(九) V ~VI期	1650~1860 17c中~19c中	伊17	蛇の目釉剥ぎ/内面釉際に鉄漿/高台数回削る	20
238	土器・かわらけ	在地	5・6溝、1・5・6溝	*10.0	*6.0	2.4			K02	口縁内面スス付着	25
239	土器・ぼうろく	在地	5・6溝	-	-	5.3			H30		10
240	瓦・平瓦	在地	5・6溝	-	-	-			瓦06	灰色/雲母/下面左右整形	15
241	瓦・隅瓦カ	在地	5・6溝	-	-	-			瓦07	灰白色/雲母/整形不明/上面焼成後刻線/左端に焼成前穿孔カ(斜め)	20
242	瓦・板堀瓦カ	在地	5・6溝	-	-	-			瓦31		10
243	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	1・5・6溝、一括	*24.2	-	-	大2、I類	16c中	町鉢118		<10
244	陶器・碗/小碗	京・信楽系	1・5・6溝	*9.0	*4.0	4.8	(東) TD- 1-gカ		碗08	内外白色釉(灰釉カ)	20
245	磁器・碗/小丸碗	肥前	1・5・6溝、一括	7.0	3.4	5.2		(九) 1820 ~ 1860	伊05	高台端部露胎/二重格子目文	95
246	磁器・碗/ぐらわんか 碗	肥前(波佐見)	1・5・6溝	*9.6	3.6	5.3	(九) V-1 ~4期	17c末~18c中	伊20	高台端部露胎/草花文/高台砂付着	50
247	磁器・碗/ぐらわんか 碗	肥前(波佐見)	1・5・6溝	*9.6	*4.0	5.3		17c末~18c中	伊21	高台端部露胎/草花文	45

第7表 土器類一覧表6

*は不確定な推定復元値、()は残存値、法量の単位はcm (東) (九)はP66参照 <10は10%以下

図No	器種	产地	出土地点	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	時期・ 形式	年代	遺物ID	備考	残存率 (%)
248	磁器・碗/ぐらわんか 碗	肥前(波佐見)	1・5・6溝	*9.0	3.6	4.2		17c末～18c	伊22	高台端部露胎/草花文	45
249	磁器・碗/広東碗	肥前	1・5・6溝	-	5.6	-	(九)V-3 ～4期	18c末～19c	伊23	底部薄い	25
250	磁器・碗	肥前	1・5・6溝	*9.0	*4.0	4.9			伊24	染付の青が明るい/山水文 にじむ	50
251	土器・ほうろく	在地	1・5・6溝	-	-	5.0			H26	外面下部工具ナデ/胎土 緻密	<10
252	瓦・軒巴	在地	1・5・6溝	-	-	-			瓦24	灰色/連珠文(間隔1.54 分)/柔らかい/裏面ドベイ 痕	<10
253	焼締陶器・壺	渥美	9溝、外堀	-	-	-			町袋084		<10
254	磁器・皿/青磁稜花 皿	中国	10溝	-	-	-		15c～16c	青11	内外淡青緑色の釉	<10
255	土器・かわらけ	在地	2井	7.8	3.8	2.0～2.3			K33	底部内面指頭ナデ/底部 外面板ナデ/内外灯芯油 痕	100
256	土器・香炉	在地	2井	-	7.5	-			素他1		40
257	土器・かわらけ	在地	8井 No1	-	*6.4	-			K34	底部内面中央凸	20
258	土器・擂鉢	在地	8井	-	11.8	-			鉢33	口縁全周同じ高さで欠損/ 底部内面磨痕・外面剥落/ 底部外面スス付着/火に架 けたものか/櫛目6本底面 格子・側面放射状	75
259	焼締陶器・壺	渥美	13井	-	-	-			町袋081		<10
260	土器・かわらけ	在地	15井	-	*5.0	-			K35	底部内面指頭ナデ/外面 削りカ/焼成堅微	25
261	土器・擂鉢	在地	15井	*29.0	*13.6	12.0			鉢34	口縁内面・外面剥落/胎土 砂っぽい/櫛目7本底面格 子・側面放射状	25
262	焼締陶器・鉢/片口 鉢	常滑	18井	*28.0	-	-	5・6a型式、 I類	1225～1275	町鉢262		<10
263	土器・かわらけ	在地	2壙	-	4.8	-			K37	底部内面指頭ナデ/内面口 クロ目明瞭	50
264	土器・かわらけ	在地	2壙	-	5.5	-			K38	底部内面指頭ナデ/底部 外面板ナデ/内面口クロ目 明瞭	50
265	土器・かわらけ	在地	2壙	-	7.6	-			K39	底部内面凸/器肉薄い	30
266	磁器・碗/青磁碗	龍泉窯系中國	7壙	-	-	-	A-4		町青090		<10
267	瓦・丸瓦	在地	7壙	-	-	-			瓦01	黒灰色/表面一部剥落/内 面スス付着・削り痕	<10
268	陶器・皿/丸皿	瀬戸美濃	13壙、5T	*12.0	*6.0	2.7	登		皿24	内外長石釉・内面灰釉流 し掛け/底部内面円錐ビン 痕/削出高台	25
269	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	18壙	*11.0	-	-	古後Ⅲカ	15c前カ	皿45	口縁内外灰釉	10
270	陶器・入子	瀬戸美濃	18壙	3.8	2.0	1.2	古前Ⅲ～ 古中Ⅱ	～14c初	町他022		60
271	土器・かわらけ	在地	50壙カ	-	4.8	-			K40	底部内面指頭ナデ/内面口 クロ目明瞭	30
272	土器・かわらけ	在地	53壙 No1	11.0	5.0	3.4～3.9			K41	底部内面指頭ナデ/底部 外面板ナデ/内面口クロ目 あり	95
273	土器・かわらけ	在地	53壙(No2・一括)、10壙 下層	10.1	4.9	3.2～3.4			町K189	底部内面指頭ナデ	95
274	土器・かわらけ	在地	53壙(No3・一括)、10壙 下層	11.2	4.8	4.0			町K190	底部内面指頭ナデ	100
275	土器・かわらけ	在地	53壙(No4・一括)	12.0	5.5	3.3～3.7			K42	底部内面指頭ナデ/底部 外面板ナデ/内面口クロ目 明瞭	95
276	焼締陶器・壺	渥美	60壙	-	-	-			町袋083		<10
277	土器・かわらけ	在地	67壙	11.8	5.0	3.3～3.8			K36	底部内面指頭ナデ/内面口 クロ目明瞭/胎土に角閃石	95
278	磁器・皿/染付皿	漳州窯系中国	土橋A No16 Ⅲ層	-	-	-	E群	15c～16c	染07		10
279	陶器・皿/織部皿	瀬戸美濃	土橋A	-	*7.0	-	登2	17c前	皿54	内面銅緑釉・外面灰釉カ/ 底部内面にダンゴトチ痕	10
280	土器・かわらけ	在地	土橋A	11.0	7.0	2.1～2.8			K55	底部内面回転線条痕	90
281	焼締陶器・鉢/片口 鉢	常滑	土橋B No30 Ⅲ層	*22.2	-	-	5・6a型式、 I類	1220～1275	町鉢261		10

第8表 土器類一覧表7

*は不確定な推定復元値、()は残存値、法量の単位はcm (東)(九)はP66参照 <10は10%以下

図No	器種	产地	出土地点	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	時期・ 形式	年代	遺物ID	備考	残存率 (%)
282	土器・かわらけ	在地	土橋B No56、外堀	10.6	7.2	2.7			K44	口縁部灰味一還元/内面口クロ目	80
283	磁器・皿/染付皿	中国	土橋C No44	-	*8.0	-	B-1群		染15	玉取獅子	<10
284	陶器・皿/志野丸皿	瀬戸美濃	土橋C No51、II層	12.2	6.6	2.7	登1	17c初	町皿075		75
285	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	土橋C No42 III層	-	-	-	大3前、I類	16c後	町鉢170		<10
286	土器・かわらけ	在地	土橋C No40 III層	*10.4	7.0	2.8			K47	底部内面回転ナデ/体部外側棱	60
287	土器・かわらけ	在地	土橋C No53	*10.6	5.2	3.2			K51		60
288	土器・ほうろく	在地	土橋C No48	-	-	5.2			H31		<10
289	磁器・皿	中国	土橋下 No65	*11.0	*6.4	2.2	皿E群	16c後	町染016		20
290	陶器・碗/天目	瀬戸美濃	土橋下(No91・100・161)、II層	*11.8	-	-	登1	17c初	町天021		60
291	陶器・碗/京焼風碗	瀬戸美濃カ	土橋下カNo174、一括	*8.8	3.4	5.3	(東)V a ~VII、登	18c~19c	碗15	内外灰色釉・高台周辺露胎	45
292	陶器・皿/志野丸皿	瀬戸美濃	土橋下	*10.0	-	-	登1カ	17c初カ	皿59	長石釉やや厚い	10
293	陶器・鉢カ甕	瀬戸美濃	土橋下カNo157	-	-	-		18cカ	袋18	内外鉄釉	10
294	焼締陶器・鉢/擂鉢	備前系	土橋下カNo157、一括	*37.0	-	-	(掘)IIIa1類	18c後~19c後カ	鉢15	口唇部明瞭な沈線	15
295	土器・かわらけ	在地	土橋下 No89	*10.4	5.8	2.6			K45	内外ロクロ目明瞭	40
296	土器・かわらけ	在地	土橋下 No115	*12.0	6.0	3.1			K46	底部内面墨書き	40
297	土器・かわらけ	在地	土橋下 No121	12.0	7.0	2.6~2.9			K48	内面に刻線多数/口唇部灯芯油痕/焼成不良やわらかい	95
298	土器・かわらけ	在地	土橋下 No160、一括	*12.4	8.0	2.8			K50	底部内面指頭ナデ	70
299	土器・かわらけ	在地	土橋下 No164	*12.4	*7.0	2.4			K49	焼成不良やわらかい	40
300	土器・かわらけ	在地	土橋下	*12.0	*7.0	2.5			K52	内面体底部境ナデ	25
301	土器・かわらけ	在地	土橋下	*12.0	*8.0	2.3			K53		10
302	土器・ほうろく	在地	土橋下 No116カ	*40.0	*35.4	5.4			H32		10
303	土器・火鉢カ	在地	土橋下カ No156	*22.0	-	-			火鉢05		10
304	瓦・平瓦	在地	土橋下No110	-	-	-			瓦08	灰色/雲母/表面に焼成後溝	10
305	瓦・棟瓦	在地	土橋下カNo156	-	-	-			瓦09	灰色/雲母多量/下面左右に削り	15
306	瓦・棟瓦	在地	土橋下カNo156	-	-	-			瓦10	灰色/下面弧状に前後ナデ	15
307	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	土橋上層	*13.0	*7.0	2.9	古後 I カ	14c後カ	皿39	口縁内面灰釉/底部外面糸切り	15
308	陶器・皿	瀬戸美濃	土橋上層	-	-	-	大1~2	15c末~16c中	皿58	灰釉/印花文	<10
309	陶器・碗/山茶碗カ	不明	土橋	-	-	-			碗23		<10
310	土器・かわらけ	在地	土橋中、4T	11.4	5.0	2.9~3.9			K43	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ/内外ロクロ目明瞭	60
311	磁器・碗/青磁蓮弁文碗	龍泉窯系中國	外堀	*14.0	-	-	A-2	13c~14c	町青041		10
312	磁器・碗/青磁蓮弁文碗	龍泉窯系中國	外堀	*16.0	-	-	B-I類	13c末~14c初	町青016		10
313	磁器・碗/青磁蓮弁文碗	龍泉窯系中國	外堀	-	-	-	B-I類	13c末~14c初	青02	内外淡青緑色の釉	<10
314	磁器・碗/青磁蓮弁文碗	龍泉窯系中國	外堀	-	-	-	B-I類	13c末~14c初	青05	内外黄緑色の釉	<10
315	磁器・碗/青磁蓮弁文碗	龍泉窯系中國	外堀	-	-	-	B類		青06	内外青緑色の釉	<10
316	磁器・碗/青磁碗	龍泉窯系中國	外堀	-	5.6	-			青08	内外淡青緑色の釉・高台内輪状釉剥ぎ・露胎部赤色	25
317	磁器・碗/青磁碗	中国	外堀	-	-	-	A類		青04	内外黄緑色の釉/底部内面に闇線	10
318	磁器・碗/青磁無文碗	中国	外堀	-	-	-			青07	内外くすんだ黄緑色の釉/上端に凹線	10
319	磁器・皿/白磁皿カ	中国	外堀	-	-	-	E-2類	15c~16c	白02		10
320	磁器・壺カ	中国カ	外堀	-	-	-			白07		10
321	磁器・碗	中国	外堀、一括	*14.8	-	-	碗C群	15c後~16c後	町染035		10
322	磁器・碗	中国	外堀	-	*5.0	-	碗E群	16c中	町染022		15
323	磁器・皿/端反皿	中国	外堀	*9.2	*4.4	2.2	皿B1群	15c後~16c後	町染066		15
324	焼締陶器・鉢/片口鉢	渥美	外堀	-	*13.0	-			町鉢251		<10
325	焼締陶器・甕	常滑カ	外堀	-	-	-	7~8型式	14c中~15c	袋11	小石が少なく、焼成があまい	<10

第9表 土器類一覧表8

*は不確定な推定復元値、()は残存値、法量の単位はcm (東)(九)はP66参照 <10は10%以下

図No	器種	産地	出土地点	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	時期・ 形式	年代	遺物ID	備考	残存率 (%)
326	焼締陶器・甕	常滑	外堀	-	-	-	11型式	16c前	袋13		<10
327	陶器・碗/天目	瀬戸美濃	外堀	*11.5	-	-	大1	15c末~16c前	天07	内外鉄釉・腰部鋸釉	10
328	陶器・碗/茶碗カ	瀬戸美濃	外堀	*11.0	-	-			碗22	灰釉	10
329	陶器・碗	瀬戸美濃カ	外堀	*9.0	-	-	(東)Vb ~VIIa期	18c~19c	碗14	内外透明釉/鉄で文様・上 絵付・発色しない 植物文	25
330	陶器・皿/志野丸皿	瀬戸美濃	外堀、一括	*12.0	7.4	2.3	登1~2カ	17c初~前カ	皿23	内外長石釉・底部外面無 釉/削出高台・高台外側削 込無し/底部内外円錐ピン 痕	40
331	陶器・皿/志野丸皿	瀬戸美濃	外堀	*13.8	*8.0	2.6	登1~4カ	17c初~後カ	皿27	内外長石釉・底部外面無 釉/削出高台/高台内面同 心円	30
332	陶器・皿/志野丸皿	瀬戸美濃	外堀	*12.0	*6.5	2.2	登1~4	17c初~後	皿28	内外長石釉・底部外面無 釉	25
333	陶器・皿/志野丸皿	瀬戸美濃	外堀	*12.0	*7.0	2.6	登3~4	17c中~後	皿29	内外長石釉・底部外面露 胎/底部外面円錐ピン痕	25
334	陶器・皿/志野丸皿	瀬戸美濃	外堀	-	6.5	-	大4~登	16c末~	皿31	内外長石釉/鉄で文様・削 出高台	50
335	陶器・皿/丸皿カ端 反皿	瀬戸美濃	外堀	-	6.2	-	大1~2	15c末~16c中	皿34	内外灰釉/付高台/底部内 面印花/底部外面輪ドチ痕	50
336	陶器・皿	瀬戸美濃	外堀	9.6	5.5	2.2~2.3	登4~5カ	17c後~末	皿35	内外灰釉/削込高台/底部 外面团子トチ痕3ヶ所	60
337	陶器・皿/灯明皿 (受皿)	瀬戸美濃	外堀	*9.6	*4.2	2.1	登5~11	17c末~19c後	皿36	内面・口縁外面鉄釉	25
338	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	外堀	-	-	-	大3、I類	16c後	町鉢137		<10
339	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	外堀	-	-	-	大4、I類	16c末~17c初	町鉢138		<10
340	陶器・花生カ	瀬戸美濃	外堀	-	7.4	-	(東)IVa ~VIIa期、 登	17c~19c	他12	脚部鉄釉・底部外面糸切 露胎/中央に円筒形の穴	40
341	陶器・有耳壺	瀬戸美濃	外堀	-	-	-	登	17c後~	袋16	外面鉄釉	10
342	陶器・有耳壺	瀬戸美濃	外堀	-	-	-	登	17c後~	袋17	外面鉄釉	<10
343	陶器・徳利	瀬戸美濃	外堀	3.0	-	-	III類、登	18c後	袋19	内外銷釉	<10
344	陶器・碗	肥前カ	外堀、II層	*11.0	5.0	6.3			碗13	内外灰釉(鉄分吹出ちぢ れ)・高台周辺露胎	25
345	陶器・皿/鉄絵皿	肥前(唐津)	外堀、KB19 A区西	*20.0	-	-		16c末~17c前	町皿118		10
346	陶器・向付	肥前	外堀	-	-	-	I-2期	1594~1610	他15	内外透明釉/鉄で文様	10
347	陶器・碗/筒形碗	志戸呂	外堀	*15.0	-	-		16c末~17c初	町碗038		10
348	陶器・碗	志戸呂カ	外堀	*11.0	-	-			碗19	内外灰釉カ/被熱により縮 みあり	10
349	陶器・皿/灯明皿 (受皿)	志戸呂	外堀	*11.2	5.2	-		17c~	町皿205		40
350	陶器・茶入カ	志戸呂	外堀	-	4.6	-			町他029		40
351	焼締陶器・鉢/擂鉢	備前系	外堀	-	-	-	(堀)IIb	18c中カ	鉢17	口唇部に沈線	<10
352	磁器・碗/端反碗	肥前	外堀	11.3	3.8	6.1	(東)JB-1 -n	(東)1800~ 1868	伊01	高台端部露胎/海辺(帆掛け 船)文	75
353	磁器・碗/ぐらわんか 碗カ	肥前(波佐 見)	外堀、南	*9.8	4.0	5.1	(東)JB-1 -g (九) V-1期		伊04	高台端部露胎/菊文・植物 文・高台裏銘/高台端部砂 付着	50
354	磁器・碗/ぐらわんか 碗	肥前(波佐 見)	外堀	9.2	3.5	5.0	(東)JB-1 -v (九) V-2期		伊02	高台端部露胎/梅樹文・雪 輪・草花文	70
355	磁器・皿/染付皿	肥前	外堀	13.2	7.8	3.5~3.7	(東)JB-2 -g (九) V-1期	(九)1680~ 1740	伊09	高台端部露胎/コンニャク 判五弁花文・半菊文・唐草 文・渦福	80
356	磁器・皿/染付皿	肥前	外堀	*14.4	*9.0	3.6	(東)JB-2 -j (九)A 類 V-2 期~	(九)18c第2四 半期	伊11	内外クリーム地/高台内環 状に露胎/蛇ノ目凹形高台 /花文・唐草文	30
357	磁器・皿/染付皿	肥前	外堀	-	*8.5	-	(東)JB-2 -j (九)A 類 V-2 期~	(九)18c第2四 半期~19c中 カ	伊12	高台内環状に露胎/蛇ノ目 凹形高台/風景文・唐草文	30
358	土器・かわらけ	在地	外堀、一括	*10.6	*5.8	2.5			K63	底部内面渦巻指頭ナデ	50
359	土器・かわらけ	在地	外堀最下層	10.2	5.8	2.2			K64	底部中央に穿孔13~8mm・ 体部に対向して2ヶ所穿孔 4mm	95

第10表 土器類一覧表 9

*は不確定な推定復元値、() は残存値、法量の単位はcm (東) (九) はP66参照 <10は10%以下

図No	器種	产地	出土地点	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	時期・ 形式	年代	遺物ID	備考	残存率 (%)
360	土器・かわらけ	在地	外堀、堀埋土	*12.0	*7.8	2.3			K65	体部に2ヶ所穿孔3mm	25
361	土器・かわらけ	在地	外堀	*10.0	*6.0	2.6			K66	底部内面指頭ナデ/底部 外面板ナデ	25
362	土器・かわらけカ	在地	外堀	-	4.2	-			K67	底部内面渦巻指頭ナデ	25
363	土器・ほうろく	在地	外堀	*35.4	-	-			H33	底面雑な整形	10
364	土器・ほうろく	在地	外堀	*40.0	*36.0	4.2			H34	口縁スス付着/内耳欠損	10
365	土器・ほうろく	在地	外堀	-	-	3.1			H35		<10
366	土器・ほうろく	在地	外堀	*37.0	*32.5	5.9			H36	内耳外・底部各1ヶ所補修 孔	15
367	土器・ほうろく	在地	外堀、一括	*36.0	-	-			H37	口縁～体部スス付着	10
368	土器・ほうろく	在地	外堀	-	-	-			H38	底辺部内面・体部外面スス 付着	10
369	土器・ほうろく	在地	外堀	*40.0	-	-			H39	底辺部内面・体部外面スス 付着/外面体部下半工具 整形/体部1ヶ所補修孔	10
370	土器・土鍋	在地	外堀	-	-	-			D02		10
371	土器・擂鉢	在地	外堀	-	-	-			鉢32	内外剥落/櫛目6本	<10
372	土器・火鉢	在地	外堀、一括	*28.0	-	10.9			火鉢03	口縁部内面黒色物付着/ 高台 弧状の抉り/高台脛 付斜め磨耗によるものか	10
373	瓦・平瓦	在地	外堀	-	-	-			瓦11	灰色/雲母多量/下面左右 に削り	20
374	瓦・軒瓦カ	在地	外堀	-	-	-			瓦25	灰色/連珠文・三ツ巴/裏面 上半分剥落	10
375	瓦・軒瓦	在地	外堀	-	-	-			瓦26	灰色/前面ドベイ痕	10
376	瓦・軒瓦	在地	外堀	-	-	-			瓦29	灰色/雲母少量含む	10
377	磁器・皿/白磁皿	中国	1T	-	3.8	-	D類	15c	白01	高台抉り・高台内兜巾/底 部内面重ね焼き痕	10
378	焼締陶器・壺	渥美	1T	-	-	-			町袋085		10
379	陶器・皿/志野皿	瀬戸美濃	1T	*14.0	*8.0	2.4	大4～登 カ	16c末～	皿51	内外長石釉/削出高台	10
380	陶器・皿/織部皿	瀬戸美濃	1T、一括	-	*7.0	-	登	17c前	皿53	内面銅緑釉・外面灰釉/底 部内面にダンゴトチ痕/体 部外面熔着痕	10
381	土器・かわらけ	在地	1T	7.5	3.4	2.6～2.9			K54	底部外面板ナデカ/口縁部 内外スス厚く付着	80
382	磁器・碗/染付碗	中国	2T	-	-	-	C群カ	15c後～16c前カ	染01	染02と同一個体カ	10
383	磁器・碗/染付碗	中国	2T	-	-	-	C群カ	15c後～16c前カ	染02	染01と同一個体カ	10
384	磁器・皿/染付皿	中国	2T	-	-	-	E群	16c後～17c初	染17	山水人物カ、高台内文字カ、 界線	<10
385	磁器・皿/染付皿	漳州窯系カ 中国	2T	-	-	-			染03	高台端部露胎	10
386	陶器・皿/緑釉小皿	瀬戸美濃	2T	*11.0	-	-	古後IIカ	14c末～15c初カ	皿43	口縁内外灰釉	10
387	陶器・皿/丸皿	瀬戸美濃	2T、II層	*10.6	6.6	2.6	大3カ	16c後カ	皿32	内外灰釉(被熱により白色 化ちぢみ・底部外面露胎/ 付高台逆三角形	40
388	陶器・皿/稜皿(ヒダ 皿)	瀬戸美濃	2T	*11.2	-	-	大3後	16c後	町皿225		10
389	陶器・向付/志野向 付	瀬戸美濃	2T	-	-	-	登カ		他11	内外長石釉/鉄で文様	10
390	陶器・鉢/黄瀬戸鉢	瀬戸美濃	2T	-	*13.4	-		17cカ	鉢27	内外灰釉+緑釉流掛・底 部内面円形に無釉/櫛による 波状文/底部高台にトチ ン痕	20
391	土器・かわらけ	在地	2T	*11.0	*4.5	3.0			K56	底部内面指頭ナデ/底部 外面板ナデ	40
392	土器・かわらけ	在地	2T	*11.0	*5.5	3.1			K57		25
393	土器・かわらけ	在地	2T	*10.0	*6.0	2.4			K58		20
394	土器・かわらけ	在地	2T	*10.0	*7.0	2.8			K59		25
395	土器・かわらけ	在地	2T	*11.0	-	-			K61		15
396	陶器・向付	瀬戸美濃	3T上層	-	5.8	-		17c初カ	他08	内外長石釉/鉄で文様	45
397	土器・かわらけ	在地	3T	*7.0	*3.0	2.5			K60	底部内面指頭ナデ/口唇 部灯芯油痕/口縁内外黄 白色・口縁下内面黒色	30
398	土器・かわらけ	在地	7T	*10.0	*6.0	2.4			K62		20
399	磁器・皿/染付皿	中国	8T	*14.0	-	-	B-1群	15c後～16c後	染06		10
400	陶器・碗/平碗	瀬戸美濃	8T	-	-	-			平01	内外灰釉	10
401	陶器・碗/平碗	瀬戸美濃	8T	-	-	-			平02	内外灰釉	10

第11表 土器類一覧表10

*は不確定な推定復元値、()は残存値、法量の単位はcm (東) (九)はP66参照 <10は10%以下

図No.	器種	産地	出土地点	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	時期・ 形式	年代	遺物ID	備考	残存率 (%)
402	陶器・皿/丸皿カ	瀬戸美濃	8T	-	*9.0	-	大		皿33	内外灰釉/付高台 大型/ 底部外面輪ドチ痕カ	20
403	陶器・皿	瀬戸美濃	8Tカ	-	-	-	大カ		皿56	内外厚い長石釉・外面ムラ	10
404	陶器・鉢/擂鉢	志戸呂	8T	-	-	-	16c中～17c		町鉢045		<10
405	磁器・皿	肥前	8T	-	7.6	-		1650～1670	伊28		25
406	磁器・碗/青磁蓮弁文碗	龍泉窯系中国	一括	-	-	-	A-2		町青091		<10
407	磁器・碗/青磁蓮弁文碗	龍泉窯系中国	一括	-	-	-	A-2		町青028		<10
408	磁器・碗/青磁蓮弁文碗	龍泉窯系中国	一括	-	-	-	A-6		町青012		<10
409	磁器・碗/青磁蓮弁文碗	龍泉窯系中国	一括	-	-	-	A-6		町青023		<10
410	磁器・碗/青磁蓮弁文碗	龍泉窯系中国	一括	-	-	-	B-I類	13c末～14c初	青01	内外淡青緑色の釉	<10
411	磁器・碗/青磁蓮弁文碗	龍泉窯系中国	一括	-	-	-	B-I類	13c末～14c初	青09	内外暗緑色の釉	<10
412	磁器・皿/青磁稜花皿	龍泉窯系カ	一括、KB14	-	*6.2	-		15c前～16c前	町青79	KB14 土176	20
413	磁器・青磁水瓶カ	龍泉窯系中国	一括	*8.0	-	-			町青056		遺物無
414	磁器・皿/白磁菊皿	中国	Ⅲ層	-	*7.0	-		16c後～	町白039	旧町青80	10
415	磁器・皿/白磁皿	中国	一括	*16.0	-	-	E-2類	15c～16c	白03		10
416	磁器・皿/白磁皿	中国	一括	-	*8.0	-	E類	15c～16c	白05	内外青白色の釉	10
417	磁器・皿/白磁菊皿	中国	一括	-	-	-	E-4類	16c	白06		10
418	磁器・碗/染付碗	中国	II層	-	-	-	C・E・F群	15c後～16c末	染11		10
419	磁器・碗/染付碗	中国	一括	-	-	-	C群カ	15c後～16c後カ	染09		10
420	磁器・碗/染付端反碗カ	中国	一括	-	-	-	A・B類	14c～15c	染12		10
421	磁器・皿/染付皿	中国	Ⅲ層、一括	-	*6.4	-	B-1群	15c後～16c後	町染033		15
422	磁器・皿/染付皿	中国	Ⅲ層	-	*7.3	-	B-1群	15c後～16c後	町染015		15
423	磁器・皿/染付皿	中国	II層	-	-	-	B-1群	15c後～16c後	染14	高台端部～内露胎	10
424	磁器・皿/染付皿	中国	II層	-	-	-	B-1群カ		染16	花卉文カ	10
425	磁器・皿/染付皿カ	中国	一括	-	-	-	E群カ	16c後カ	染04		<10
426	磁器・皿/染付皿	中国	一括	-	-	-	E群	16c後	染05		10
427	磁器・皿/染付端反皿	中国	一括	-	-	-	B-1群	15c後～16c後	染10		10
428	磁器・小坏/染付小坏	中国	一括	-	*2.4	-			染08	高台露胎	10
429	磁器・小坏/染付小坏	中国	一括	-	*2.5	-			染13		10
430	焼締陶器・壺	渥美	一括	-	-	-			町袋078		10
431	焼締陶器・鉢/擂鉢	常滑	一括	-	-	-	2型式カ	1150～1175カ	鉢19		<10
432	焼締陶器・壺カ	常滑	一括	*20.0	-	-			袋20	自然釉	<10
433	焼締陶器・甕	常滑	一括	-	-	-	12型式	1550～1600	町袋022		<10
434	焼締陶器・甕	常滑	一括	-	-	-			袋12	外面自然釉	10
435	陶器・碗/天目(小天目)	瀬戸美濃	一括	*10.0	-	-	大1・2カ	15c末～16c中カ	天06	内外鉄釉(被熱によりちぢみ)・腰部鋸釉	10
436	陶器・碗/総織部丸碗	瀬戸美濃	I層、II層、III層	*11.2	-	-	登1	17c初	町碗010		40
437	陶器・碗/柳茶碗	瀬戸美濃カ	一括	*12.5	4.3	5.6	登10	19c前	碗11	内外灰色釉/鉄で文様/胎土緻密	25
438	陶器・碗	瀬戸美濃	一括	-	6.2	-			碗18	内外良石釉・高台内露胎	30
439	陶器・碗/せんじ	瀬戸美濃	5■	*9.0	-	-	登7・8	18c中・18c後	碗12	内外灰釉・鉄釉流し	20
440	陶器・皿/縁釉小皿カ	瀬戸美濃	III層、一括	-	6.0	-	古後カ		皿38	内外一部灰釉	50
441	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	III層	*11.0	-	-	古後(古カ)	15c中カ	皿41	口縁内外灰釉	10
442	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	III層	*12.0	-	-	大1カ	15c末～16c前カ	皿42	口縁内外灰釉	10
443	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	I層	*10.0	-	-	古後(新カ)	15c後カ	皿40	口縁内外灰釉	10
444	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	一括	-	5.0	-	古後～大1	14c後～16c前	皿37	底部内面一部灰釉/底部外面糸切痕	60
445	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	一括	*12.0	*5.5	2.7	大1カ	15c末～16c前カ	皿25	口縁内面灰釉/底部外面糸切り	40

第12表 土器類一覧表11

*は不確定な推定復元値、() は残存値、法量の単位はcm (東) (九) はP66参照 <10は10%以下

図No	器種	産地	出土地点	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	時期・ 形式	年代	遺物ID	備考	残存率 (%)
446	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	一括	*11.0	-	-	大1	15c末～16c前	皿44	口縁内外灰釉	10
447	陶器・皿/縁釉小皿	瀬戸美濃	一括	-	6.5	-			皿26	底部外面糸切り	20
448	陶器・皿/志野丸皿	瀬戸美濃	II層	11.4	6.6	2.1	大4	16c末～17c初	皿21	内外長石釉/削出高台	60
449	陶器・皿/志野丸皿	瀬戸美濃	II層	*12.0	-	-	大4	16c末～17c初	皿22	内外長石釉・外面釉ちぢれ/底部外面円錐ピン痕	25
450	陶器・皿/志野丸皿	瀬戸美濃	一括、KB19D区1壙5層309、 KB19C区1層	12.1	6.8	2.9	大4後	17c初	町皿147		遺物無し
451	陶器・皿/志野皿	瀬戸美濃	一括	-	*8.6	-	大4～登	16c末～	皿52	内面長石釉・腰部以下露胎/削出高台	20
452	陶器・皿/志野皿	瀬戸美濃	一括	*11.0	*6.0	2.2	登		皿55	内外長石釉/被熱により淡褐色	20
453	陶器・皿/端反皿	瀬戸美濃	一括	*11.2	*6.2	2.6	大1	15c末～16c前	町皿094	内外灰釉/内面底部青灰色/高台内輪トチ/スス付着/被熱による貫入	30
454	陶器・皿/反り皿	瀬戸美濃	一括、KB19 C区	*13.1	*8.2	2.8	登3・4	17c中・17c後	町皿140		50
455	陶器・皿/折縁皿	瀬戸美濃	II層	*11.0	-	-	大4カ		皿60	内外灰釉	10
456	陶器・皿/丸皿	瀬戸美濃	一括	8.8	4.8	2.1	登		皿30	内外透明釉/削込高台/底部外面トチ痕	60
457	陶器・皿/丸皿	瀬戸美濃	一括	-	*7.0	-	登2	17c前	皿57	長石釉/鉄釉圏線に蘭竹カ/円錐ピン痕	20
458	陶器・皿	瀬戸美濃	III層	-	*6.0	-			皿61	内面灰釉/削込高台	20
459	陶器・鉢/志野鉢	瀬戸美濃	II層	-	-	-	大4	16c末	鉢26	内外厚い長石釉/口縁内面鉄で格子文	10
460	陶器・鉢/志野大鉢	瀬戸美濃	II層	-	-	-			鉢23	内外長石釉/鉄で文様/底部	10
461	陶器・鉢/志野大鉢	瀬戸美濃	一括	-	-	-			鉢24	内外長石釉/鉄で文様/輪高台	10
462	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	上層No8(5壙カ)	-	-	-	大2、I類	16c中	町鉢136		10
463	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	?壙下層	-	-	-	大3後、I類	16c後	町鉢177		10
464	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	I層	-	-	-	大3、I類	16c後	町鉢128		10
465	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	III層	-	-	-	大3、I類	16c後	町鉢135		10
466	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	一括	-	-	-	登、B類	17c後カ	鉢18	内外鉄釉/指頭により片口部形成	10
467	陶器・鉢/擂鉢	瀬戸美濃	一括	-	-	-	大3、I類	16c後	鉢36		10
468	陶器・小壺	瀬戸美濃	III層北	8.0	3.8	3.7	登	17c後～19c	碗16	内外灰釉・外面体部以下露胎	70
469	陶器・入子カ	瀬戸美濃	III層	-	-	-	古前～中期		他19	口唇内外灰釉	<10
470	陶器・茶入	瀬戸美濃	一括	-	*4.0	-	大4・登1	16c末～17c初	町他018		10
471	陶器・水滴	瀬戸美濃	一括	-	-	-	古前IV		町他032		10
472	陶器・四耳壺	瀬戸美濃	一括	-	-	-	古後		袋14	外面灰釉/耳の基部が残る	10
473	陶器・向付/志野向付カ	瀬戸美濃	II層	-	-	-	登		他10	内外長石釉/鉄で文様	10
474	陶器・向付/志野向付	瀬戸美濃	上層	-	-	-		16c末	他09	内外厚い長石釉/底部外貼付足痕カ	10
475	陶器・香炉/筒形香炉	瀬戸美濃	一括	*14.0	-	-	大カ		香01	内外灰釉・被熱のためか無光沢	10
476	陶器・碗	肥前	一括	-	4.5	-			碗21	全面透明釉	25
477	陶器・碗カ	肥前	一括	-	4.4	-			碗17	内面灰釉	20
478	陶器・皿/鉄絵皿	肥前(唐津)	一括、KB19 D区1層	*15.6	-	-		16c末～17c前	町皿106		10
479	陶器・皿	肥前	II層、III層	-	4.0	-			皿50	内外透明釉/鉄で文様/底部内面円形に窪む	40
480	陶器・皿	肥前	III層	-	-	-	I-2期	1594～1610	皿46	内外透明釉/鉄で文様	10
481	陶器・皿	肥前	一括	-	*4.0	-		16c末～17c初	皿62	透明釉/鉄で文様/底部内面胎土目痕2ヶ所・円形削込/高台内削込深い	10
482	陶器・向付	肥前	一括	-	-	-	I-2期	1594～1610	他16	内外透明釉/鉄で文様	10
483	陶器・鉢	肥前	一括	-	6.4	-		18c～19c	鉢25	蛇の目釉剥ぎ・灰釉流し掛け	40
484	焼締陶器・鉢/擂鉢	備前系	一括	-	-	-		18c～カ	鉢16	口唇部明瞭な沈線・縁帶下にナデによる凹線	10
485	陶器・鉢/片口鉢	不明	一括	-	-	-	2～3型式	12c中～後	鉢20	無釉瓷器系	<10

第13表 土器類一覧表12

*は不確定な推定復元値、()は残存値、法量の単位はcm (東)(九)はP66参照 <10は10%以下

図No.	器種	产地	出土地点	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	時期・ 形式	年代	遺物ID	備考	残存率 (%)
486	陶器・鉢/片口鉢	不明	II層	-	-	-	2~3型式	12c中~後	鉢21	無釉瓷器系	<10
487	磁器・皿	肥前(波佐見)	一括	13.6	8.0	3.9	(九)V-1期	(九)1680~1740	伊10	高台端部露胎/コンニャク判五弁花・半菊文+崩れた扇文+雪輪カ文・唐草文・渦福	60
488	土器・かわらけ	在地	I層	7.5	4.5	2.3			K68	口縁部内外全周に黒色付着物/胎土砂粒多し	75
489	土器・かわらけ	在地	一括	7.4	5.0	1.8			K69	口唇部灯芯油痕	95
490	土器・かわらけ	在地	一括	7.2	4.3	1.8			K70	口唇部灯芯油痕2ヶ所	60
491	土器・かわらけ	在地	一括	11.5	4.5	3.1			K71	底部内面指頭ナデ/内外口クロ目明瞭	80
492	土器・かわらけ	在地	一括	-	5.0	-			K72	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ/内外口クロ目明瞭	50
493	土器・かわらけ	在地	一括	*7.4	*3.5	2.1			K73	焼成良好	30
494	土器・かわらけ	在地	一括	*10.0	*6.2	3.1			K74		30
495	土器・かわらけ	在地	一括	*11.2	*8.0	3.0			K75	内面体底部境ナデ	40
496	土器・かわらけ	在地	一括	-	5.8	-			K76	底部内面指頭ナデ/外面口クロ目明瞭	50
497	土器・かわらけ	在地	一括	-	4.5	-			K77	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ/内面口クロ目明瞭	50
498	土器・かわらけ	在地	一括	-	4.6	-			K78	底部内面指頭ナデ/底部外面板ナデ/内面口クロ目明瞭	60
499	土器・かわらけ	在地	一括	-	5.0	-			K79	内外口クロ目明瞭	50
500	土器・かわらけ	在地	一括	-	4.8	-			K80	底部内面指頭ナデ	60
501	土器・ほうろく	在地	一括	*36.0	*32.0	5.3			H40		20
502	土器・ほうろく	在地	一括, KB14 24壙	*37.7	*32.0	5.7			H23		40
503	土器・土鍋	在地	一括, KB14 外堀	*34.0	-	-			D01	KB14 土130で既報告/外 面スス付着	10
504	土器・捕鉢	在地	一括	*30.0	-	-			鉢35	外面指頭成形痕/櫛目8本	10
505	土器・火鉢カ	在地	一括	*40.0	-	-			火鉢02	体部外面削り痕	10
506	土器・火鉢	在地	一括	*34.0	-	-			火鉢04	外面飛びカンナカ/外面下 部剥落	10
507	土器・土釜	在地	一括	-	-	-			素他02		10
508	瓦・平瓦	在地	一括	-	-	-			瓦12	灰色/雲母/下面左右に削 り	15
509	瓦・平瓦	在地	一括	-	-	-			瓦13	暗灰色/雲母/右端かえし あり/かえし下面前後ナデ	15
510	瓦・平瓦	在地	一括	-	-	-			瓦14	灰色/雲母多量/右端かえ しあり/かえし下面前後ナデ /左右削り/左端に焼成前 穿孔カ(斜め)	25
511	瓦・平瓦カ	在地	一括	-	-	-			瓦16	灰色/雲母/上面磨きなし	25
512	瓦・平瓦カ	在地	一括	-	-	-			瓦17	灰色/雲母/刻線4条/断面 磨耗により平坦/下面とけ ている	15
513	瓦・平瓦カ	在地	一括	-	-	-			瓦18	黒色 斑灰色/右端に溝/ 下面整形 前後斜/ドベイ 痕部上面稜あり	25
514	瓦・棟瓦	在地	一括	-	-	-			瓦19	灰色/雲母/下面整形前後 /尻の切り込み	20
515	瓦・棟瓦	在地	一括	-	-	-			瓦20	灰白色/雲母/下面整形前 後/尻の切り込み長い	40
516	瓦・棟瓦	在地	一括	-	-	-			瓦21	灰色/雲母多量/下面整形 左右→前後	15
517	瓦・棟瓦	在地	一括	-	-	-			瓦22	灰色/雲母/下面整形前後	20
518	瓦・棟瓦	在地	一括	-	-	-			瓦23	明褐色/下面整形前後	20
519	瓦・軒瓦	在地	一括	-	-	-			瓦27	灰色/唐草文	30
520	瓦・軒瓦	在地	一括	-	-	-			瓦32	断面 内面スス付着	10
521	瓦・軒瓦カ	在地	一括	-	-	-			瓦33	前面ドベイ痕	10
522	瓦・丸瓦	在地	一括	-	-	-			瓦34	灰色	10
523	瓦カ	在地	一括	-	-	-			瓦35	被熱による発泡/上面一部 磨き/下面未整形	10
524	磁器・碗/土製円盤	同安窯系中国	外堀	5.2	-	1.6	同安窯系I		青03	内外青白色の釉/高台内 兜巾	

第14表 土器類一覧表13

*は不確定な推定復元値、()は残存値、法量の単位はcm (東)(九)はP66参照 <10は10%以下

図No	器種	産地	出土地点	口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	時期・ 形式	年代	遺物ID	備考	残存率 (%)
525	焼締陶器・甕/土製円盤	常滑	Ⅲ層	5.2	-	1.2			町つぶて石02	甕	
526	焼締陶器・甕/土製円盤	常滑	一括	8.4	-	1.7			町つぶて石01	甕	
527	陶器・鉢/土製円盤	瀬戸美濃	22壙上層	5.2	-	1.0			町つぶて石05	擂鉢	
528	陶器・碗/土製円盤	瀬戸美濃	33壙上層	4.2	-	1.2			町つぶて石13	天目	
529	陶器・碗/土製円盤	瀬戸美濃	1溝	4.8	-	1.6			町つぶて石14	天目	
530	陶器・碗/土製円盤	瀬戸美濃	土橋上層	5.0	-	1.0			町つぶて石06	天目	
531	陶器・碗/土製円盤	瀬戸美濃	外堀	5.6	-	0.9			町つぶて石07	天目	
532	陶器・碗/土製円盤	瀬戸美濃	外堀	4.6	-	1.0			町つぶて石09	天目	
533	陶器・碗/土製円盤	瀬戸美濃	外堀	4.8	-	1.6			町つぶて石10	天目	
534	陶器・鉢/土製円盤	瀬戸美濃	1T	4.0	-	0.9			他13	内外鋸釉	
535	陶器・碗/土製円盤	瀬戸美濃	Ⅱ層	5.0	-	1.9			町つぶて石12	天目	
536	陶器・碗/土製円盤	瀬戸美濃	一括	5.2	-	1.4			町つぶて石11	天目	
537	陶器・碗/土製円盤	瀬戸美濃	一括	4.7	-	1.3			町つぶて石15	天目	
538	陶器・鉢/土製円盤	瀬戸美濃	一括	4.0	-	0.7			他14	内外鋸釉	
539	陶器・碗/土製円盤	志戸呂	3壙上層	4.8	-	1.6			町つぶて石08	天目	
540	土器・土製円盤	在地	土橋下	3.2	-	0.7			素他09	ほうろくか	
541	土器・土製円盤	在地	Ⅲ層	5.6	-	0.9			素他08	ほうろく	
542	土器	在地	一括	(7.0)	(4.8)	-			素他04	金雲母を多量に含む/外面 ヘラ状工具痕	
543	土器・土壁片	在地	5壙 上層	5.7	5.1	2.1			素他11	被熱により焼成/上面平坦 /スサ痕あり	
544	土器・土壁片	在地	25壙No.93下層	4.6	4.4	2.1			素他13	スサ痕	
545	土器・土壁片	在地	25壙 No.95下層	7.5	5.8	3.8			素他06		
546	土器・土壁片	在地	25壙 No.116下層	8.1	5.2	3.1			素他07		
547	土器・土壁片	在地	用水	5.5	4.7	1.9			素他12	スサ痕あり	
548	土器・泥面子	在地	一括	2.4	2.1	0.9			素他10		

第15表 土器類一覧表14

(東) : 東京大学埋蔵文化財調査室 1999『東京大学構内遺跡調査研究年報』2 別冊

(九) : 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』



中央～南区

第2節 木製品類

1) 概要

本報告KB15区の調査では生活用具・生業の道具・経済に関わるもの・いくさ関係・その他加工がなされている材など広範囲の遺物が出土している。

(凡例4参照)

○生活に関するもの

「衣」では1の25号堀出土の黒色漆塗の櫛がある。歯の一部が欠損しているが、比較的残りがよい。棟は山形で、歯間は比較的広く、断面形は平ら。

2~12は下駄類である。

2は9号堀出土の連歯下駄の破片である。前歯と後緒穴1箇所周辺のみ残る。緒穴は方形の可能性が高い。台表は全面炭化。状態は不良。

3~7は10号堀出土。

3は差歯下駄の歯で、歯は上が狭く、下に向かい広がっている。厚みもあり大型の可能性が高い。樹種はケンポナシ。

4は連歯下駄。緒穴は三ヵ所とも残り円形。後歯が大きく欠損、前歯では芯が観察できる。台表に線刻あり。樹種はスギ。

5は差歯下駄の台で、大きく欠損している。僅かに歯が残る。台裏全面炭化。残る緒穴は方形。

6は連歯下駄。前を大きく欠損、後歯と後右緒穴のみ残る。緒穴は円形。樹種はクリ。

7は差歯下駄台部のみ。緒穴は方形。台裏は大きく欠損。樹種はケンポナシ。

8は20号堀出土の連歯下駄であるが、歯はほとんど残っていない。遺存状態不良のため歯の摩耗によるものかどうかは判断できなかった。左後緒穴が大きく欠損。緒穴は方形。やや大きめ。樹種はケヤキ。

9は24号堀出土で、連歯下駄か。後緒穴一箇所と後歯が僅かに残る。遺存状態不良で詳細不明。

10は25号堀出土の差歯下駄。右後緒穴周辺は欠損しているが、歯の一部も残る。台表は広く炭化。緒穴は方形。一緒に取り上げた歯の一部を図上で復元した。10号堀の7と類似。樹種はケンポナシ。

11は26号堀出土で連歯下駄か。前緒穴と前歯のみ残る。後緒穴と後の歯が確認できないことから未製品の可能性もある。台裏広く炭化。

12は11号井戸出土。歯が中央に残るが、緒穴なし。一歯下駄の未製品か。

今回確認された差歯下駄で樹種が確認できたものは全てケンポナシであった。このことから、騎西城の差歯下駄にはケンポナシを多く使用していると考えられるが、これは時代的な特徴なのか、地域的なものかは今後の課題である。

「調理」では13が自在鉤である可能性が高い。半裁されたものを使用。孔の周辺には使用痕あり。片面にススが多く付着。樹種はアオキ。

「貯蔵」では桶類(14~35)がある。

14は22号堀出土で、柾目取りで小型。柄杓の底板の一部か。中央付近に孔あり、柄を留めた痕か。

15~17は9号堀出土の側板。15は板目取り、一部欠損、外面広く炭化。16・17は両者とも自然乾燥していたため劣化し、詳細は不明。17はやや大型。17は側面のそりがあまり確認できないため側板でない可能性もあり。

18~25は10号堀出土の側板と底板。

18・19は大型の側板で、棒を差し通すための孔あり。それぞれ一部炭化。19の樹種はスギ。

20は底板の一部で、側面に木釘孔あり。かなり大型で厚いため、樽の底板の可能性も高い。樹種はスギまたはヒノキ科。

21・22は側板であるが乾燥のため著しく変形。両者とも炭化。

23は側板か。非常に薄く、木目が詰まつていて柾目取りに近い材。側板でない可能性もあり。下部を加工か。一部炭化。樹種はヒノキ。

24は含水率が高く、形が保たれていない。蓋板の可能性が高い。非常に薄い。

25~1~15は桶一個体の側板。炭化しているものが多い。必要に応じ縦側面と断面を描き分けた。25~6は樹種がイヌガヤで、25~7はヒノキである。同一樹種でないことから、当初の組み合わせではな

く、補修の際に違う材を使用していた可能性もある。また、節のあるものなども使用している。この15枚を組み合わせてみると、直径23cm程度で一周することが確認でき図上で復元を試みた。（第51図下）

26～28は21号堀出土。すべて劣化が進み詳細不明。26は底板。27・28は側板。27はやや大型。

29は23号堀出土で、他の側板に比べ節が多い。樹種はスギ。

30は25号堀出土であるが、含水率非常に高く、木目に沿い崩壊。

31・32は26号堀出土の側板。

31は断面形が弧を描かないことから側板でない可能性もある。崩壊が進行し詳細不明。

32は棒を差し通すための孔がある。上部のみ残る。自然乾燥していたため詳細は不明。

33・34は11号井戸出土。両者とも自然乾燥していた。状態不良。

33は底板の一部。断面に木釘が残る。表面に整形痕が一部観察できる。大型。

34は一部炭化した側板。

35は外堀埋土出土の側板である。大きく欠損し、遺存状態も悪い。

KB15区では桶板が多く出土しており、樹種もスギ・ヒノキの他にイヌガヤを使用していることは興味深い。江戸時代と異なり幅広い材を使用していたのであろう。

また、10号堀では特に多くの桶板が出土している。廃棄場所として堀が使われていたか。

「食膳」では36～59の漆椀類と60・61の折敷がある。

36は7号堀出土の漆椀破片である。内面赤色外面黒色漆塗で高台部は残らず炭化。胴部外面2箇所に赤色で施文を確認。文様の意匠は松葉か。

37・38は8号堀出土の漆椀である。

37は内外面黒色漆塗。胴部外面2箇所・見込み・高台裏に赤色で施文あり。見込みには「丸に鶴」、高台裏には「四つ菱」を施文。胴部施文の意匠は不明。高台は低く、身は浅く皿に近い。高台端部は欠

損。樹種はクリ。

38は内面赤色外面黒色漆塗。漆の剥落が著しい。高台端部が欠損。身の深い椀。施文の確認はできなかつたが、同一個体と思われる胴部破片には赤色の施文が確認できることから、施文のある可能性が高い。

39～43は10号堀出土。

39は内面赤色外面黒色漆塗。胴部外面に3箇所・高台裏に赤色で施文。高台裏には線刻もあり。胴部施文の意匠は「九曜紋」か。高台は低い。樹種はトネリコ。

40は内面赤色外面黒色漆塗で、漆膜やや硬質。口縁部内面に黒色の縁取りあり。施文は確認できない。高台部欠損、胴部から口縁部にかけてやや直線的に立ち上がる。

41は内面赤色外面黒色漆塗、胴部外面2箇所・高台裏に赤色で施文を確認。胴部施文の意匠は不明、高台裏には「一」。高台低く浅い椀。大きく欠損。

42も内面赤色外面黒色漆塗。遺存状態非常に悪い。大きく欠損し、施文の有無は確認できなかつたが、同一個体と思われる破片には赤色の痕跡があるため施文されている可能性が高い。高台低く浅い椀と想定。

43は内面赤色外面黒色漆塗。施文の有無は確認できなかつた。見込みに穿孔があるが意図は不明。口縁部、高台部大きく欠損。

44は11号堀出土。内外面黒色漆塗。全体に漆の剥落著しい。胴部外面に2箇所・見込みに赤色で施文。文様の意匠は不明。しっかりとした大きめの高台を持つ深めの椀。高台裏の抉りは浅い。

45は16号堀出土。内外面黒色漆塗。胴部外面3箇所・見込み・高台裏に赤色で施文。文様の意匠は、高台裏は「四つ菱」、他の意匠は不明。しっかりとした高めの高台を持ち、深めの椀。

46・47は20号堀出土。

46は内面赤色外面黒色漆塗の椀の破片。胴部・高台裏に赤色で施文を確認。高台は低く浅い椀。実測後崩壊。

47は内外面赤色漆塗で高台裏のみ黒色漆塗の椀。大きく欠損し遺存状態も悪いため詳細は不明。高台

は低い可能性あり。施文は確認できず。

48は21号堀出土。内面赤色外面黒色漆塗。胴部外面に1箇所赤色の施文を確認。高台は低い。全体に歪む。遺存状態悪し。

49は22号堀出土の内面赤色外面黒色漆塗で、漆の剥落著しく、施文の確認はできず。一部炭化。ややしっかりとした高台を持つが、高台裏はほとんど抉られていない。樹種はトチノキ。

50～52は24号堀出土。

50は内外面黒色漆塗。見込み・胴部外面2箇所に赤色で施文あり。文様の意匠は「亀甲文」の省略形か。しっかりとした高めの高台をもつ深い椀。樹種はクリ。

51は内外面黒色漆塗。見込み・胴部外面に赤色の痕跡あり、施文か。高台裏に赤色で「四つ菱」。口縁部周辺は大きく欠損しているが、しっかりとした高めの高台をもつ。深めの椀か。

52も内外面黒色漆塗。見込みに赤色で施文、意匠は鳥か。胴部の施文は確認できなかった。高台は低い。口縁部が大きく欠損。樹種は広葉樹。

53は25号堀出土。内外面黒色漆塗。胴部外面に1箇所赤色の施文がある。文様の意匠は不明。高台裏にも赤色の痕跡あり。遺存状態悪く崩壊。

54～58は26号堀出土。

54は内外面黒色漆塗。見込みに赤色で「丸に鶴」。大きく欠損し一部炭化。低い高台をもつ浅い椀。

55も内外面黒色漆塗、見込みに赤色で鳥文か。胴部外面には赤色の痕跡あり。外面の漆はかなり剥落。しっかりとした高台をもつが、高台裏は大きく欠損しているため詳細は不明。樹種はブナ属。

56～58は高台のみ残存。

56は内外面黒色漆塗。同一個体と思われる胴部破片の大きさから大型である可能性が高い。

57は同一個体と思われる破片からも内面赤色外面黒色漆塗の可能性が高い。遺存状態は非常に悪く、漆はほとんど剥落。

58は内外面黒色漆塗で高台裏に赤色で「四つ菱」。遺存状態は悪い。

59は大型の漆鉢。出土地点不明。外堀の可能性が高い。内外面赤色漆塗で高台裏のみ黒色漆塗。口縁

部は幅の広い縁帯が形成され、赤で施文されている。漆は硬質。栗橋宿などの江戸期で類似品が見られることから、江戸時代に入る可能性が高い。

漆椀も10号堀から多数出土していることがわかる。それらは高台が低く浅い椀、高台は低いが少し深い椀、高台が高く深い椀の3種類に大きく分類できる。樹種は、いろいろな種類が確認され、同一種類の材料を使用していないことから江戸時代と異なる様相を示している。

60・61は折敷の破片である。

60は10号堀出土で、2箇所に木釘孔が残る。柾目取りの隅切り折敷の破片。遺存状態悪い。

61は22号堀出土の1箇所木釘孔が残る隅切り折敷の破片か。やはり柾目取り。ただし、自然乾燥しているため歪み、詳細は不明。

○いくさに関するもの

62は10号井戸出土で腰刀の柄か。目釘と刀身茎が残る。樹種はクリ近似種。

○生業に関するもの

63は25号堀出土の付札状の木製品である。赤外線調査（註1）を行ったが、墨書等は確認できなかった。樹種はヤマグワ。

64は8号堀出土の柄の部分である。何の柄かは上半部が欠損しているため不明。丁寧に面取りを施している。

65は10号堀出土で木錘か。非常に小型で外面全体に細かい面取りを施している。中央の孔は貫通しているが、他に側面に貫通しない孔がある。

○その他（66～81）

製品または明確な加工はあるが用途不明のものである。

66は20号堀出土の製品である。小型で全面に加工を施している。用途は不明。

67～69は板状製品である。

67は7号堀出土。遺存状態が悪く詳細は不明であ

るが、ホゾが残る。小型で柾目取り。折敷の縁の可能性もある。

68は10号堀出土。欠損のため全形が明確ではない。方形の小孔が4箇所残る。一部炭化。用途不明。自然乾燥しているため状態は不良。

69は33号堀出土。小破片で含水率も高く詳細は不明。柾目取りの板に両面に細かい線状の痕がある。使用痕か。用途不明。

70～81は加工材である。

70は9号堀出土で板状。片面のみ整形。板目取り。片面の加工痕は明確。整形した面にのみ細かい線状の痕がある。使用痕か。

71・72は10号堀出土。

71は片面に切り込みと両面に明確な加工がある。節があるが周辺を整形している。

72は片面のみを削り、縦断面を見ると傾斜がついている。やはり両面に加工が残る。

73は23号堀出土。小型の板状で両端を面取り。中央に貫通する孔あり。遺存状態悪く詳細不明。

74は7号堀出土。大きな方形の切り込みが中央に施されている。建築部材の一部の可能性もあるが、含水率が高く詳細は不明、ほとんど崩壊状態。

75は25号堀出土。欠損しているため全形は不明。片側が狭くなる。全面に丁寧な加工あり。板目取り。

76は26号堀出土。細い板状で片側先端炭化。柾目取り。小破片のため詳細不明。

77・78は33号堀出土。

77は半截材の小片を使用した加工材。片面のみに切り込みと細かい加工を施す。

78は含水率がとても高く劣化が進行し、崩壊した。全形は不明確。片面にのみ傾斜と段をつけて加工した小片。詳細不明。

79は22号堀出土の丸木材の破片。弓状の弧を描く。端部加工と全面に面取りを施す。一部炭化。何かの部品か。

80・81は10号堀出土の丸木材。

80は両端が切り落とされ完結か。大きく面取りを施す。芯持ち材。両端に使用痕があるかどうかは確認できなかった。

81は小破片で片側先端欠損。一部を除いて面取り

を施している。やはり芯持ち材である。

以上が図化できたものである

このKB15区では、この他に遺物の遺存状態が悪く図化できなかつたものが多数存在している。それらの中で観察し一覧表後半に掲載したものを以下に説明するが、崩壊したものも多く存在する。

「生活に関するもの」では漆椀片は5点あり、そのうち2点は内面赤色外面黒色漆塗でその中の1点は芯が残る材を使用していた。漆椀で芯を持つものを使用しているものは珍しい。内外面黒色漆塗も2点あり赤色の施文の痕跡が残っていた。残りの1点は外面の漆は剥落し、内面は黒色漆塗であった。2・10・24・33号堀からの出土であったが、いずれも遺存状態が悪かった。

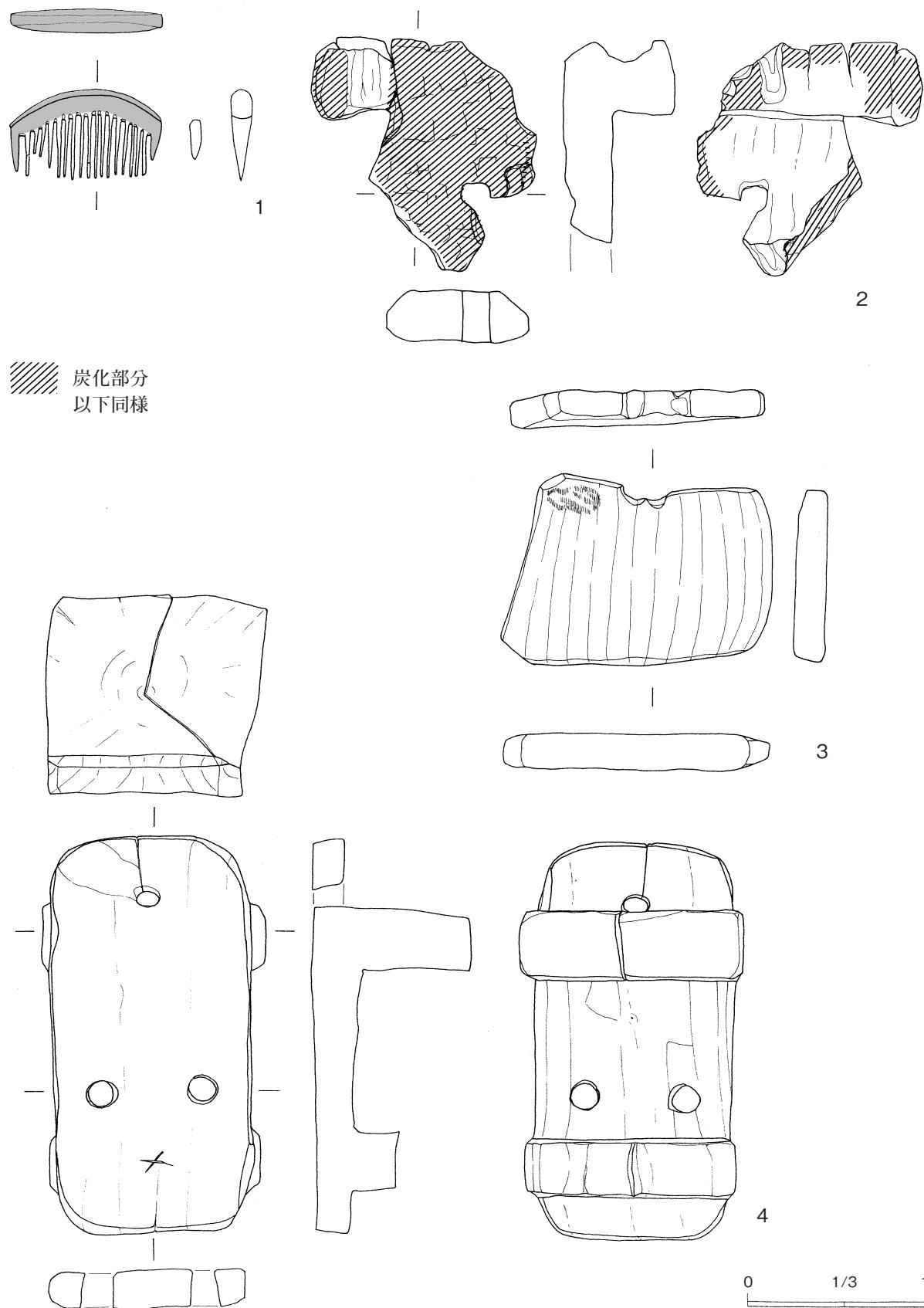
「その他」として加工材類がある。板材や切り込みがある加工材などのほか、柵材と考えられる丸木材がある。

今回報告のKB15区では、10号堀からの木製品の出土量が多い。下駄などの「衣」、「貯蔵」に関する桶類や「食膳」の漆椀類、他にも加工材類など幅広く出土している。10号堀の性格を考える上で重要なである。

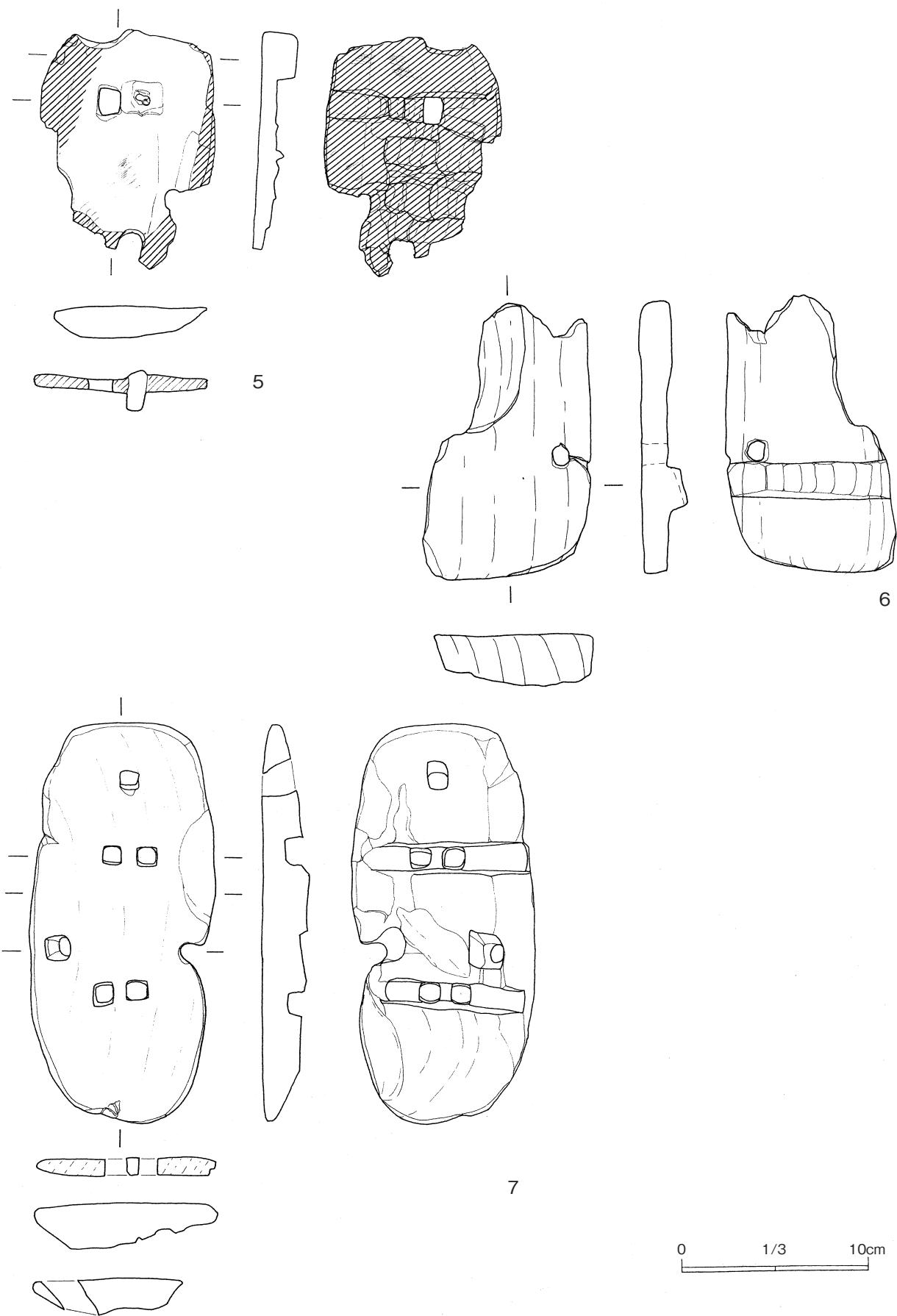
註1 (公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団の協力を賜った。



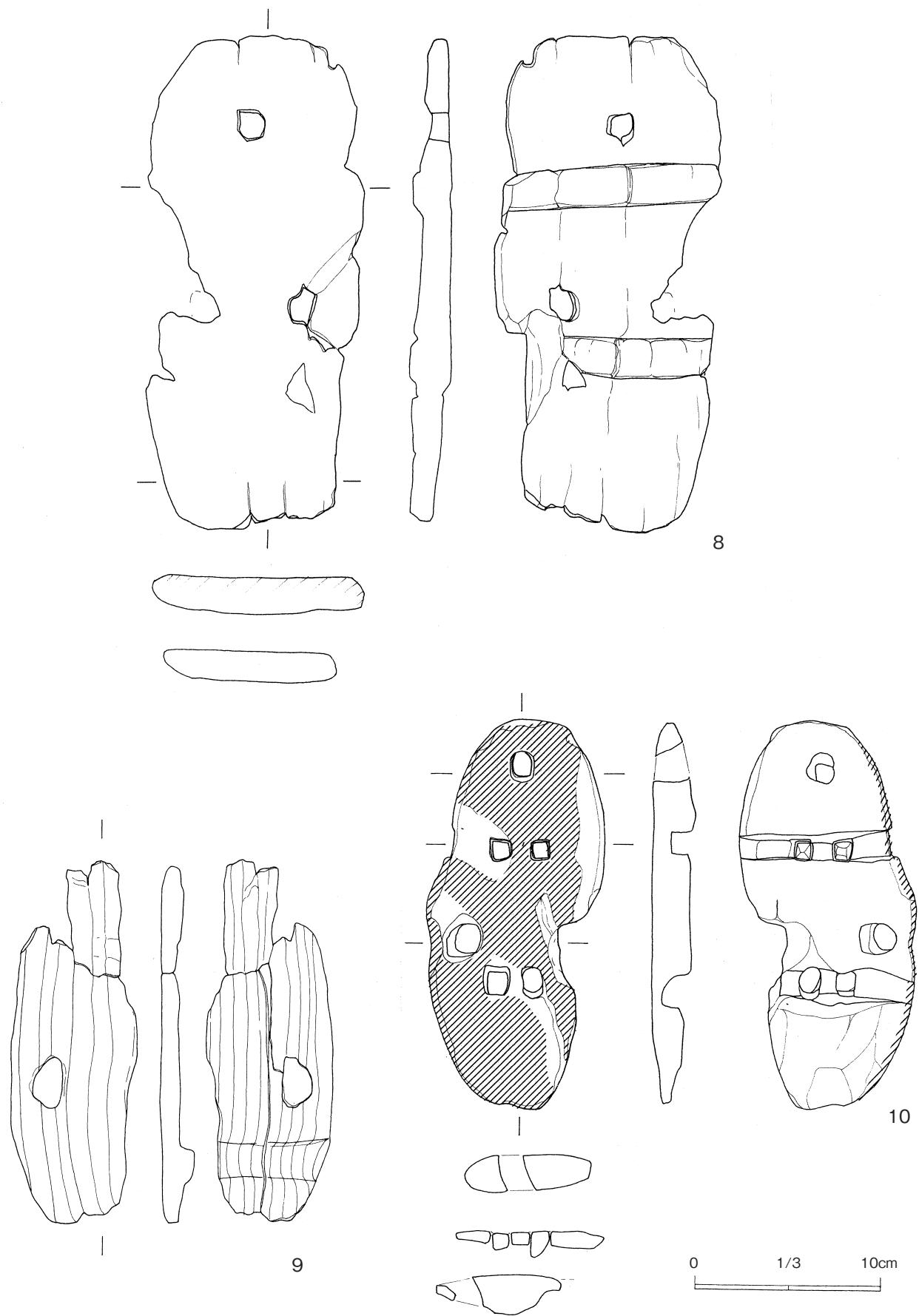
漆椀 (木-54)



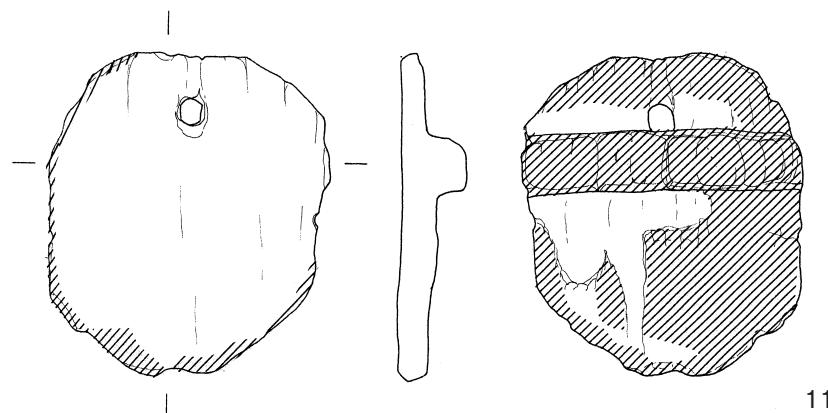
第43図 木製品類 1



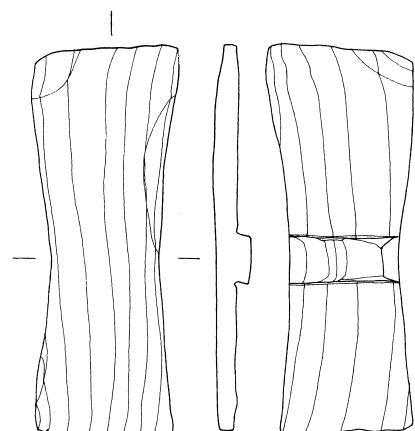
第44図 木製品類 2



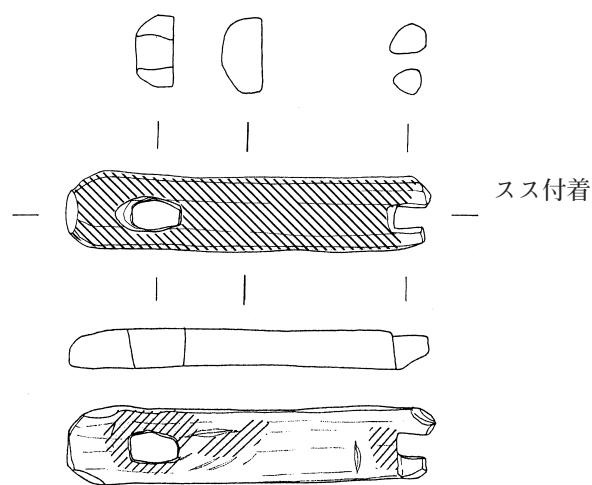
第45図 木製品類 3



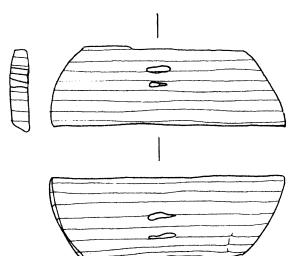
11



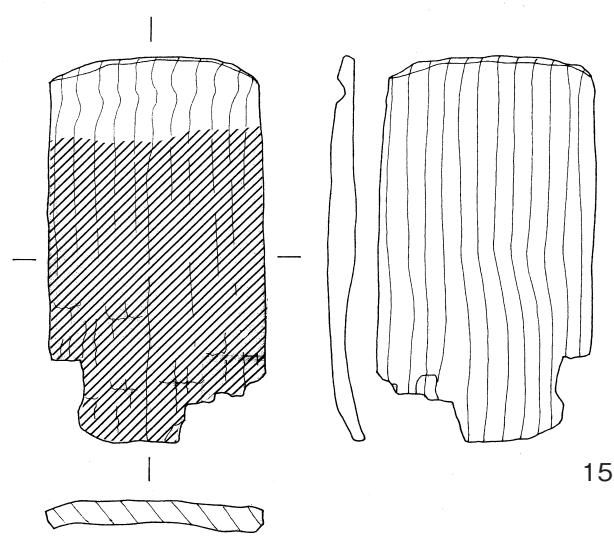
12



13



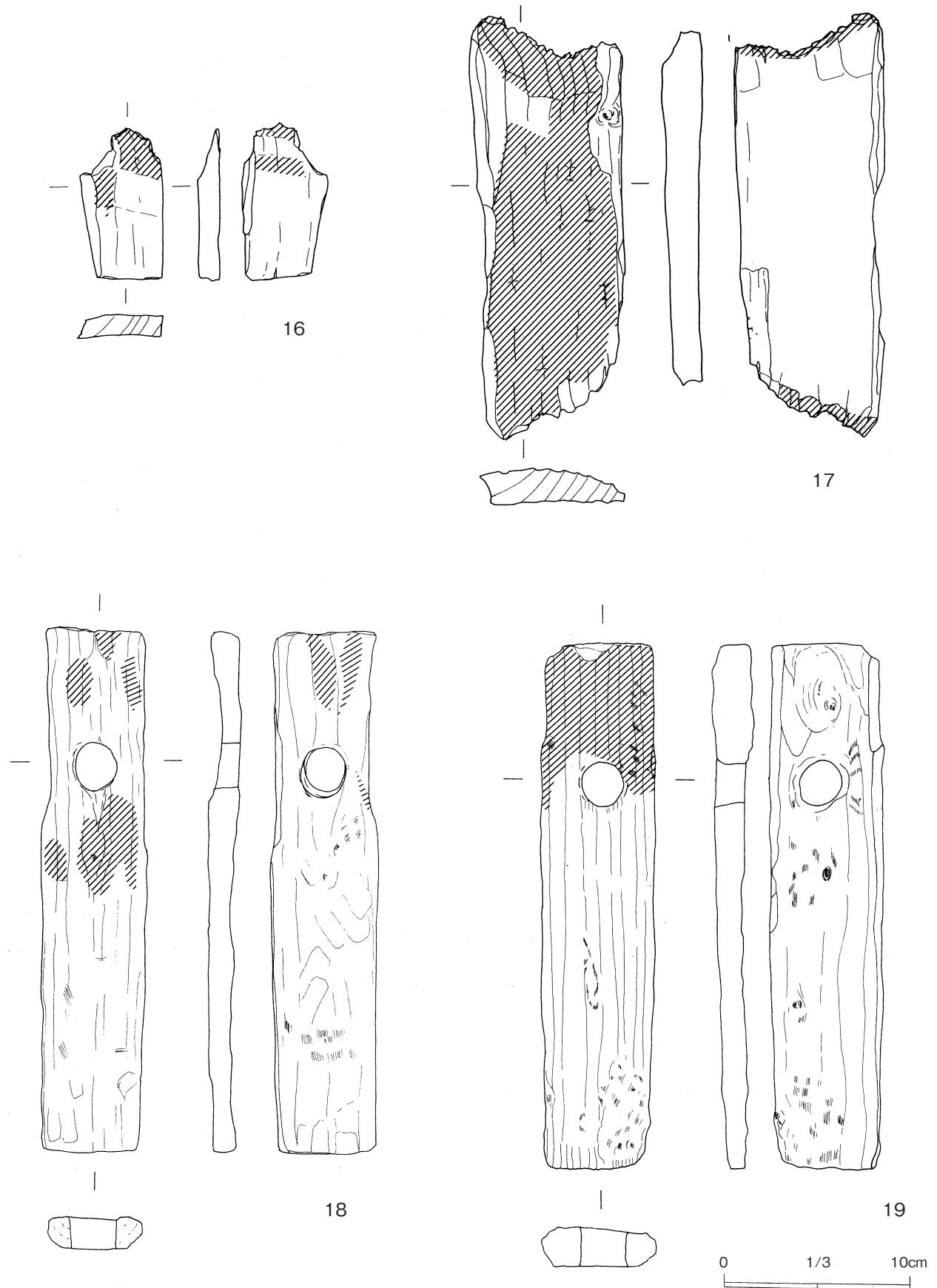
14



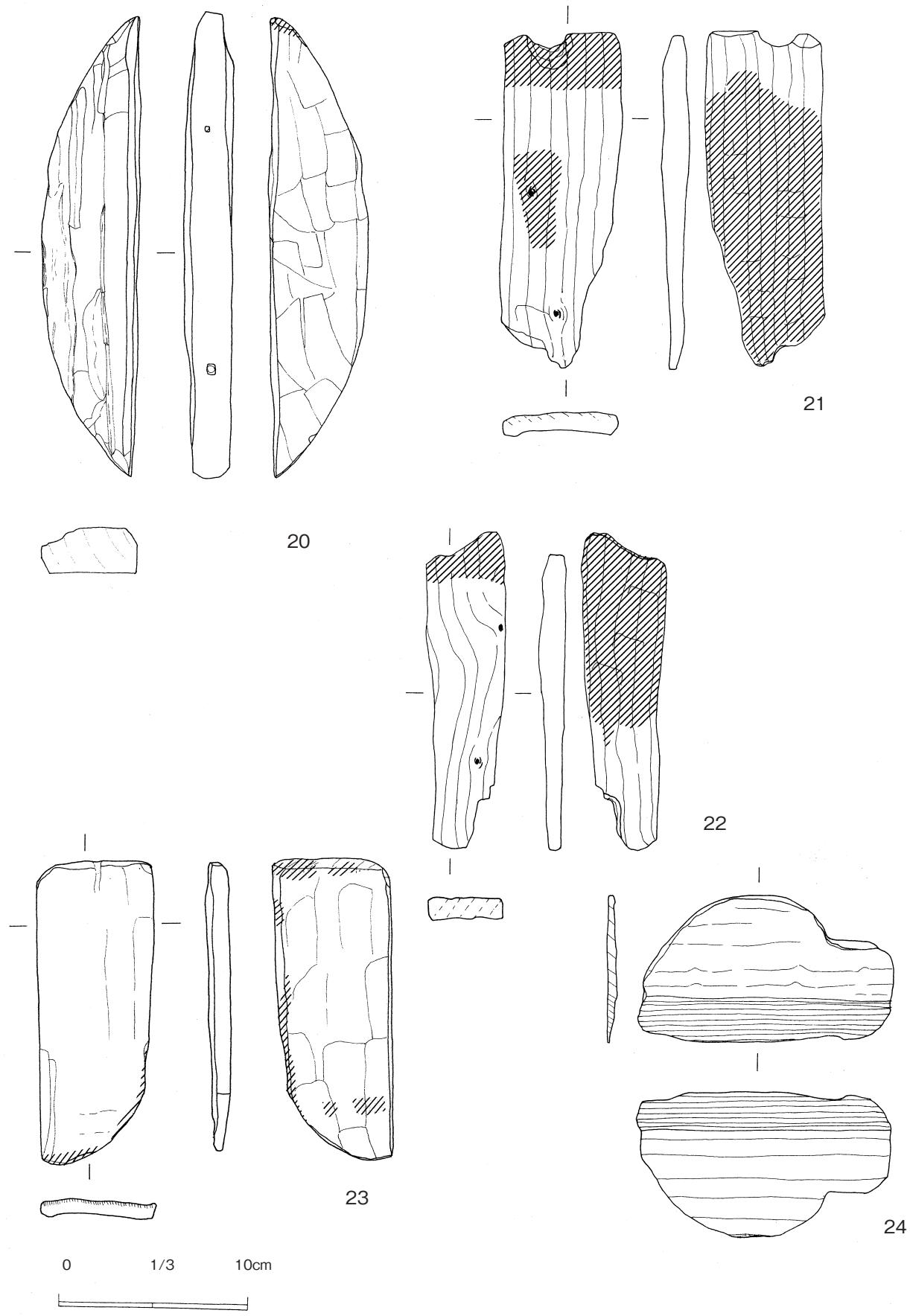
15

0 1/3 10cm

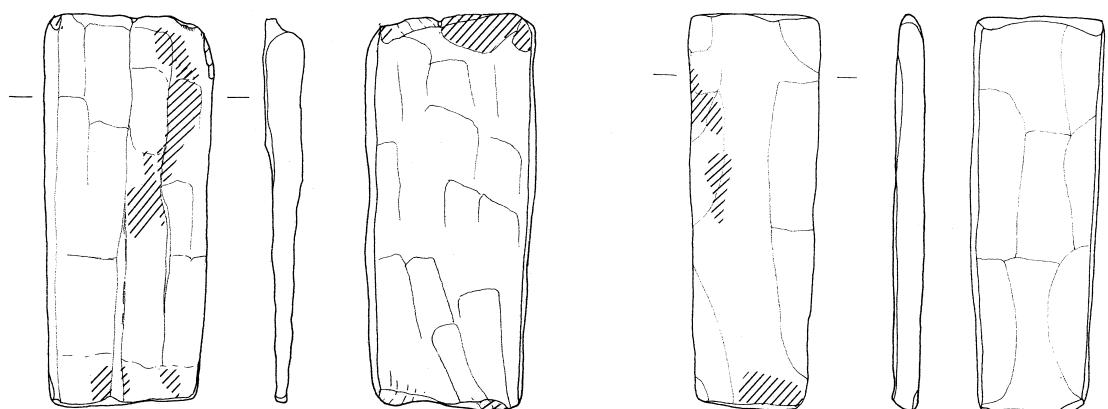
第46図 木製品類4



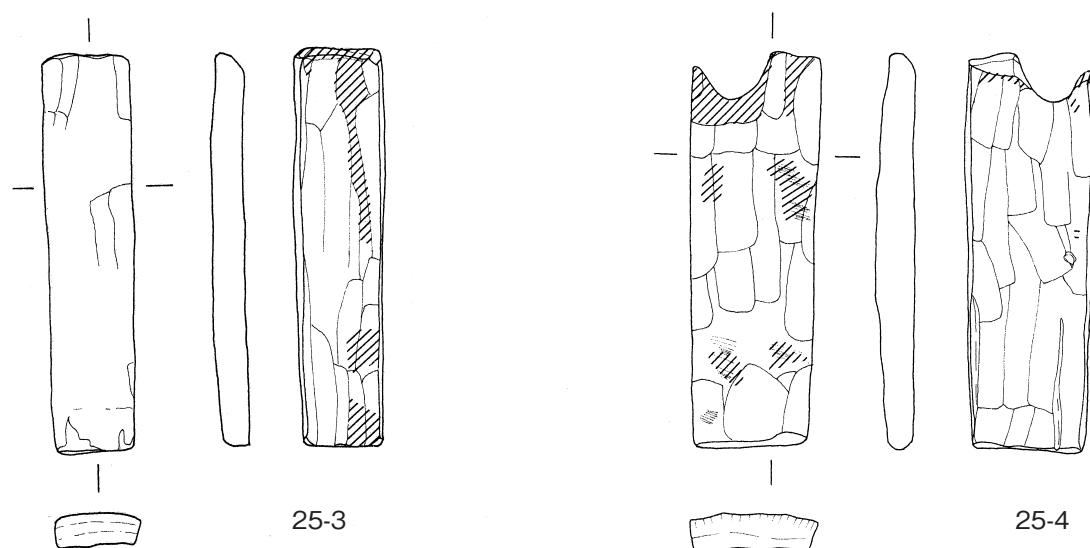
第47図 木製品類 5



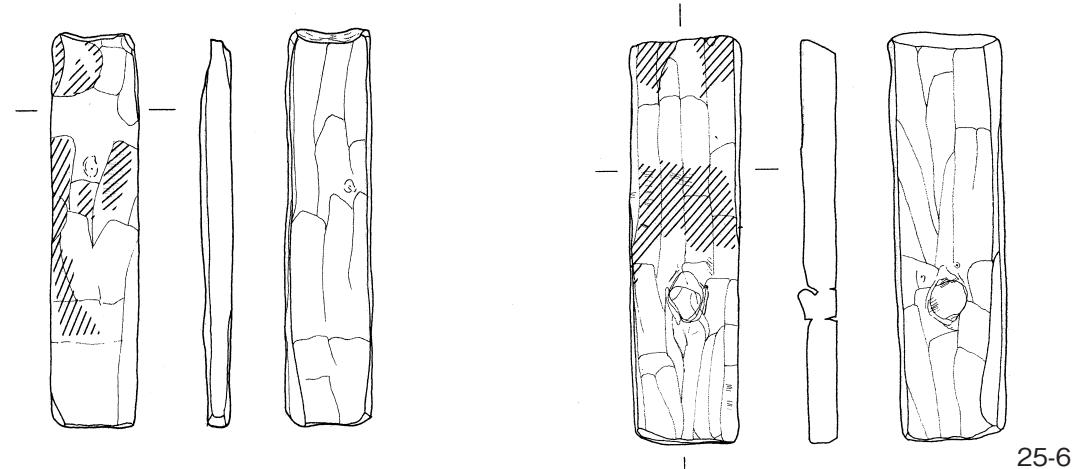
第48図 木製品類 6



25-1 25-2

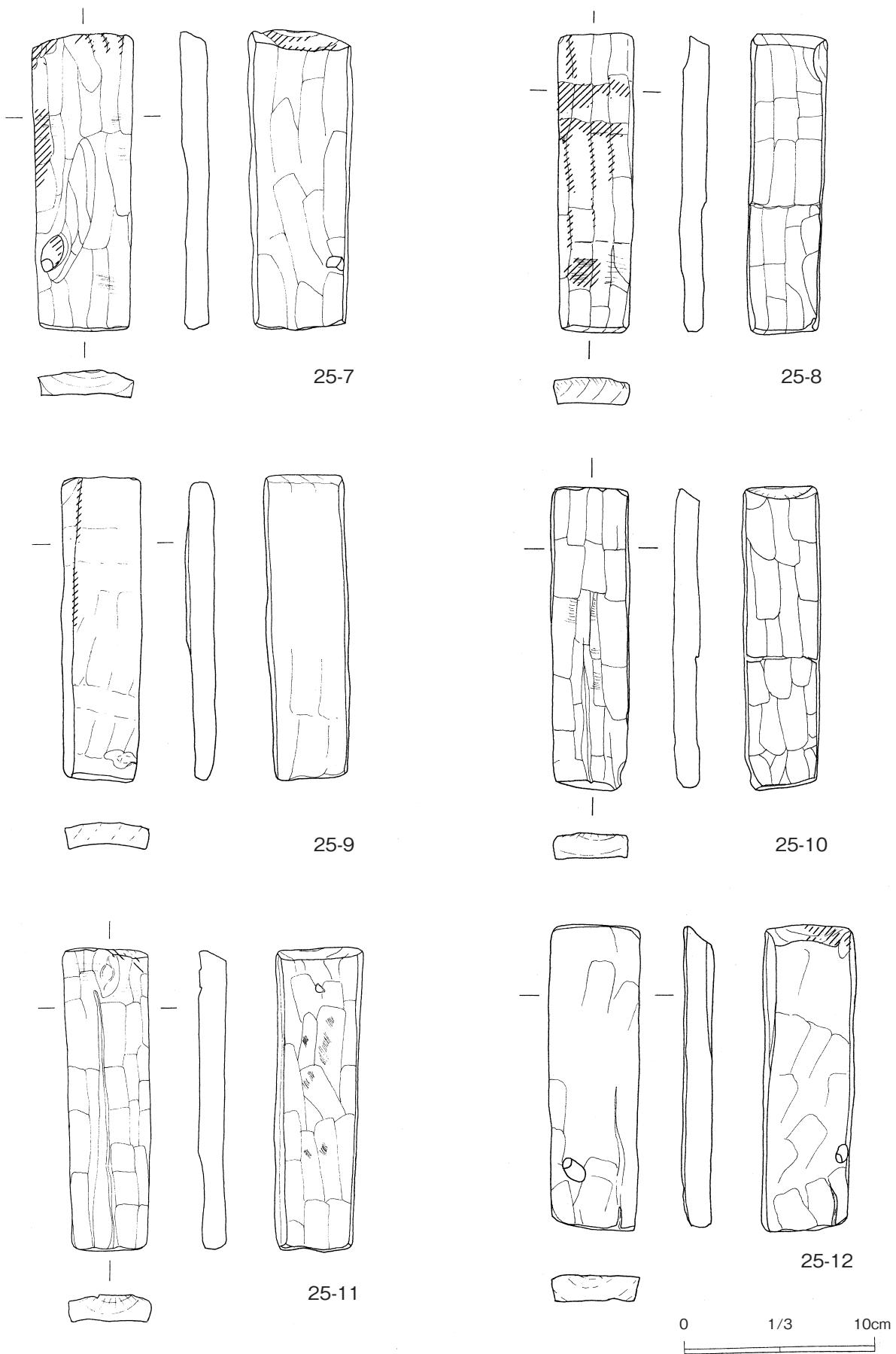


25-3 25-4

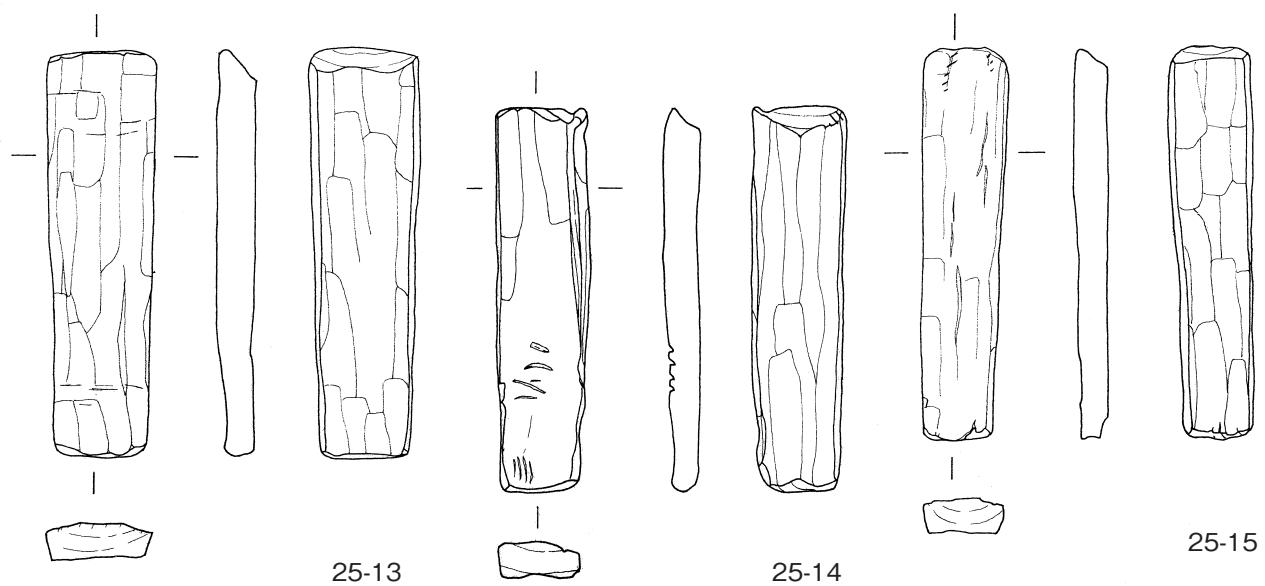


0 1/3 10cm

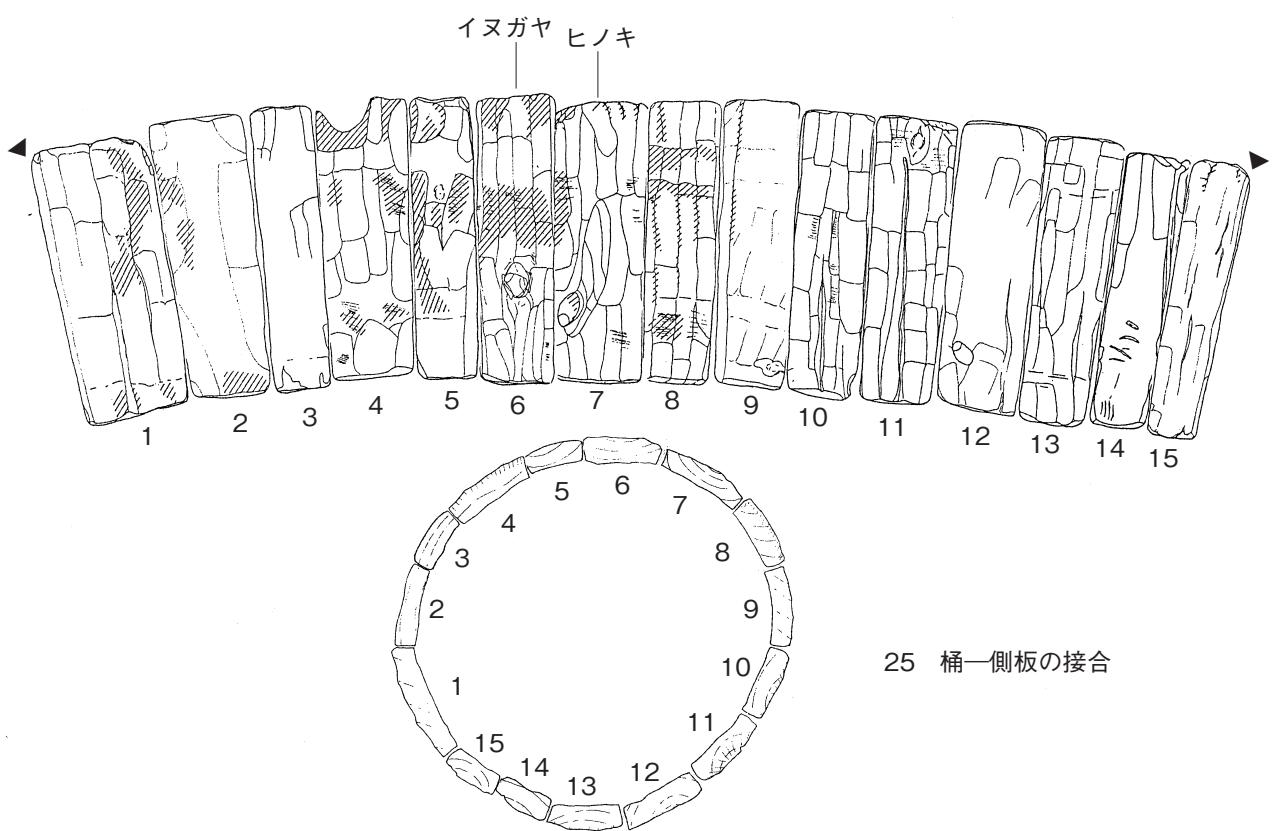
第49図 木製品類 7



第50図 木製品類8



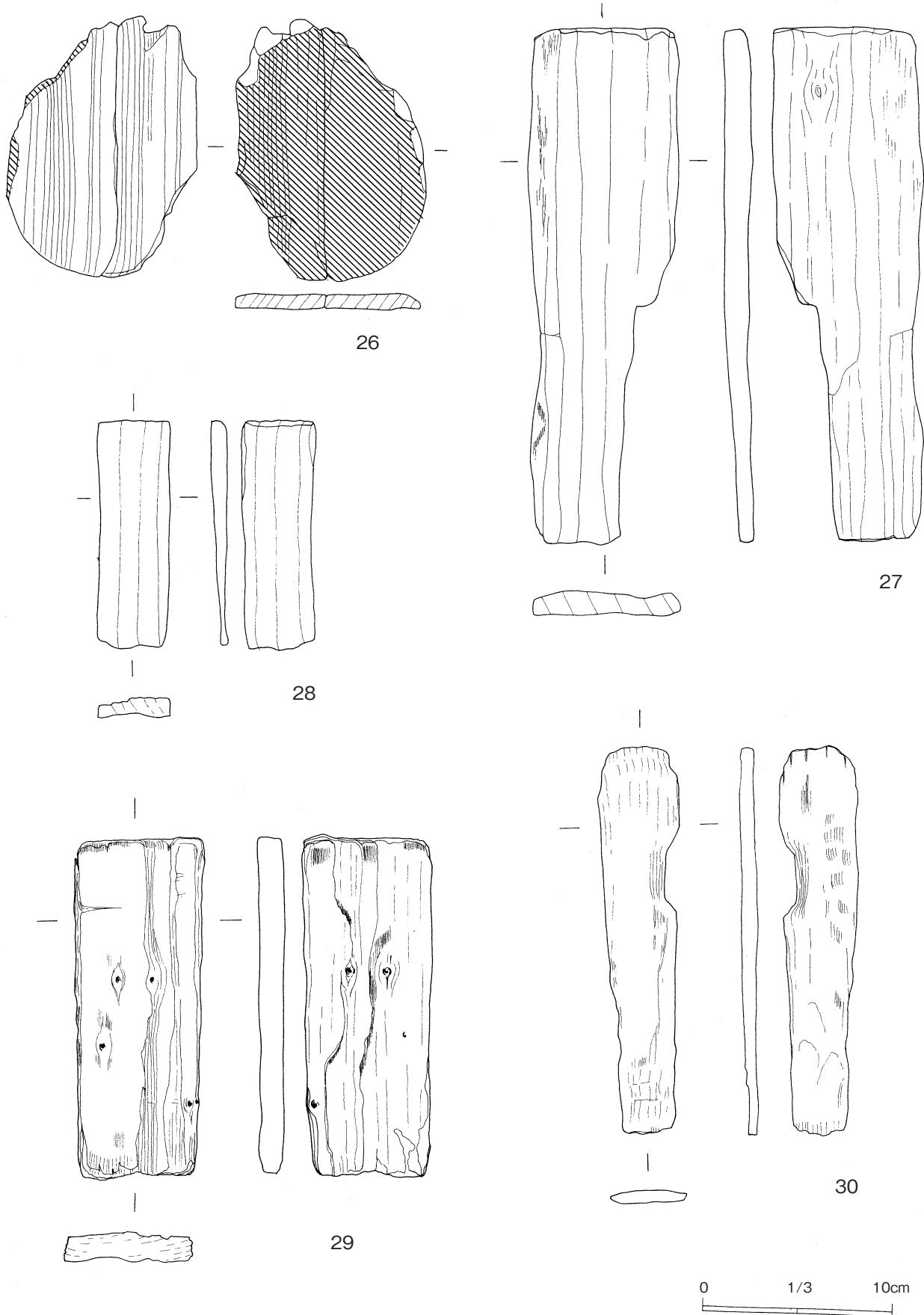
0 1/3 10cm



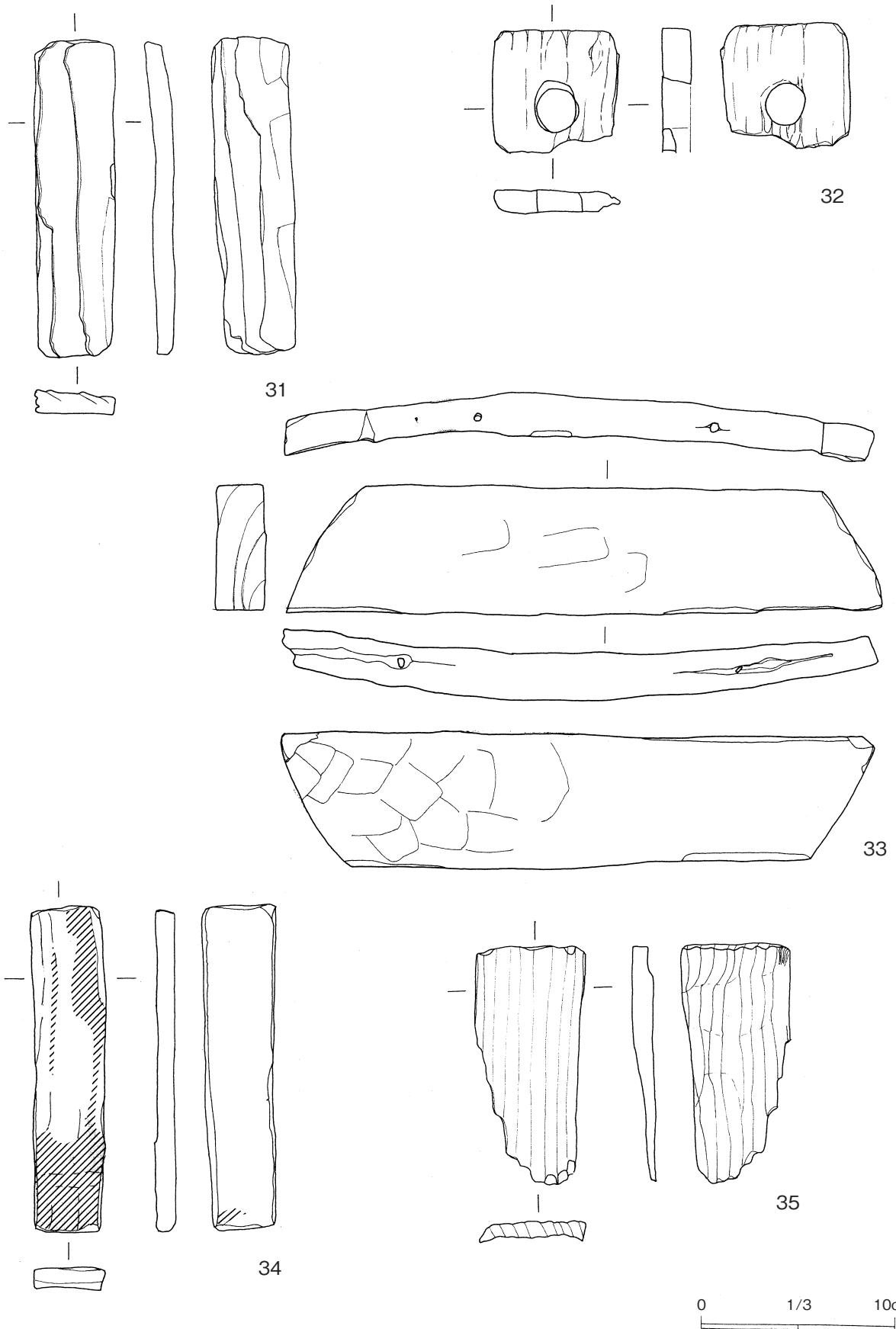
25 桶一側板の接合

縮尺任意

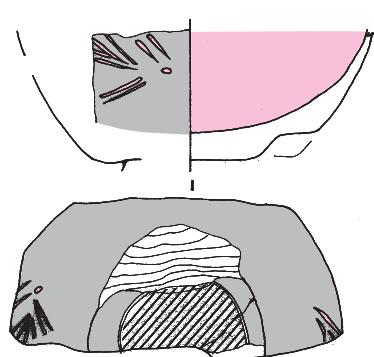
第51図 木製品類 9



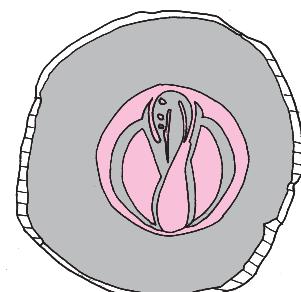
第52図 木製品類10



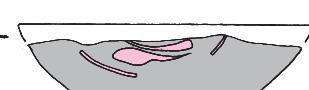
第53図 木製品類11



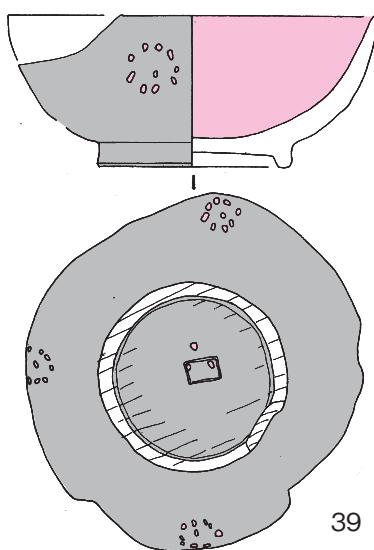
36



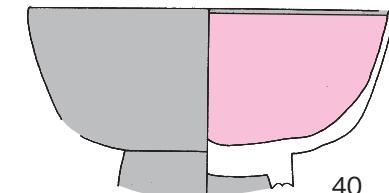
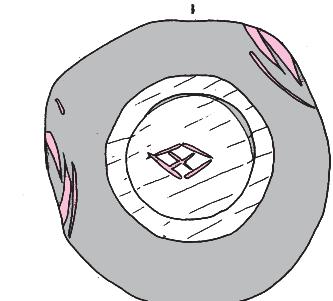
37



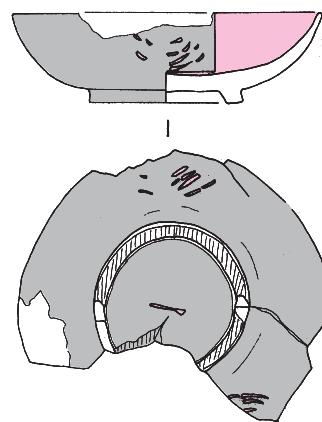
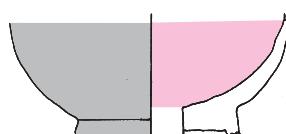
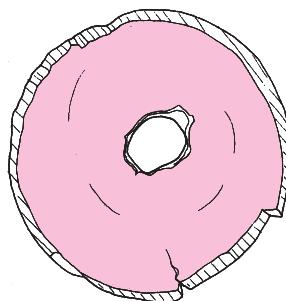
37



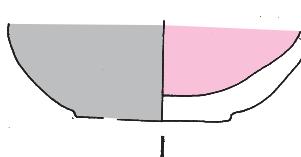
38



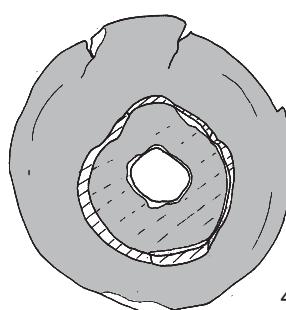
40



41



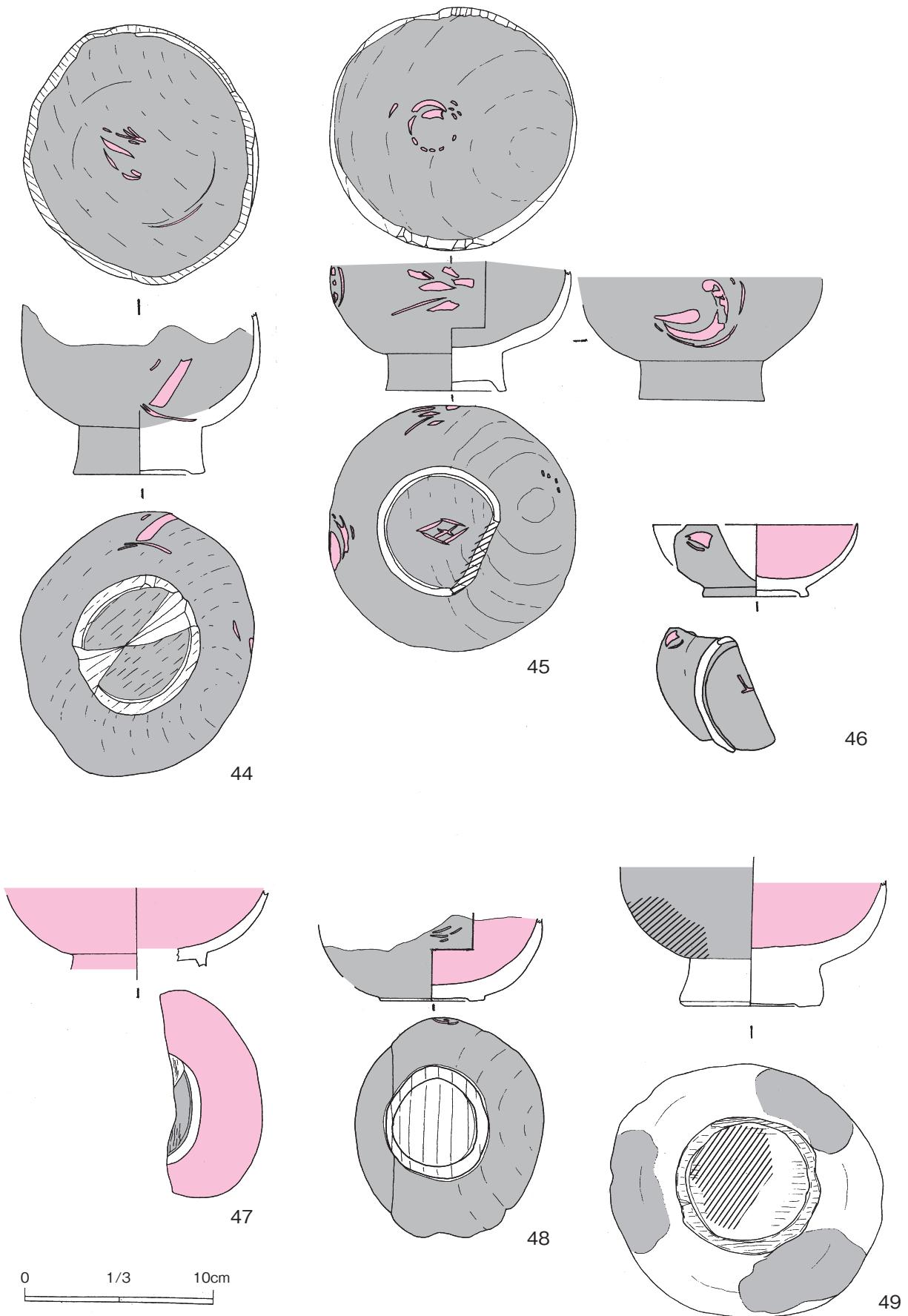
42



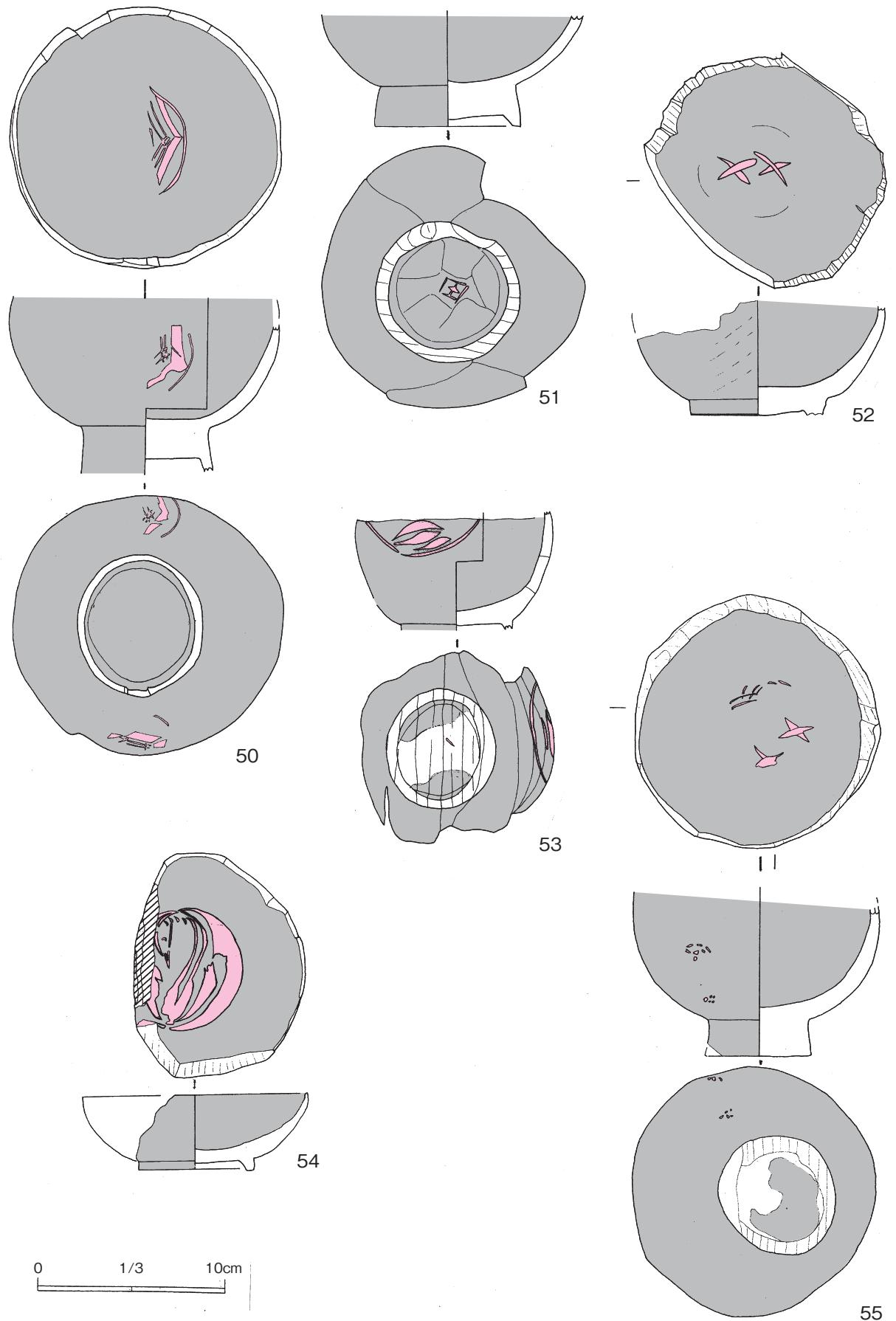
43

0 1/3 10cm

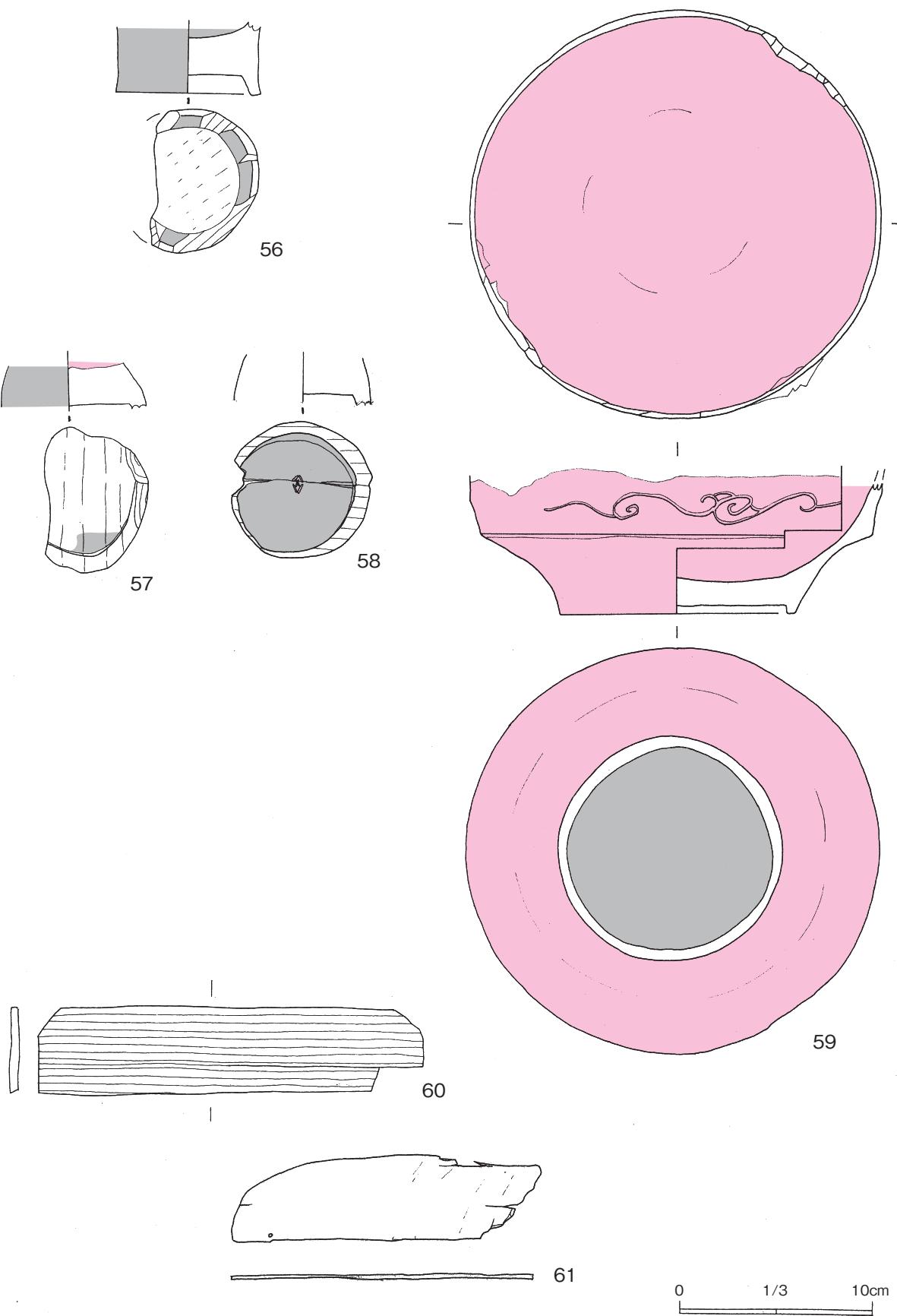
第54図 木製品類12



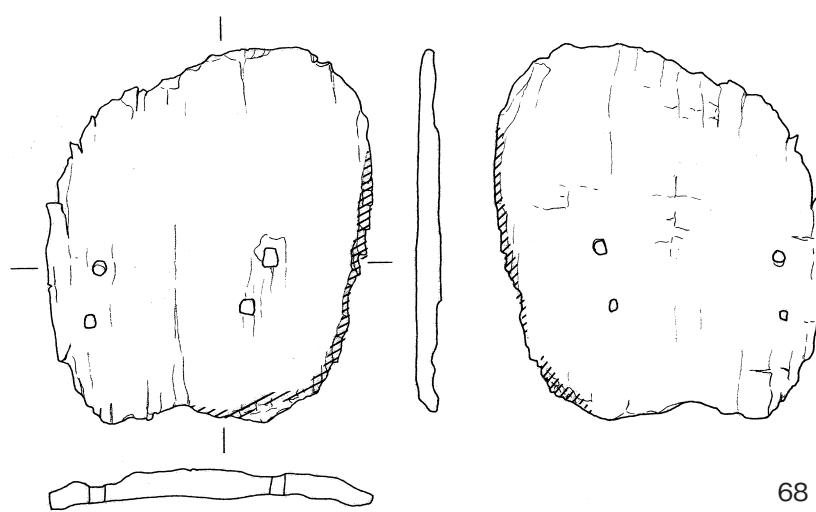
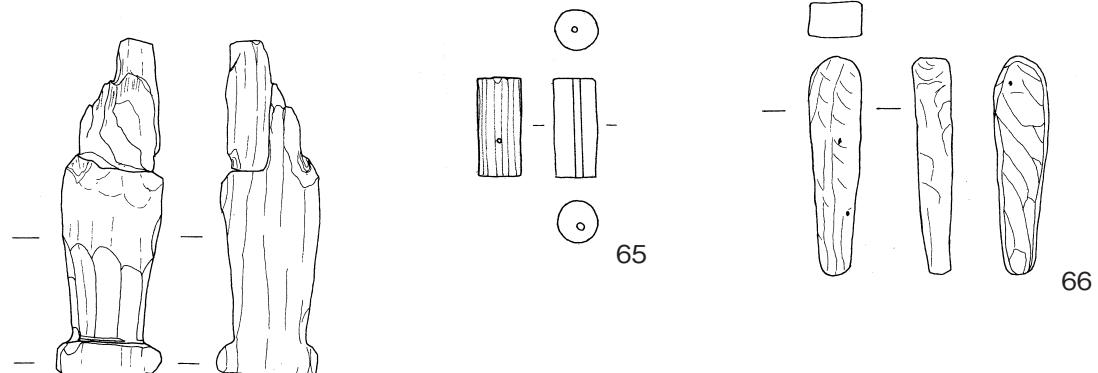
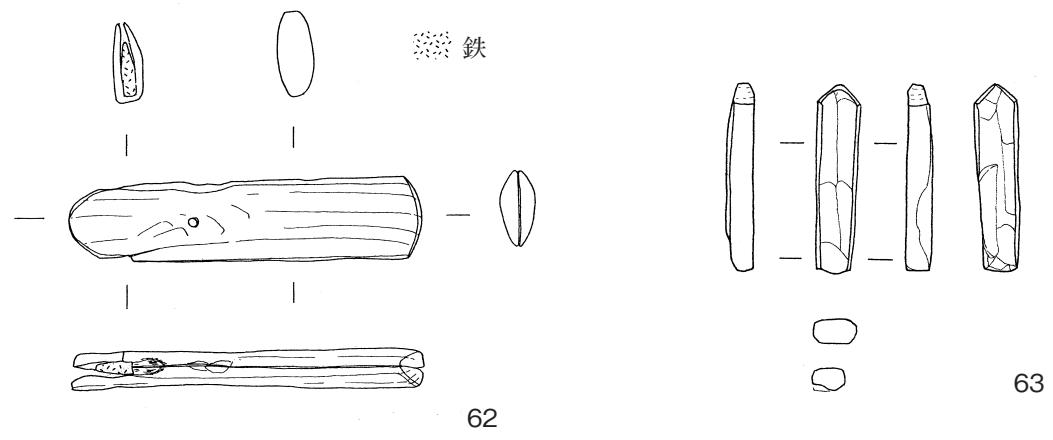
第55図 木製品類13



第56図 木製品類14

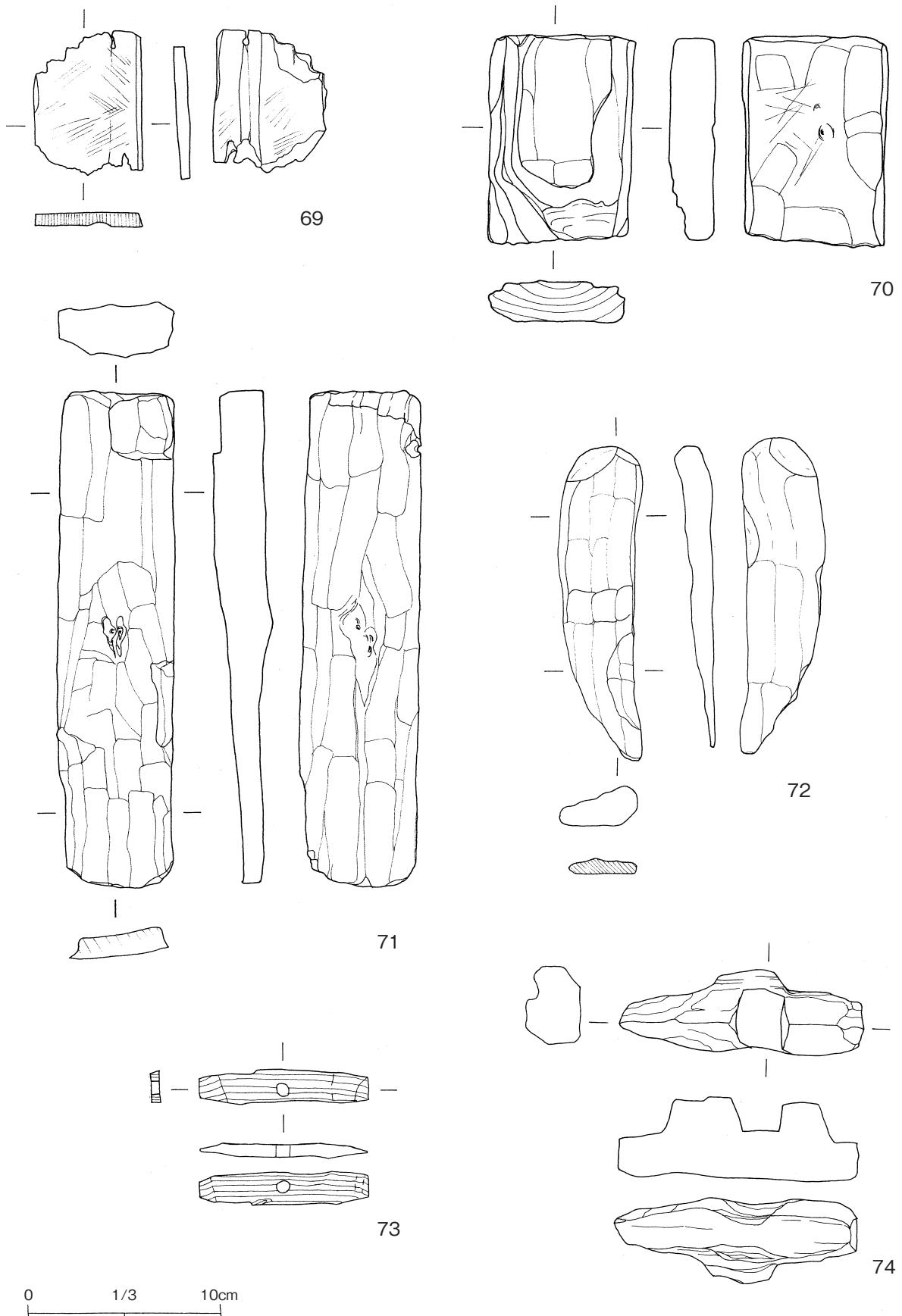


第57図 木製品類15

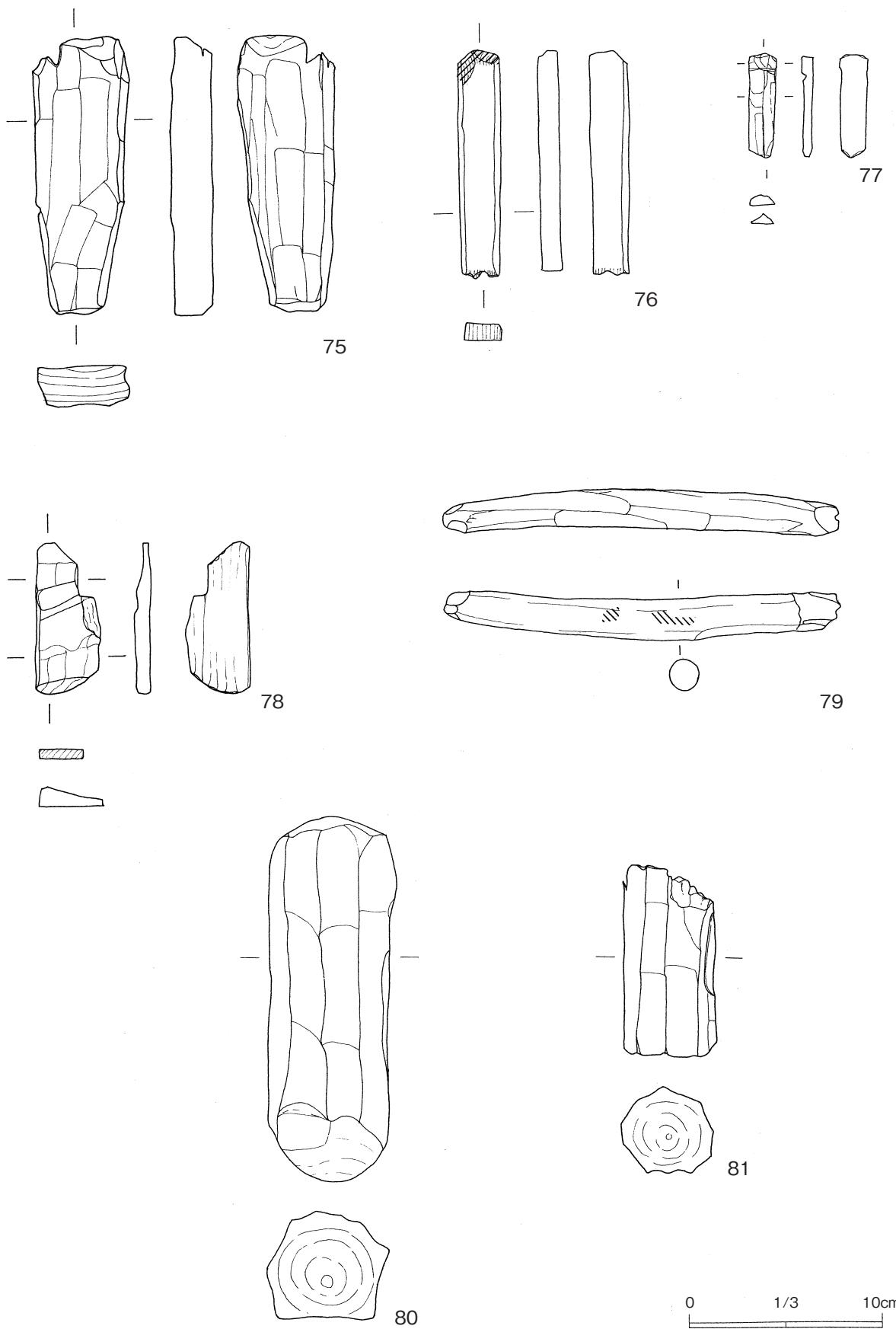


0 1/3 10cm

第58図 木製品類16



第59図 木製品類17



第60図 木製品類18

図No.太字は保存処理済

()は残存値

図No.	遺物名	出土地点	法量(cm)	特徴	備考	遺物ID	保存処理
01	櫛	25号堀下層(106カ)	幅7.7/高さ4.6/厚さ1.0	黒色漆塗	歯の一部欠損	661-0705-0015-0104	24
02	下駄	9号堀No17	長さ(10.3)/幅(7.4)/高さ(5.7)	連歯下駄	炭化、大きく欠損	661-0705-0015-0020	
03	下駄	10号堀No16	幅13.4/高さ9.0/厚さ2.0	差歛下駄の歯、樹種はケンボナシ		661-0705-0015-0023	368
04	下駄	10号堀No25下	長さ20.6/幅11.4/高さ8.0	連歯下駄、台表に線刻 樹種はスギ。	後歯欠損	661-0705-0015-0027	55
05	下駄	10号堀下No20	長さ(12.8)/幅(8.2)/高さ(2.3)	差歛下駄の台表	歯の一部も残る。炭化	661-0705-0015-0024	
06	下駄	10号堀No71下	長さ(13.4)/幅(8.8)/高さ(2.4)	連歯下駄、樹種はクリ	歯の大部分欠損	661-0705-0015-0048	226
07	下駄	10号堀下No72	長さ22.1/幅9.8/厚さ2.3	差歛下駄、樹種ケンボナシ	台部のみ	661-0705-0015-0059	44
08	下駄	20号堀	長さ26.0/幅11.6/高さ(2.2)	連歯下駄、樹種はケヤキ	歯は摩耗カ、ほとんど残らず	661-0705-0015-0070	220
09	下駄	24号堀上No22	長さ(19.0)/幅(6.8)/厚さ(1.6)	連歯下駄カ	後緒穴、後歯が僅かに残る	661-0705-0015-0084	227
10	下駄	25号堀下層No110	長さ20.3/幅9.5/厚さ2.2	差歛下駄、樹種ケンボナシ	台部と差し込み部のみ。 表面炭化	661-0705-0015-0049	43
11	下駄	26号堀No26カ	長さ(12.4)/幅(11.2)/高さ(2.6)	連歯下駄カ	前緒穴、前歯周辺のみ残る、台裏炭化	661-0705-0015-0106	228
12	下駄	11号井戸No3	長さ15.5/幅4.4/高さ2.5	一歯下駄カ	未製品カ、緒穴なし	661-0705-0015-0121	
13	自在鉤カ	24号堀上No16	長さ14.4/幅3.0/厚さ1.6	半裁材利用、樹種はアオキ	片面にスス付着、使用痕有り	661-0705-0015-0083	305
14	柄杓一底板	22号堀下No25	径9.8/厚さ0.6	柾目取り、穿孔2箇所		661-0705-0015-0076	
15	桶一側板	9号堀No11	長さ(15.3)/幅8.5/厚さ1.0	板目取り	外面炭化	661-0705-0015-0018	
16	桶一側板	9号堀上層	長さ(8.0)/幅(4.3)/厚さ1.1	一部炭化、板目取り	大きく欠損、自然乾燥ため歪む	661-0705-0015-0136	
17	桶一側板	9号堀上層	長さ(22.5)/幅(8.0)/厚さ1.9	大型、広く炭化	自然乾燥のため歪む、状態非常に悪い	661-0705-0015-0137	
18	桶一側板	10号堀	長さ28.0/幅5.6/厚さ1.8	板目取り、棒を通す孔あり	一部炭化	661-0705-0015-0005	401
19	桶一側板	10号堀下No56	長さ28.0/幅6.2/厚さ2.1	板目取り、棒を通す孔あり。 樹種はスギ	一部炭化	661-0705-0015-0042	364
20	桶一底板	10号堀下No38	径35.6/厚さ2.4	大型、樹種はスギ又はヒノキ科	木釘穴あり	661-0705-0015-0029	173
21	桶一側板	10号堀下No57	長さ(17.7)/幅(6.1)/厚さ1.1		一部炭化	661-0705-0015-0043	
22	桶一側板	10号堀下No60	長さ(16.8)/幅(4.0)/厚さ1.2		一部炭化	661-0705-0015-0045	
23	桶一側板	10号堀下No51	長さ(15.8)/幅6.0/厚さ0.8	樹種はヒノキ	一部炭化	661-0705-0015-0039	181
24	桶一蓋板カ	10号堀下No39	径14.0/厚さ0.5	薄い	含水率高く破片化する可能性が高い	661-0705-0015-0030	
25-01	桶一側板	10号堀下No45	長さ15.5/幅7.0/厚さ1.3		一部炭化	661-0705-0015-0033	177
25-02	桶一側板	10号堀下No23	長さ15.6/幅5.0/厚さ1.1		一部炭化	661-0705-0019-0026	174
25-03	桶一側板	10号堀下No45下	長さ15.5/幅3.5/厚さ1.4		一部炭化	661-0705-0019-0035	179
25-04	桶一側板	10号堀下No80	長さ15.6/幅4.8/厚さ1.4		一部炭化	661-0705-0019-0052	184
25-05	桶一側板	10号堀下No44	長さ16.5/幅3.4/厚さ1.1		一部炭化	661-0705-0019-0032	175
25-06	桶一側板	10号堀下No45	長さ15.5/幅4.5/厚さ1.3	樹種はイヌガヤ	一部炭化	661-0705-0019-0034	178
25-07	桶一側板	10号堀下No79	長さ15.6/幅5.2/厚さ1.3	樹種はヒノキ	一部炭化	661-0705-0019-0051	183
25-08	桶一側板	10号堀No85	長さ15.6/幅4.0/厚さ1.4		一部炭化	661-0705-0019-0056	186
25-09	桶一側板	10号堀下No81	長さ15.8/幅4.4/厚さ1.2		一部炭化	661-0705-0019-0053	172

第16表 木製品一覧表 1

図No太字は保存処理済

() は残存値

図No	遺物名	出土地点	法量(cm)	特徴	備考	遺物ID	保存処理
25-10	桶一側板	10号堀No87	長さ15.3/幅3.9/厚さ1.3			661-0705-0019-0058	188
25-11	桶一側板	10号堀No86	長さ15.6/幅4.3/厚さ1.4		わずかに炭化	661-0705-0019-0057	187
25-12	桶一側板	10号堀下No48	長さ15.8/幅4.7/厚さ1.4		一部炭化	661-0705-0019-0037	176
25-13	桶一側板	10号堀No82	長さ16.0/幅4.3/厚さ1.5			661-0705-0019-0054	185
25-14	桶一側板	10号堀下No50	長さ15.1/幅3.4/厚さ1.3			661-0705-0019-0038	180
25-15	桶一側板	10号堀下No52	長さ15.5/幅3.2/厚さ1.3			661-0705-0019-0040	182
26	曲物一底板	21号堀No3	径14.0/厚さ0.8		片面炭化	661-0705-0015-0072	
27	桶一側板	21号堀No2	長さ27.0/幅7.8/厚さ1.4	やや大型		661-0705-0015-0071	
28	桶一側板	21号堀No4	長さ12.0/幅3.8/厚さ1.0			661-0705-0015-0073	
29	桶一側板	23号堀上No11	長さ18.0/幅6.5/厚さ1.3	樹種はスギ	節が多い	661-0705-0015-0080	343
30	桶一側板	25号堀下No111	長さ(20.4)/幅4.2/厚さ0.8		含水率高く、詳細不明	661-0705-0015-0100	
31	桶一側板カ	26号堀	長さ16.2/幅4.0/厚さ1.2			661-0705-0015-0113	
32	桶一側板	26号堀No12	長さ(6.3)/幅6.4/厚さ1.2	棒を通す孔あり	上部のみ残存、自然乾燥のため状態不良	661-0705-0015-0127	
33	桶一底板	11号井戸	径18.0/厚さ2.5	断面に木釘が残る	大型、自然乾燥のため歪む	661-0705-0015-0134	
34	桶一側板	11号井戸	長さ17.3/幅3.6/厚さ1.0	板目取り	一部炭化、自然乾燥のため歪む	661-0705-0015-0135	
35	桶一側板	外堀埋土	長さ(12.2)/幅5.4/厚さ1.0		劣化進行、状態悪し	661-0705-0015-0123	
36	漆椀	7号堀下No1	口径14.0/器高(5.0)/高台径7.0	内面赤色外面黒色漆塗、施文あり	一部炭化、大きく欠損	661-0705-0015-0006	
37	漆椀	8号堀下層No30	口径11.8/器高3.2/高台径6.8	内外面黒色漆塗、胴部外面・見込み・高台裏に赤色で施文。樹種はクリ		661-0705-0015-0013	257
38	漆椀	8号堀下No10	口径不明/器高(5.0)/高台径6.4	内面赤色外面黒色漆塗	漆剥落、大きく欠損	661-0705-0015-0011	
39	漆椀	10号堀下層No13	口径14.6/器高5.8/高台径7.6	内面赤色外面黒色漆塗、胴部外面・高台裏に赤色で施文・高台裏には線刻もあり。樹種はトネリコ属	口縁部大きく欠損	661-0705-0015-0022	120
40	漆椀	10号堀下No53	口径15.4/器高(7.0)/高台径不明	内面赤色外面黒色漆塗。口縁部に黒色の縁取りあり	大きく欠損	661-0705-0015-0041	425
41	漆椀	10号堀No76	口径12.3/器高3.6/高台径6.0	内面赤色外面黒色漆塗、胴部外面・高台裏に赤色で施文	大きく欠損	661-0705-0015-0050	408
42	漆椀	10号堀No67	口径不明/器高(3.8)/高台径6.0	内面赤色外面黒色漆塗	遺存状態非常に悪し	661-0705-0015-0047	
43	漆椀	10号堀下層No22	口径不明/器高(4.8)/高台径6.2	内面赤色外面黒色漆塗、施文なし、底部に穿孔あり	口縁部大きく欠損	661-0705-0015-0025	398
44	漆椀	11号堀下層No7	口径12.0/器高(9.0)/高台径7.2	内外面黒色漆塗、胴部外面・見込みに赤色で施文	口縁部大きく欠損	661-0705-0015-0064	410
45	漆椀	16号堀下No1	口径不明/器高(7.0)/高台径6.5	内外面黒色漆塗、胴部外面・見込み・高台裏に赤色で施文	口縁部大きく欠損	661-0705-0015-0065	409
46	漆椀片	20号堀上No1	口径10.8/器高3.8/高台径5.6	内面赤色外面黒色漆塗、胴部外面と高台裏に赤色で施文	破片、含水率高く崩壊	661-0705-0015-0067	
47	漆椀	20号堀上No3	口径不明/器高(4.2)/高台径7.2	内外面赤色漆塗、高台裏のみ黒色。施文確認できず	大きく欠損、高台裏に縮んだ痕跡あり、乾燥か?	661-0705-0015-0068	
48	漆椀	21号堀No5	口径不明/器高(4.5)/高台径5.8	内面赤色外面黒色漆塗、胴部外面に僅かに赤色の施文	含水率高く大きく歪む。高台部欠損	661-0705-0015-0074	
49	漆椀	22号堀下層No23	口径不明/器高(7.7)/高台径8.2	内面赤色外面黒色漆塗、漆の剥落著しく施文は確認できず。樹種はトチノキ	一部炭化、口縁部大きく欠損	661-0705-0015-0075	355
50	漆椀	24号堀No8	口径14.6/器高(9.5)/高台径7.1	内外面黒色漆塗、胴部外面・見込みに赤色で施文。樹種はクリ	外面の剥落著しい	661-0705-0015-0082	258

第17表 木製品一覧表 2

図No.太字は保存処理済

()は残存値

図No.	遺物名	出土地点	法量(cm)	特徴	備考	遺物ID	保存処理
51	漆椀	24号堀下No29	口径不明/器高(6.0)/高台径7.8	内外面黒色漆塗、胴部外面・見込みに僅かに赤色の痕跡、高台裏に赤色で施文	口縁部大きく欠損。破片化進む	661-0705-0015-0088	
52	漆椀	24号堀下No30	口径不明/器高(6.2)/高台径7.2	内外面黒色漆塗、見込みに赤色で施文、樹種は広葉樹	口縁部大きく欠損	661-0705-0015-0089	359
53	漆椀	25号堀下No140	口径不明/器高(6.3)/高台径6.0	内外面黒色漆塗、胴部外面に施文、高台裏に赤色の痕跡	兜と同一層。含水率高く劣化進行中、破片化が進み大きく歪む。崩壊。	661-0705-0015-0101	
54	漆椀	26号堀No114	口径12.0/器高4.0/高台径6.0	内外面黒色漆塗、見込みに赤色で施文	高台劣化が進行	661-0705-0015-0133	413
55	漆椀	26号堀No110	口径13.0/器高9.0/高台径6.3	内外面黒色漆塗、外面に赤色の痕跡、見込みに赤色で施文。樹種はブナ属	外面わずかに炭化。高台裏大きく欠損	661-0705-0015-0112	259
56	漆椀片	26号堀No24	口径不明/高台径7.4/高台高3.5	内外面黒色漆塗カ	高台のみ実測、胴部は含水率高く実測できなかつた	661-0705-0015-0105	
57	漆椀片	26号堀No51	口径不明/高台径7.4/高台高(2.3)	内面赤色外面黒色漆塗カ	高台のみ実測、含水率高く胴部破片は崩壊	661-0705-0015-0110	
58	漆椀片	26号堀No26	口径不明/高台径7.0/高台高(2.7)	内面黒色漆塗、外面・高台裏黒色漆塗。高台裏に赤色で施文	高台のみ実測、含水率高く胴部破片は崩壊	661-0705-0015-0107	
59	漆鉢	一括カ	口径21.2/器高(7.3)/底径12.0	内外面赤色漆塗、底部は黒色漆塗、外面に赤で施文、大型	非常に状態良好、江戸時代カ	661-0705-0015-0124	
60	折敷一底板	10号堀	長さ20.0/幅(4.3)/厚さ0.4	柾目取り	含水率高く取り上げ困難	661-0705-0015-0061	
61	折敷一底板カ	22号堀	長さ(15.9)/幅(4.5)/厚さ0.2	柾目取り、隅切り折敷カ	自然乾燥のため歪む	661-0705-0015-0128	
62	腰刀の柄カ	10号井戸	長さ13.8/幅3.2/厚さ1.3	目釘、茎が残る。樹種はクリ近似種		661-0705-0015-0120	330
63	付札状製品	25号堀下層No73	長さ7.2/幅1.7/厚さ1.0	樹種はヤマグワ	赤外線調査でも墨書確認できず	661-0705-0015-0099	166
64	柄カ	8号堀下No.2	長さ(13.4)/幅(4.1)/厚さ(2.1)	加工痕明確	大きく欠損	661-0705-0015-0010	263
65	木錘カ	10号堀下No34	長さ3.9/径1.3/孔径0.3	全面に細かく加工あり。貫通する孔としないものあり		661-0705-0015-0028	
66	楕円形製品	20号堀下No4	長さ8.8/幅1.4/厚さ1.2	全面に面取りあり		661-0705-0015-0069	402
67	板状製品	7号堀下No27	長さ(7.4)/幅2.2/厚さ0.5	ホゾあり、柾目取り	折敷の縁カ	661-0705-0015-0008	
68	板状製品	10号堀No66	長さ(14.7)/幅(12.4)/厚さ1.1	方形の小孔4箇所あり	一部炭化、自然乾燥	661-0705-0015-0129	
69	板状製品	33号堀No44	長さ(7.4)/幅5.5/厚さ0.7	柾目取り、両面に使用痕カ	含水率高く崩壊寸前	661-0705-0015-0118	
70	材/加工材	9号堀下No15	長さ10.8/幅7.0/厚さ2.0	片面にのみ加工痕が残る		661-0705-0015-0019	
71	材/加工材	10号堀	長さ25.5/幅6.0/厚さ2.8	両面に明確な加工痕あり	旧5堀3T	661-0705-0015-0004	
72	材/加工材	10号堀	長さ(16.4)/幅4.0/厚さ1.6	片面に傾斜をつけて削る、両面に明確な加工痕あり	旧5堀3T	661-0705-0015-0132	
73	材/加工材	23号堀下No4	長さ8.7/幅1.6/厚さ0.6	中央に穿孔あり、両端周辺面取り、柾目取り		661-0705-0015-0079	
74	材/加工材	7号堀上No10	長さ(12.5)/幅4.0/高さ4.2	中央に大きな方形の切り込みあり、部材の一部カ	含水率高く崩壊	661-0705-0015-0007	
75	材/加工材	25号堀下No141	長さ(14.2)/幅4.7/厚さ2.0	両面に明確な加工痕あり	含水率高く劣化進行	661-0705-0015-0102	
76	材/加工材	26号堀No96	長さ(11.5)/幅1.9/厚さ1.0	柾目取り	先端一部炭化	661-0705-0015-0111	
77	材/加工材	33号堀No41	長さ5.3/幅1.3/厚さ0.5	半裁材を利用、片面に切り込みと細かい加工		661-0705-0015-0117	
78	材/加工材	33号堀下No6	長さ(7.7)/幅(3.3)/厚さ1.0	片面を加工、詳細は不明	含水率高く崩壊	661-0705-0015-0114	
79	材/丸木材	22号堀下No30	長さ(20.6)/径1.6	端部と全体に面取り	大きく欠損	661-0705-0015-0077	
80	材/丸木材片	10号堀下No61	長さ22.7/径6.0	両端を斧で加工カ、大きく面取りを施す	芯持ち材	661-0705-0015-0046	

第18表 木製品一覧表 3

図No太字は保存処理済

() は残存値

図No	遺物名	出土地点	法量(cm)	特徴	備考	遺物ID	保存処理No
81	材/丸木材	10号堀下No84	長さ(9.8)/径4.6	大きく面取り	芯持ち材	661-0705-0015-0055	
—	漆椀	2号堀下層	未計測	内面赤色外面黒色漆塗、浅い	芯あり	661-0705-0015-0002	
—	漆椀	33号堀下No.17	未計測	外面漆剥落、内面黒色漆塗、見込みに赤で施文	高台部のみ、含水率高く崩壊	661-0705-0015-0116	
—	漆椀片	10号堀	未計測	内面赤色外面黒色漆塗の胴部破片		661-0705-0015-0063	
—	漆椀片	10号堀下No.40	未計測	内外面黒色漆塗、内面に赤色の痕跡、施文カ	含水率高く崩壊	661-0705-0015-0031	
—	漆椀片	24号堀下No.24	未計測	内外面黒色漆塗の胴部破片	含水率高い	661-0705-0015-0086	
—	板材	19号堀	長さ(19.2)/幅(4.0)/厚さ2.7		含水率高く崩壊寸前	661-0705-0015-0066	
—	板材片	9号堀下No.8	長さ(12.5)/幅4.2/厚さ2.0		含水率高く崩壊	661-0705-0015-0017	
—	材/加工材	26号堀No.32	長さ(17.5)/幅2.1/厚さ0.9		破片化	661-0705-0015-0109	
—	材/加工材	22号堀上層	長さ(14.0)/幅4.5/厚さ2.0	片面抉りあり	一部炭化	661-0705-0015-0078	
—	材/加工材	25号堀上	長さ(12.5)/幅5.5/厚さ2.0	切り込みあり	含水率高く崩壊寸前	661-0705-0015-0095	
—	材/丸木材	25号堀No.45	長さ(27.5)/径6.0	ナタ痕あり、樹皮付き	柵材カ、含水率高く劣化	661-0705-0015-0094	

第19表 木製品一覧表 4

(2) 自然科学分析—木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 試料

試料はKB15区出土の木製品21点である。試料の詳細は樹種同定結果と共に表20に表記した。

2 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切断を作成し、ガム・クロラール（飽水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを制作する。作成したプレパラートは、生物顕微鏡で観察、同定する。

3 結果

樹種同定の結果を表20に示す。KB15区の木製品は針葉樹3種類（スギ・ヒノキ・イヌガヤ）、広葉樹8種類（クリ・クリ近似種・ケンポナシ・ケヤキ・トチノキ・アオキ・ヤマグワ・ブナ属）に分類された。主な解剖学的特徴を以下に示す。

クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属
環孔材で、孔圈部は1～2列、孔圈外で急激～やや穏やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

試料は保存状態が悪い。環孔材で、孔圈部は2列以上。小道管は、道管壁が厚く、単独又は2個が放射方向に複合する。道管は單穿孔を有する。壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～20細胞高。

ケンポナシ属 (*Hovenia*) クロウメモドキ科

環孔材で、孔圈部は2～3列、孔圈外で急激～やや急激に管径を減じたのち、単独または2～3個が放射方向に複合して配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。

スギ (*Cryptomeria japonica (L.f.) D.Don*)

スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹肥細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅はやや広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia (Knight) K. Koch f.*)

イヌガヤ科イヌガヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。樹脂細胞が早材部及び晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され、分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。

ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc) Endlicher*)

ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。晩材部部分に樹脂細胞が認められるが、顕著ではない。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は柔らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

ケヤキ (*Zelkova serrata (Thunb.) Makino*)

ニレ科ケヤキ属

試料は木口面と柾目面の切片が作製できたが、板目面は作製できなかった。環孔材で孔圈部はほぼ1列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型。高さや列数は不明であるが、木口面・柾目面で観察する限り、8細胞幅以上で30細胞高を越えるものが認められる。放射組織の上下縁辺部には結晶細胞が認められる。

トチノキ (*Aesculus turbinata Blume*)

トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列する。

アオキ (*Aucuba japonica Thunb*)

ミズキ科アオキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、ほぼ単独で散在する。道管の分布密度は低い。道管は階層穿孔を有する。放射組織は大型の異性、1～5細胞幅、100細胞高以上となる。放射組織には鞘細胞が認められる。

ヤマグワ (*Morus australis Poiret*) クワ科クワ属

環孔材で孔圈部は1～2列で孔圈外への移行は緩やか、晚材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～40細胞高で、しばしば結晶を含む。



漆椀 (木-50／試料17)

ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

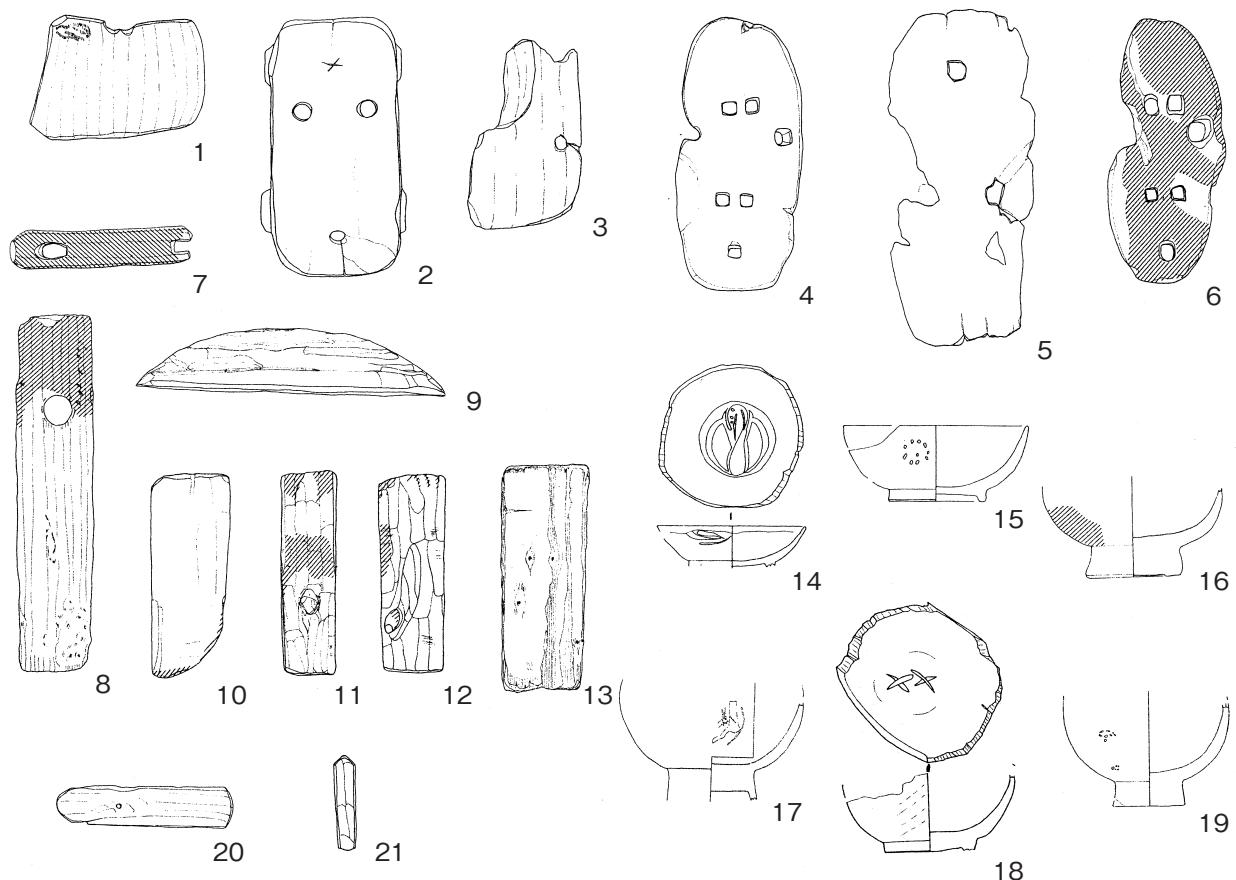
試料は保存状態が悪い。散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在する。道管は单穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

クリ近似種 (*cf. Castanea crenata Sieb. et Zucc*) ブナ科

環孔材で孔圈部は2～4列。孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。



漆椀 (木-52／試料18)

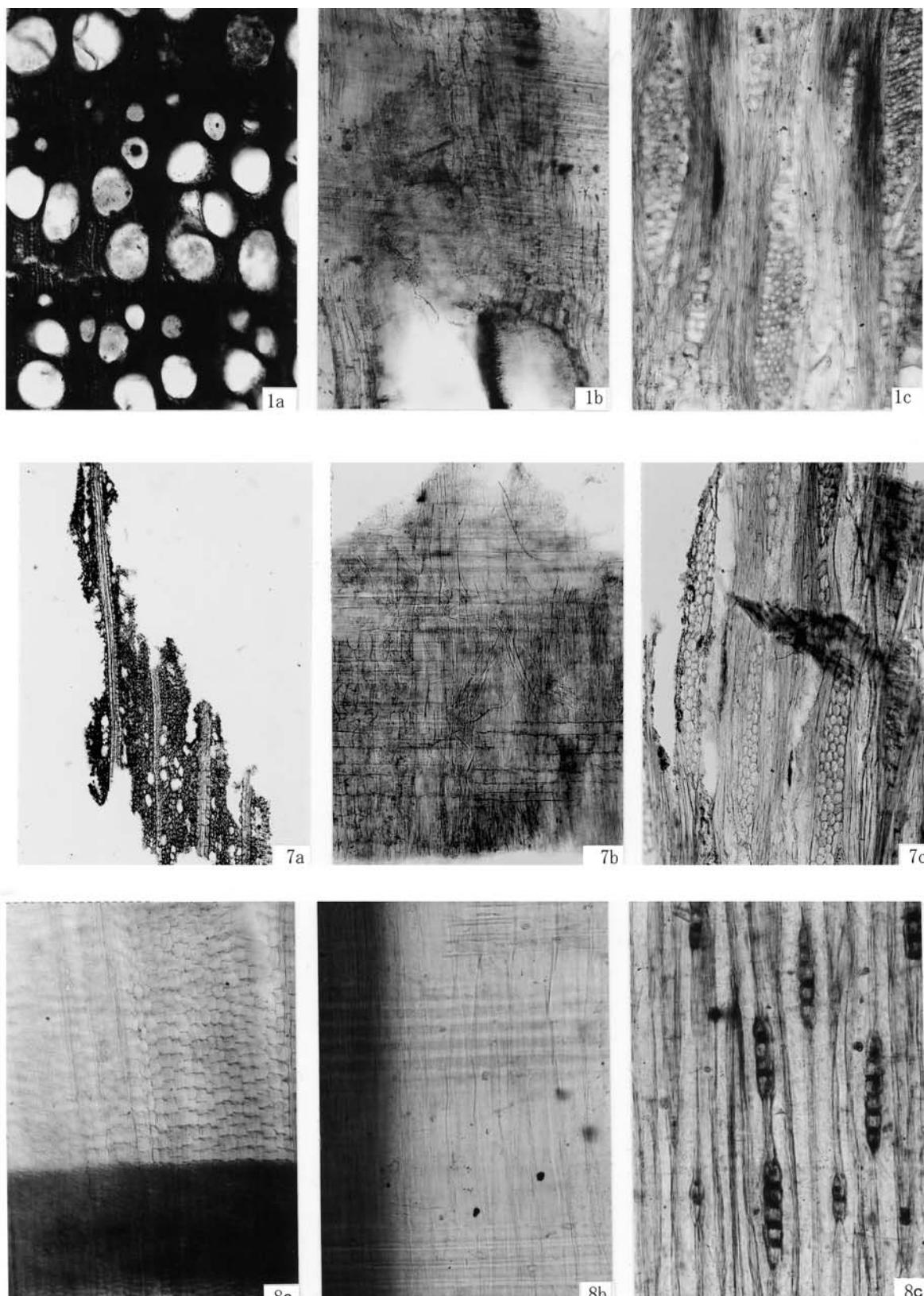


第61図 木製品樹種同定試料

試料No	遺物名	樹種	図No	遺物ID
1	下駄-歯	ケンポナシ	03	661-0705-0015-0023
2	下駄	スギ	04	661-0705-0015-0027
3	下駄	クリ	06	661-0705-0015-0048
4	下駄	ケンポナシ	07	661-0705-0015-0059
5	下駄	ケヤキ	08	661-0705-0015-0070
6	下駄	ケンポナシ	10	661-0705-0015-0049
7	自在鉤力	アオキ	13	661-0705-0015-0083
8	桶-側板	スギ	19	661-0705-0015-0042
9	桶-底板	スギ又はヒノキ科	20	661-0705-0015-0029
10	桶-側板	ヒノキ	23	661-0705-0015-0039
11	桶-側板	イヌガヤ	25-6	661-0705-0015-0034
12	桶-側板	ヒノキ	25-7	661-0705-0015-0051
13	桶-側板	スギ	29	661-0705-0015-0080
14	漆椀	クリ	37	661-0705-0015-0013
15	漆椀	トネリコ属	39	661-0705-0015-0022
16	漆椀	トチノキ	49	661-0705-0015-0075
17	漆椀	クリ	50	661-0705-0015-0082
18	漆椀	広葉樹	52	661-0705-0015-0089
19	漆椀	ブナ属	55	661-0705-0015-0112
20	腰刀の柄カ	クリ近似種	62	661-0705-0015-0120
21	付札状製品	ヤマグワ	63	661-0705-0015-0099

太字は顕微鏡写真のあるもの

第20表 木製品樹種同定結果

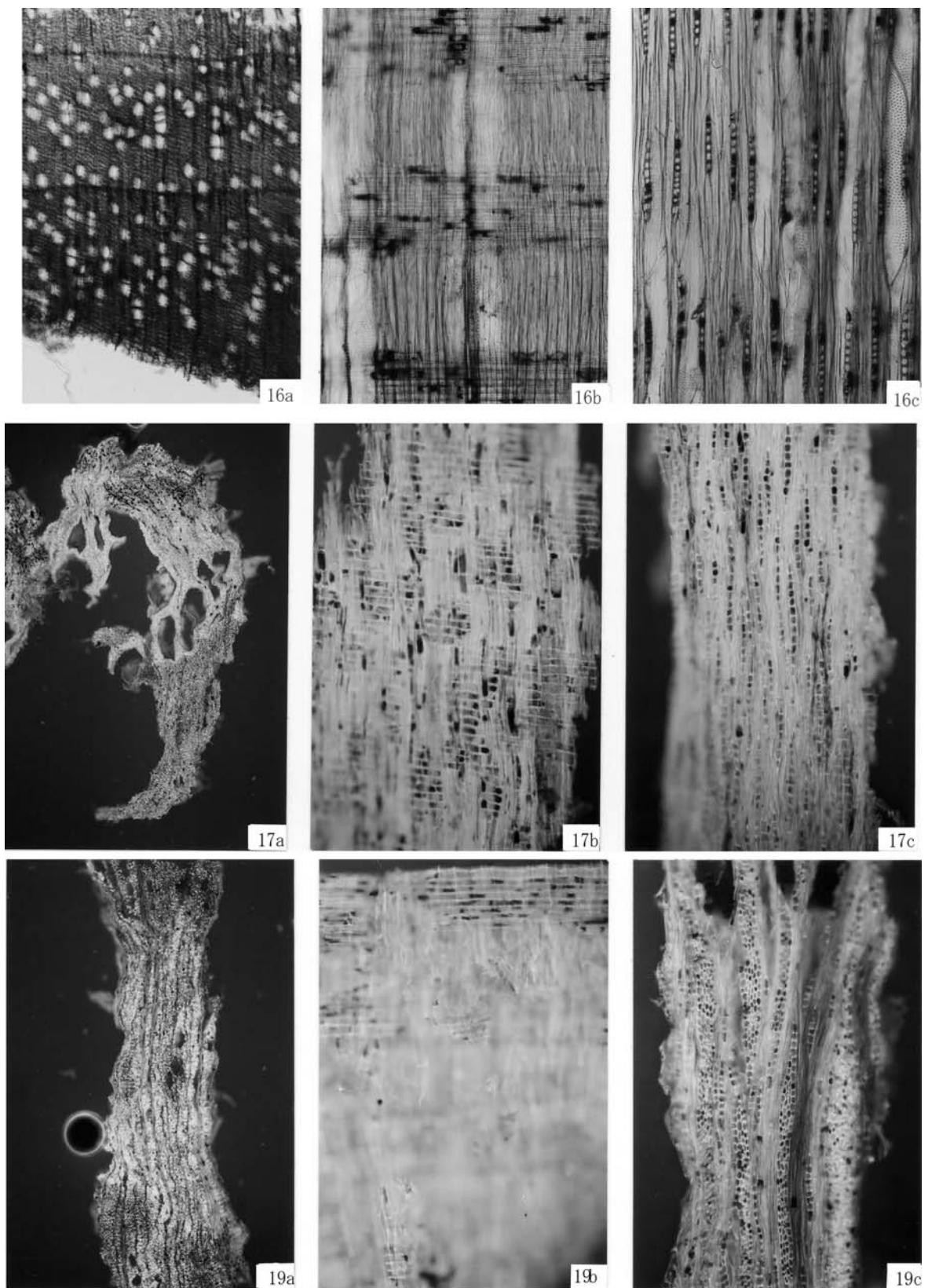


試料 1: ケンポナシ
試料 7: アオキ
試料 8: スギ

a : 木口, b : 柄目, c : 板目

— 200 μ m:a
— 200 μ m:b, c

第62図 木製品光学顕微鏡写真 1



試料 16: トチノキ

試料 17: クリ

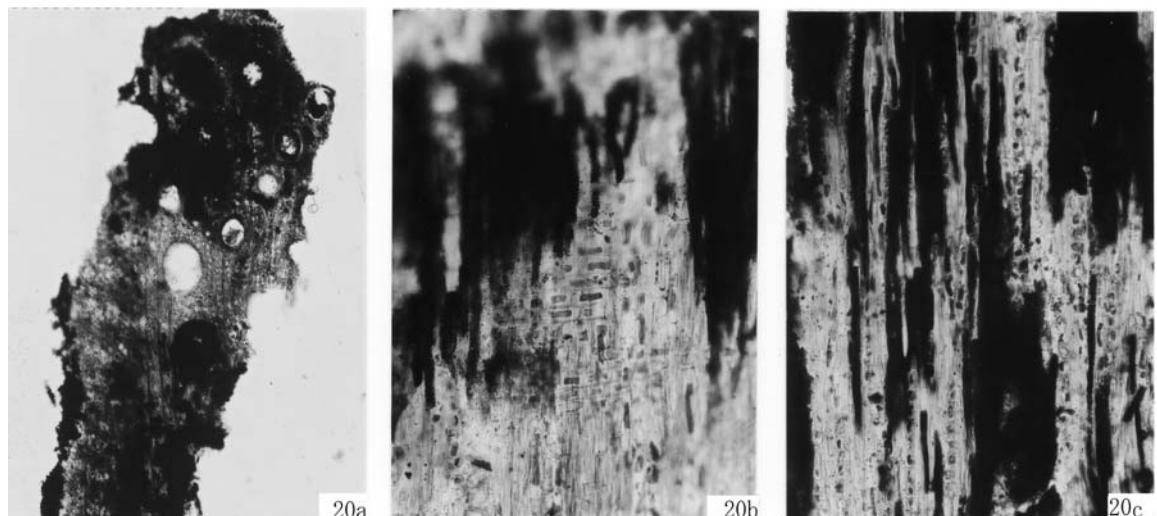
試料 19: ブナ属

a: 木口, b: 柱目, c: 板目

— 200 μ m : a

— 200 μ m : b, c

第63図 木製品光学顕微鏡写真 2



試料 20 : クリ近似種

20a

20b

20c

■ 200 μ m:a

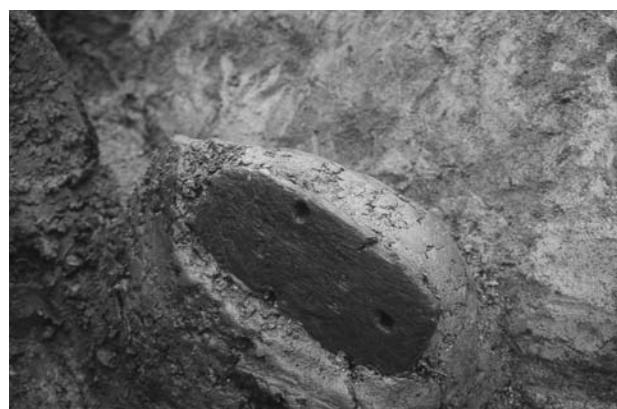
■ 200 μ m:b, c

a : 木口, b : 柱目, c : 板目

第64図 木製品光学顕微鏡写真 3



下駄 (木-4 / 試料 2)



下駄 (木-7 / 試料 4)



下駄 (木-10 / 試料 6)



漆碗 (木-37 / 試料 14)

第3節 繊維製品

繊維製品は、布・縄・縄を編んだ袋がある。

現況については、1・2は図版31に写真を、3は第65図にその範囲を掲載した。

1は、平織の布片。3×1cmの長方形で厚さ0.3mm。ほかに細片がある。織りはやや粗く1cm当たり20本の経糸・15本の緯糸が認められ、緯糸がやや太い。色調は黒色で炭化しているか。

9 堀下層出土。

2は、縄で藁か。ほぼ纖維が解かれ断片化している。直径3mm。色調は黒色で炭化している。10堀最下層出土。

3は、袋である。25堀の底面より出土し、銭貨70枚を収納していた。出土時には良好な遺存状態であったが、出土後乾燥した状態で10年経過してしまったのち保存処理を実施したため、現状は不良で紐

が破片化し散乱している。出土時の写真によると一部銭貨が露出しているが上面、下面、側面が遺存する。堀底に沿って南北方向に長く出土したが、南側は太い縄が認められ袋の口周辺と思われる。

図では左側が幅狭で、袋の口があったものと思われる。

袋はやや細い太さ1.5mmの2本の縄により編まれており、厚さは2mmを計る。重さに十分に耐えうるものである。出土範囲は長さ39.5cm幅13cm高さ8cmである。

銭貨は紐によりまとめられ、縁の状態で、長短4列で、1縁が上下するが、下に2列、上に1列ある。

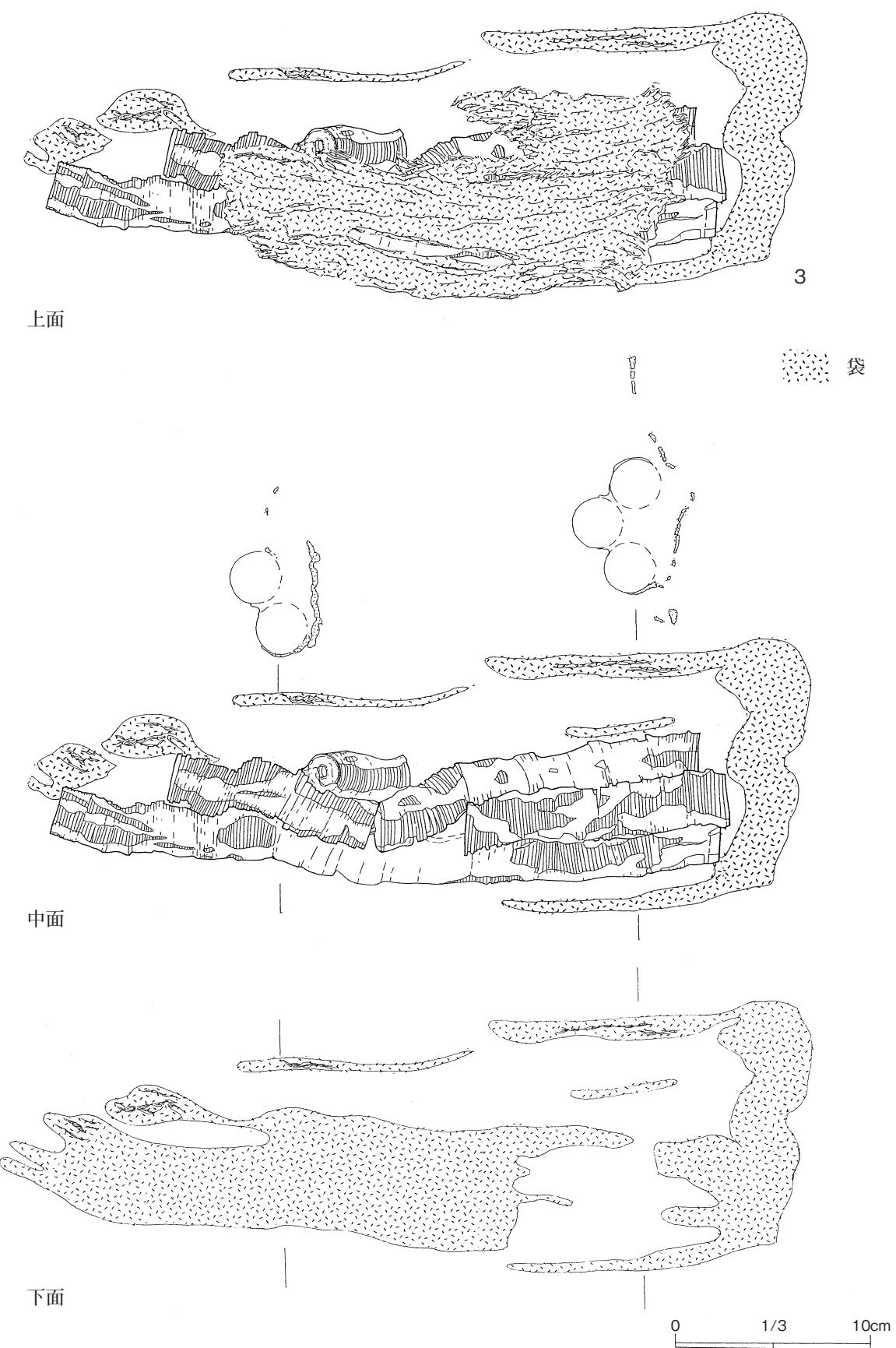
実測図及び計測値は、袋の保存処理後の現況及び銭貨の復元レプリカによるものである。

銭貨を収納した袋が遺存する例は他に聞かず、希少な例である。

ID661-0705-0015-0126。保存処理No.139



袋入り銭貨出土



第65図 繊維製品（袋入り銭貨）

第4節 金属製品

金属製品は、鉄製品と非鉄金属製品がある。それぞれ用途別（凡例4参照）に記述するが、兜・錢貨は別に扱う。

（1）鉄製品

○生活に関するもの

「調理」の鍋（1）は、騎西城唯一の鉄製鍋である。遺存状態は不良で、出土時は1/2遺存で形を保っていたが取り上げ時に細分化し、保存処理後6点となっている。復元した口径は40cm高さは20cmである。厚さは鋳で不明瞭だが1mm程度である。口唇部は肥厚し、口縁部は外に屈曲する。胴部はやや開き、底部は中央がやや尖るものと思われる。内耳は径0.9cmの丸棒状で外傾する口縁内部に設けられている。2か所遺存しており本来は3～4箇所設けられていたと思われる。25堀出土。参考までに42次で出土している鍋の鋳型（未報告）内寸は約口径39cm高さ22cmである。

「灯り」の火打金（2）は体部は長方形で中央でくの字に屈曲する。頂部は半円形と思われ穿孔は確認できない。2堀出土。火打金状製品（3）は長さ6.1cm幅2.8cmと小さく、厚さは1.1cmと厚い。用途不明。土橋出土。

「住」の釘（4～14）のうち、4～13は頭部及び脚部断面はいずれも発錆により不明瞭であるが、頭部が屈曲しているものは、5・6・7・9・10・13で、7・11は土を抱き込んだせいか大きい。断面は4～10、12は矩形で、他も同様と思われる。長さは、6・8・12・13は8cm、9・11は6cm程度と思われる。14は表面に丸頭状突起、裏面に矩形の釘断面2か所、木質が見られる。発錆により木質部を抱き込んだ橋桁材の一部か。4～12は土橋周辺出土。土橋に使用か。13は包含層出土。14は土橋下層出土。

「喫茶」の湯釜（15）は、口径14cm最大径23.4cm高さ19.6cm。厚さ2～3mm。口縁「口造り」が直立する「甌口」で、口唇部上端は僅かに膨らむ。体部は丸く膨らむが、上部で強く張り「肩」部を形成する。体部「胴」に文様を施さない。肩部には対向して鑲

付が設けられる。形態は「つまみ撮（遠山）」である。右の「鑲付」にのみ「鑲」が残る。鑲は断面矩形で円形を呈し、表面には敲打による成形痕が認められる。肩部周辺に細かい条線が、胴部中央には稜「毛切り」が巡る。底部中央には「湯口」が遺り、いずれも鋳造時のものである。また、底面には2か所穴を埋めた様な跡が確認できる。鋳掛けによるものか。10号堀出土。「甌口丸釜」（註1）とする。

蓋（16）は中央よりややずれて割れ、湯釜内の底辺部で鋳着していた。15の湯釜の蓋としているが、径17cmと湯釜の口径14cmより大きい。側面形は平坦な「一文字」で、上面中央には伝世品に多い摘みではなく、半円形で扁平な鈎を設け、針金状の鑲を一周半交差させて通す。下面には高さ5mmの「掛け子」を鋳出する。肩部に鋳が遺る。10号堀出土

○信仰に関するもの

「弔い」の香炉形製品（17）は底部破片で、底径は7cm程度、厚さは底部体部とも4mmを計る。脚部は側面三角、上面橍円形である。鋳造のためか脆弱で一部厚さ1mmに剥落する。8号堀出土。

○いくさに関するもの

「刀類」の小柄（18）と思われる。刃部先端、茎部端部を欠損し、やや屈曲する。刃部棟有り。2T出土。刀子（19～21）としたが、19は茎部で、端部は丸く目釘穴を穿つ。締め金具があり、鎌か。一括出土。20・21は、刀身部で刃部・茎の一部を欠損する。20は棟区、21は刃区が認められる。いずれも一括出土。

「火縄銃」の弾丸（22）は鉄製。径2.4cm、重さ45.7g（保存処理済）。発錆顯著。一括出土。

「馬具」の轡（23）は、口にくわえる「噛み」、両頬に装着する本体、手綱を結ぶ「引手」、噛みと引手を繋ぐ「から搦みの環」の4つの部位で構成される。噛みは両端に環を付け中央はフックで繋がる。本体は棒を素材とし、下部に「鉄の把手状」の環を作り、中位には円形に加工した板を嵌める。板は無文である。上部に「立聞の輪」を付け上方の馬の耳に結ぶ緒を導く。右の本体の下部は下方にずれ欠損する。引手は右は外れ、左は上部を欠損する。断面は方形・

長方形である。法量は噛みの長さが20.6cm、本体の高さは10.8cmである。25堀出土。

「ほか」の薙鎌ないがま（24・25）としたが、大型の鎌で戦闘用のものといわれ、3m程の柄を付けたという。24は木製の柄が遺り、目釘がある。補強のため幅3～5mmの樹皮を幅4.5cmにわたり巻いている。柄は長さ19.2cmで切断しており、腐食が顕著で断面が変形する。径3.5cmの口金から、柄の径も同寸であったと思われる。刃渡り32.4cm。25は柄は遺らず、刃部は欠損が顕著である。茎には目釘穴は無く、先端が鍵形になる。口金が遺り径3.3cmの柄が取り付けられていたか。刃渡り30.9cmいずれも25堀出土。

○不明

山形板製品（26）としたが、火打金の形状を大型にしたもの。幅3.5cmの頂部は平坦でやや窪む。両下端を欠損する。厚さ5mm。土橋下出土。十字状製品（27）は端部平坦で断面矩形、長さ3cmの脚が4本ある。土橋A区出土。環状製品（28）は、径3.5×2.7cmの環の上部にふくらみがある。断面矩形幅5mm。土橋A区出土。

（2）非鉄金属

○生活に関するもの

「嗜好・遊び」では、煙管があり、雁首（29～32）と吸口（33～36）がある。雁首の29・31・32は首が長く、29・31は接続部がやや細い。30は首が短く段を経て円筒部を持つ。30は大型の火皿、32は端部を屈曲させて火皿とする。32の小口付近には楕円形の凹みが多数見られる。吸口の33は小口円筒部から吸口部近くまで徐々に絞られる。34・35は段を経て円筒部を有する。36はラッパ状である。33には羅字の木質が残る。29は26堀出土。他は外堀・一括出土。

○いくさに関するもの

「刀類」の笄（37）は、上端の耳搔きと下部を欠損する。中程で屈曲する。枠線が刻まれその上部双葉状文、枠内は遺存状況が悪く不明瞭だが、下部に魚々子文様が確認できる。一括出土。

「火縄銃」の弾丸（38・39）は、いずれも鉛製で、38は下部が平坦に潰れ、39はほぼ正球である。38は26堀、39は33堀出土。

○ほか

飾り金具（40）は、扁平で、弧状を呈する。弧状の山が4つある。右端欠損。一括出土。

（3）銭貨

総数798点（844枚）確認されている（41～838）。

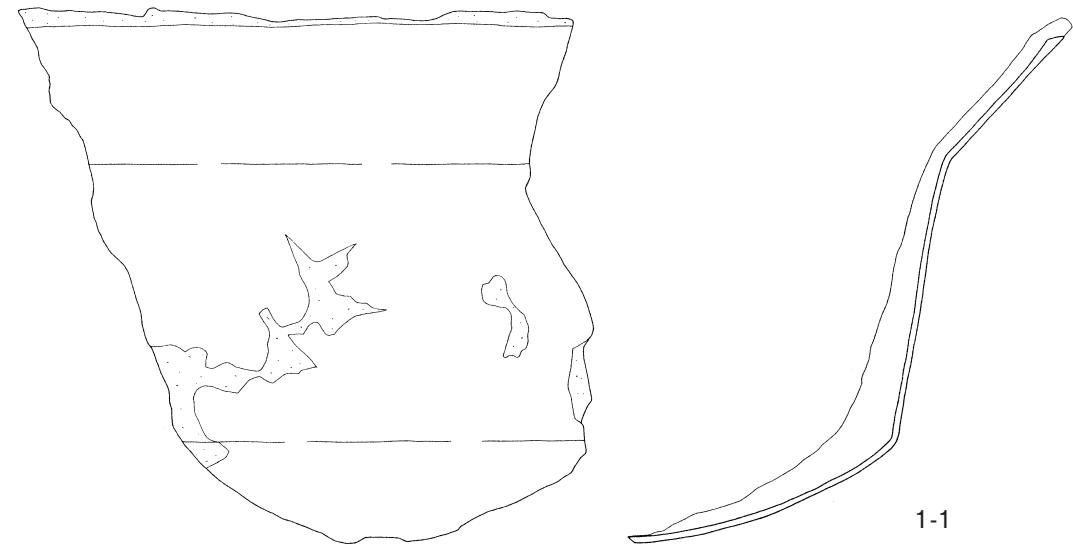
うち近世の寛永通宝が2点、近代以降の一錢・十錢が各1点。他は中世以前の渡来銭で、不明55点である。寛永通宝はⅡ層・一括で出土している。不明銭のうち、44は16枚、45は8枚、46は5枚、100は21枚熔着する。44～46は9堀、100はⅡ層出土。

なかでも障子堀25堀の底から袋に収納され出土した708枚（131～838）は、縉の状態で錆着していた。区別して整理しなかったため縉毎の種別・枚数は不明。銭種は45種で、初鑄年順に掲載したが、再確認した際に錯誤訂正したもの、不明瞭なものがある。中国銭が多数を占める中、朝鮮銭の朝鮮通宝（初鑄1423年）、安南銭の延寧通宝（同1454年）・景統通宝（同1498年）は希少であり、また銭貨使用年代推定に援用できる。

中国銭は、50枚前後の多いものでは、洪武通宝67枚、皇宋通宝54枚、開元通宝51枚、熙寧元宝48枚、永樂通宝47枚である（第97図）。

背面に鋳出された文様に、上月・下月・洛・潭・逆洪カ・潤カ・左甲文カ（開元通宝）、黎（天福鎮宝）・元・二（紹熙元宝）、七・十・十三（嘉定通宝）、三（紹定通宝）、二（景定元宝）、二・七（咸淳元宝）、一錢・浙・下月カ・左月・福（洪武通宝）、左月・右月（永樂通宝）がある。

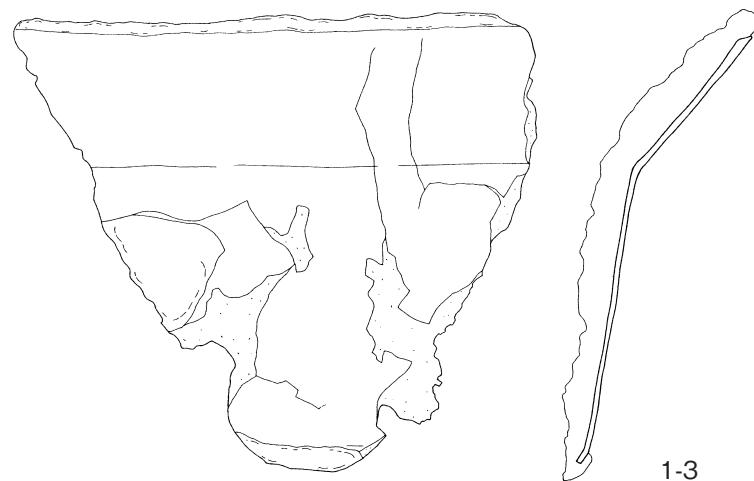
註1 2007『天明釜』佐野市郷土博物館



1-1



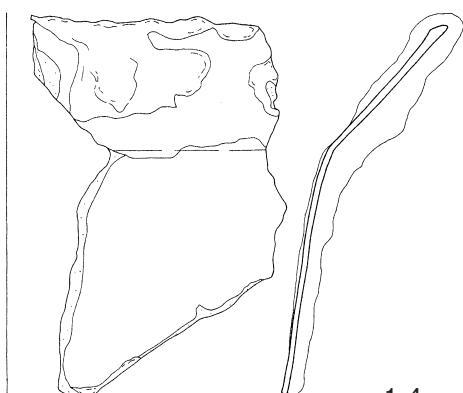
1-2



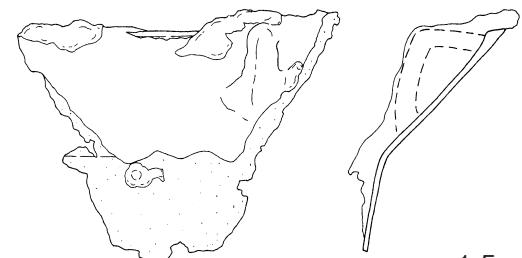
1-3

0 1/3 10cm

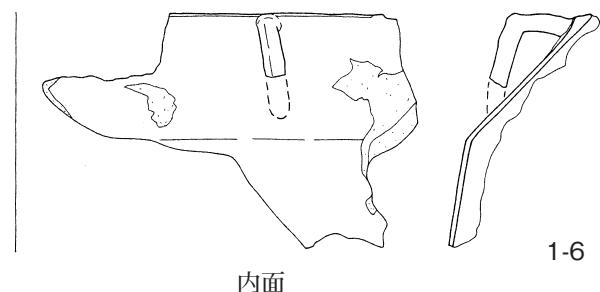
第66図 金属製品類1（鉄1）



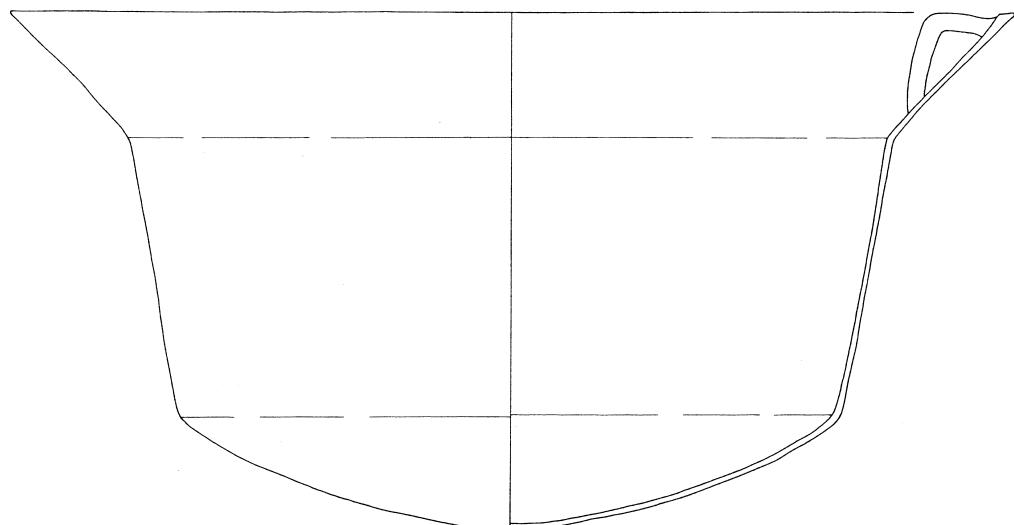
内面



内面

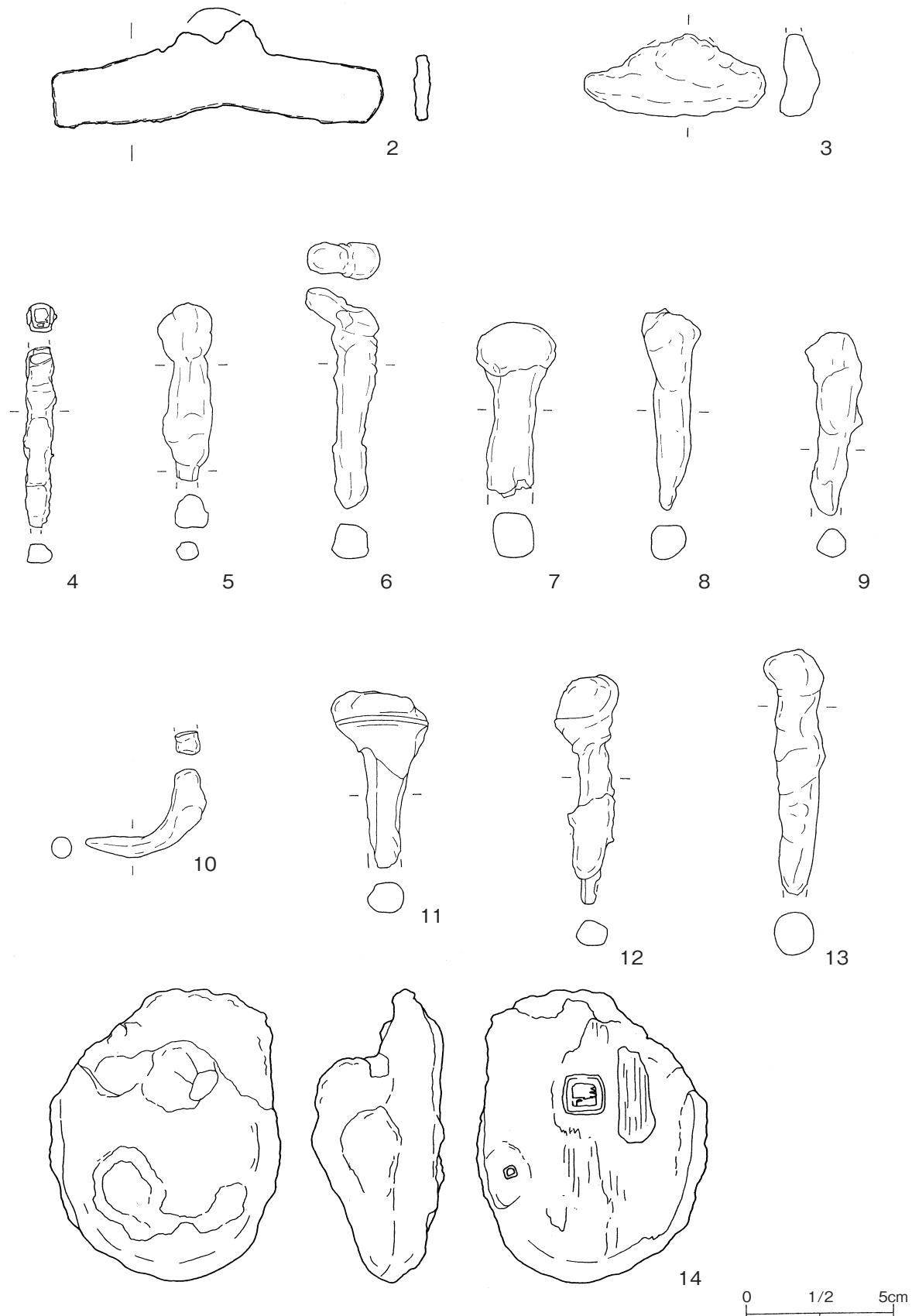


内面

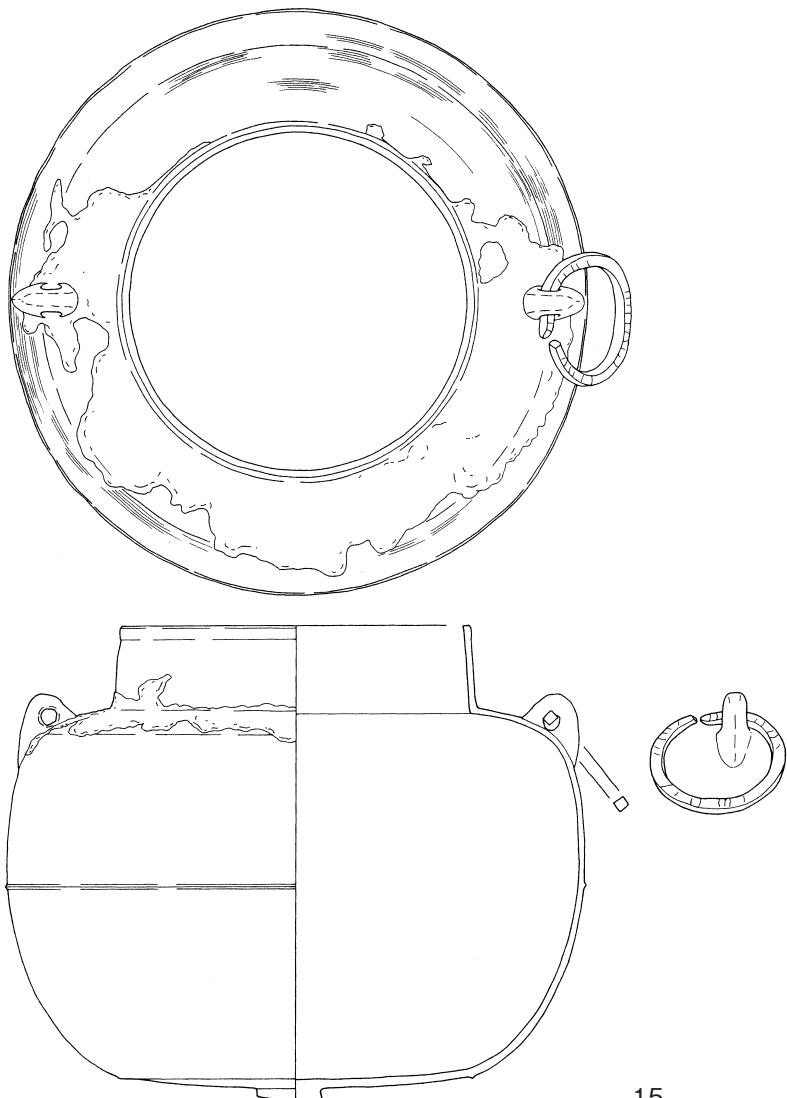


0 1/3 10cm

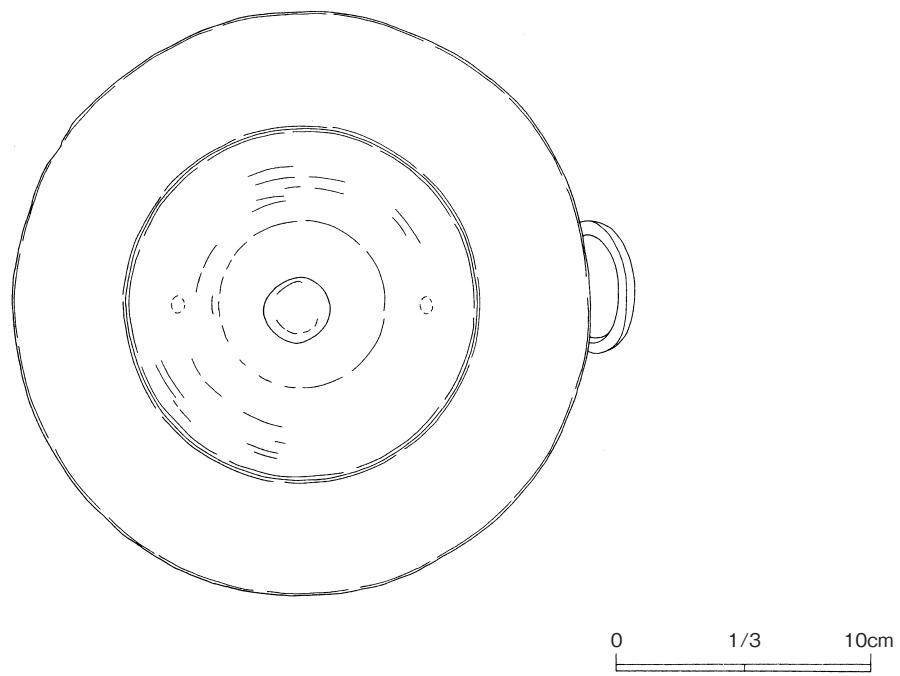
第67図 金属製品類2（鉄2）



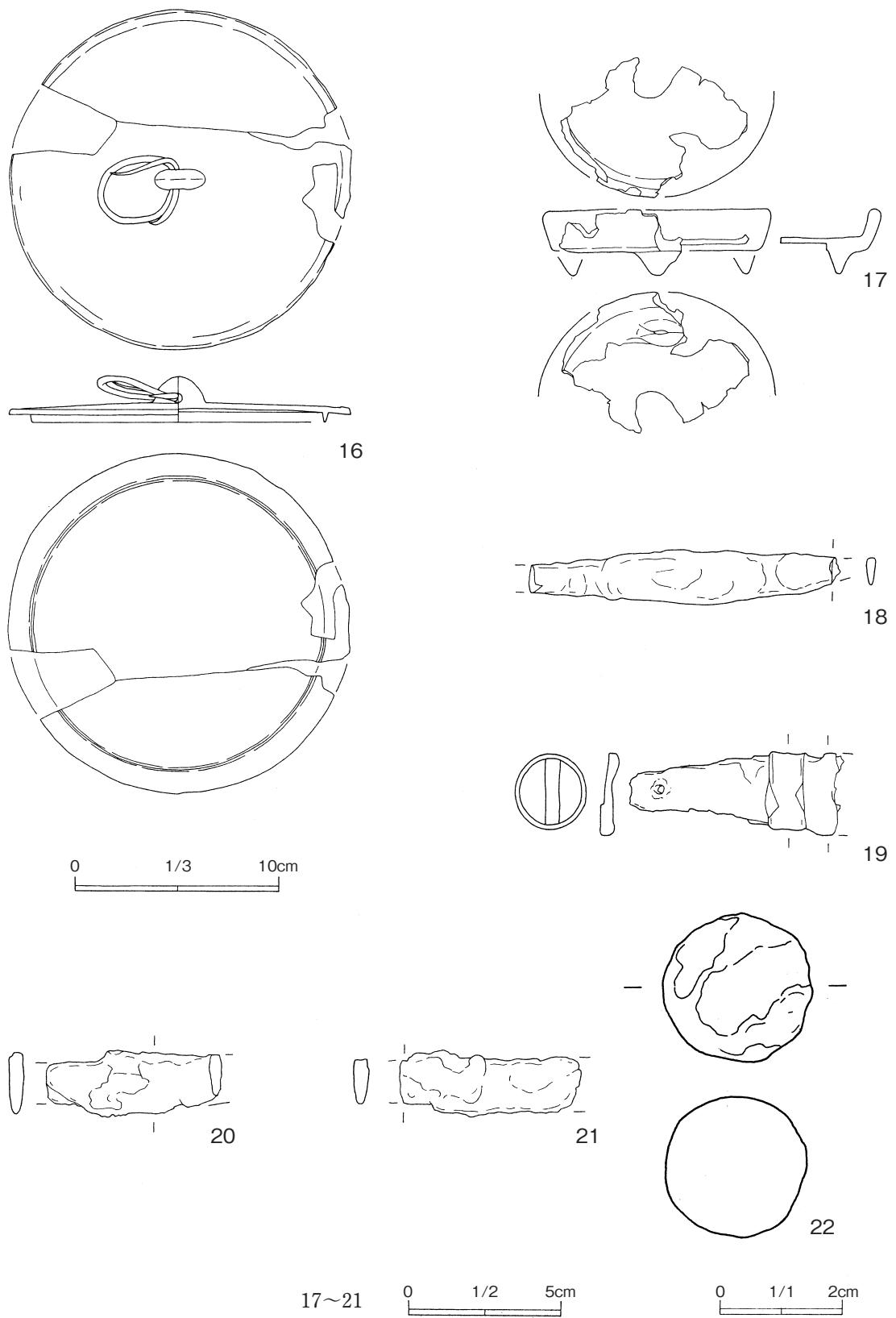
第68図 金属製品類3（鉄3）



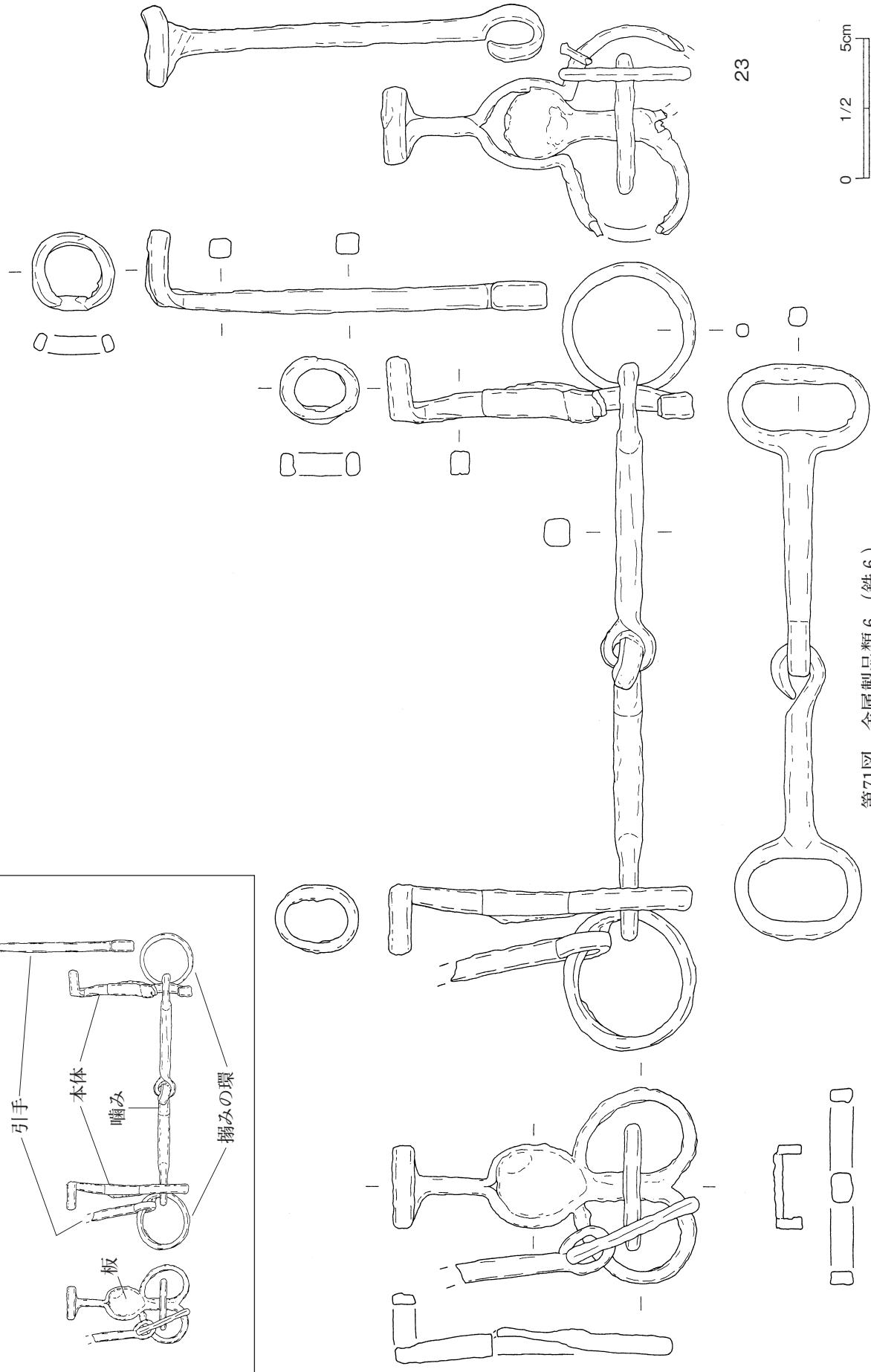
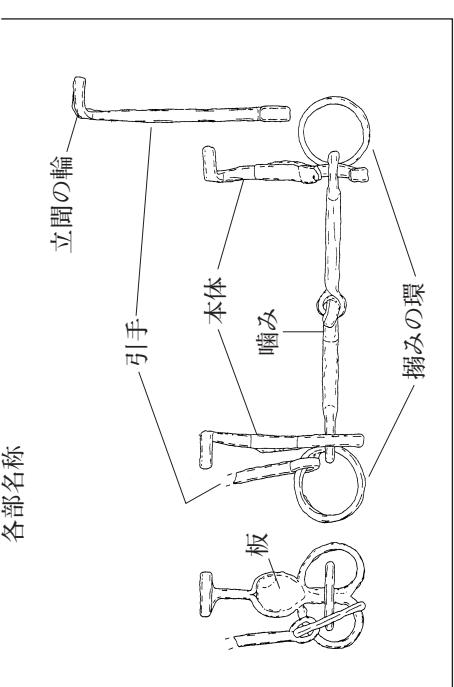
15

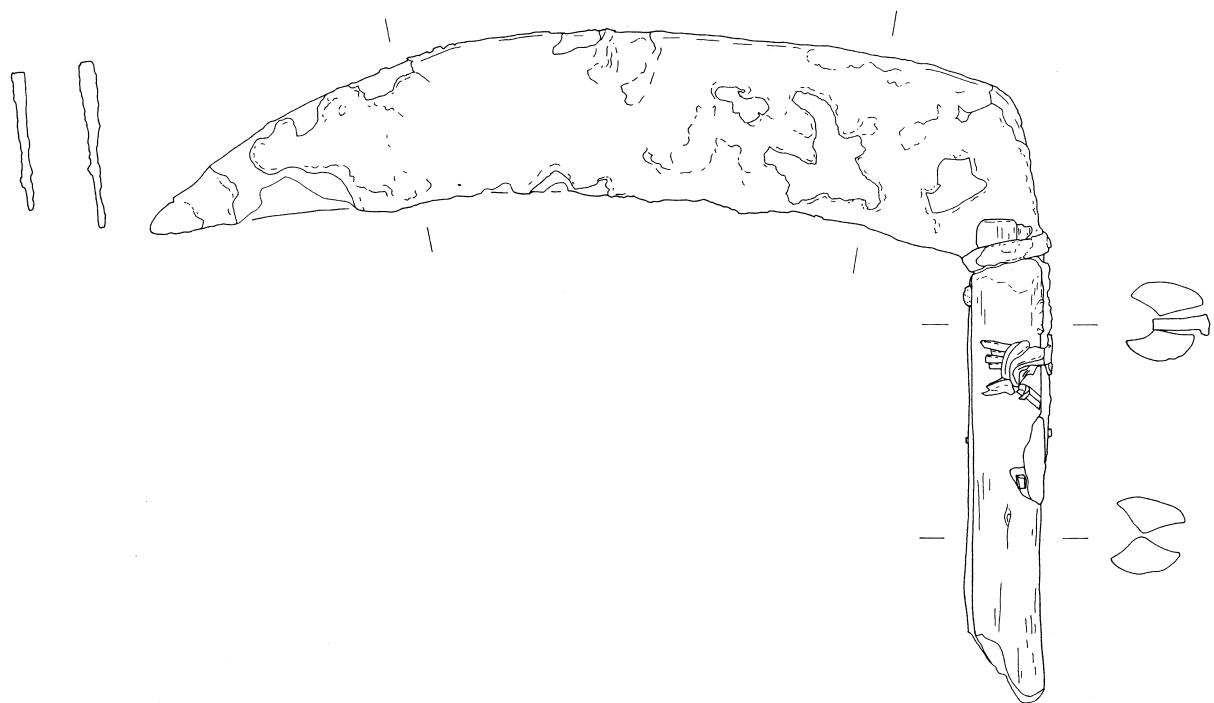


第69図 金属製品類 4 (鉄 4)



第70図 金属製品類5（鉄5）



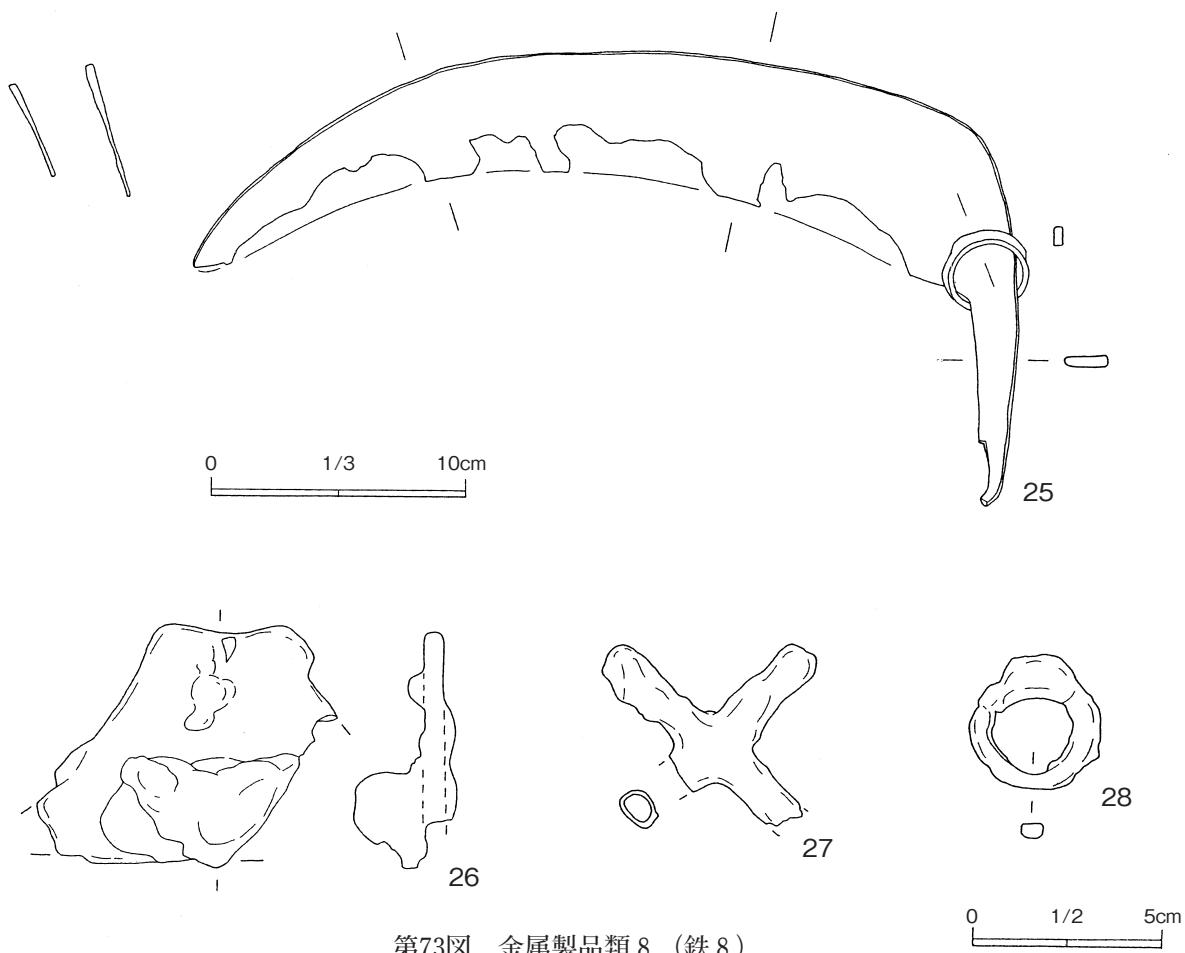


24



0 1/3 10cm

第72図 金属製品類7（鉄7）

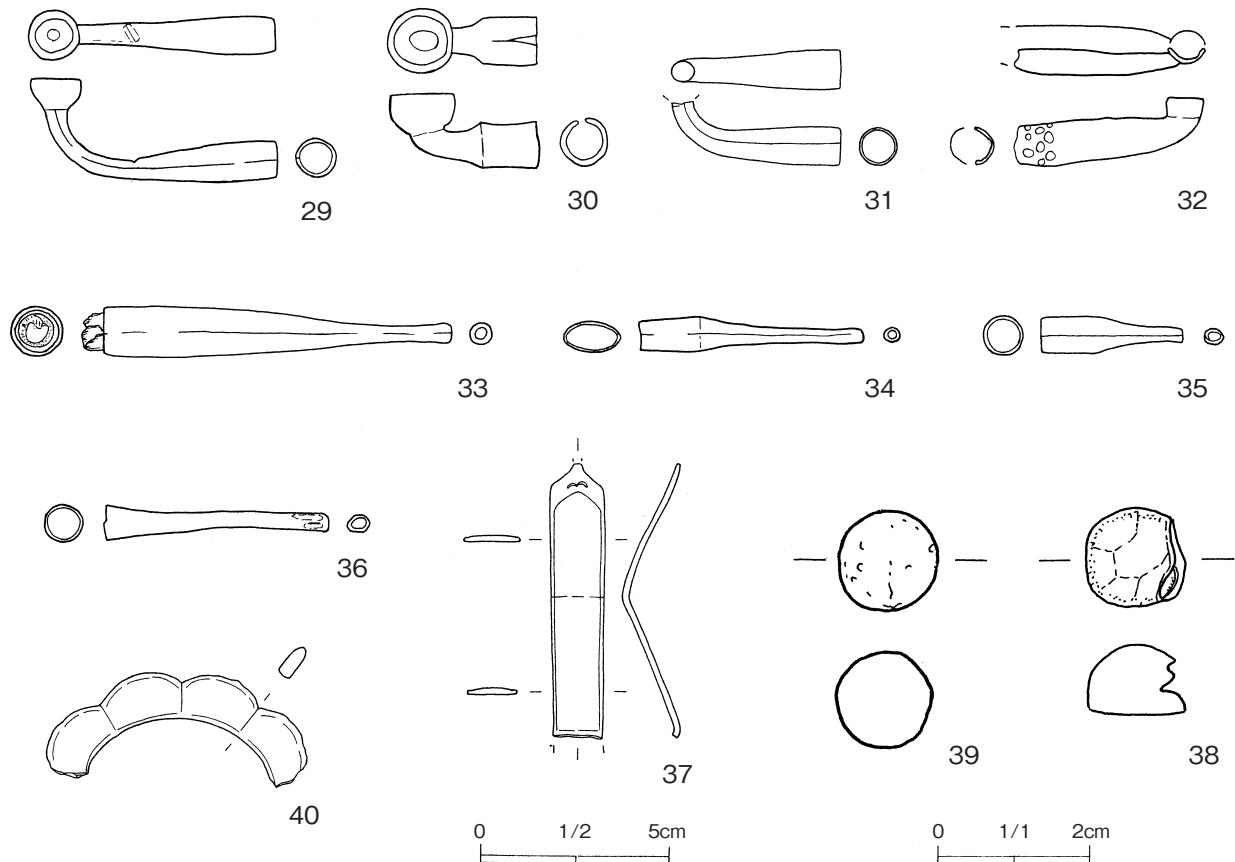


第73図 金属製品類8 (鉄8)

*は不確定な推定復元値、()は残存値、法量の単位はcm

図No	遺物名	材質	出土地点	長さ	幅	厚さ	遺物ID1	遺物ID2(662-0705)	備考	保存処理No
1	鉄鍋	鉄	25堀 No.59中位層	口径*40	高さ*20.4	0.1		0015-0017		25
2	火打金	鉄	2 堀最下層	11.2	(3.0)	0.5	町金036	0015-0014		73
3	火打金状製品	鉄	土橋	6.1	(2.8)	1.1		0015-0013		
4	釘(角)	鉄	土橋下 No.64	(6.1)	1.0	-		0015-0001		
5	釘	鉄	土橋下 No.69	(6.0)	1.2	-		0015-0002		
6	釘	鉄	土橋下 No.74	7.5	2.4	1.2		0015-0003		
7	釘(角)	鉄	土橋下 No.119	(5.9)	2.7	-		0015-0004		
8	釘	鉄	土橋下 No.138	(6.2)	1.8	-		0015-0005		
9	釘(角)	鉄	土橋下 No.141	6.9	2.0	-		0015-0006		
10	釘	鉄	土橋A No.25	3.0	4.2	0.7		0015-0008		
11	釘(角)	鉄	土橋B No.28	(6.1)	3.3	-		0015-0011		
12	釘(角)	鉄	土橋B No.55	7.7	2.0	-		0015-0012		
13	釘	鉄	北Ⅲ層	(8.4)	2.0	-		0015-0026		
14	釘など	鉄	土橋下	10.0	7.9	4.5		0015-0044		
15	湯釜	鉄	10堀 No.70	口径14.0	最大径23.4	高さ19.6	町金009	0015-0015		122
16	湯釜蓋	鉄	10堀 No.70	17.0	-	高さ2.2	町金009	0015-0015		122
17	香炉形製品	鉄	8堀 No.14下層	口径*7.5	-	0.4		0015-0042		312
18	小柄	鉄	2T	(10.2)	1.7	0.3		0015-0025		
19	鎌カ	鉄	一括	(6.8)	2.5	0.4		0015-0029		
20	刀子	鉄	一括	(5.7)	2.2	0.4		0015-0031		
21	刀子	鉄	一括	(5.9)	2.0	0.4		0015-0040		
22	弾丸	鉄	一括	2.4	-	-		0015-0033	45.7g	379
23	轡	鉄	25堀 No.17下層	29.6	12.0	-	町金037	0015-0016		54
24	鎌	鉄	25堀 No.77下層	36.0	(27.2)	0.4	町金050	0015-0018		22
25	鎌	鉄	25堀 No.146下層	32.4	19.2	0.4	町金043	0015-0019		23
26	山形板製品	鉄	土橋下 No.167	(8.0)	6.4	2.6		0015-0007		
27	十字状製品	鉄	土橋A	5.5	(4.8)	0.8		0015-0009		
28	環状製品	鉄	土橋A	3.5×2.7	-	0.5		0015-0010		

第21表 金属製品一覧表1 (鉄製品)

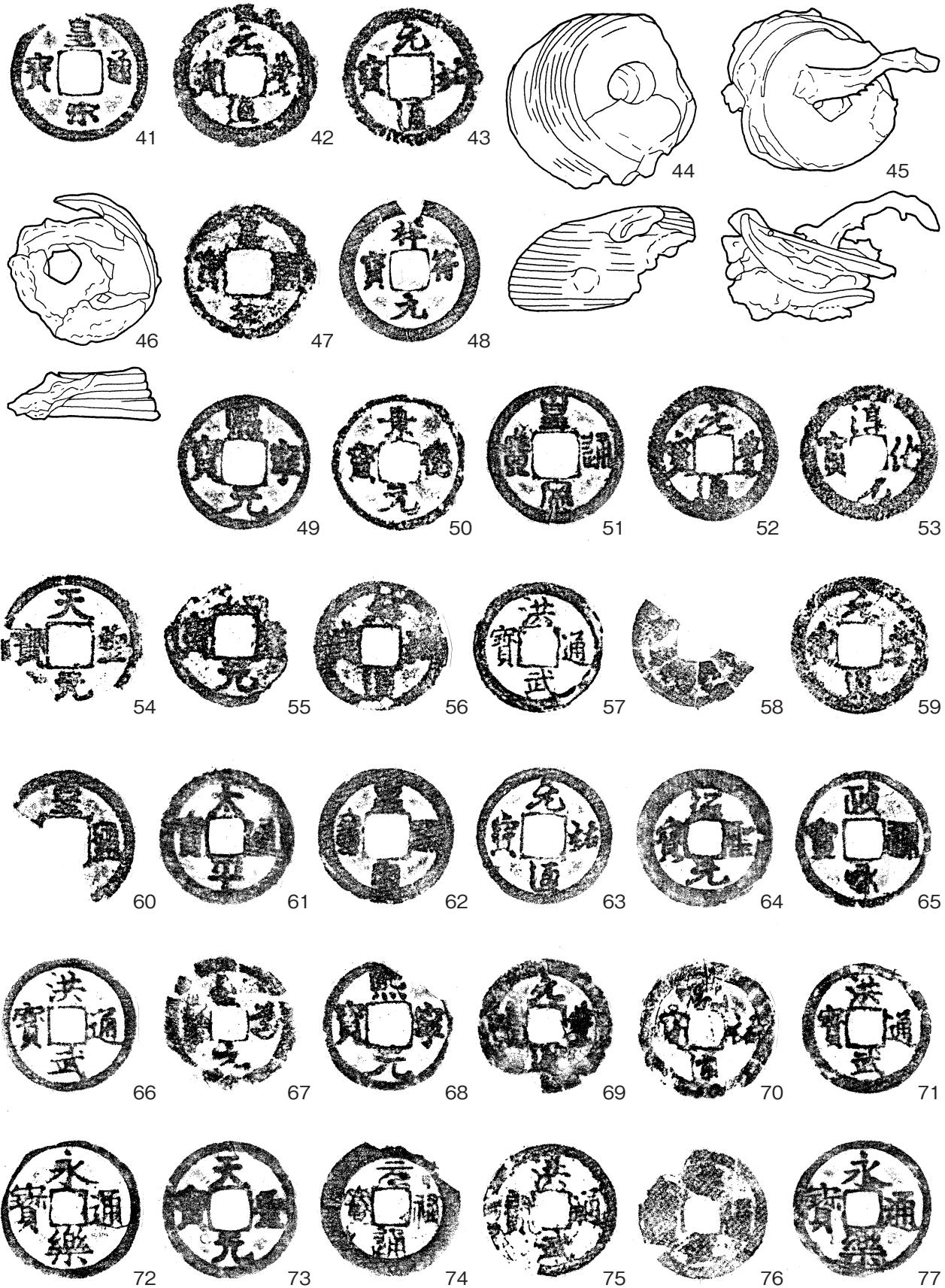


第74図 金属製品類9 (非鉄金属)

*は不確定な推定復元値、()は残存値、法量の単位はcm

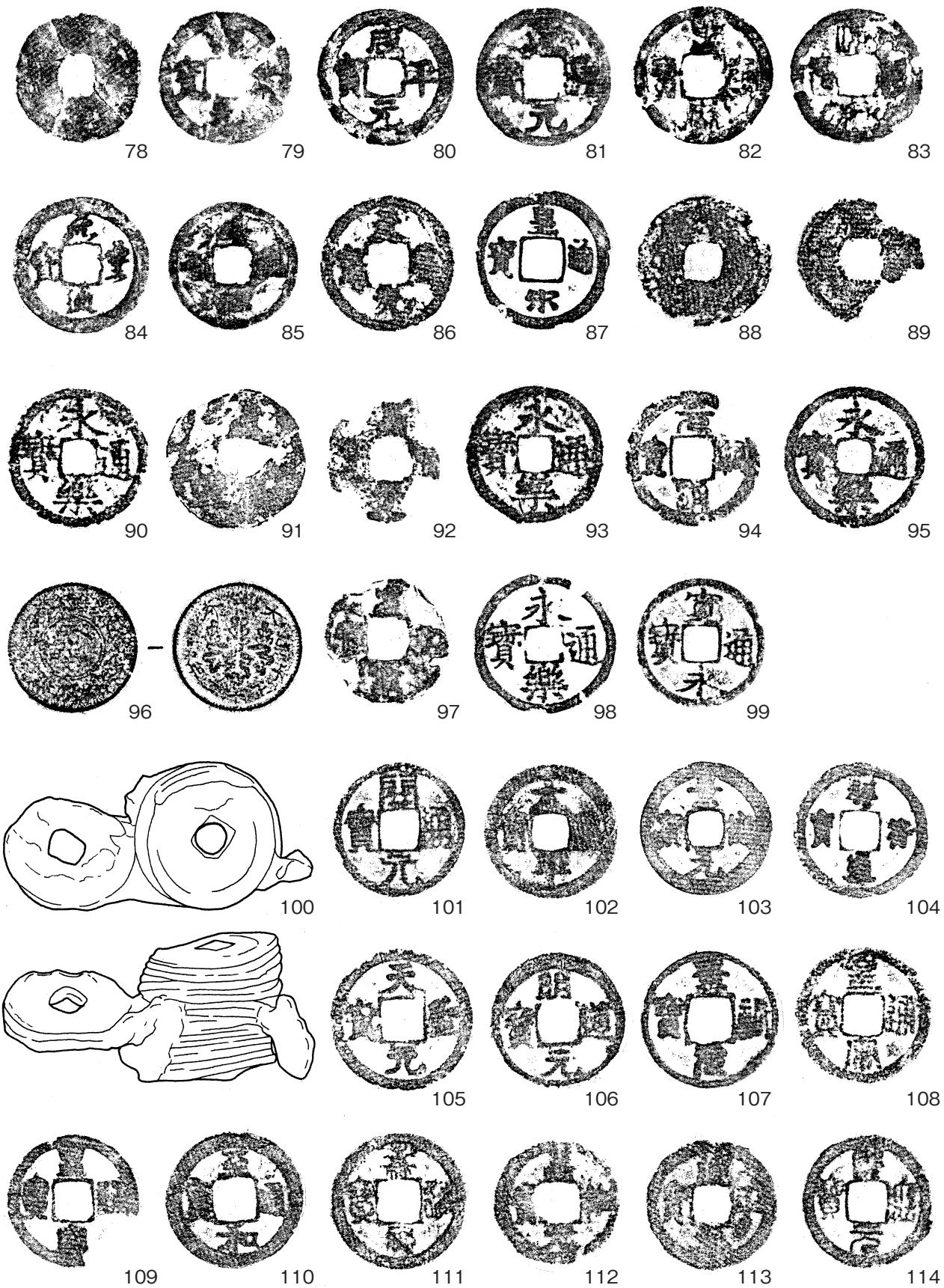
図No.	遺物名	材質	出土地点	長さ	幅	厚さ	遺物ID1	遺物ID2(662-0705)	備考	保存処理No.
29	煙管(雁首)	銅	26堀 No.8	6.5	2.7	1.3		0015-0001		
30	煙管(雁首)	銅	南外堀	3.9	2.0	1.7		0015-0006		
31	煙管(雁首)	銅	外堀	(4.5)	(1.4)	-		0015-0007		
32	煙管(雁首)	一括		(5.0)	1.5	1.0		0015-0022		
33	煙管(吸口)	銅	外堀	9.2	1.3	-		0015-0008		
34	煙管(吸口)	銅	一括	5.9	1.5	-		0015-0021		
35	煙管(吸口)	銅	南外堀	3.7	0.9	-		0015-0023		
36	吸口状製品	銅	一括	5.9	0.9	-		0015-0020		
37	笄	銅	一括	(7.2)	1.4	1.5		0015-0015		
38	弾丸	鉛	26堀 No.84	1.3	-	0.9		0015-0002	8.0g	234
39	弾丸	鉛	33堀下層	1.3	-	-		0015-0003	10.3g	
40	飾り金具	銅	一括	(6.9)	(2.9)	0.4		0015-0016		

第22表 金属製品一覧表2 (非鉄金属)

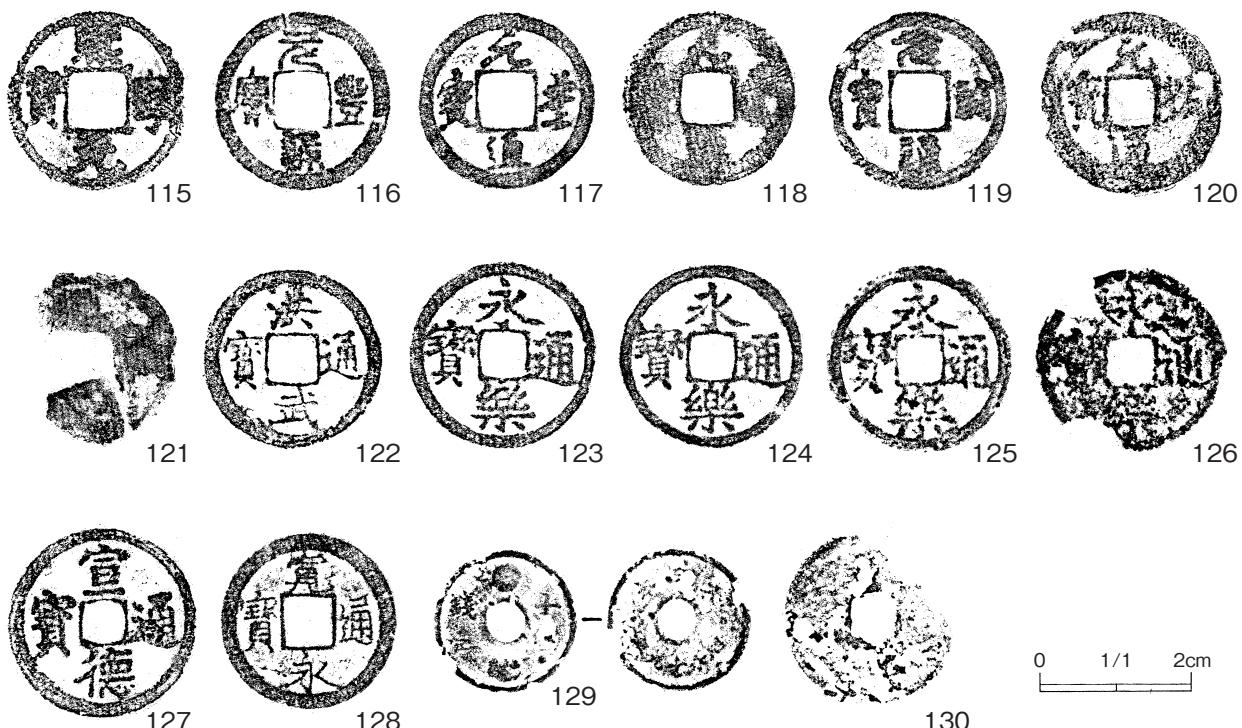


0 1/1 2cm

第75図 金属製品類10（錢貨1）



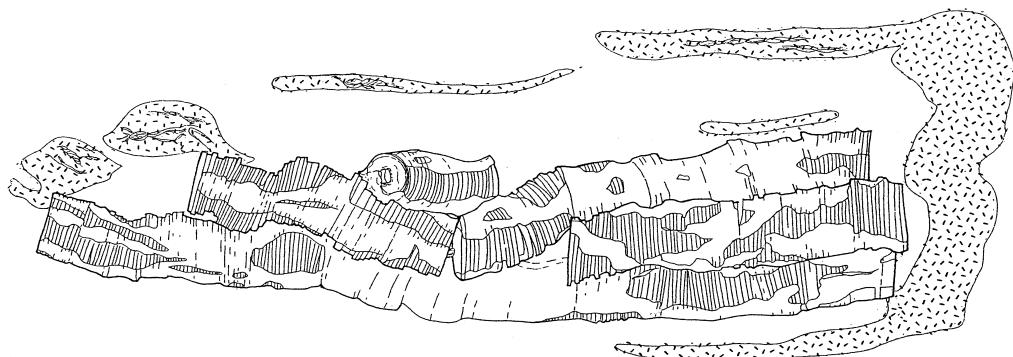
第76図 金属製品類11（錢貨2）



第77図 金属製品類12（錢貨3）

No.	出 土 地 点	錢種（錢貨名は番号順）	遺物ID (651-0705-0015-)
41	5堀 No.13下層	皇宋通宝	0039
42・43	6堀北	元豐通宝2	0040～0041
44	8堀上層	不明（16枚熔着）	0042
45	9堀 No.3下層	不明（8枚熔着）	0043
46	9堀 No.21上層	不明（5枚熔着）	0044
47	10堀最下層	嘉祐通宝	0045
48	14堀 No.2下層	祥符元宝	0046
49	22堀	熙寧元宝	0047
50	23堀 No.1下層	景德元宝	0048
51・52	25堀	皇宋通宝、元豐通宝	0032～0033
53	30堀 No.17下層	淳化元宝	0049
54～58	1溝	天聖元宝2、元祐通宝、洪武通宝、不明	0075～0079
59	2溝	元豐通宝	0080
60	10井	皇宋通宝	0091
61～66	51壙	太平通宝、皇宋通宝、元祐通宝、紹聖元宝、政和通宝、洪武通宝	0050～0055
67～72	52壙	至道元宝、熙寧元宝、元豐通宝、元祐通宝、洪武通宝、永樂通宝	0056～0061
73	54壙 No.1	天聖元宝	0062
74～77	54壙 No.2	元祐通宝、洪武通宝2、永樂通宝	0063～0066
78・79	54壙 No.3	開元通宝、紹聖元宝	0067～0068
80～85	67壙	咸平元宝、天聖元宝、皇宋通宝、熙寧元宝、元豐通宝、元祐通宝	0069～0074
86～88	土橋A	天聖元宝、皇宋通宝、不明	0083～0085
89	土橋下No.63	不明	0086
90	土橋下No.130	永樂通宝	0087
91	土橋下No.134	不明	0088
92	土橋下No.145	不明	0089
93	土橋下No.165	永樂通宝	0090
94～97	外堀	元祐通宝、永樂通宝、一錢、不明	0035～0038
98	堀の上 5T	永樂通宝	0034
99・100	II層	寛永通宝、不明（21枚熔着）	0081～0082
101～130	一括	開元通宝、太平通宝、景德元宝、祥符通宝、天聖元宝、明道元宝、景祐元宝、皇宋通宝2、至和通宝、嘉祐通宝、嘉祐元宝、治平元宝、熙寧元宝2、元豐通宝3、元祐通宝2、紹聖元宝、洪武通宝、永樂通宝4、宣德通宝、寛永通宝、十錢、不明	0001～0030

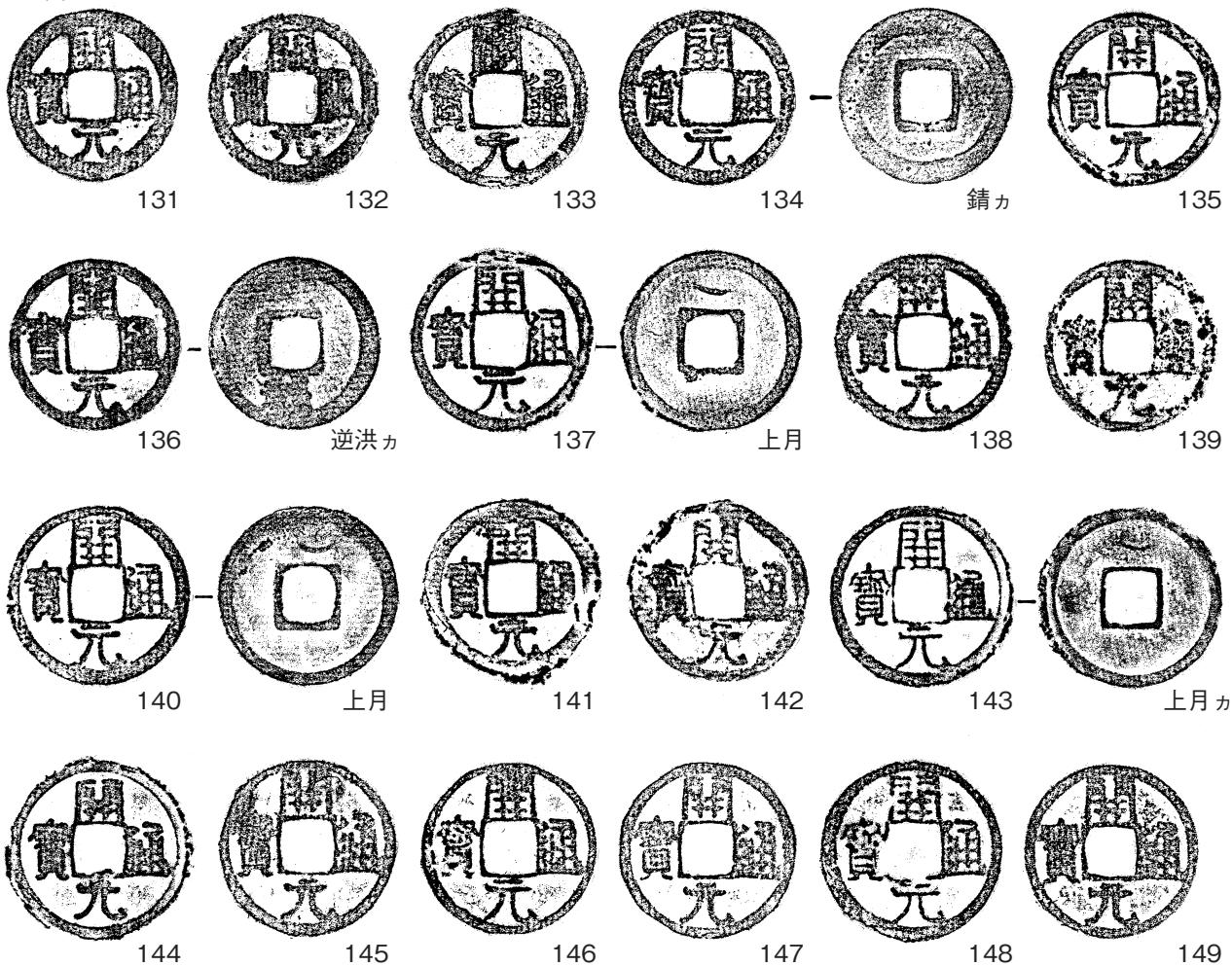
第23表 金属製品一覧表3（錢貨）



袋入り銭貨

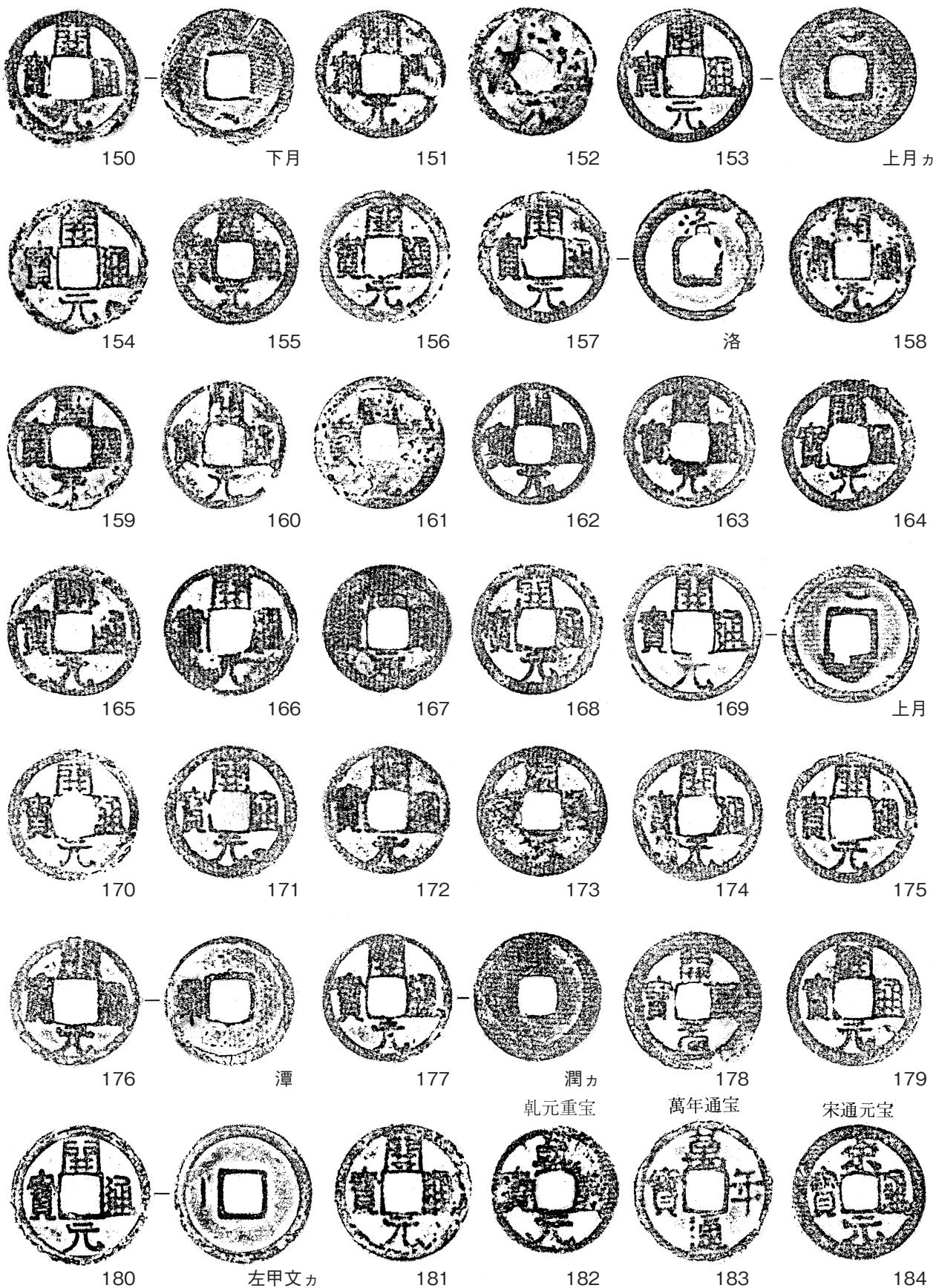
0 1/3 10cm

開元通宝

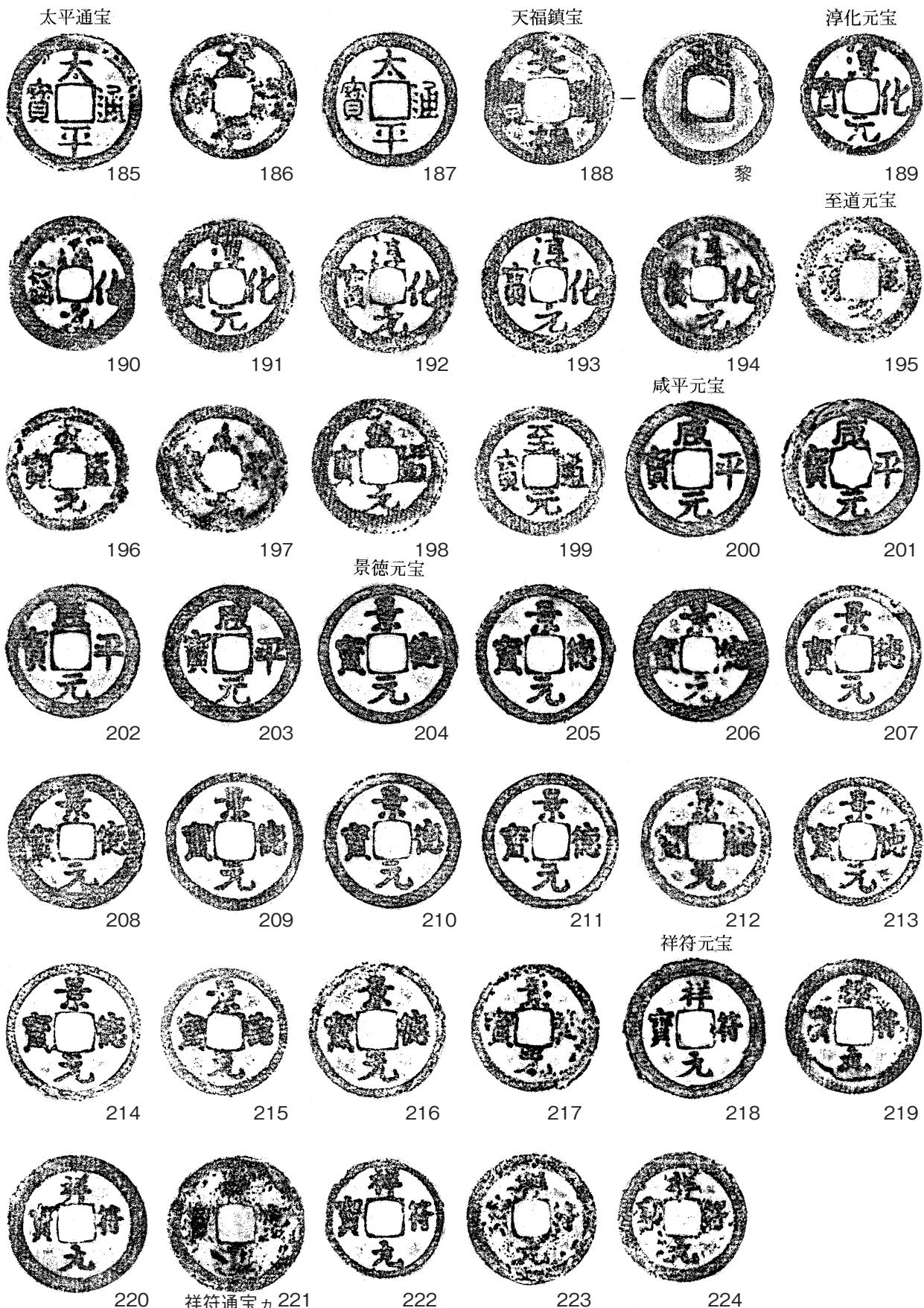


0 1/1 2cm

第78図 金属製品類13（袋入り銭貨 1）

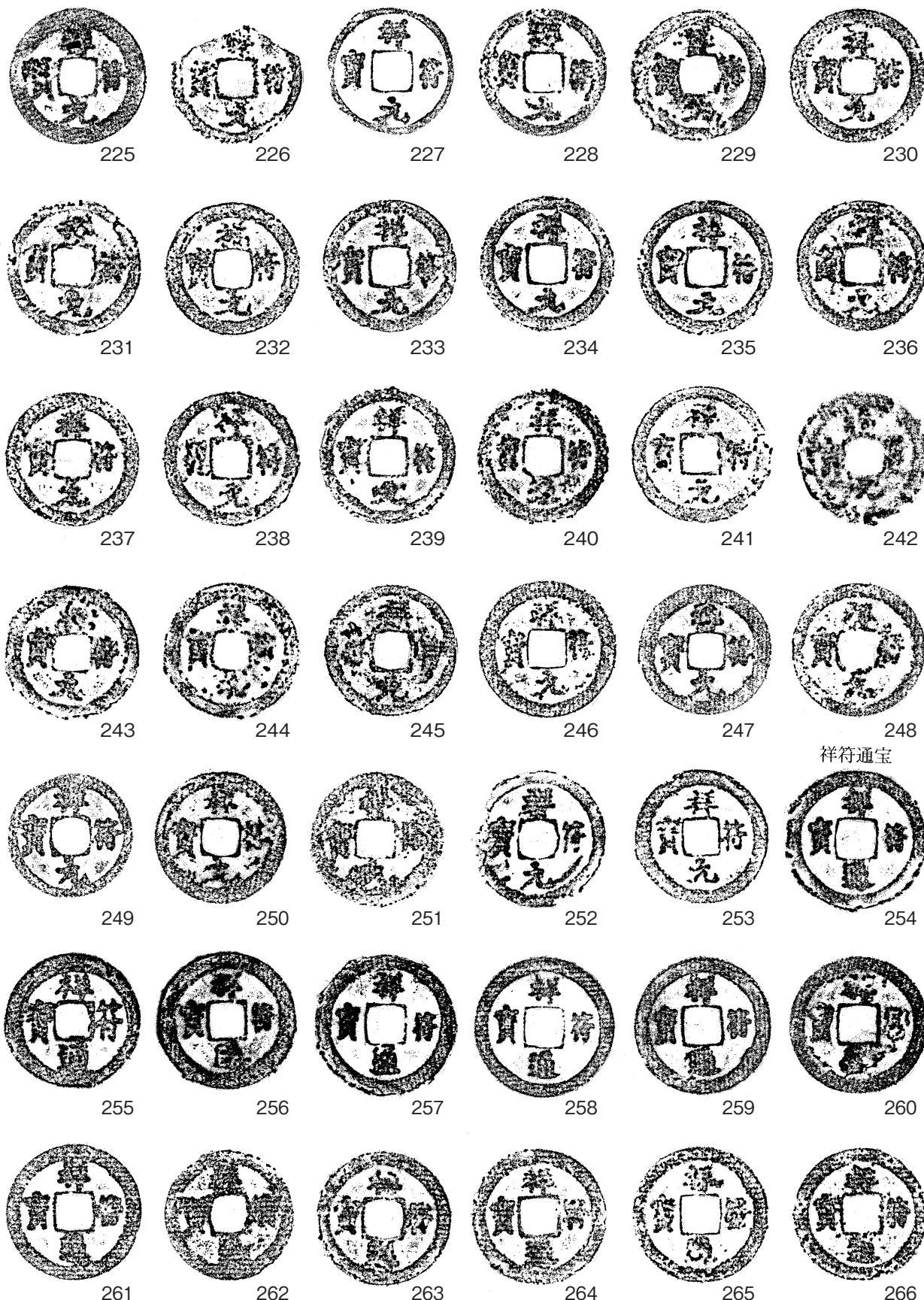


第79図 金属製品類14（袋入り錢貨2）



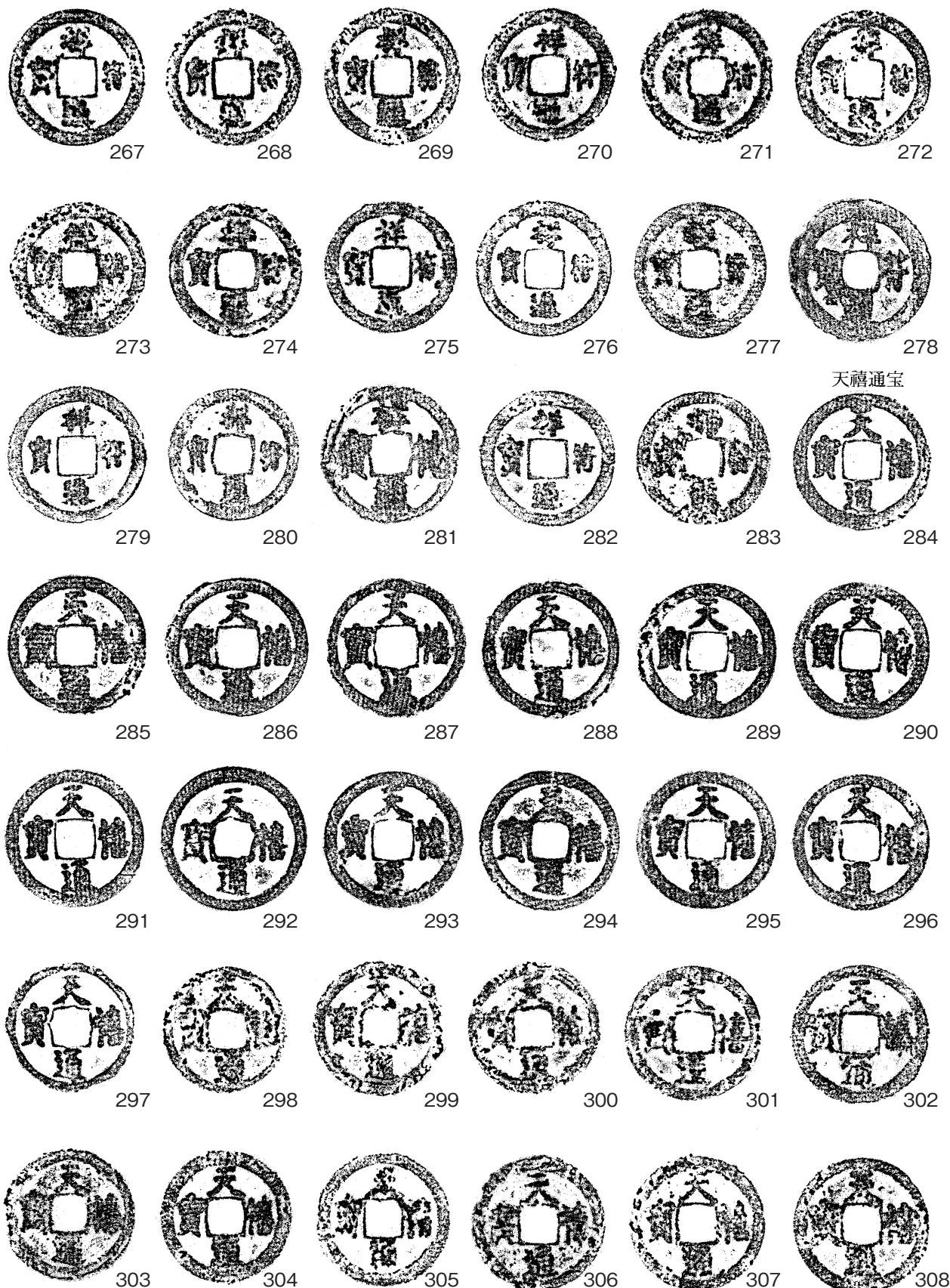
0 1/1 2cm

第80図 金属製品類15（袋入り錢貨3）



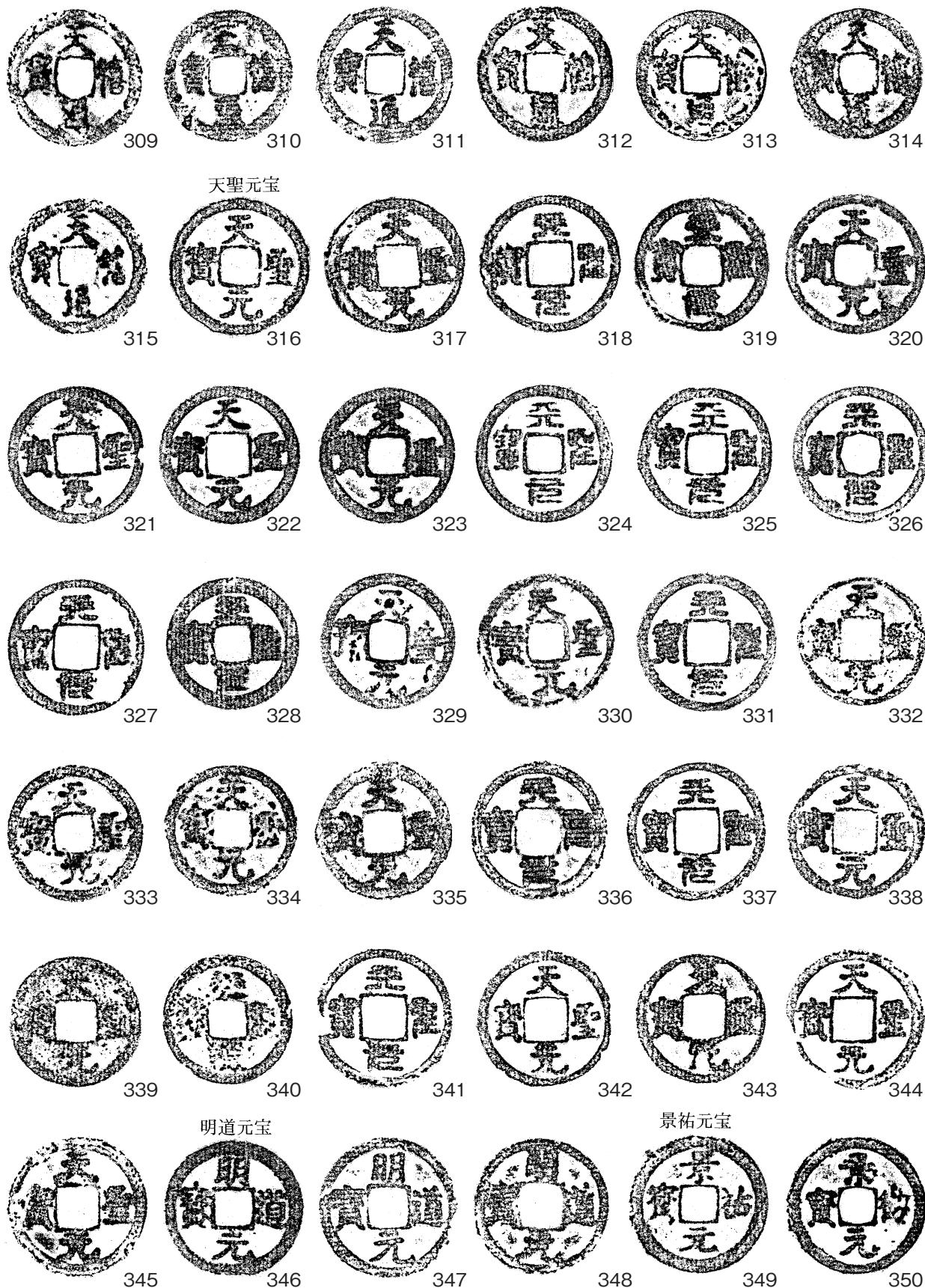
0 1/1 2cm

第81図 金属製品類16（袋入り錢貨4）



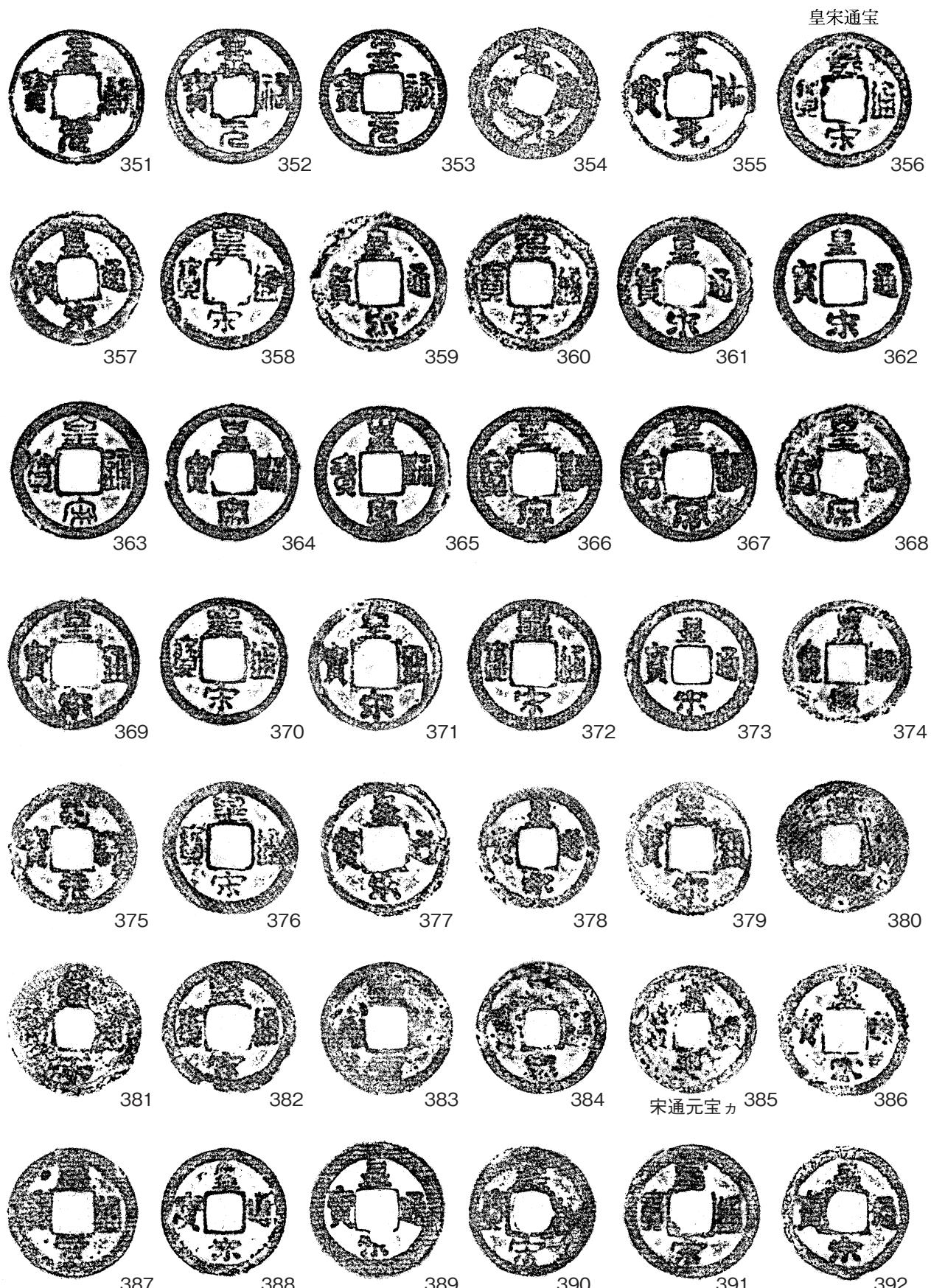
第82図 金属製品類17 (袋入り錢貨 5)

0 1/1 2cm



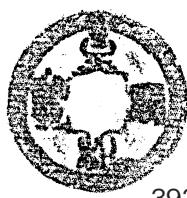
第83図 金属製品類18（袋入り錢貨6）

0 1/1 2cm

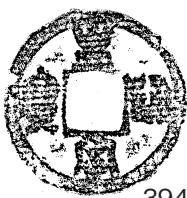


0 1/1 2cm

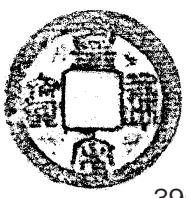
第84図 金属製品類19（袋入り錢貨 7）



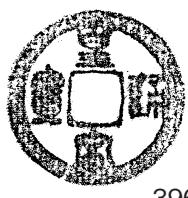
393



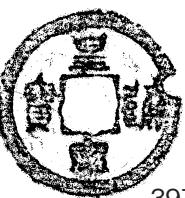
394



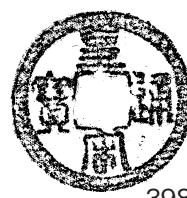
395



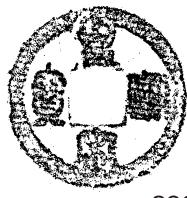
396



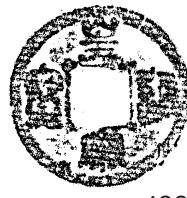
397



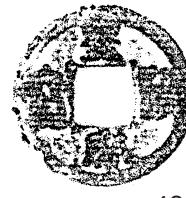
398



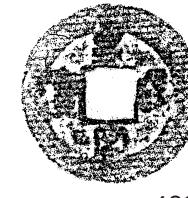
399



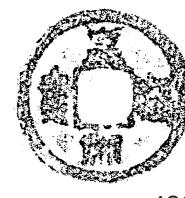
400



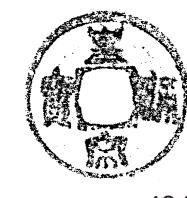
401



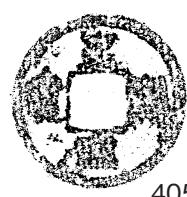
402



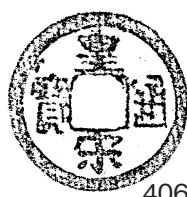
403



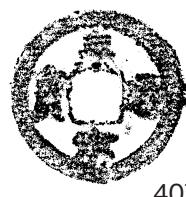
404



405



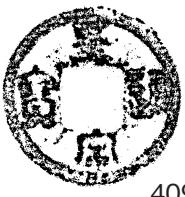
406



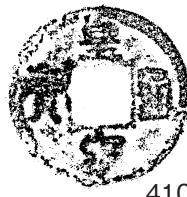
407



408

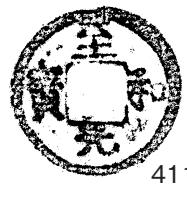


409



410

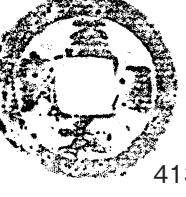
至和元宝



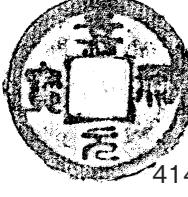
411



412



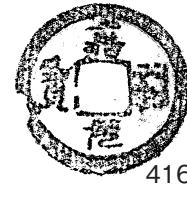
413



414

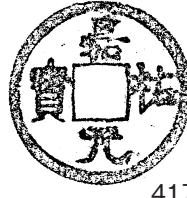


415

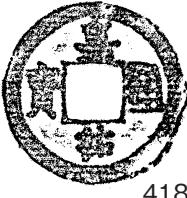


416

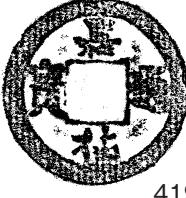
嘉祐通宝



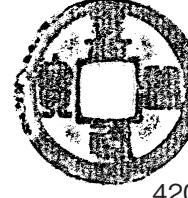
417



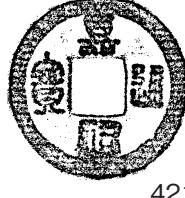
418



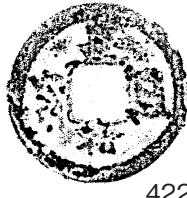
419



420

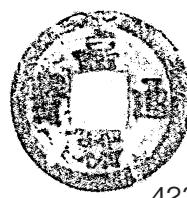


421

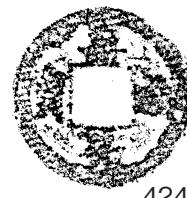


422

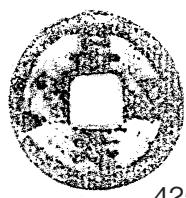
治平元宝



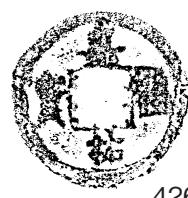
423



424



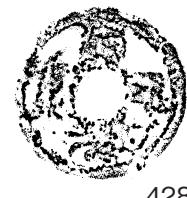
425



426



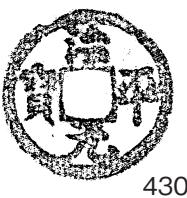
427



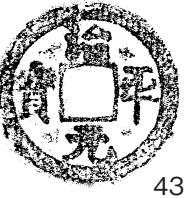
428



429



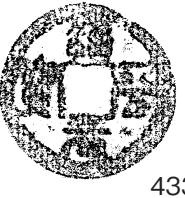
430



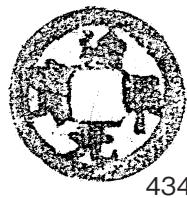
431



432



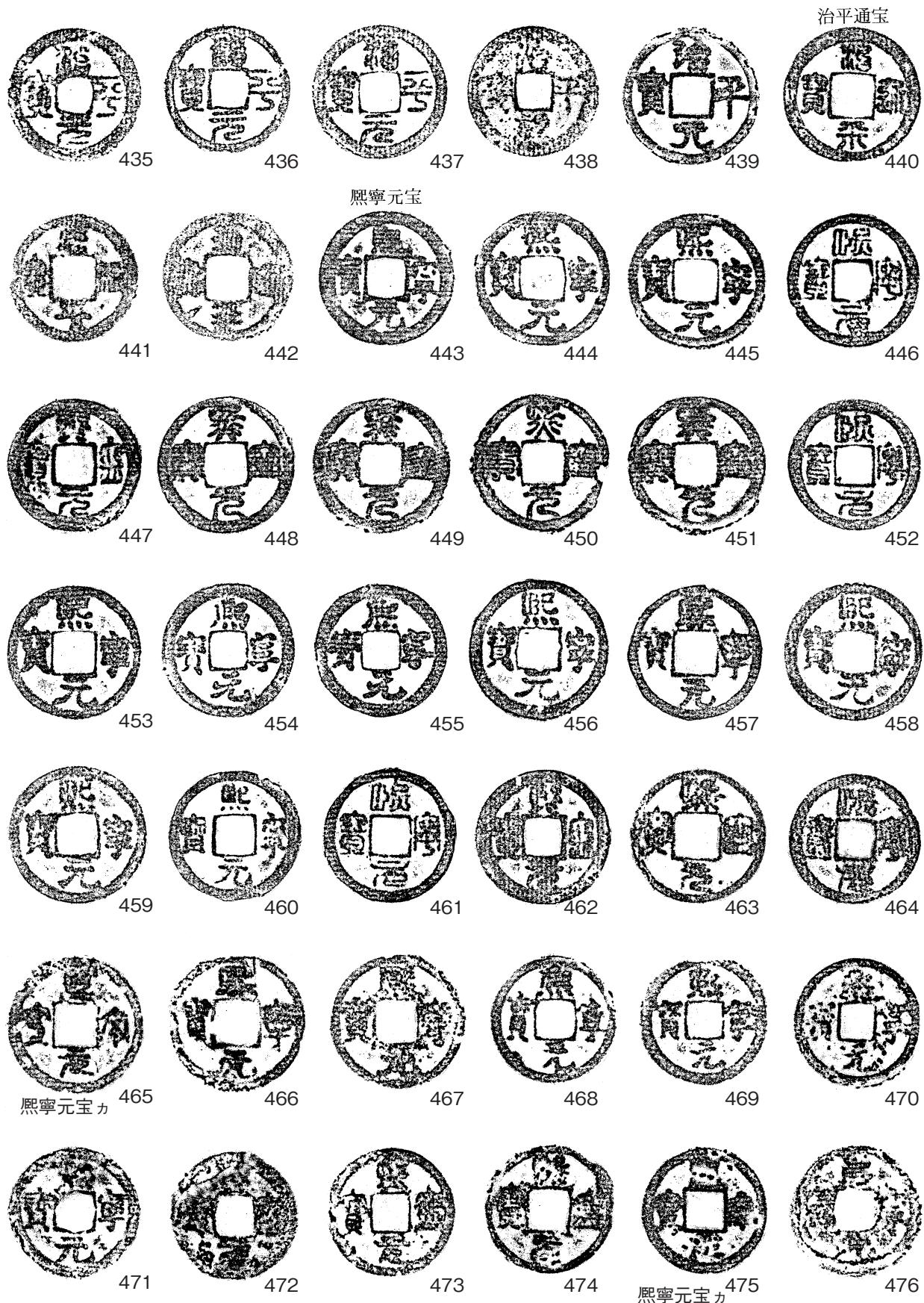
433



434

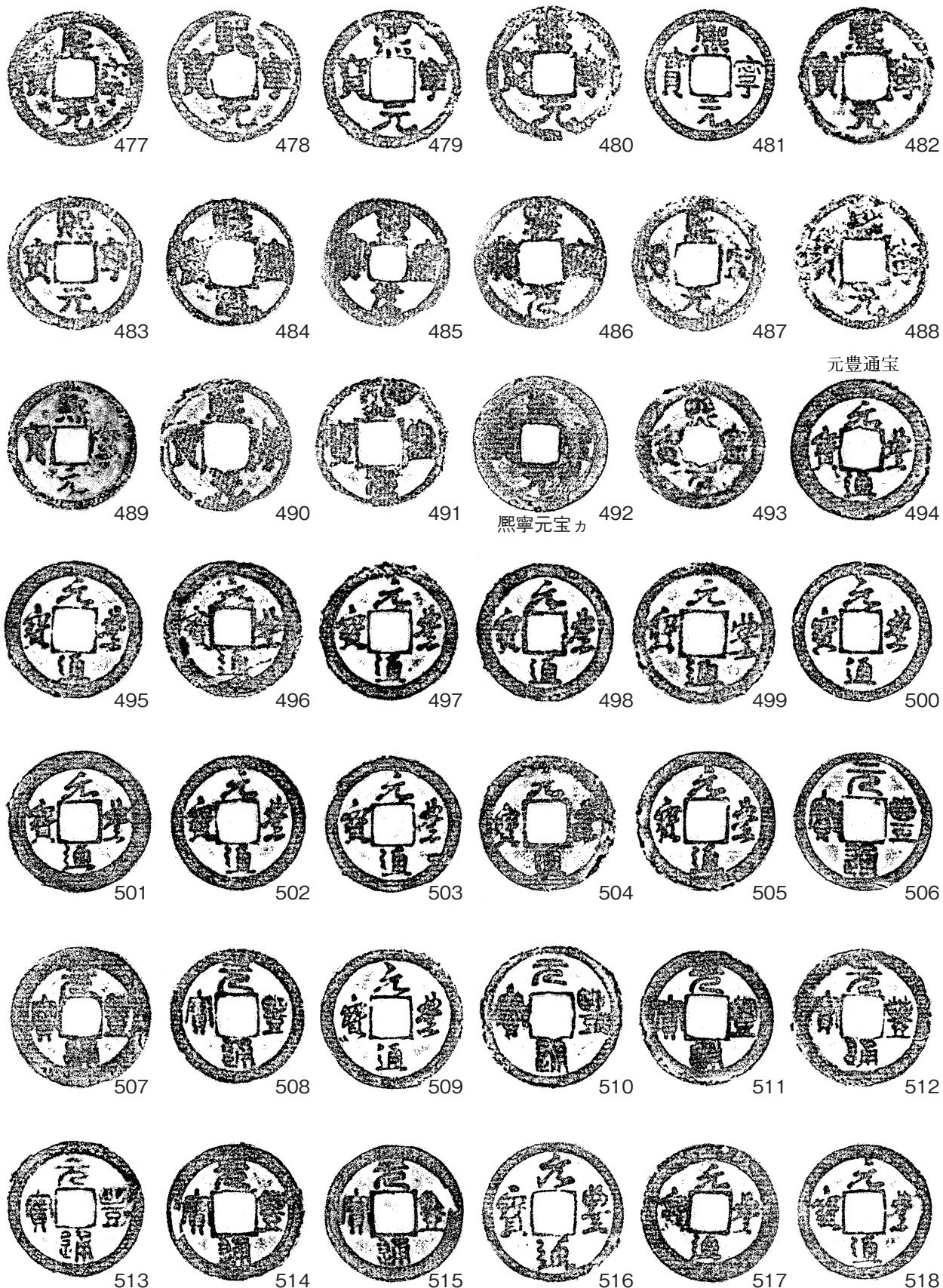
0 1/1 2cm

第85図 金属製品類20（袋入り錢貨8）



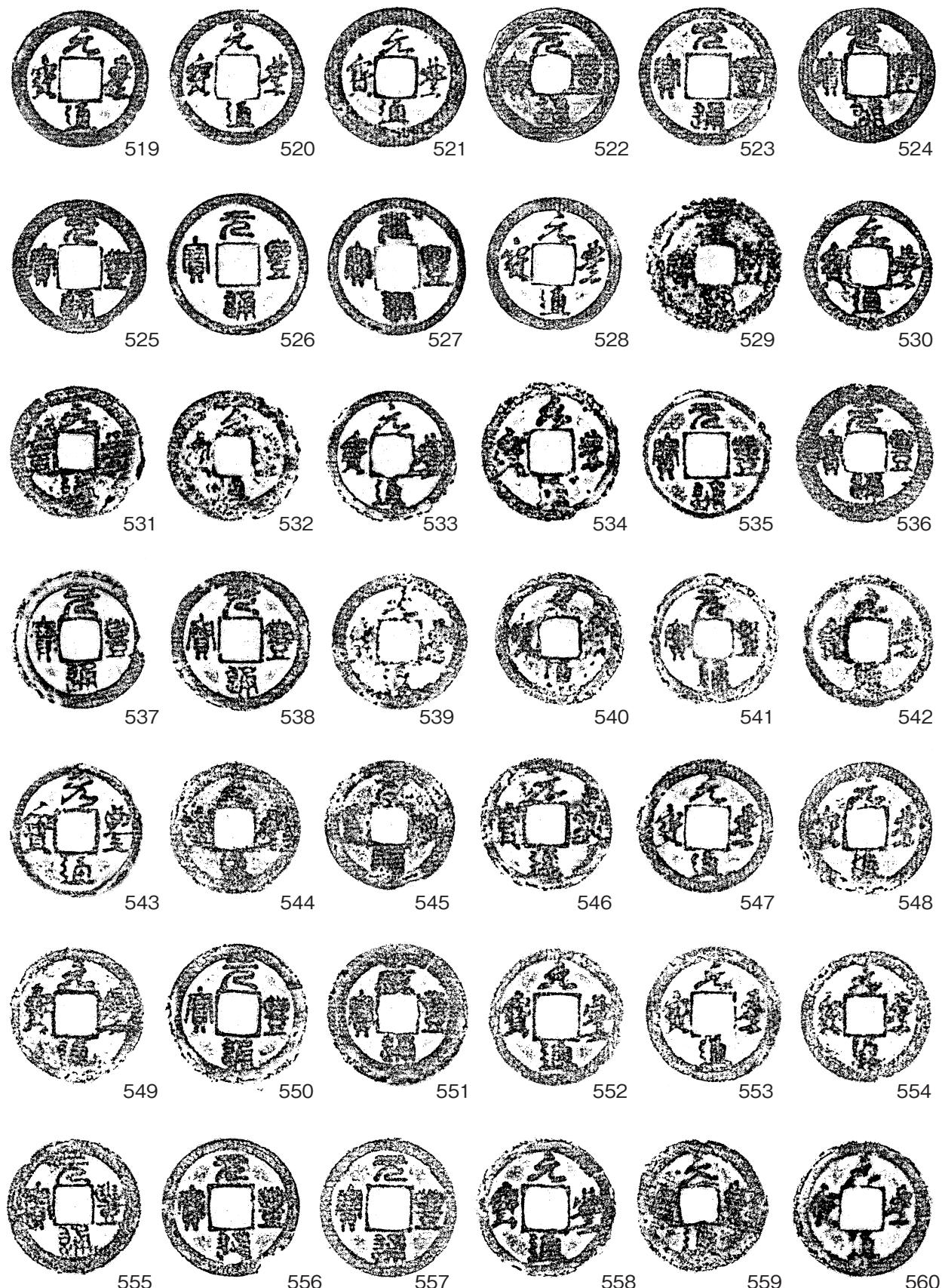
0 1/1 2cm

第86図 金属製品類21（袋入り錢貨9）



第87図 金属製品類22 (袋入り錢貨10)

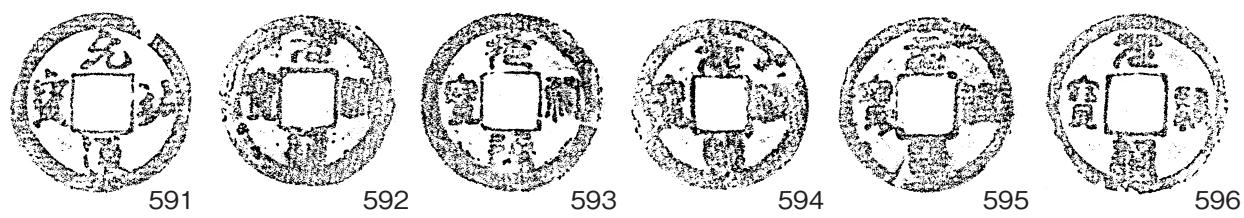
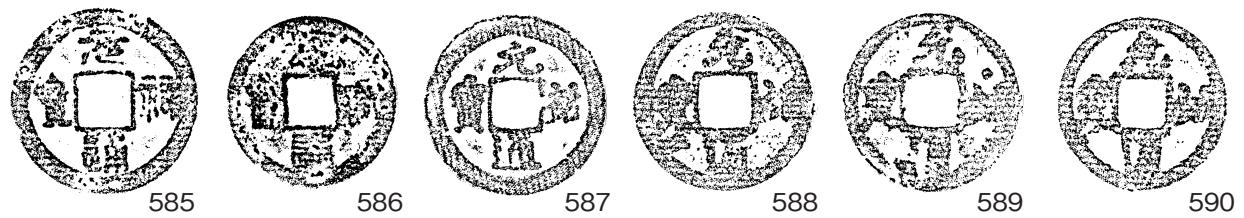
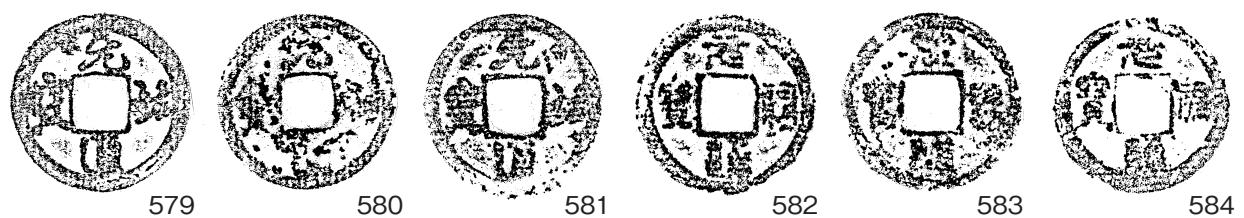
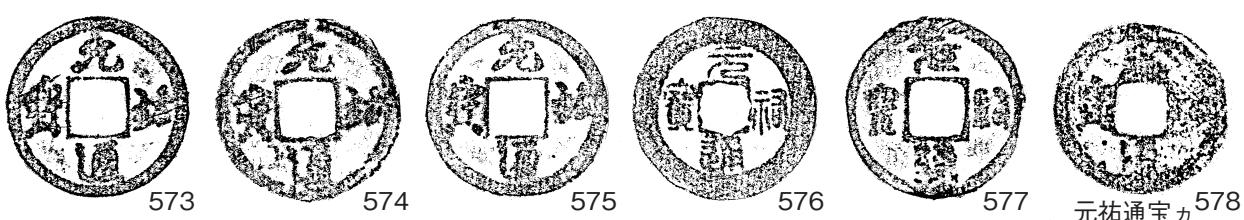
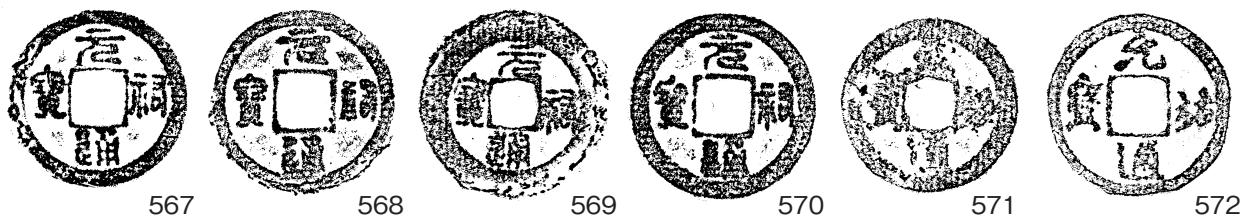
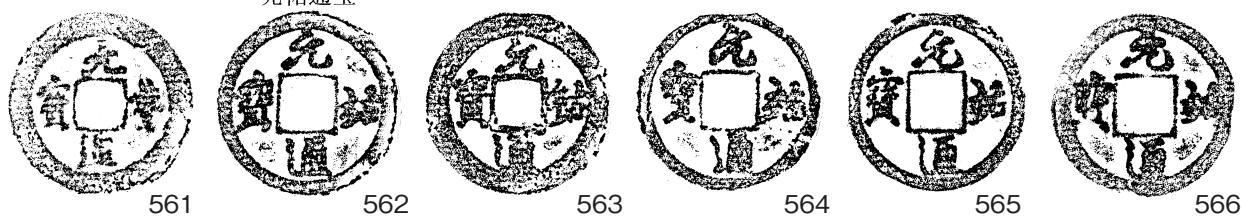
0 1/1 2cm



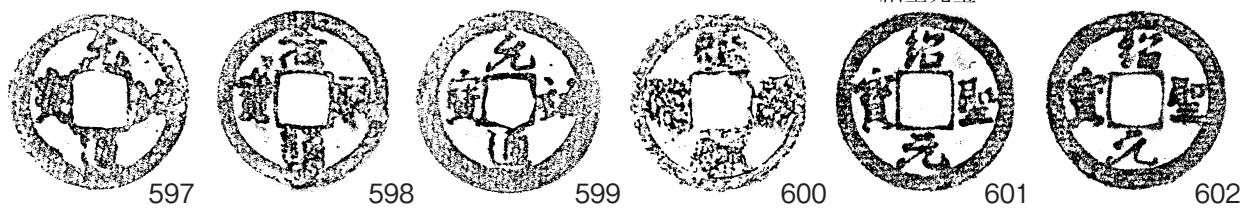
第88図 金属製品類23（袋入り錢貨11）

0 1/1 2cm

元祐通宝

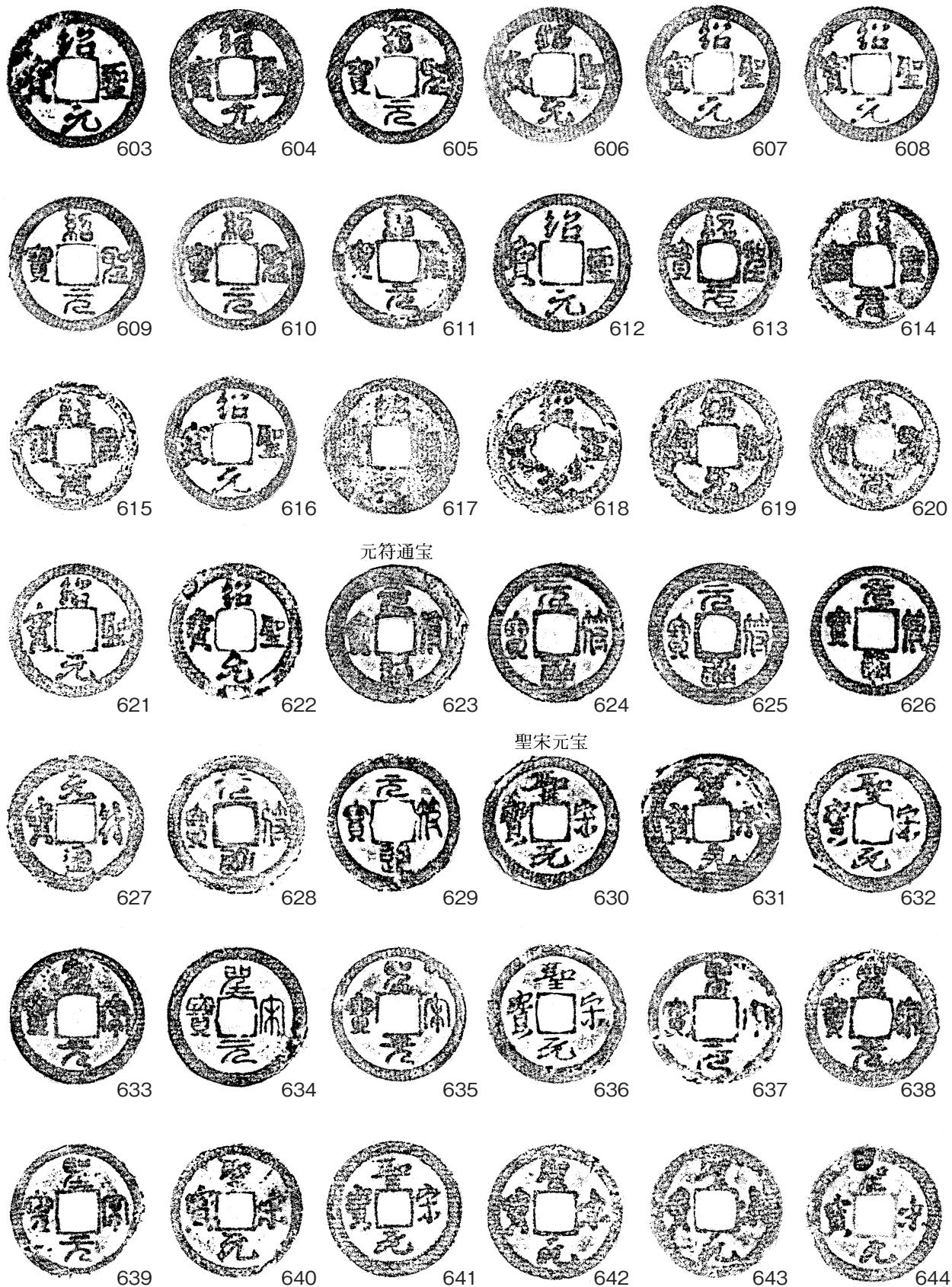


紹聖元宝



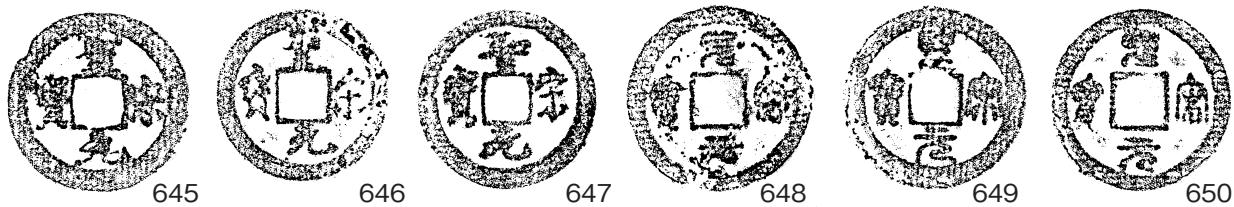
0 1/1 2cm

第89図 金属製品類24 (袋入り錢貨12)

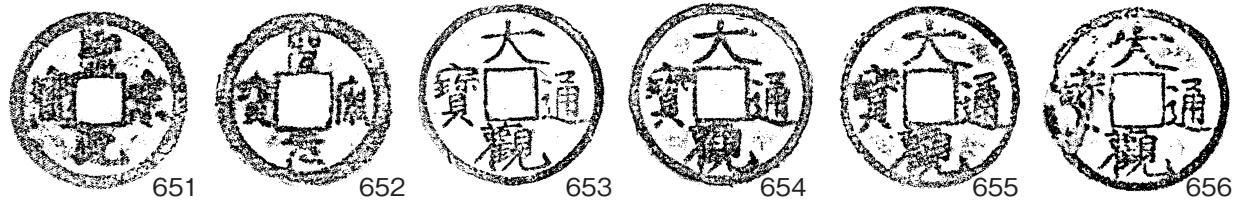


第90図 金属製品類25（袋入り錢貨13）

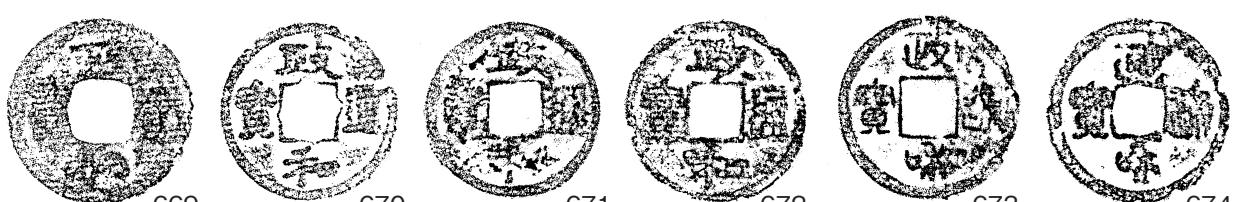
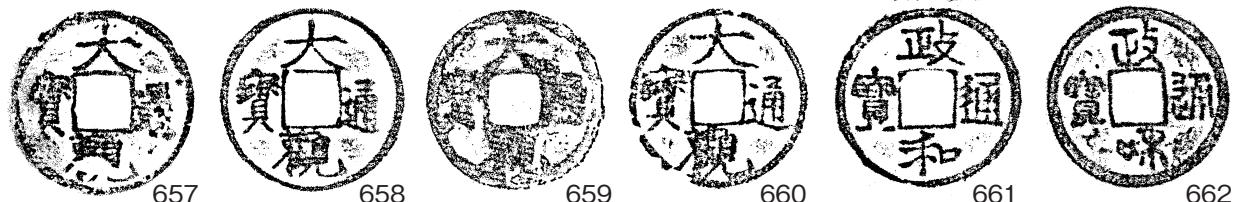
0 1/1 2cm



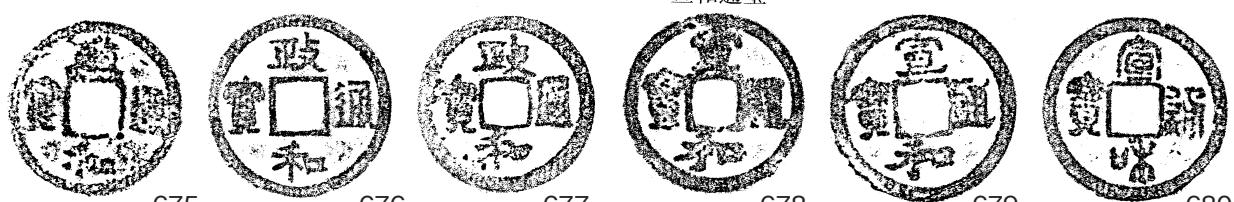
大觀通寶



政和通寶

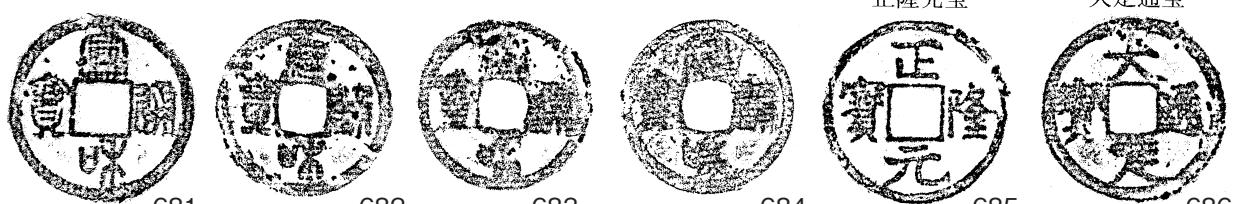


宣和通寶



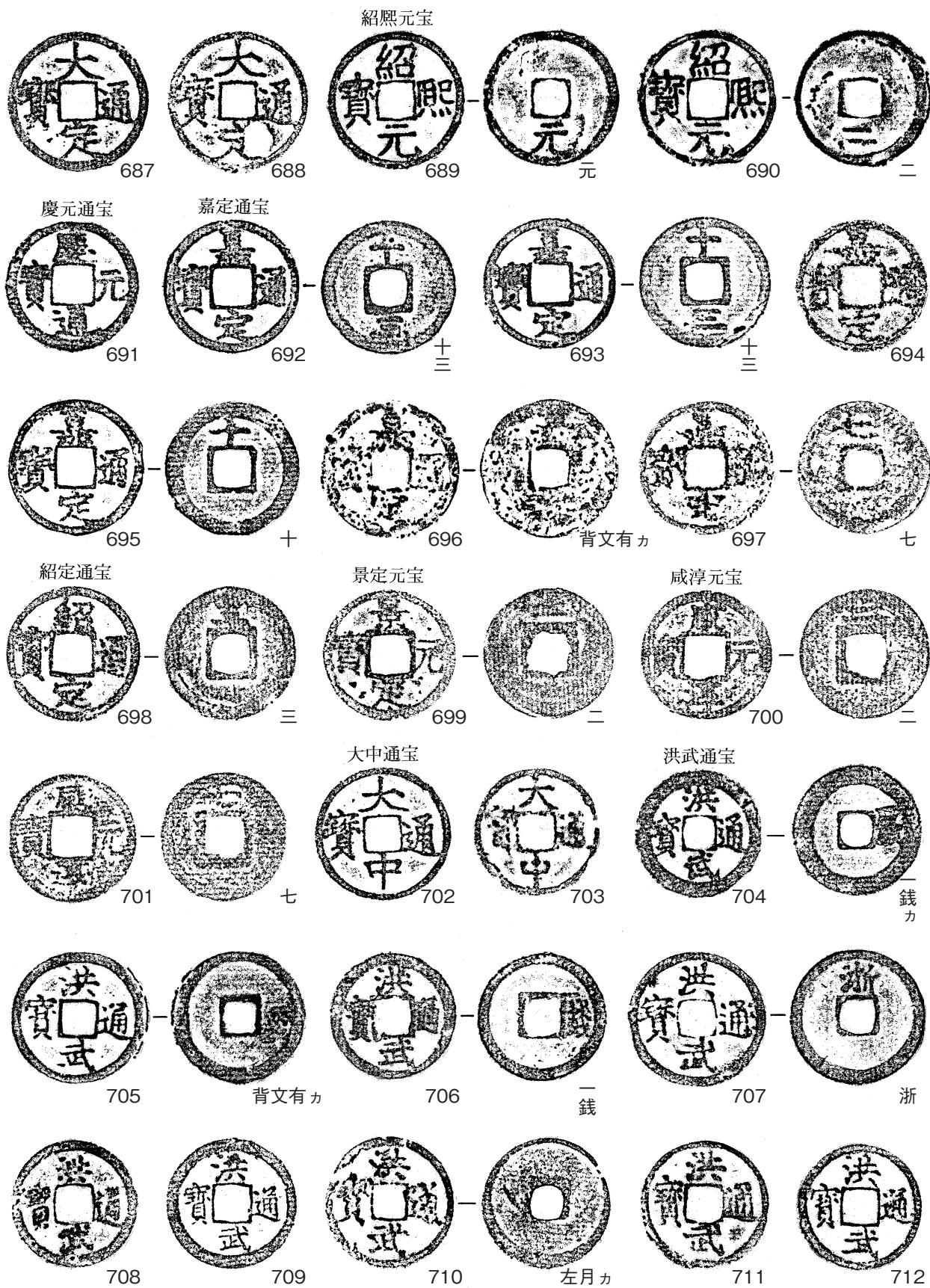
正隆元寶

大定通寶



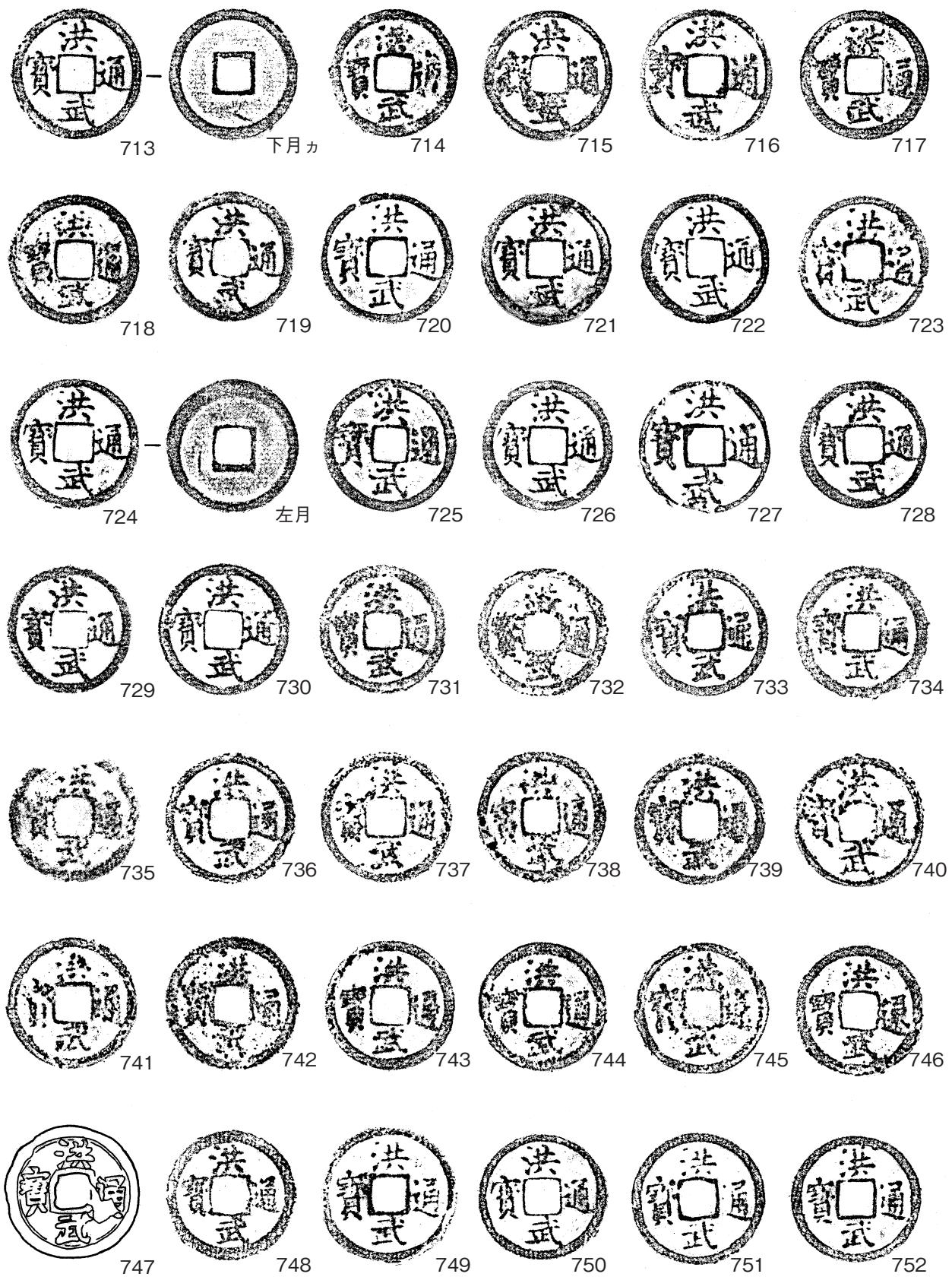
0 1/1 2cm

第91図 金属製品類26 (袋入り錢貨14)



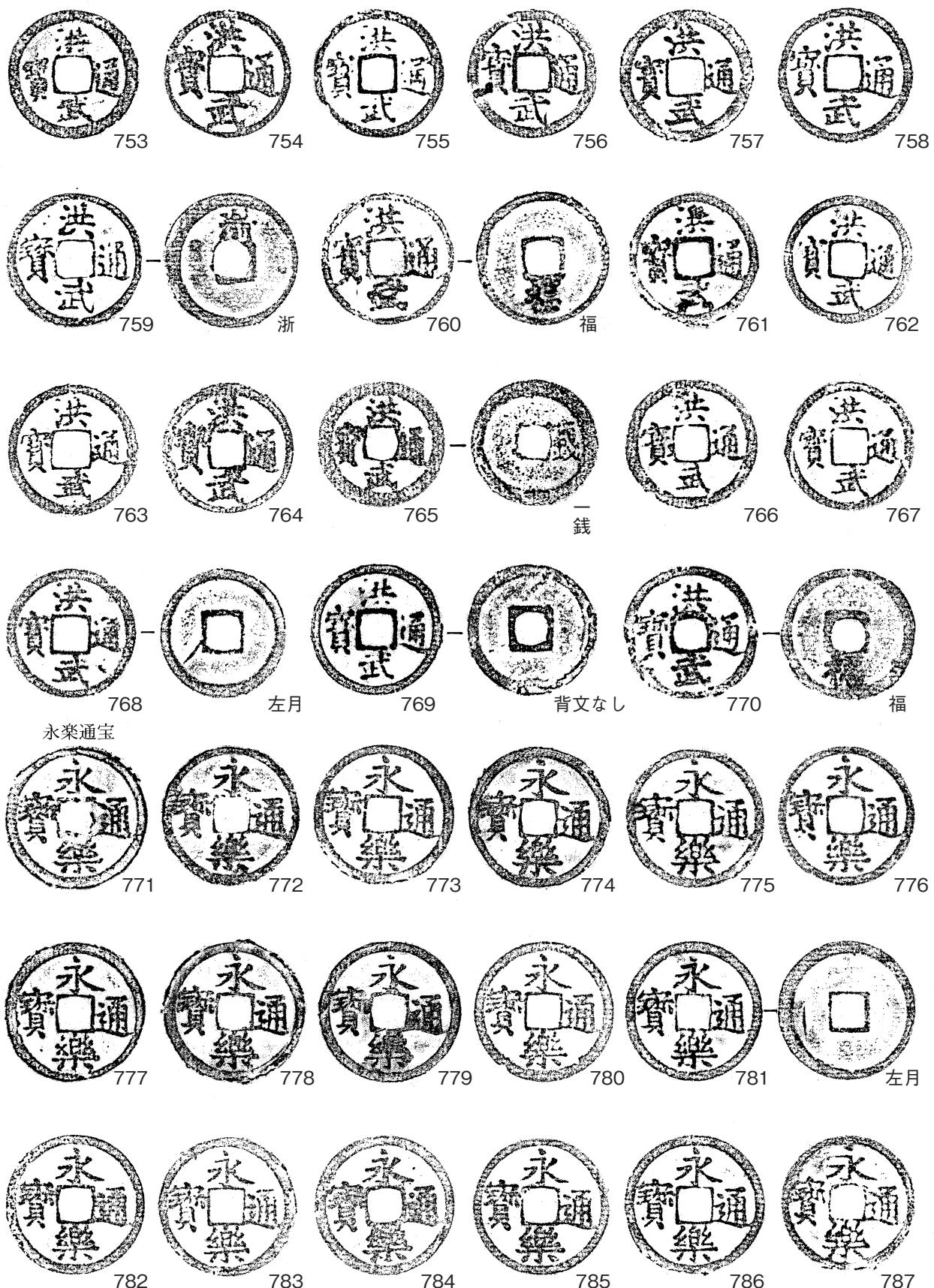
0 1/1 2cm

第92図 金属製品類27 (袋入り錢貨15)



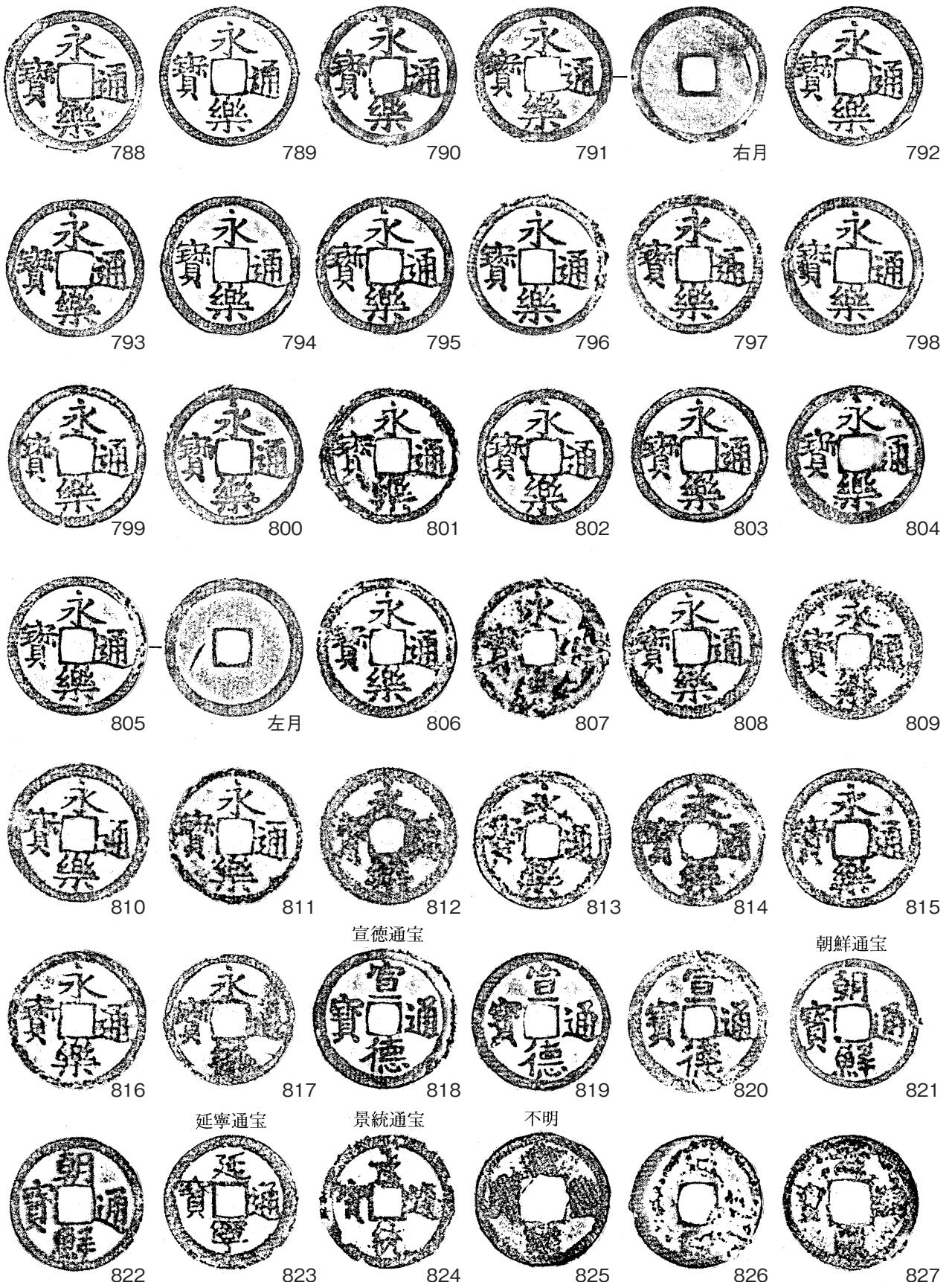
第93図 金属製品類28 (袋入り錢貨16)

0 1/1 2cm



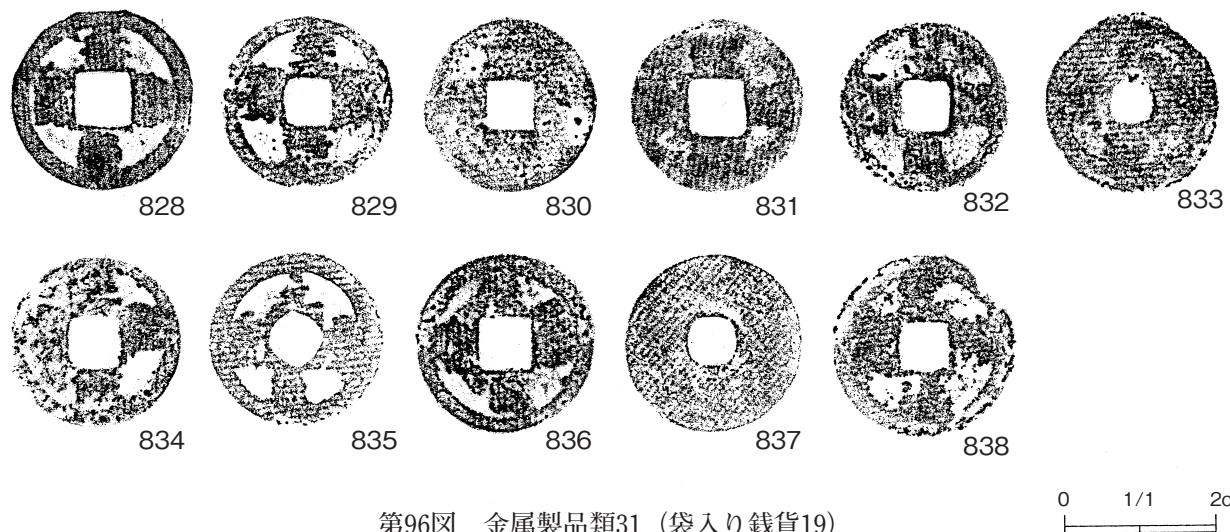
第94図 金属製品類29 (袋入り錢貨17)

0 1/1 2cm



0 1/1 2cm

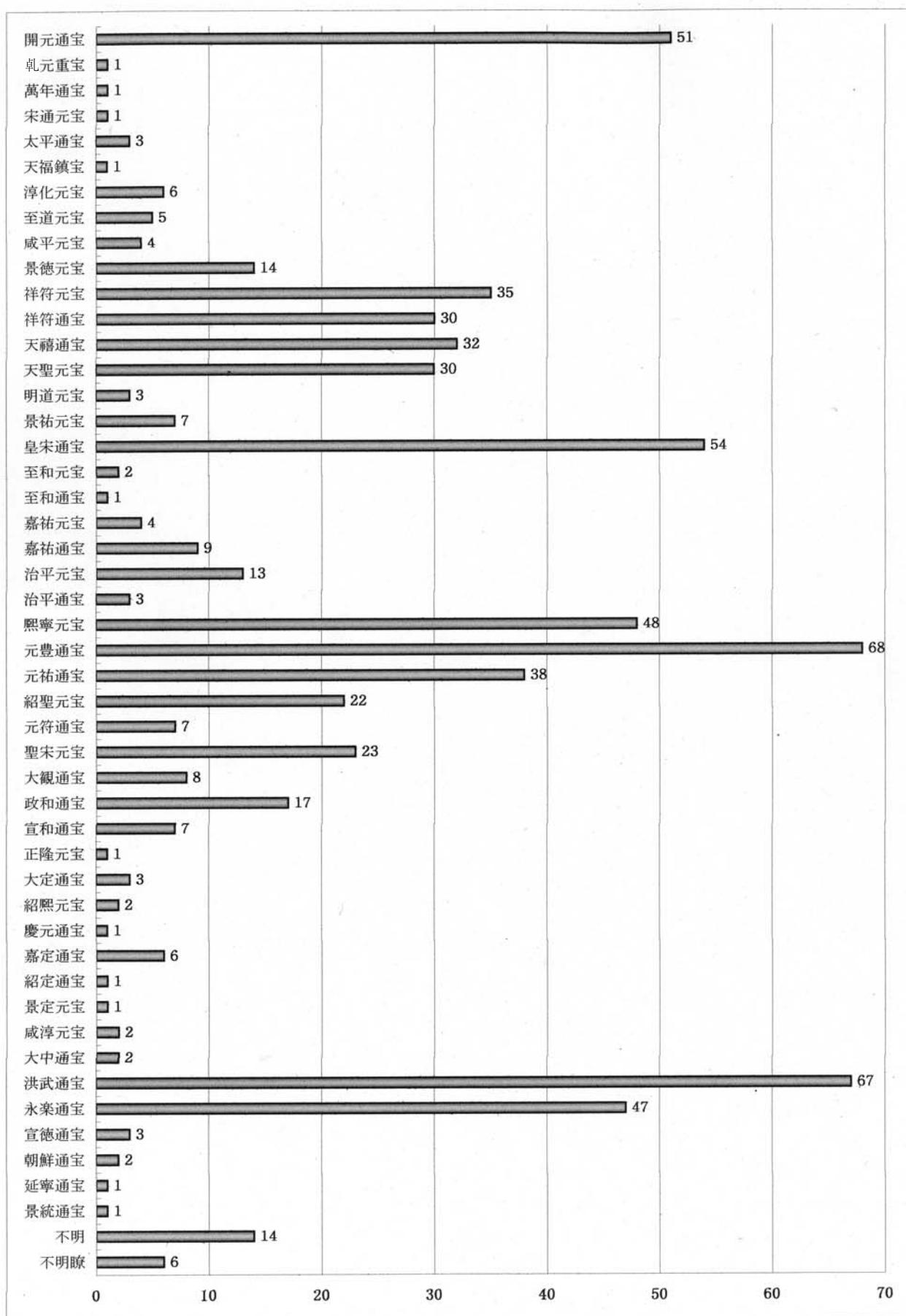
第95図 金属製品類30 (袋入り錢貨18)



第96図 金属製品類31（袋入り錢貨19）

No.	錢種	枚数	国・王朝	初鑄年	錢種不明瞭
131~181	開元通宝	51	唐	621	
182	乾元重宝	1	唐	758	
183	萬年通宝	1	日本	760	
184	宋通元宝	1	北宋	960	
185~187	太平通宝	3	北宋	976	
188	天福鎮寶	1	前黎	984	
189~194	淳化元宝	6	北宋	990	
195~199	至道元宝	5	北宋	995	
200~203	咸平元宝	4	北宋	998	
204~217	景德元宝	14	北宋	1004	
218~253	祥符元宝	35	北宋	1009	祥符通宝カ 1枚
254~283	祥符通宝	30	北宋	1009	
284~315	天禧通宝	32	北宋	1017	
316~345	天聖元宝	30	北宋	1023	
346~348	明道元宝	3	北宋	1032	
349~355	景祐元宝	7	北宋	1034	
356~410	皇宋通宝	54	北宋	1038	宋通元宝カ 1枚
411~412	至和元宝	2	北宋	1054	
413	至和通宝	1	北宋	1054	
414~417	嘉祐元宝	4	北宋	1056	
418~426	嘉祐通宝	9	北宋	1056	
427~439	治平元宝	13	北宋	1064	
440~442	治平通宝	3	北宋	1064	
443~493	熙寧元宝	48	北宋	1068	熙寧元宝カ 3枚
494~561	元豐通宝	68	北宋	1078	
562~600	元祐通宝	38	北宋	1086	元祐通宝カ 1枚
601~622	紹聖元宝	22	北宋	1094	
623~629	元符通宝	7	北宋	1098	
630~652	聖宋元宝	23	北宋	1101	
653~660	大觀通宝	8	北宋	1107	
661~677	政和通宝	17	北宋	1111	
678~684	宣和通宝	7	北宋	1119	
685	正隆元宝	1	金	1157	
686~688	大定通宝	3	金	1178	
689~690	紹熙元宝	2	南宋	1190	
691	慶元通宝	1	南宋	1195	
692~697	嘉定通宝	6	南宋	1208	
698	紹定通宝	1	南宋	1228	
699	景定元宝	1	南宋	1260	
700~701	咸淳元宝	2	南宋	1265	
702~703	大中通宝	2	明	1361	
704~770	洪武通宝	67	明	1368	
771~817	永樂通宝	47	明	1408	
818~820	宣德通宝	3	明	1433	
821~822	朝鮮通宝	2	朝鮮	1423	
823	延寧通宝	1	安南	1454	
824	景統通宝	1	後黎	1498	
825~838	不明	14			
221~385·465·475·492·578	不明瞭	6			

第24表 金属製品一覧表 4 (袋入り錢貨)



第97図 袋入り錢貨錢種別点数

第5節 金属の生産

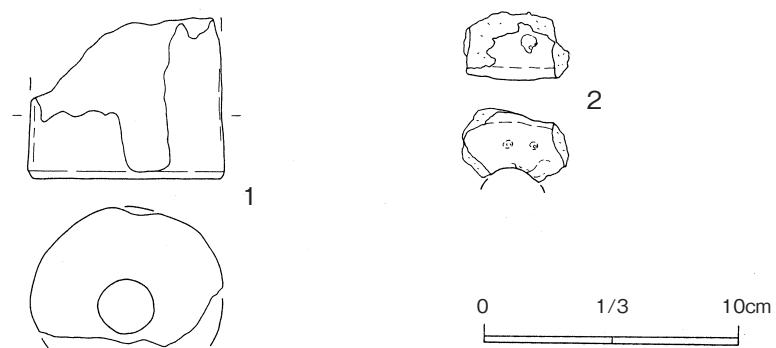
金属加工滓及び鞴の羽口

金属加工滓は、総量5,305g出土している。長さ5cm50g程度のものが多いが、7・8・10・25・26・29・33号堀、外堀、1・5.6・9号溝、9・12号井戸、2・3・34号土壙、1・2・3・23トレンチ、土橋、遺構外で出土している。特に多量に出土しているのは、33堀の950g、外堀の1,390gで、遺構外で

は2,180gである。大型のものは、33号堀上層で411g、外堀で200~280gのものが出土している。

鞴の羽口（1）は、鞴取付部で、端部は平坦で付着物なし。外径7.8cm内径2.2cm。表面1~2mm程度酸化焼成で素焼となり、内部は還元焼成で黒色。5号溝出土。2は、金属熔融物が付着したホド側の口片である。

※5.6溝は5と6溝の合流地点



第98図 鞴の羽口



調査風景

第6節 兜

(1) 発掘調査

平成元年11月22日（水）25号堀下層を移植ゴテにより掘り下げた際、黒色漆の皮膜を一撃した。皮膜は小札の形態であった。

23・24日（木・金）引き続き掘り下げ。

25日（土）皮膜は兜と確認する。

27日（月）兜本体から離れた覆土を除去する。

28日（火）兜掘り出し。覆土の除去には、移植ゴテ・竹べら・刷毛では皮膜を傷めるため、油差しや注水モードにした霧吹きを用い、水で覆土を流しながら兜を露出させた。直射日光による乾燥・劣化を避けるため、シートによる日陰で作業を行った。

29日・30日（水・木）完全に露出する。写真撮影。

12月1日（金）平面図作成開始（縮尺1/10）

12月5日（火）藤本正行氏が来跡し御教示を賜る。

12月7日（木）平面図作成終了。エレベーション図作成（第101図）。写真撮影。

(2) 取り上げ

12月12日（火）兜の調査中の保全及び取り上げにあたり、兜の養生について、桶川市東部遺跡群発掘調査会調査員 守屋（嶋村）薰氏から指導を賜った。（P137写真）

調査中の養生については、先ず兜に不織布を貼り、脆弱な箇所に脱脂綿を当て、さらに全体にもカット綿を施した。その後全面に水分を十分に与え、乾燥を避けるため二重にビニール袋をかけた。さらに衝撃回避のため発泡スチロールで囲い、固定のため麻袋で覆った。最後にブルーシートを被せ保全した。

作業スペース確保のため、25号堀東側を掘り下げた。

13日（水）報道発表。

14日（木）取り上げの準備。兜の取り上げについては、株東都文化財保存研究所取締役 朝重嘉朗氏、桶川市東部遺跡群発掘調査会調査員 宮戸昭彦氏より指導を賜り、その方法について検討・練習を実施した。

○取り上げは3日にわたって実施した。（P138・



調査状況（覆土除去）



注水により鞆を露出



鉢 挖り出し



写真撮影



報道発表
(説明)



報道発表 (記者と担当者)



養生指導 不織布カット



同 不織布・脱脂綿貼付



同



同



同 完了



同 大判の不織布を被覆



養生前



養生



養生



周囲 荒堀り



周囲三方（ウレタン充填部）溝掘り



土による被覆



ウレタン発泡剤混合



周囲三方ウレタン充填

兜取り上げ 1



上部 ウレタン充填



背面 ウレタン充填



ウレタン周囲掘削



下部ウレタン充填後、地山と切断



搬出



軽トラックへ積載



西から



北から

兜取り上げ 2

139写真)

16日（土）取り上げ1日目。不織布・脱脂綿による養生を行ない、その上に全体をカバーするよう大きな不織布を被せた。

17日（日）取り上げ2日目。周囲を大きく荒掘りし、兜から10cm程度空けて周囲三方に溝を掘る。厚さ1cm程度の土により兜をさらに被覆し、三方の溝に発泡させたウレタンを充填する。不要な土を削除した後、上部・4側面の5面をウレタンで覆い、硬化を待つ。

18日（月）取り上げ3日目。下面をハバタ（鋤）で掘削し、地山と切断する。兜が載る土の下にコンパネ板を入れ、運搬台とし6人で車に乗せる。町史編さん室に搬送し保管する。

（3）開梱・保存処理

保存処理は、（株）東都文化財保存研究所に委託し、実施した。

開梱は、ウレタン取り外し、土剥ぎ取り、脱脂綿・不織布取り外しの順で行った（P141写真）。

保存処理については、兜は、鉄と漆との異なる素材によるものであり、かつ漆皮膜のみの非常に脆弱で、複雑な構成であるため、非常に精細かつ丁寧な作業を行い、平成2年度から3年度にかけて2年の歳月を要した。

当初は、一緒に取り上げた堀底面の土の上に固定する予定であったが、高い技術による作業の結果、土をほぼ除去し、兜単体での処理が成功した。内面を詳細に観察・調査できるほど表面付着の土を除去できたものである。処理薬剤は合成樹脂で、塗布・含浸したものである。兜の状況確認のためX線撮影を行い、鉄製鉢の構造・劣化状況、漆皮膜の吹返し・ふきかえ鞆の胎部素材・状況を確認した。

保存処理後、劣化の進行を抑制し、より良い状態を保つため湿度調整可能なケース（デシケーター）を収納かつ展示ケースとした。管理湿度は、鉄と漆のため40%を目指している。設置以後遺物保護のため移動していないが、平成24年に左吹返しが自然に落下している。その際取付修復を実施したが、保存処理後30年が経過したため、再処理を令和元年度より4ヵ年計画で、劣化部分の補修・補強を行っている。

（4）兜の実測及び写真撮影

実測図は既に騎西町史編さん時に作成しているが、誤謬の修正、詳細な観察による内面図・断面図を加えるため再実測した。

実測中、固定していた左吹返しが脱落したため出土状態に近い位置にセットしなおし、実測及び写真撮影を行った。

○実測・写真撮影時の左吹返しの位置

正面・上面 一出土状態に近い位置（不固定）
両側面・内面・背面 一左吹返し脱落前の位置

実測図・写真撮影は資料保護のため精確に水平を採っていない。正位（正面・両側面・背面・断面図）は前部が2cm程度高く、逆位（内面図）は後部がやや高い。

兜と吹返し・鞆との現状の位置関係は、兜埋没後、鉢が下の空隙に自身の重みにより沈下した結果、吹返し・鞆が本来よりやや上有るものと思われる。鞆の暴れ・欠損も鞆を取り付けた鉢付鉢に引っ張られた結果によるものであろう。

（5）兜の概要（第99～105図）（口絵1～6）（図版1～13）

兜は『鉢』、『吹返し』、『鞆』で構成される。

鉢は鉄製で、発錆しその吹き出しによる瘤が各所に付着、板の空洞化、錆による土の抱き込みが見られる。また、一部土が残るが、鉢・吹返し・鞆の固定及び安定の為樹脂で固めたものである。

吹返し及び鞆を形づくる小札は内部空隙で、本来革があったものが腐食し漆皮膜のみとなったものと想定される。漆自体及び保存処理による樹脂の光沢がある。漆塗膜は一部欠損や剥落部分がある。

なお、口絵・図版・図・本文の説明中、「左」「右」は、正位正面から見た方向による。実測図・模式図の作成、計測値・説明は、実体視及びX線写真観察による。

本項は、豊田勝彦氏の御教示及び第IV章（1）現状も参考としている。

※各部の計測値は第105図・第27表参照。

『鉢』

半球形の本体と眉庇まびさし、腰巻板こしまきいたからなる。鉢の法量



開梱 周囲ウレタン切り取り



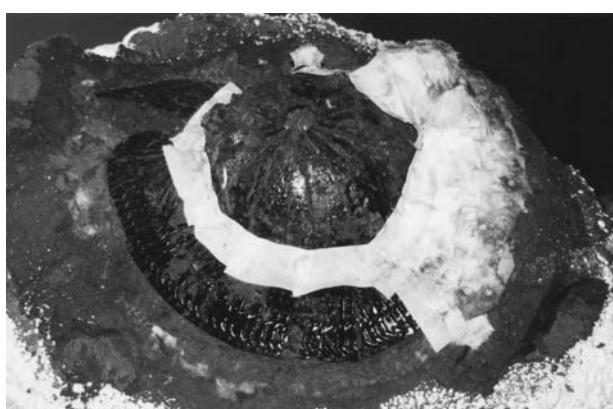
同 上部ウレタン取り外し後



同 土剥ぎ取り



同 土剥ぎ取り完了



同 脱脂綿・不織布取り外し



同 脱脂綿・不織布取り外し完了



兜 実測



同 写真撮影

は眉庇・腰巻板を含め、前後26.5cm左右24.2cmである。内外面とも黒漆が施されていたものと思われる。

本体 上面から見ると、前後22.0cm左右20.2cmの僅かに前後に長い円形である。高さは、腰巻き板上端から天辺まで9.5cm。断面形は、左右は対称の半円形で、前後は前部はやや立ち上部で屈曲し、後部は上部で弱く屈曲し緩やかに傾斜する。

矧ぎ合わせ (第102図) は、1列4本の鉢を打ち、16枚の板を半球状としたものである。**前正中板**(前面中央の板) が最上位、**後正中板**(後面中央の板) が最下位となる。他の板の名称は正位正面右側前よりR-1・2・3…とし、左側はL-1・2・3…とする。(第103図1)

板の法量(第103図2・第26表)については、長さは13.2~13.5cmで平均13.3cm、幅は下端で前正中板は5.5cm、後正中板は5.5cmである。他の14枚の板については上面図と内面図から見ると、1~2mm程度の幅があるが、5.0cmと推定できる。厚さは天辺の穴で1.5mm。

板縦辺の端を1mm立て筋とし、板の厚さを含めると見た目3~4mmある。筋は16を数える。

銘については年代・制作者を確定するものであることから前正中板・後正中板を精査したが、確認することができなかった(口絵6・図版5)。

鉢については、1列5箇所あることが確認でき、鉢中心での間隔(第25表)を平均すると、上から1.2、3.3、3.7、2.7、2.2、0.6cmである。最下位は腰巻板との取付鉢と思われる。鉢内面の鉢・孔図(第104図)では不明瞭な箇所は○で、存在が想定できるものは破線○で表示した。鉢頭部は潰れている。鉢の径は潰れているが、内面観察では5mm前後だが、X線写真では3~4mm前後、鉢穴は5~6mmである。鉢は規則的に打たれているが、後正中板の上端右・R-4の四番目(X線図版13)・L-4の四番目で欠落し、X線(図版12)ではL-2下端(鉢取付)、L-4の二番目で浮いているのが確認できる。

天辺の穴は径2.7~3.0cmを計り、やや楕円形で八幡座などの金具はない。

四天鉢及び響穴 (図版4・6、第104図) は、内面の観察により、各々4箇所設けられ、前正中右2枚目(R-2)左2枚目(L-2)、後正中右3枚

目(R-5)左3枚目(L-5)に確認できる。L-2では上面からは発鑄が顕著でいずれも確認できない。四天鉢は、腰巻板上端から4.3cmに位置し、直径1.0~0.9cm、高さ0.6cmを計る。響穴は土や鉢が付着しており上面から明確に確認できず、破線で表現した(第99・100図)。内面からは、四天鉢の1cm(いずれも中心計測)下に位置し、その輪郭を確認できる。径は0.4~0.5cmである。

眉庇 (図版3) 鉢前部に取り付けられ、その角度は鉢前面がやや立つ傾斜の延長線上にあり、水平にならない。正面上辺左右に切り込みが僅かに確認できる。側面観察で眉庇前端は腰巻板下端より1.3cm下がる。庇の端は僅かに折り返す。中央縦長さ7.7cm横幅21.5cm。眉庇基部円弧は約30cm(両端が隠れるため推定)。

眉庇と腰巻板を留める鉢は、外面から観察できないが、内面及びX線(図版12・13)により想定できるものが見られる。**祓立**を取り付けているものは径8mm。

祓立が正面に設けられる(図版3)。長方形の筒形で上端を欠損する。長さ7.4cm幅1.4cm奥行き0.9cmで、下部で鉢留めしている。下位の板は、長さ4.1cmが上端1.1cm下端幅1.0cmでほぼ平行である。

腰巻板 (口絵5・6、第103図3) 鉢本体下部に腰巻板が巡り、眉庇中央部で幅2.5cm、眉庇両端で2.2cmを計る。眉庇の端から徐々に曲げられ、後正中ではほぼ水平である。鉢との接合幅は0.5cm程度と狭い。

腰巻板には穿孔及び鉢留が見られる。前面庇側中央に1箇所(1)、L-2下(2)、(3)に三光鉢と思われる鉢、鉢付鉢(鞆を取り付けた)は4箇所想定される。眉庇の右端部R-3(4)・左端部L-3(5)外、R-6外(6)、R-7外(7)に1箇所ずつある。孔は左側には機能しない不等間隔の3箇所並ぶ(9)。後面R-7の外には欠損がある。外面に鉢の凸部が認められるのは(5)と(6)と(8)である(図版7)。

『吹返し』(図版3・第99図)

実測図で確認する。右吹返しは、ややゆるく返し



やや上方を向く。前面に見える大きさは幅9.0cm高さ8.0cmで、1段目12枚・2段目12枚の小札が前面に観察される。左吹返しは、出土時の写真では緩く返しやや上方を向く。現状はやや立ち上がる。左端を欠損するが大きさは幅9.0cm高さ9.0cmで、1段目7枚・2段目11枚である。2段目の下緘には、端より数えて右吹返しは14枚目まで、左吹返し1は5枚目まで2段菱縫^{ひし縫い}が確認でき、一部に朱が遺る。

『鞠』

調査時の兜発見の際、移植ゴテによる第1撃などにより後部を一部欠いている。また、左吹返しの根本は、残した土により観察できない。

吹返しに続くもので、2段の小札板により構成される。1段目が内側下位にあり札上端のみ露出し、2段目が外側上位に位置しほぼ全体が確認できる。水平に開いた腰巻板に沿い2段目まで水平に開く笠鞠である。

小札を下緘の孔を横に繋ぐ横縫いをした後、漆を塗付した。横縫いは上下とも各2本の革ひもで綴じた（第104図右下）。上下に繋ぐ糸は漆塗り後に施したもので、1段目の毛立ての孔から2段目の緘の孔を通した。その威し毛は腐食し、緘の孔が見通せる。2段目の毛立ての孔も抜けており、3段目に繋ぐ威し糸が通っていたか。1段目の威し毛は初めから無く、鉢付けの鉢により固定されていた。そのため、鉢が沈下した際に引っ張られ、左右1箇所が潜るようになってしまったものと思われる。小札の数は吹返しも数えて一段目が92枚、二段目が121枚である。

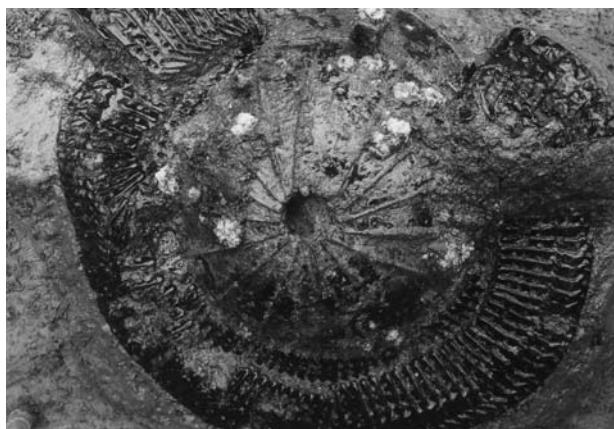
札板は、鞠後部の計測可能なものでは、長さ6.2cm・上幅1.6cm・下幅2.0cm、威し孔の中心での間隔は、緘の孔間は0.6cm、緘と毛立ての孔間は0.9cm、毛立ての孔と下緘孔間は0.9cm、下緘孔間は0.6・0.9・0.7cmである（第104図左下）。

他

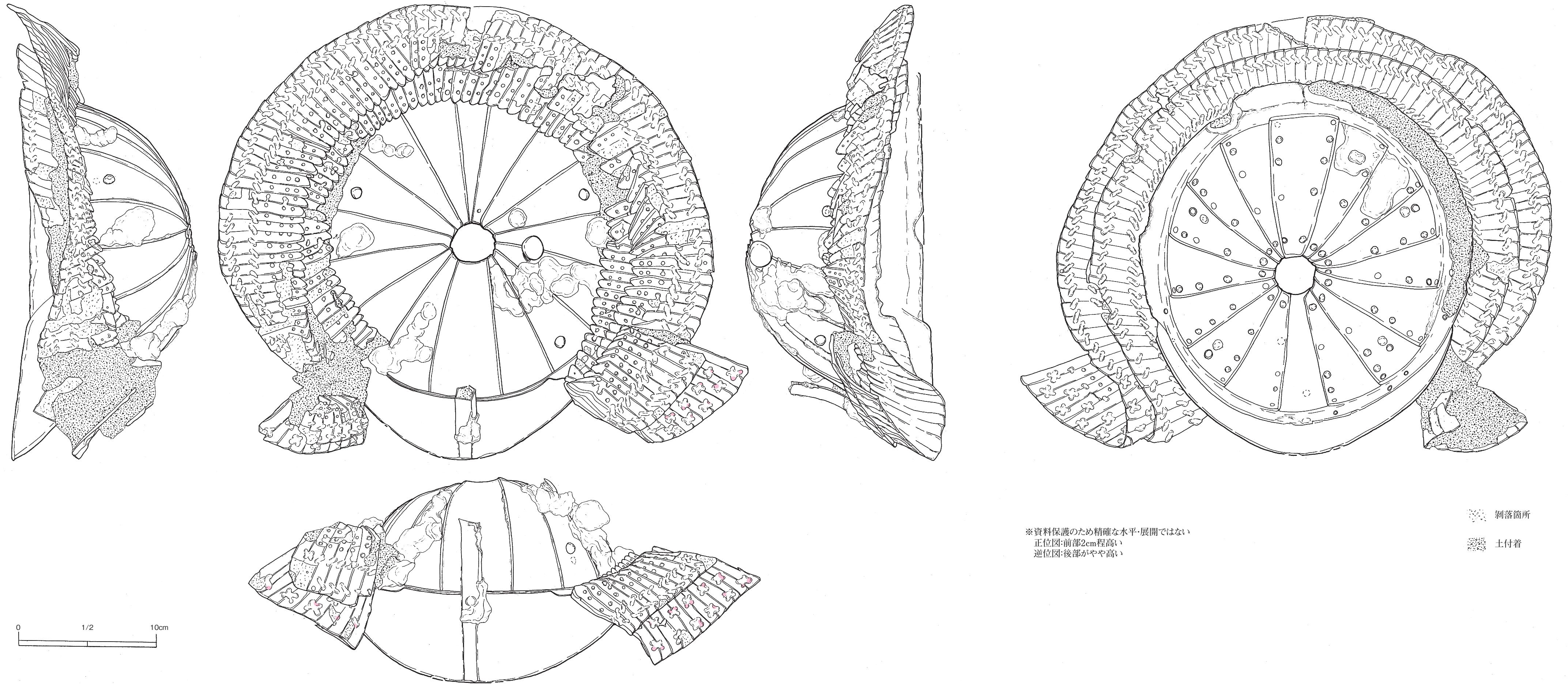
鉢左の上部には青銅製の円形の鉢が錫着している。X線により開いた足が確認できる。

25号堀出土。ID661-0705-0015-0103。保存処理No.

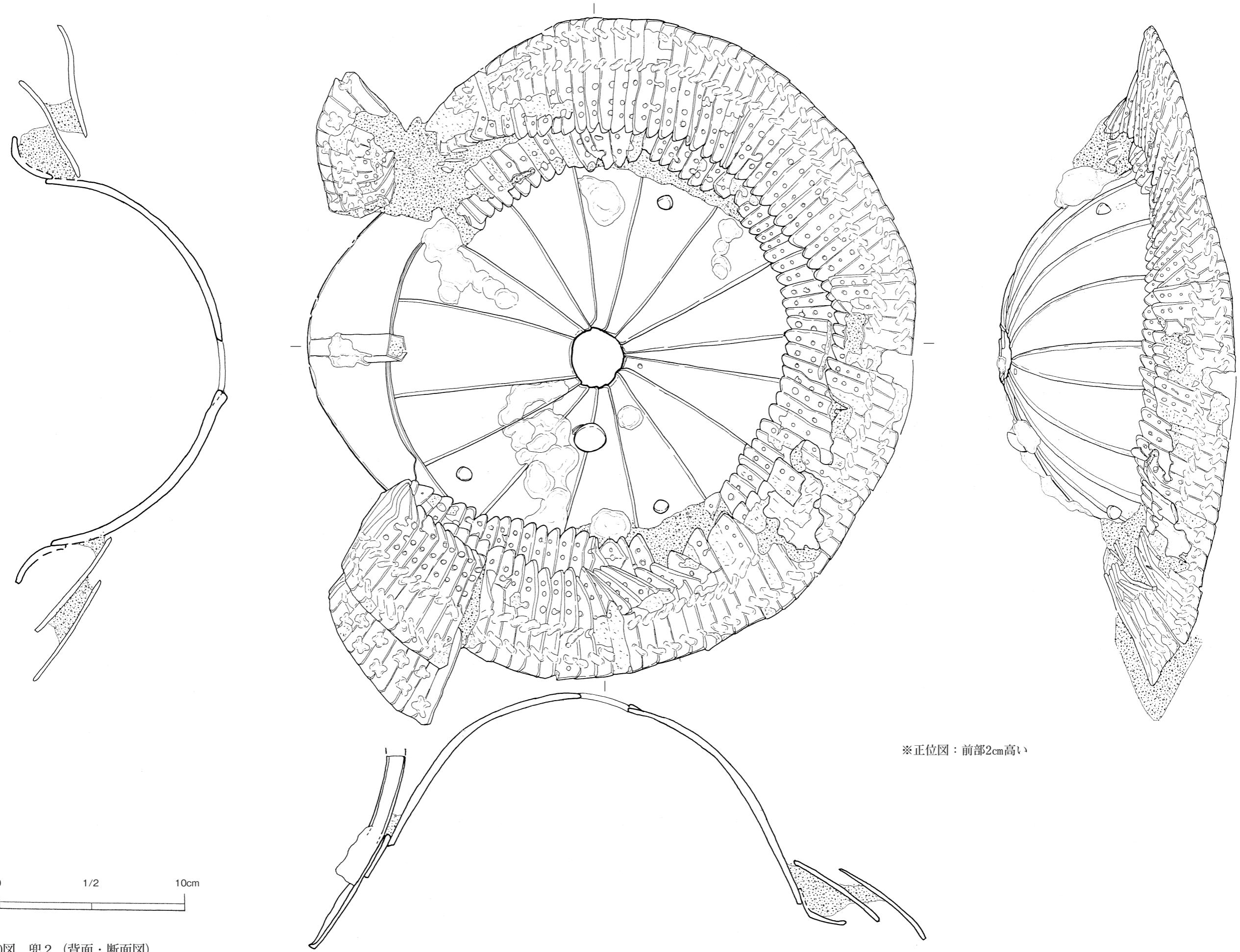
兜についてのカラー画像をHP「加須インターネット博物館【加須を訪ねる】」に掲載する予定である。参照されたい。



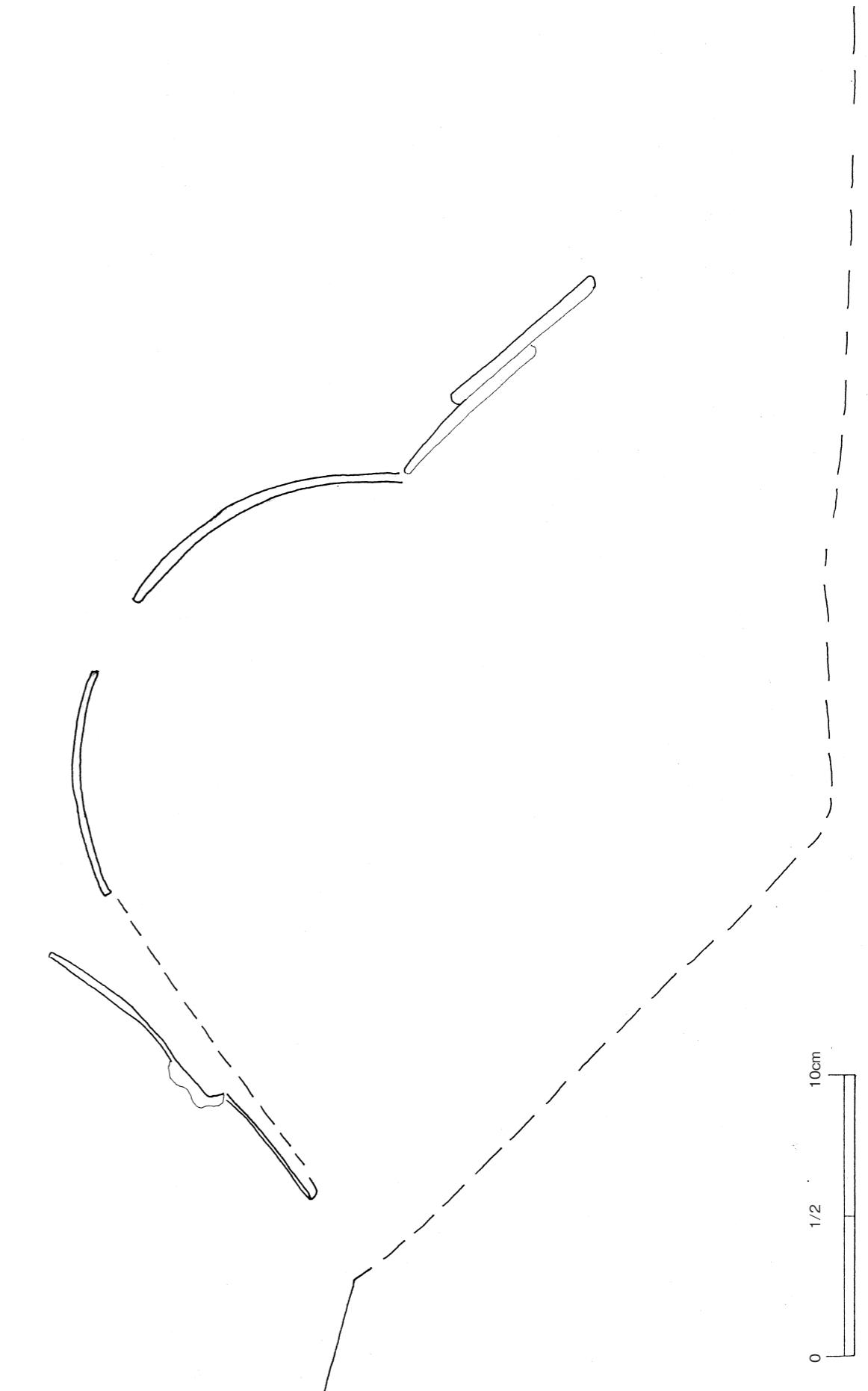
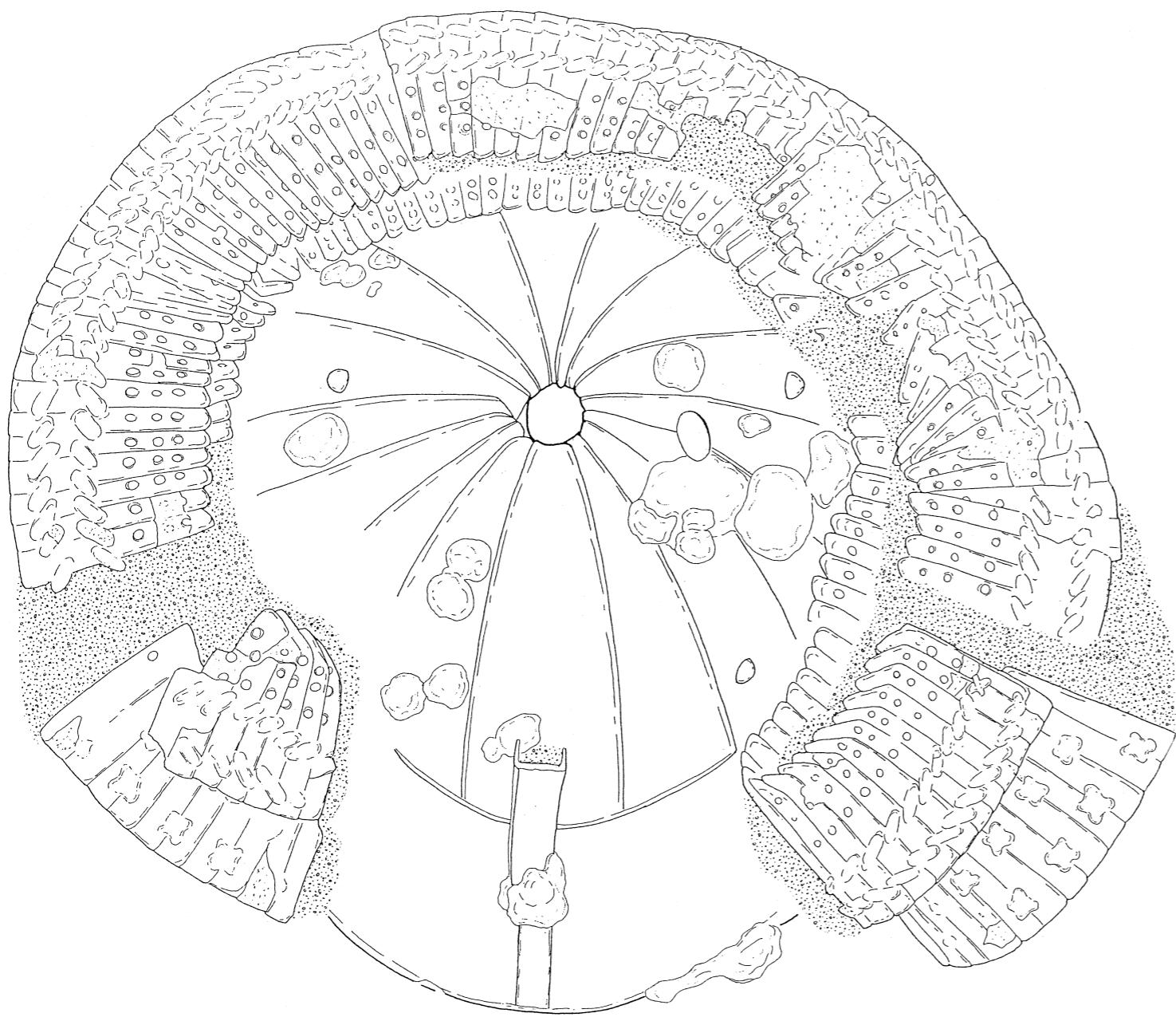
兜



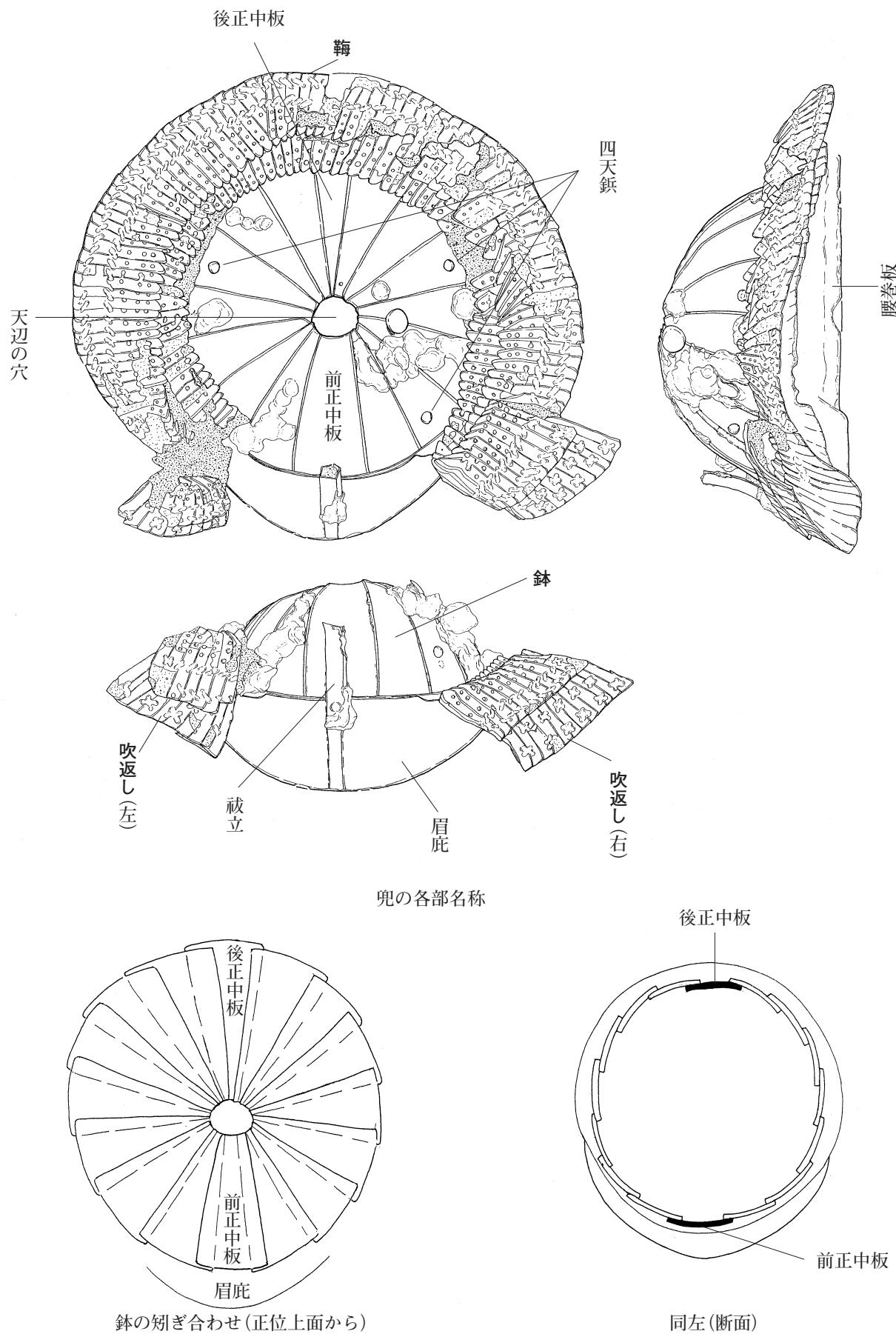
第99図 兜1 (正面・側面・上面・内面図)



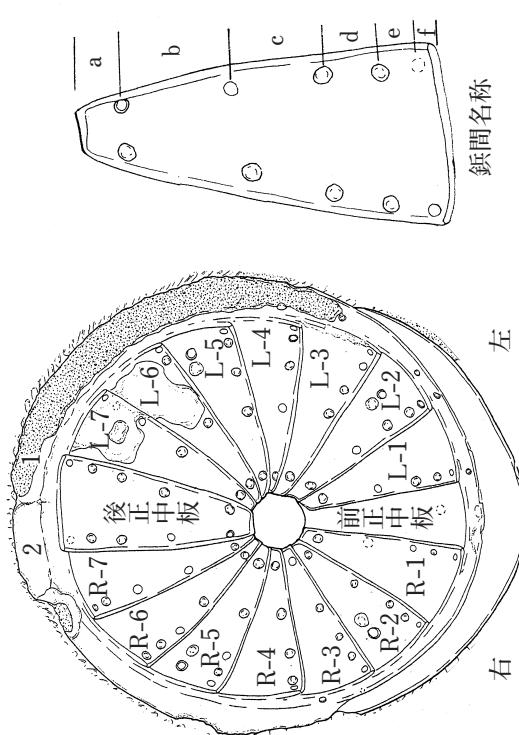
第100図 兜2 (背面・断面図)



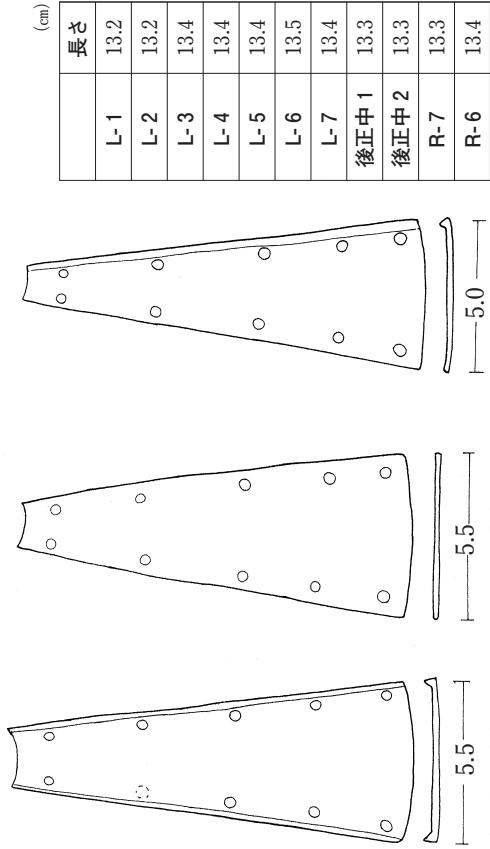
第101図 兜3 (出土状態)



第102図 兜4 (各部名称・地板矧ぎ合わせ)



1 地板名称と鍔列名(内面)

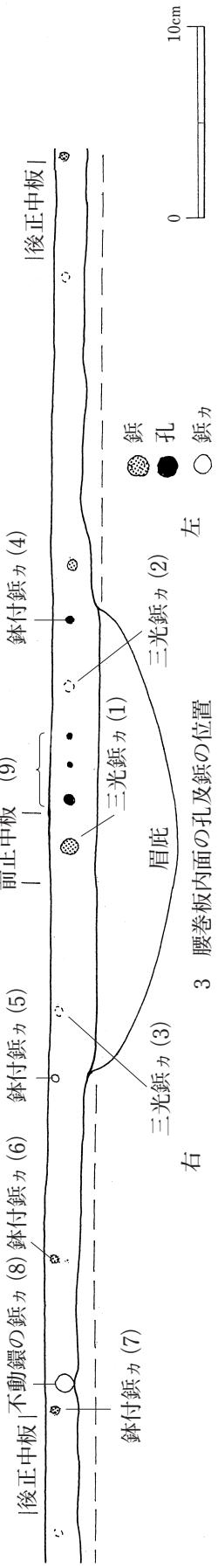


2 地板の幅(cm)

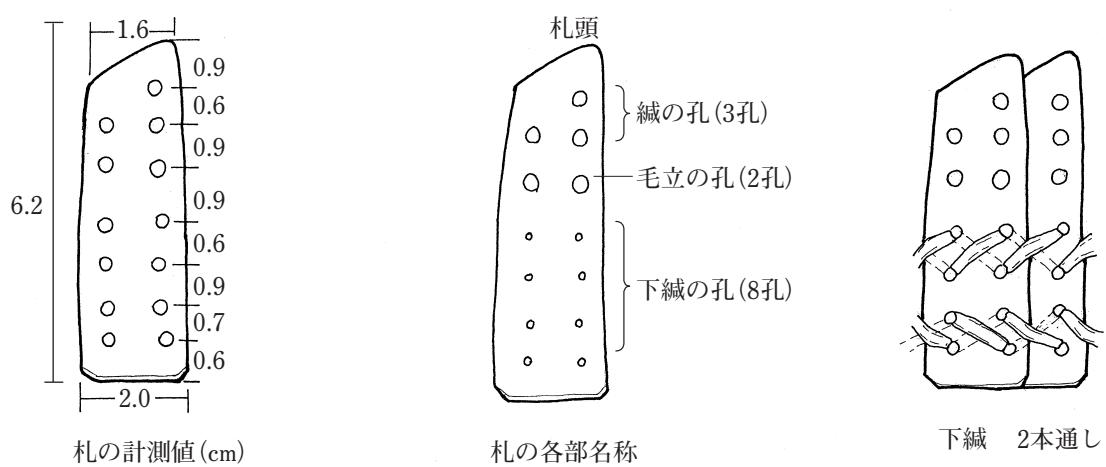
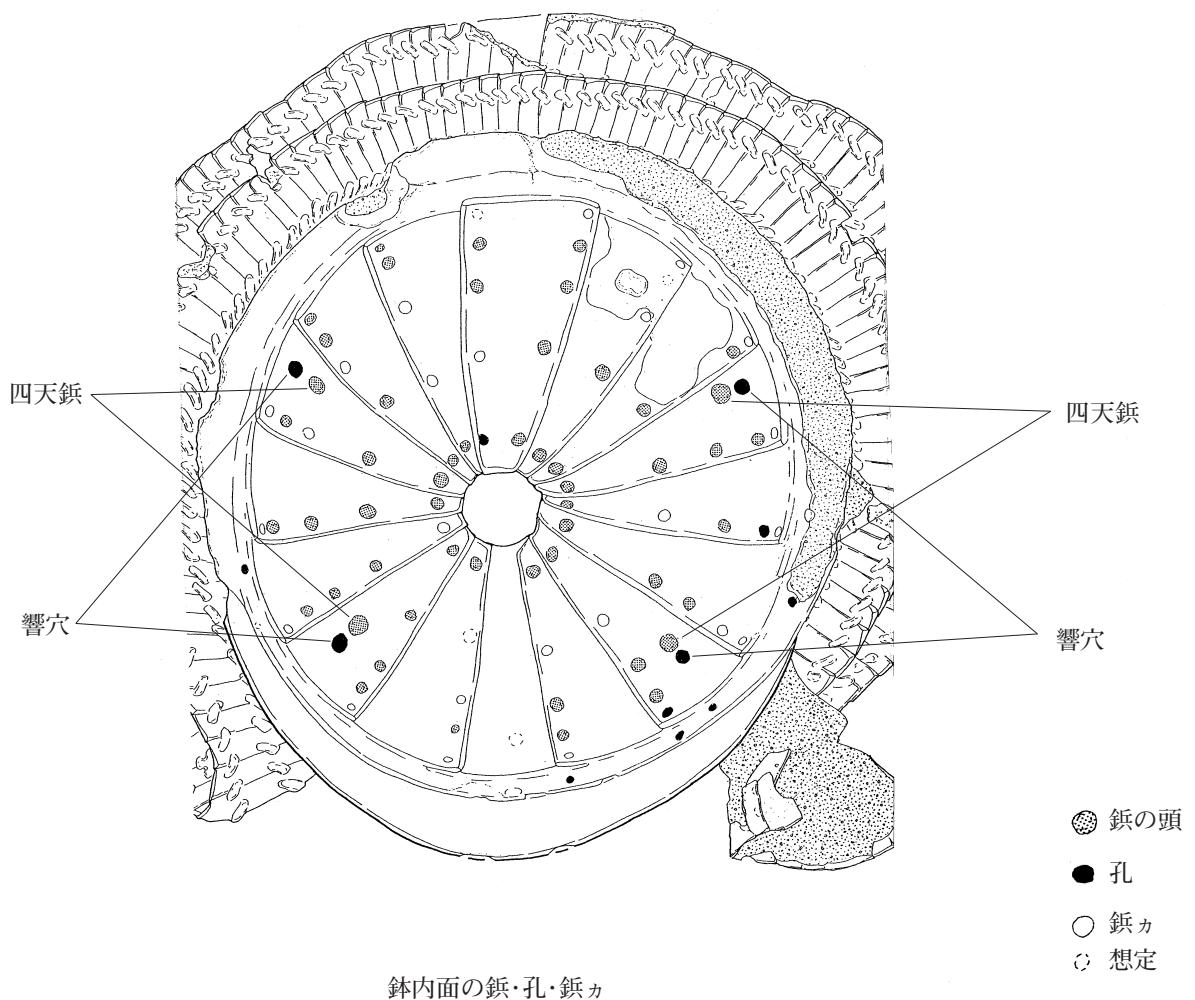
	L-1	L-2	L-3	L-4	L-5	L-6	L-7	後正中1	後正中2	R-7	R-6	R-5	R-4	R-3	R-2	R-1
a	1.3	1.0	1.5	1.3	1.0	1.3	1.0	—	1.1	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.1	1.1
b	3.2	3.0	3.6	3.2	3.3	3.5	3.0	3.3	3.3	3.2	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3	—
c	3.6	3.9	3.7	3.5	3.7	—	3.5	3.7	3.5	3.8	3.9	4.0	3.7	3.8	3.8	—
d	2.8	2.7	2.8	2.8	2.6	—	—	2.9	2.6	2.6	3.0	2.5	2.9	2.8	2.8	2.9
e	2.2	2.5	2.2	2.2	2.3	2.1	—	2.1	2.0	2.1	2.5	2.0	2.3	2.3	2.3	2.5
f	0.5	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.6	0.7	0.7	0.6	0.7	0.6	0.5	0.5	0.5

	L-1	L-2	L-3	L-4	L-5	L-6	L-7	後正中1	後正中2	R-7	R-6	R-5	R-4	R-3	R-2	R-1
a	1.3	1.0	1.5	1.3	1.0	1.3	1.0	—	1.1	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.1	1.1
b	3.2	3.0	3.6	3.2	3.3	3.5	3.0	3.3	3.3	3.2	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3	—
c	3.6	3.9	3.7	3.5	3.7	—	3.5	3.7	3.5	3.8	3.9	4.0	3.7	3.8	3.8	—
d	2.8	2.7	2.8	2.8	2.6	—	—	2.9	2.6	2.6	3.0	2.5	2.9	2.8	2.8	2.9
e	2.2	2.5	2.2	2.2	2.3	2.1	—	2.1	2.0	2.1	2.5	2.0	2.3	2.3	2.3	2.5
f	0.5	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.6	0.7	0.7	0.6	0.7	0.6	0.5	0.5	0.5

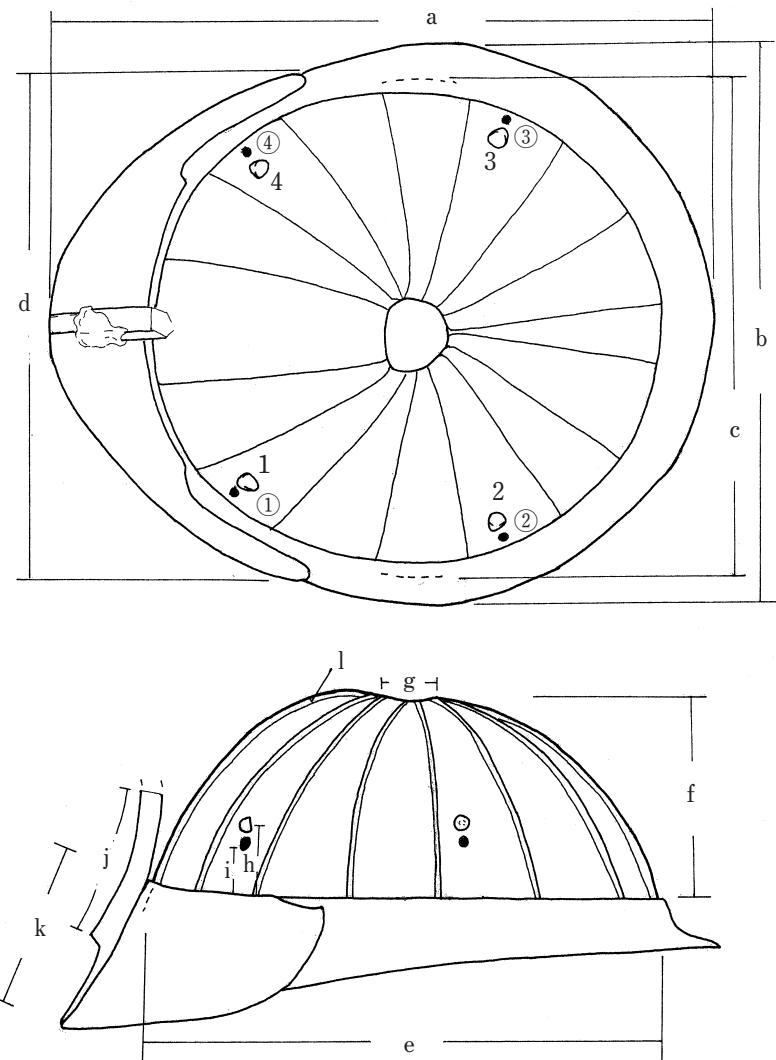
第25表 鍔内面の鍔間隔
前正中板 (9)
前正中板 (5)
鉢付鍔カ (6)
不動鍔の鍔カ (8)
後正中板 |



第103図 兜5 (鍔間隔・地板・腰巻板)



第104図 呪6 (鉢内面の鉢と孔・札板)



	計測箇所	計測値
a	眉庇先端から腰巻板後端の鉢前後長	26.5
b	腰巻板下端での鉢左右幅	24.2
c	鉢のみの幅	20.2
d	眉庇の左右幅	21.5
e	腰巻板上端の鉢前後長	22.0
f	腰巻板上端から天辺の穴までの高さ	9.5
g	天辺の穴の径	2.7
h	四天鉢の位置（腰巻板上端からの高さ）	4.3
i	響穴の位置（腰巻板上端からの高さ）	3.2
j	祓立の長さ	7.4
k	眉庇の長さ	7.7
l	筋立の最大高	0.2

	計測箇所	計測値
1	四天鉢の径	0.9
	四天鉢の高さ	0.6
2	四天鉢の径	1.0
	四天鉢の高さ	0.6
3	四天鉢の径	0.9
	四天鉢の高さ	0.6
4	四天鉢の径	不明
	四天鉢の高さ	不明
①	響穴の径（鉢内面）	0.5
②	響穴の径（鉢内面）	不明
③	響穴の径（鉢内面）	0.4
④	響穴の径（鉢内面）	0.5

*法量は全てcm

第27表 鉢各部計測値

第105図 兜7（鉢各部計測値）

第IV章 兜考察

騎西城跡出土十六間筋兜について —その現状と考察— 函工 豊田勝彦

この兜(註1)は、平成元年に騎西城跡の発掘調査で障子堀から出土したものである。札片や飾り金具等の甲冑部品はしばしば中世の発掘現場からの出土例はみられるところではあるが、兜や胴甲が粗使用されたまま発見されるのは、戦国時代の遺跡と雖も極めて珍しい。

数世紀にわたり土中に埋没していたものであり、観察や調査はすべて兜保存のため施された樹脂越しのものである。

表面から得られる往時の情報や部位ごとの計測寸法の精度は伝世資料のそれに比して及ぶべくもないが、それらを差し引いても資料的価値は計り知れない。

※写真(図4~11)
は口絵23・24にも
カラーで掲載

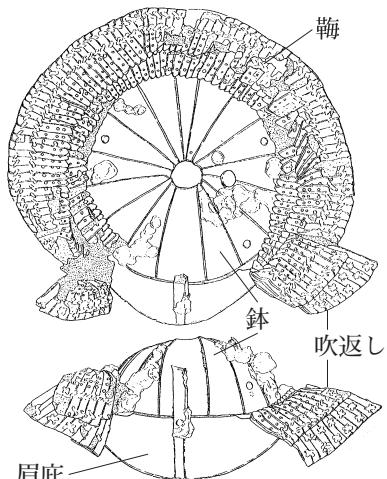


図1 兜の名称

1) 現 状

鉢

必要な勾配を加えた縦長台形状の鉄板(地板)十
六枚を横方向に剥ぎ合わせながら半球状に構成され
た円山形の
丸鉢である。
後述する腰
巻板や眉庇
ごと表裏黒
漆が施され
ている。

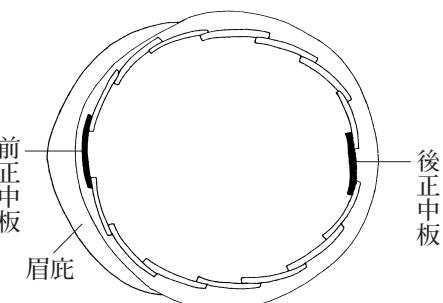


図2 鉢の構成

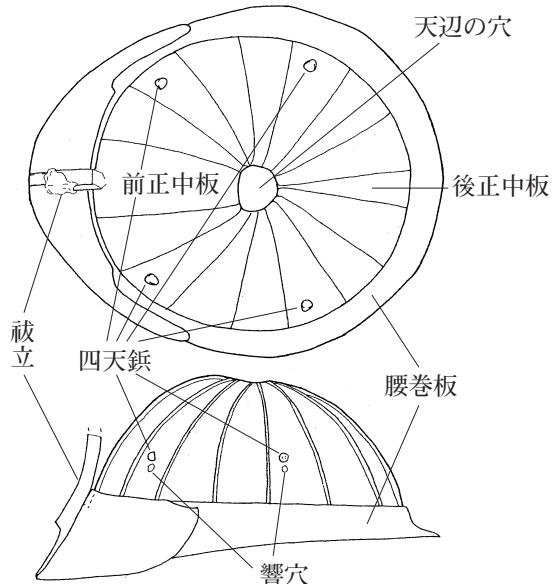


図3 鉢の詳細名称

側面左右の勾配が聊か均一に欠け、鉢形の姿はや
や歪ではあるが、鉢構成の作業に何ら躊躇いが見
られず、必要な工具や技量が全て揃った環境下、流れ
作業的に作られた製品である印象を強く受ける(註
2)。構成としては前正中板(まえじょうちゅういた)両隣板から逐次下重
なりとして後正中板(うしろじょうちゅういた)を裏から張留としている。

また、各地板の外側に露出する端部を縦方向表側
に向けて筋状に捻り返している。これ自体鉢の強度
と美観を兼ねた工夫である(註3)。なお捻り返し
は天辺の穴の縁までしっかりと施されており、この事
実からも当初から八幡座金具の取り付けを想定して
いなかったことは明瞭である。天辺の穴の径は比較的
大きく約30mmである。

地板使用の鉄材は、下部がやや厚く1.2mm位、上
に向かって逐次遞減して天辺あたりで0.8~0.7mm程
度と見受けられる。銘の類は確認できないが、地板
は表裏とも表面や断面を丁寧に整形する手間は加え
たようである。前正中から左右二枚目及び、後正中
から左右三枚目各地板下部に大きな四天鉄(しせんてい)を打つ
おり、それぞれその下に響穴(ひびきのあな)も穿たれて
いる。

こしまきいな 腰巻板

鉢底部に廻らせた鉄製帶状の板である。鉢の強化や必要な容積確保および鞆取り付けの用途を担うものである。上部外側は各地板同様捻り返しを施している。腰巻板左右から後ろまでぐるりと下半分を外側に向けて水平に折り返しており、現存する笠形の鞆を当初から想定しての作りであることは確かである。

当該兜では必ずしも腰巻板の継ぎ目が明瞭ではないが、少なくとも前正中には見い出せないので、眉庇真裏の前正中から始めて、鉢下部なりに左右均等に張り進め、後正中で張り止めたものと考えられる。

兜を頭上で固定するため、付設する忍緒を顎下で結ぶのが通常である。この緒を兜に取り付ける用途として鎌倉末期から粗室町時代を通して採用されたのが、腰巻板裏側に割足で取り付けられた金属製の不動釦（図9）である。少なくとも前寄り左右と後ろ中央の計3か所に存在していた筈だが、当該兜には見当たらない。欠損なのか別の手法が採られたのか詳かではない。

まびさし 眉庇

縦方向の膨らみが殆ど認められない大振りな眉庇である。周囲を捻り返すのみで非鉄系金属による覆輪は加えていない。鉢との取り付けは共鉄による鉢と思われるが、現状からは判別できない。眉庇左右の外れの裏側を補う要害板は設けられていないよう見える。

中央には強固に造られた共鉄製の大きな祓立が付設されており、往時かなり大きな立物を付けていたことは想像に難くない。通常見慣れている桃山から江戸時代にかけての祓立は、中央部を大きく縫らせたうえで、下部先端に向かって漸次細く通減させており、その形状から蜻蛉尻とも形容されるものであるが、当該例はおよそそのような姿には合致しない。

かなぐ 金具

前述のとおり金具製の八幡座は付設していない。後正中板上部に笠印付釦を取り付けるための穴が空けられておらず、こちらも付設しなかったことは明

らかである。なお後正中板の天辺の穴縁近くに認められる小穴は未使用で了った剥ぎ合わせ用、または鉢が欠落したものと思われる。

広く東国圏では、室町時代のある段階から近世初めにかけて、通常非鉄系金属で揃えられる実用と装飾を兼ねたこれら兜周辺の金具類を、意識して省く傾向が認められる。当該兜もその例外ではないようである。

しころ 鞆

水平方向に大きく広がる笠鞆という形容に相応しいものである。上下に連続した札板が二段残存している。一段目の吹返し部に十四穴の四目札も認めら

れるが、基本は十三穴二行札（図4）の並札による札仕立てである。（穴数による分類）

永年土中にあり、表面の黒漆塗膜のみを残し内部の札質は悉く朽損してしまったが、それゆえに全て革札であったことが窺い知れる。

両段とも複数の乱れや欠損が生じ、当初の札枚数を確認することはできないが、一段目92枚・二段目121枚は数えることができる。

使用された札は、殊更札頭に漆下地で厚く盛り上げを施しておらず、平札と呼称されて然るべきものである。また、一枚あたり表面に露出する出幅も下部で7mm～8mm程を計測し、これら札の形状と法量は、今日南北朝時代から室町時代初めと認定されている他資料に一見近似する。

ただし、現存するその時代の資料は、悉く鉄札が多数混入しており、鞆そのものが重く、それに耐え得るよう、鉢との接続は鉄製非鉄金属装等、強固な割鉢（鉢付鉢）を使用するのが例である。当該兜の鉢付鉢はすべて欠損したもようで確認できない。あるいは革札のみの軽い鞆なので、鉄製よりも強度が劣る足まで非鉄金属製の鉢で事足りると判断した結果なのかもしれない。

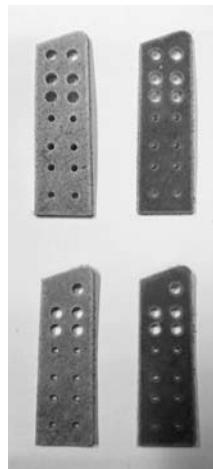


図4 鞍の札 上段は四目札。下段は並札

各札どうしの綴じは、上下とも革の断緒による二

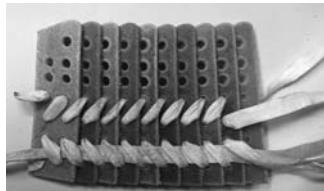
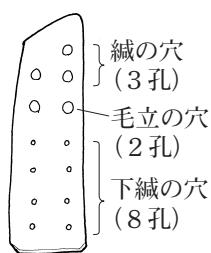


図5 上下二本取りの綴じ
下段には同じ材料で敷を加えた。その根本部位までは、



札各部名称

存他例の鞆は、多くが五段下がりのもので、札一枚



図6 試みに自作櫛引八幡宮白糸縫取威鎧鞆札を当該兜に重ね、大きさを比較した。

使い込まれたことをよく物語るものである。

札板を上下に連結する威毛は、今はその痕跡すら留めていない。よってその威し手法と使用材質は類推に頼る以外には術がない。ただし、現状各札に隙間なく整然と穿たれた縫の及び毛立ての穴は、当該兜の出土後、発掘や保存処理担当者によって補正されたものではないとのことである。威糸が一定の間隔をおいて斑に行われる素掛威であった場合、その前段階で不要な穴は漆で埋めてしまうのが普通である（図7）。

本取りで行われ、下段表側には同材料を横に通す敷を付設することも確認できる（図5）。

二段目の吹返し及び

描菱による菱縫（註5）と

しているが、それより後方は空しく毛立ての穴のままであり、往時二段目以下にも札板が連続していたことは間違いない。近い形状の札により構成された南北朝から室町時代にかけての現



図7 組紐による素掛威及び菱縫の例を示す。騎西城兜と粗同時代の腹巻の残欠。口絵23参照

それが為されていない以上当該兜では、各札の穴を悉く使用する毛引威が採用されていたと判断してよいであろう。

往時、威しの材料は紐状に畳んだ布帛・組紐・細く裁った鹿革の三者からの選択であった。使用者の嗜好にもよるが、韋が布帛・組紐に比して耐久性に優れ費用的にも割安であったことがわかつており（註6）、中世までは実用を前提とした甲冑の多くが韋威であったことが、伝世資料の多さや置文等の文献からも知られるところである。また、今日現存する中世甲冑で菱縫を描菱とする物の大半が韋威であることから鑑みて、当該兜も同様であったと思われる（図8）。

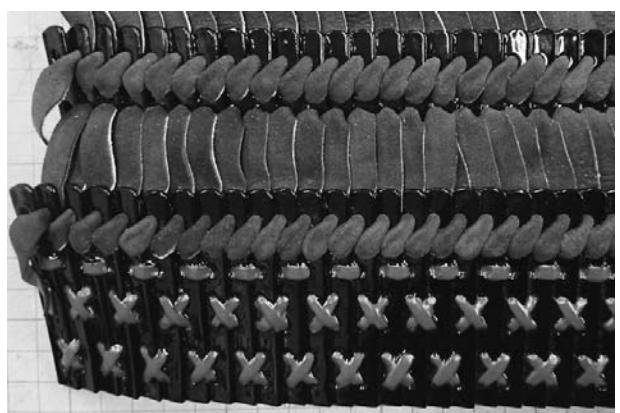


図8 著者作品による韋の毛引威および描菱の組み合わせを示す。口絵23参照

2) 考 察

この兜の持ち主

出土場所から鑑みて、重要な防衛施設を寿ぎ要害の弥栄を願う供物（註7）として騎西城側の然るべき人物によって納められたものではないか、との仮説も成り立ちそうであるが、既に使用されたものをそのように供するとも考えにくい。よって当該兜は水濠を押し渡り、障子堀まで取り付いてきた攻城方將士の遺物と想定するのがより妥当であろう。

さて騎西城をめぐっての攻防は、

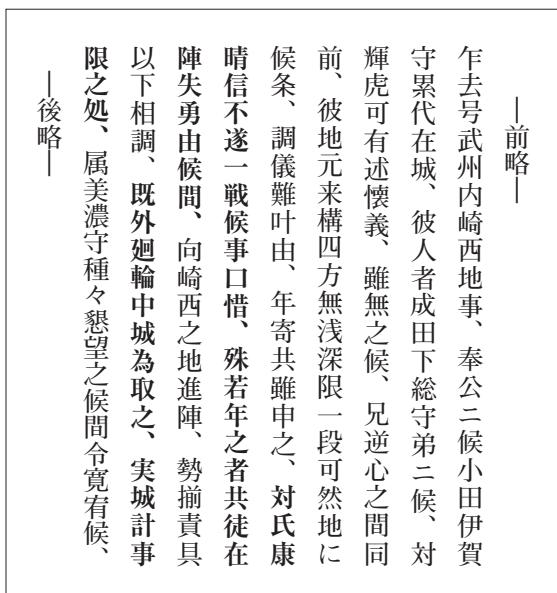
①康正元年（1455）足利成氏対崎西郡に集結した関東管領方との戦い（註8）

②永禄六年（1563）守将小田伊賀守を屈服させた上杉輝虎による攻略

③天正二年（1574）上杉謙信による再攻（註9）

の三度が知られている。そのうち要害中枢近くまで、攻城側の侵入を許した激戦が行われた事を確認できるのは、現状では②のみである。

何分にも地域の覇権を争う戦国大名間の書簡であり、自軍有利に戦果を実態以上に誇張している可能性は大いに考慮する必要はあるが、次の東京大学史料編纂所所蔵『伊藤本文書』所載蘆名盛氏宛、「永禄六年（1563）四月上杉輝虎書状写」の抜粋により、この戦いのあらましを知ることができる。



北条氏康・武田晴信連合軍の攻撃にさらされた武藏松山城救援のため関東まで出張ってきた上杉輝虎（以下謙信で統一）ではあったが、既に同要害は開

城した後であった。それなら両者と然るべき決戦を行う事を期待するも、北条・武田は既に当面の目的を達成したとして、ともに撤収した後であり、果たせなかった。自軍の戦意低下を危惧した謙信は、堅城との聞こえはあるものの、敵方の身内であるとの理由で小田伊賀守が拠る騎西城に力攻めを敢行したのであった。結果は順調であり、「外廻輪・中城」を無力化することに成功、もはや「実城 計事」すなわち本丸を残すまで陥れたところで、城方が降伏を望んだのでそれを受諾したというのが大まかな要旨である。

無論、この出兵自体は、武藏北部辺における北条・武田勢力の排除と関東管領として上杉秩序回復を大義とした出陣であり、謙信の立場からは外様となる多数の先手衆や近隣諸勢が参陣していた筈である。

しかし当初から、北条氏康や武田晴信との直接対決に及ぶ大規模な合戦が予想され、その最も信任厚い譜代の家臣団が越後から多く動員され、上杉軍の主力を形成していた事は疑うべくもないであろう。

騎西城の局地戦に限れば、大きな要素が「殊若年之者共徒在陣失勇由候間」であると云い、謙信取り立ての若年近臣層に勲功を上げさせるのが目的的作戦であったと言い換えて過言ではなさそうである。取りも直さず、この城攻めには越後本国から従軍した多くの直臣衆が参加していたことが予想され、その彼らの誰かがこの兜の持ち主であった可能性が最も濃厚と言えよう。

上杉家近臣衆の武備

さて当時の上杉家近臣衆の武備についての手掛かりを示す資料として、『新潟県史 資料編』補遺掲載の4638号文書が極めて興味深い情報を伝えてくれる。

<p>(付箋)</p> <p>「天正二年 関東陣軍器送状」</p> <p>上杉氏軍陣備品書出し</p>
<p>関東御陣御立之時、わたし申御日記</p>
<p>一、御たゞみくそく 同御おひ共ニ</p>
<p>一、御うふき</p>
<p>一、御こて</p>
<p>一、御のとわ</p>
<p>一、御はいたて</p>
<p>一、御ゑたて 同御ゑたてからミ</p>
<p>一、御すねあて</p>
<p>一、ほしの御かふと、御うち物ハ、ひの丸、御めんほう、 〔合忌〕</p>
<p>一、つがね、御うち物ハ無の字ニて候、御はんほう、 三足からす</p>
<p>一、つがね、御うち物ハ無の字ニて候、御はんほう、 むらさき</p>
<p>以上 十月十九日 御蔵</p>
<p>天正式 (ママ) 甲 戌</p>
<p>以上 十月十九日 御蔵</p>
<p>（異筆1） 一、壱つ 御うちわ 式つ くろき御かさ</p>
<p>以上 （異筆2） 一、壱つ 御うちわ</p>
<p>此ほか十一月廿一日ニ芹沢方より請取申候、 あめいろの御かさ 一、くろきたく両 たゞみくそく 一、つの、御うち物 一、つの、御うち物 一、壱つ 以上</p>

この文書は、複数の異筆を交える上に、諸道具中に見慣れない名称が使用されており、内容を完全に把握するのは困難ではあるが、時期的に判断して先に挙げた騎西城をめぐっての攻防③が行われた関東出陣に際して、「芹沢殿」に必要な武具が貸与または補填された事を示しているものだと理解してよいであろう。

なおこの「芹沢殿」とは、永年越後上杉氏を研究されてきた今福匡氏のご教示によれば、およそ大身ではないが弥四郎正信及び又次郎信胤の二代にわたって為景・謙信・景勝の歴代当主に仕えた近臣父子であったことが窺える（註10）。

前者の弥四郎正信が天文五年（1536）の三分一原合戦の段階で既に現役として武功をあげたことを、為景より与えられた感状が実証しており（註11）、こちらに登場するのは年代的に鑑みて後者の又次郎信胤に該当するものと推定される。

天正二年（1574）春日山城蔵方から芹沢本人分として渡された甲冑は、有事に際して自分具足を持たない無足人に主君や共同体が臨時に武器武具類を貸与した所謂お貸具足の類（註12）ではなく、必要な小具足類を全て皆具し、全身隙間なく悉皆防御を意識した本格的な自分具足であったことは勿論ながら、騎乗時膝廻を防御する佩楯を含んでいることは注

目に値する。これにより信胤が騎馬武者として従軍する武士であった事が十分窺えるのである。また、同時代の武田信玄や同勝頼が市河氏や島津氏等配下の国衆に課した騎馬武者の装備より質的には充実を示している（註13）。さて、春日山城内に備蓄された道具がこのように芹沢に宛がわれた事が、その頃の上杉家中としては褒章等特殊事情による過分なのか、よくあった一般事例程度の出来事だったのかは残存史料が限られており判断がつかない。ただし、信胤自身の着具分貸与が容れられた後も、それとは別に、供として参陣する信胤の従者達に着せるために、芹沢方から数回に分れた追加分が執拗に所望され、複数の異筆分とは春日山城蔵方がその度に対処した痕跡であろうと著者は判断する。

これは、裏を返せば、芹沢にとって自身及び従者分と合わせて合戦に必要な甲冑類を自ら揃えることが如何に困難なことであったのかをよく示す好例だと言えよう。近臣として総大将の傍近く仕える身でこの有様なのだから、上杉軍全体として芹沢と同等もしくはそれより軽輩の武者に於ける具足普及率が高いものであったとは到底思われない。

上杉氏関連の遺例、「越後国村松作」兜鉢

上杉氏関連の具体的な遺例として、「越後国村松作」と銘を刻む兜鉢の存在が昨今知られるところとなってきた。管見に及ぶ限りでは、目下、新潟県立歴史博物館の一頭（註14）・山形県常安寺の一頭（註15）・及び複数個人所蔵の四頭の合計6例が確認できる。今後新出資料が増えるものと期待する（註16）。

現存6例は、五頭が星兜（註17）であり、残り一頭が筋兜である。どれも形状は、中世末期の東国で盛行する先端が尖り、真上から見た形姿が卵形のものではなく、どちらかといえばそれより先行して行われていた円山と形容するのが相応しい姿を呈している。

所有者のご厚意により、現資料を手に取って調査する機会に恵まれた新潟県立歴史博物館所蔵の一頭及び個人蔵の二頭に限れば、地板をはじめ各板材は表裏及び断面何れも比較的丁寧な鑓掛け^{やすりがけ}が加えられ、構成も極めて手慣れており、無駄な仕事や躊躇^{ためら}いの跡は一切感じられなかった。三例とも腰巻板を正面で継ぎ合わせている。

特に特徴的なのは、鉢と眉庇を留める鉄鋤（所謂三光鋤）裏側の処理である。実見中二頭（新潟県立歴史博物館と個人蔵）は受張が一部剥がれており、眉庇付け根裏側を視認することが可能である。双方とも各鋤は足を二本足として比較的長いまま裏側で広げ曲げて留めているのである（図9）。より古い時代に普遍的な鉄製金銅装や金銅製鋤等の事例以外では珍しい細工であると言えよう。同時期同等兜の場合、通常この部位の鉄製鋤は一本足であり、裏側で叩いて潰すリベット留めが一般的である。

また、外見上からの観察ではあるが制作当初と思しき縦方向のふくらみが小さい眉庇を具備する例は、何れも上部左右の繰り込みが極めて浅いか皆無で、構造上^{すべからく}須く要害板を必要としないものと見受けられる。



図9 新潟県立歴史博物館所蔵 兜眉庇裏側 腰巻板の継ぎ合わせ・留鋤の処理・要害板の設けが無い事が確認できる。また画像上部左右に金銅製の不動環が見える。

さて、同じ銘が刻まれている以上当然であろうが、現存六例はかなり制作工程においては共通性を有していると言えそうである。さりながら構成地板数も、六十から三十枚とばらばらで個体ごとの個性もかなり強く、これらが全て同一工人の仕事に拠るところとはおよそ思われない。よって現状から得られた情報から判断する限り、眉庇や祓立を加えた兜鉢を最終製品とし、互換性を伴わない部品を用意し、作業を行う上で必須な治具や工具を揃え、多勢の工人を擁し、彼らを駆使しながら、規格が異なる複数製品を同時進行で製造する能力を有する工房による仕事であるとの解釈が妥当なようである。「越後国村松作」とはその產品であることを示す商標（ブランド）に他ならない。

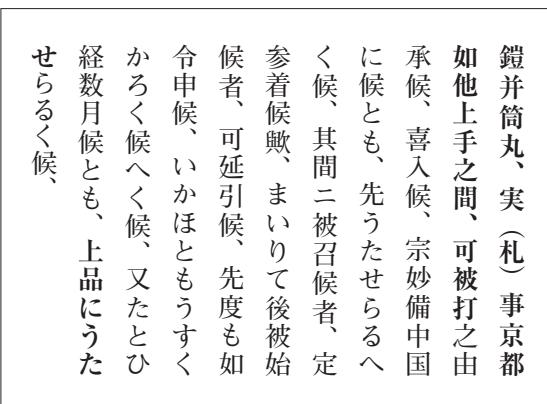
一定の生産力を維持するためにかなり細分化した分業制が採用されたことは想像に難くなく、またいずれも技術的に高度な専門性が要求されることから、農業や漁業等他業種との兼業で片手間仕事であろう筈はない。旺盛な需要が存在したとの前提の上、都市的な空間にあって下職^{したしょく}を含めても従事者全員が作業に特化し、見返りとして得られた対価で生活が^{まかな}賄えた環境にあったことが想定される。実際、資料によっては國の字に続けて「府中住」とか、村松作に続けて「宗吉」との個名を入れた事例も認められ、さらに2例においては永禄年代の制作年紀も記されており、謙信統治時代にまさしくその膝下で生産されていたことを物語っており、需要層は越後上杉氏とその家臣団及び友好的な国人衆ということになろう。

上杉氏関連の遺物に特徴的な鞠

村松作兜鉢と並んで、目下のところ上杉氏関連の遺物に集中して確認できる特徴的な鞠の存在も触るべきであろう。なお、同家の兜は外側の笠鞠に加えて内側にもう一つ重ねる二重鞠を行うことが知られており、上杉神社所蔵 六十間筋兜（註18）、新潟県立歴史博物館所蔵 六十間筋兜等がその好例といえるが、内鞠の方は本題の騎西城跡出土兜と関連しないので本稿では割愛する。

わが国の甲冑は、古墳時代後半以降、前述した鉄や革で作られた札と呼ばれる小片を綴じ合わせてその主要部分を構成するという歴史を経たものであり、無論鞠もその例外ではない。中世に限れば、札は平安時代末期あたりを最大最厚とし、概して時代の下降とともに徐々に小型軽薄化が進行した（註19）。この傾向は中世の人々にも認識されていたようで、室町時代中半以降小型の札つまり「小札」という名称が次第に定着している。それ以前の歴史用語は「札」である。当稿では便宜上後者で用語を統一する。

次に正中二年（1325）とされる『金沢文庫文書』「金沢貞顕書状」の文書を示す。



おそらく、鎧や胴丸が最終的に構成された関東もしくは鎌倉とは遠く離れた京都で札が作られていると述べられている。

当然札を作る工人（札打）は、自分達の手による部品を使用する甲冑の全体像を知る術はない。既に、鎌倉時代末葉の段階で甲冑制作が地理的に広域な広がりを有する、分業体制で成り立っていた産業であったことを物語っている。また、前代に比しての小型化も汎用性を高める意味で必須であったことは想像に難くない。

南北朝以降室町時代を通して、甲冑に使用された札の法量は全国的に伝世・埋蔵何れの資料でも前代に比して格段の均一性を見せており、少ない種類の規格品を、高精度に維持し安定供給できた産地（おそらく畿内が最大の生産地）で機械的に生産された札が、広く認知されたことで、半製品状態での流通に拍車がかかったものと推定される。

また、札の小型軽薄化はそれ以前にものに比して、甲冑の防御性能を低下させる事を意味した。そのため、14世紀末あたりから札を重ねた際、表側に露出する部位に漆下地を厚く盛り上げ、強度不足を人工的に補填する事が始まった。これを、従来の平札に対し盛上札と称して賞玩され、以後それが標準化していった。

一方、中世末葉に至り、一枚板の鉄や革片を札板としたものが出現する。これをその形状から本小札に対し板札と言い、それを採用した甲冑を、従来の小札仕立てに対して板物と今日でも一般的に呼称されている（註20）。当初の板札は、必要とされた法量を直線形に切放しとしたものか、外部に露出する断面端部を表方向にむけて筋状に折り曲げる程度の處理に髹漆を施したものに過ぎなかった（図10）。



図10 個人蔵 三十間星兜 「越後之國住村松作宗吉」の銘が鉢裏に刻まれている。四段下がりの板札を紺糸で素掛威としている。なおこの鞠は鉢よりも幾らか新様なようである。

しかし、板札が認知され広く普及するにつれて次第に差別化されたのか、各板札上部を鋸歯状に整形し、丁寧に漆下地を加え、恰も前述の盛上札を擬態化した切付盛上札（きりつけもりあげざね あるいは きっつけもりあげざね）が、程なく登場した。近世に至り、切付盛上札は、手本とされた盛上札を凌駕するまでに隆盛を極め、今日現存する江戸時代の甲冑の多くがこの技法を駆使したものである。

さらに、従来切付盛上札の一種として認識されてきたものに、漆下地による本格的な盛り上げは施さず、代わりに裏側から叩き出し、表面等間隔に凹凸を表し、恰も小札を繋げた札板に見せた鉄板札も存在した。全国的に類例の多いものではないが、現状遺物は上杉氏関連に集中しており、管見に及ぶ限り全て鞞である（註21）。

一方で、兜に付属する胴甲には惜しみなく盛上札が使用されていた事は確認できる。このデザインが越後上杉氏やその周辺にあっての特殊な嗜好によるものか、あるいは鞞の部材として盛上札を用いる事を物理的に阻害する何らかの要因があったのか詳かではない。

この鉄板札は、材料の制約上、盛上札や切付盛上札程強い凹凸は望めず、それらに比して平坦な仕上がりを見せる技法であり（図11）、盛り上げを施さない平札の擬態であると考えざるを得ない。

これは越後ではそう遡らない時期あるいは並行して、平札立ての鞞が用いられていた事を示唆するものである。関東や東北では急速に札を排した甲冑に移行する時期に附合するものであり（註22）、太平洋側では入手困難な上方や西国製の材料や部材を、日本海ルートを介して得られる状態にあった越後の特殊性に依拠するところと考えて良いであろう。

3) 結語

以上を踏まえて騎西城跡出土兜を村松兜鉢及び上杉関連遺物笠鞞と比較すると以下の事が言えそうである。

当該兜は、十六と少ない間数及び腰巻板継ぎ合わせを後正中に配し、数少ない確認可能な村松兜鉢とは差異を示すものではあるが、それ以外では極めて

類似した要素を示すものである。一方鞞も構造及び形状において、伝世する他資料との共通性が大いに見出せるものである。

変遷過程としては、騎西城跡出土兜→上杉神社所蔵 六十間筋兜（伝上杉謙信所用）→新潟県立博物館所蔵 六十間筋兜（伝上杉景勝所用（図11））と理解する。

よって騎西城跡出土兜は、村松兜の原型で初期モデルといえる。すなわちこれが土台となり、より高級化を図ったものが村松兜である。あるいは早期村松兜の無印量産型が、騎西城跡出土兜であるといえよう。



図11 新潟県立歴史博物館所蔵 六十間筋兜 鉢裏に「永禄六年癸亥八月吉日越後之國村松作」の銘を刻む。鉄板叩き出しの板札三段下がりの鞞。

4) あとがき

騎西城跡出土兜を私自身初見したのは、戦国時代やその時代の遺物をこよなく愛好する愛知県在住の友人が偶々上京、それなら彼に手蔓のないだろう資料を見せたくて普段は公開していないかった当該兜を当時の担当者に無理をお願いして拝見したものであった。平成10年代後半頃だっただろうか、無論未だ合併前の北埼玉郡騎西町の時代であった。

初期の武士団から鎌倉時代前夜10～12世紀あたりが興味の中心であり、地方官衙や地域有力者の館跡

からの出土品がどちらかといえば感心の対象であった身の上から言えば、正直あまり積極的な動機ではなかった。それでも当兜や騎西城跡から発掘された札片や鎧の袖に付く笄金物の残欠は大いに目を見張るものであった。当時は他の甲冑研究者同様南北朝から室町時代初め頃の物に見えたものである。

出土当初からこの資料を担当されている嶋村英之氏は、聞けば抑々縄文時代を深く勉強され、その方面的知識も活用できる職場と期待して当時の騎西町の埋蔵文化財担当として職場を求めた方とのことであった。しかるに、中世末の要害遺跡との関わりが、彼の最大の仕事となり、定年退職の記念品として友人に配られたという手拭いにも兜のデザインが大きく刷られ、如何にこの遺物が現役時代の彼にとって重要な出来事であった事を物語っている。それは、埋蔵文化財行政に関わると出土品は選べない理を如何なく教えてくれた事例である。氏のこの転変譚が何よりも私自身にとっては印象深く、身につまされる話であった。その後にこの分野では同様の経験者がとても多い事を知り、以降何れと話す際には騎西城の嶋村氏を便利な例えとしてよく使わせてもらっている。結果的に同氏とこの兜とはとても長いお付き合いとなった。

さて、加須市として報告書を刊行されるとの事で、当該兜の執筆を依頼された。少しでも資料の認知度を上げることにつながるのではと思い軽い気持ちで引き受けたが、不慣れな戦国時代や上杉氏関係文書の読み込みは楽ではなかった。

ただその過程で当該資料の使用年代の下限が永禄六年（1563）であることに確信を持つこととなったのである。

末筆ではありますが、今福匡氏には文献を御教示戴きました。上田治男氏、前嶋敏氏、新潟県立博物館には資料実見及び写真掲載許可を戴きました。ご芳名を記して感謝の意を表します。

(註1) 日本の兜は、時代を問わず多くの場合、縦長台形なりの鉄板を横方向に剥ぎ合わせながら半球状に鉢を構成する。

また、鉢自体の強度と美観を兼ねて平安時代末期以来、外側に露出する側の剥ぎ板縦方向の断面を表側に向けて捻り返すことが普遍的に行われるようになり、この部分を筋と呼んでいる。筋とその隣の筋のあいだを間と云い、六十二間等通常その数によって兜鉢を呼称することが多い。

一方、鎧垂や飾り地板等の装飾物が、剥ぎ板をまたいで加えられ、外見から実際の剥ぎ板の枚数が確認できないため、ある意味仕方なく間数から判断せざるを得ない事例が多く存在する。当該兜の場合、剥ぎ板の枚数が十六枚と明白であり、その枚数と間数が一致する例である。

(註2) X線写真（図版10・12・13）により地板毎の鉢の数や位置が概ね均等であることが窺われる。勾配を施す以前の平板または地板を鉄材から板状に打ち出す段階で、鉢の位置や間隔が規定されていたのは明瞭である。

部品の規格が予め厳密に決められており、作業を実行するために必要な型紙等の道具類や知識が充分蓄積され、手練れの工人達の分業制下計画的に同型製品を同時複数生産していた環境が想定される。

(註3) 地板どうしの繋ぎに使用した鉢の頭を装飾として突出的に見せるものを星兜^{ほしかぶと}と言い、それに對して当該兜のごとく、敢えて平頭を用いて鉢を見せないかわりに筋立てを強調したものを一般的に筋兜^{すじかぶと}と呼ぶ。鉢の構造はどちらも同じである。

(註4) 頭上に被った兜を固定する忍緒と呼ぶ頸紐^{しのびのお}は、ある時代まで直接この響穴^{ひびきのあな}から鉢内側に出されていた。四天鉢^{よんてんばつ}とは、外側に露出する忍緒の根を斬撃^{ざんげき}によって損なわれるのを防ぐ為のものである。

やがて、鎌倉時代末期位から腰巻板内側に取り付けた不動鎧^{ふどうかん}が兜への忍緒装着の役割を果たすようになるに及び、響穴・四天鉢共に実用性を消失する。それでも中世末期あたりまで前代の名残としてしばしば兜に施され続けた。当該兜もそれに

漏れるものではない。

(註5) 上下に何段か連続させた札板中、最下段の下綴じは外に露出する。往時の人達はそれが体裁の良いものとは思わなかったとみて、最下段に限って×状の綴じ目が横に連続する綴じ方を採用した。漆でその板を塗り込めた後、組紐や革緒の類で今一度飾り縫いを加えて菱縫と称している。

描菱は塗り上げた後の札板に、綴じの部分を朱漆でなぞり、恰も菱縫を施したかのように見せる手法である。前者よりは手間と費用を抑えた省略技法である。

(註6) 寛正六年(1465)春日若宮の秋季大祭見物のため將軍足利義政が南都(奈良)を訪ねている。受け入れ側の興福寺大乗院では足利義教時の前例に則り、甲冑その他の引き出物を用意する事とした。

以下六月晦日の記述は現段階での材料の揃い具合と内訳費用を示しており貴重である。概して韋革類が組紐に比して廉価であることがよくわかる。所用者好みとは別に費用を低く抑えようすれば、韋威が選択されたことが容易に想像される。

『大乗院寺社雜事記』 寛正六年(1465)六月晦日	
一貫五百文	腹巻細工今日ヨリ始之糸具足一両
甲鉢五貫文	下地塗立代三十五貫文
五目皮一枚四百四十文	ムナ板押付等金具
ひきはた百五十文	金物地ホリ桐タウ二十貫文
きんらん百五十文	立文六十文
き皮五百文	面皮一枚
菖蒲皮一又百文	ひきはた百五十文
みのいと上帶六貫文	立文六十文
ひしの糸くみちん一貫五百文	ぬい糸十五文
肩糸	なめし五百文
一貫五百文	浅黄糸百筋
ひしの糸くみちん一貫二百五十文	二十貫文
上卷袖緒	ふせくみぬいちん

(註7) 忍城跡の本丸と諏訪曲輪を繋ぐ橋脚下から人為的に安置された馬頭骨が出土している。城及び重要施設の永続性を祈念した供物と考えられている。

(註8) 享徳の乱に際して、下総古河に根拠を据えた古河公方足利成氏と旧利根川対岸に展開した上杉関東管領方は激しく対立した。騎西城が位置する武藏北東部はしばしば戦いの最前線となった。

足利成氏が京都の三条実雅に宛てた康正二年(1456)四月四日付け書状によれば、崎西辺に結集した関東管領方と合戦に及び、相手方に打撃を与えて敗走させたと主張している。

一上相八郎・同序鼻和六郎・同七郎・長尾左衛門入道以下両国一揆等、武州崎西郡ニ相集、輝玄申間、將帥於差副數多兵軍、去年十二月三日・同六日致軍戰、為宗勇兵等數百人討取候了、残逆等方々皆以令馳走候
（国立公文書館所蔵「武家事紀」所載足利成氏書状写）抜粹

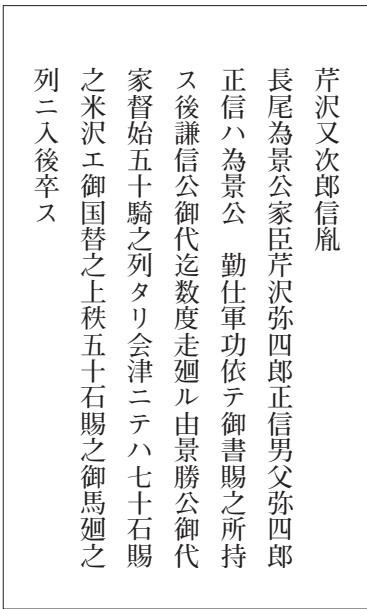
(註9) 武藏国をほぼ手中に収め、利根川以北や房総圏にも霸権を拡大しつつあった北条氏に対する牽制と反北条勢力結集のため、この年謙信は年初及び後半と二度関東に出陣したことが確認できる。特に二度目は、謙信にとって重要な同盟関係にあった築田晴助・持助父子が治める要衝下総関宿城が北条方に包囲され存亡の危機に瀕しており、速やかな救援を必要としていた。

謙信率いる越後勢は、北条与党の切り崩しや攻城軍の後方攪乱更に北条氏政本軍を誘引するために、各地で焼き討ちや乱取りを繰り広げた。騎西城周辺に対する軍事行動もこの一端とみられる。ただし結果的には反北条勢力の足並みが揃わず後詰が間に合わなかったので、肝心の関宿城は北条の軍門に降ってしまい、謙信とその軍勢は得ると

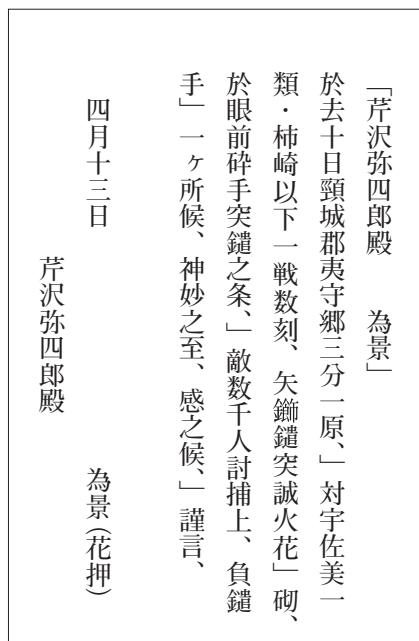
ころなく越後に帰陣するのであった。

この年2度目の関東出兵については『名将之消息録』所載 天正二年（1574）閏十一月二十日付け蘆名盛氏宛上杉謙信の長い書状で概要が窺える。
※この註はその書状の要約である。

(註10) 『上杉家御年譜』所載「御家中諸氏略系譜」



(註11) 『新潟県史三』所載3483号文書「長尾為景感状」



(註12) 麻や木綿等の植物性布帛類に金属や皮革などで作られた札板や座板及び鎖等を縫い付けて仕立

てた胴甲を中心に構成された甲冑を、近世に至り一般的にたたみ具足と認識されている。構造上小さく収納出来たので一ヶ所に大量に保管するには好都合であり、江戸時代のお貸具足レベルの甲冑としては今日よく見かけるものである。

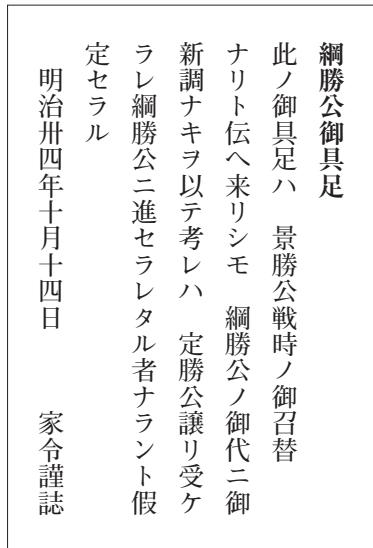
だからと言って戦国期の文書に現れたものも同様と解釈するのは早計であろう。殊に上杉家関連の道具としては、上記の構造を満たす具足が上杉神社及び個人蔵品に知られ、何れも景勝所用との伝来を有する高級品である。

また一方で蝶番を極端に多用した五枚胴が上杉家関係及び旧勢力圏で発見されている。こちらも現状では「たゞみくそく」に附合せずとは言い難い。今日の研究水準をして当該文書に登場する具足をその名称のみから近世遺品と同一視するのは甚だ危険である。

(註13) 『市河文書』所載 永禄十二年（1569）十月十二日付け「市河信房宛武田信玄軍役定書」及び、『島津文書』所載 天正六年（1578）八月二十三日付け「島津奏忠宛武田勝頼軍役定書」に見える騎兵の装備内容はいずれも以下の通り、ほぼ同じである。

咽輪	一	乗馬之衆	貴賤共に甲
手蓋（籠手）	一	面頬當	
脛當	一	差物たるべし	
も除べからざるの事	此内一物		

(註14) この資料は具足一式として個人の手を経た後、新潟県立歴史博物館が平成27年（2015）に入手したものである。付属する具足櫃蓋裏に以下の由緒を記す貼紙がなされており注目される。



これによれば、当該具足は初代景勝所用として米沢上杉家に伝来し、後年、手を加えて四代藩主綱勝に転用された旨が窺われ、代々大切に扱われてきた品物であり、上杉家から流出したのもこの明治三十四年（1901）を遡るものではないことが知られる。

現存する同時代と思われる他の資料と比較しても、前記を否定する材料は見いだせず、景勝遺品との伝来は信頼して良いであろう。さらに言えば他の景勝伝来品と比較して聊か小振りな印象は否めない。永禄九年（1566）が初陣とされる景勝のために謙信が特別に詫えさせた具足として期待も込めて考える余地はある。

また兜（図9・11）と前立に限れば、明らかな綱勝期及び、それ以降の改修や修理の痕跡を少なくとも著者は見つけられず、当初の姿を留める貴重な事例として積極的に評価するものである。

(註15) 本庄繁長所用と云う。常安寺は本庄氏の菩提寺であり、この伝来は肯定して良さそうである。ただし両者の結縁は早くとも上杉家が所領の再減を被る寛文四年（1664）以降の事である。

現在当該兜には、江戸時代中半以降に付けられた天辺金具と前立が付属する。慶長十八年（1614）十二月繁長没後久しく彼の子孫に伝来し、その後江戸時代の価値観に則り増補が施され、更にその後常安寺に納められたものと考えられる。

福岡市博物館『特別展 侍 もののふの美の系

譜』図録所載特別寄稿「戦国・桃山期における甲冑の東西」で紹介されている。

(註16) 上杉神社伝世品中にも、外見上村松在銘品に類似するものが認められる。

(註17) 個人蔵の一例は外見上星兜ではあるが、もはやそれは各地板どうしの接続部に打たれておらず、接続の用途を担う実用の鉢は全て平頭とした隠鉢である。つまりこの兜の実態は筋兜である。星鉢がもはや伝統を示す装飾に移行しつつあることを物語っている。

(註18) 先年の大火で社殿悉く灰燼に帰し、失われてしまった神宝・社宝類を補填するために、大正十二年（1923）上杉家から祭神所縁の多くの伝世重宝が再建された上杉神社に奉納された。その中でおそらく最も貴重なのが色々威腹巻であろう。この兜はその胴と一具として伝來したものである。その信仰に基づくとされる飯縄権現の前立と併せて、上杉謙信が登場する時代劇等ではその着具として今まで多くの場合この兜の形状が採用され、かなり有名なものである。

六十間の筋鉢は現状からは確認できないが、村松作兜鉢の可能性を有する。鞠は平札を革できめ込み透き漆を施し浅葱糸で素掛威しとする。鉢の間数や鞠を革包みとする等の違いはあるが、全体としての形姿は騎西城跡出土兜に極めてよく似ており、嗜好や制作環境の共通性を示しているものといえよう。

(註19) 現存する平安時代末期の大鎧の殆どは、分厚な二枚重ねの革札、若しくはそれよりも薄い三枚重ねの革札で殆どの部位が構成され、鉄札は胴正面等限られた使用が普通なようである。革札による厚い札板の甲冑こそが理想視されていたことが窺える。

一方時代の下降に伴い、革札は薄くなる傾向が認められる。武家政権の樹立や中世の戦乱は武装人口の増加を促し、厚い革材の慢性的な不足が惹

起し、従来甲冑に使用しなかった薄い材料で事に当たらなければならぬ事態をもたらしたと考えられる。薄い革札の防御力を補填する為、鉄札を交える面積が拡大し、札自体も盛上化が始まり、最終的には札をやめて板札に移行する流れである。

(註20) 該当するものが、富士山本宮浅間大社・相模国一之宮寒川神社・秩父棕神社にそれぞれ武田勝頼・武田信玄・北条氏邦の奉納品との触れ込みで伝来している。真偽のほどは別にしても各伝承を首肯させるような高級品揃いである。

殊に富士山本宮浅間大社の例は、奉納者の着用の類ではなく、祭神を擬人化したその召料（高貴な人が使うもの）に相応しい眺えであり、特別に調進された物であったことは確かである。16世紀の第3四半世紀段階としてはやや新様でとくに実戦本位と思われがちながら、この形式の甲冑が、格式と伝統を誇る屈指の大社に、神宝として奉納するのに遜色無いものとして著しく地位を上昇させていたことを示唆して余りあるものである。これらの事例から、関東及び東北地方では小札を排した甲冑の認知が早く、既に十六世紀後半には相応の普及が及んでいた事が想定される。

(註21) 上杉神社の3例・新潟県立歴史博物館の1例・個人蔵品数例が目下知られるところであろう。

(註22) 概して槍や鉄砲等一点に強力な貫徹力を有する攻撃兵器の登場・普及が、札製から板札の甲冑への転換を促したと兎角考えられてきた。一方でいち早く鉄砲を大量導入し、加えて畿内の生産力を自陣営の強化に取り入れる事に成功した織田信長や豊臣秀吉に仕えた織豊大名第一世代が、近年丸胴具足と呼ばれる札製甲冑に揃って執着していたことはより注目され得べきであろう。

もし、鉄砲が札製甲冑を排す要因であったとしたら、その威力を最も知る当事者がそれを使い続けた事実は大きな矛盾である。札生産が盛んな畿内ゆえに札製甲冑が作られ続け、その部材が入手困難な地域ではそれに代わるものとして板札を採用したのではと発想を改める時期に来ているものと考える。

※横書き変換、ルビ、小タイトル付与、改行、句読点追加、太字強調、括弧説明などの編集を嶋村が加えており、誤りや読みづらい点などの責任は嶋村にある。

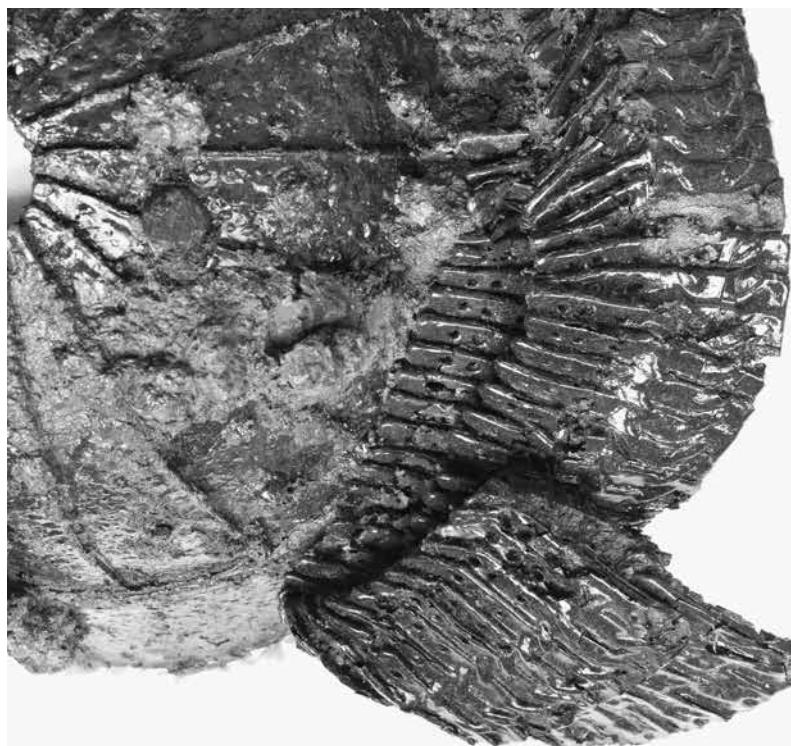
参考文献

- 金山順雄 2010 「発掘された小札探訪（九） 騎西城跡出土小札 一埼玉県・騎西町 室町期の三目札・平札と十六間筋兜の出土」 『甲冑武具下研究』168号 一般社団法人日本甲冑武具研究保存会
- 塙野博編 2001 『騎西町史』 考古資料編1 騎西町教育委員会
- 塙野博編 2005 『騎西町史』 通史編 騎西町教育委員会
- 竹村雅夫 2010 『上杉謙信・景勝と家中の武装』 宮帶出版社
- 竹村雅夫 2019 「戦国・桃山期における甲冑の東西」『特別展 侍 もののふの美の系譜』 福岡市博物館
- 富田勝治編 1990 『騎西町史』 中世資料編 騎西町教育委員会
- 豊田勝彦 2020 「『薩摩国山田文書』所載黒糸威胴丸及び想像復元」 『甲冑武具下研究』209号 一般社団法人 日本甲冑武具研究保存会
- 藤本正行 1990 「私市城跡出土の筋兜」 『歴史読本』
- 山田邦明 2020 人物叢書『上杉謙信』 吉川弘文館

図 版



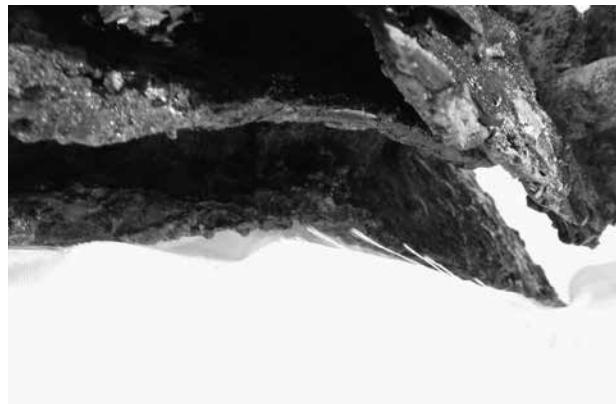
上面（左）



上面（右）



眉庇（前面）



眉庇（左側面）



吹返し（左）

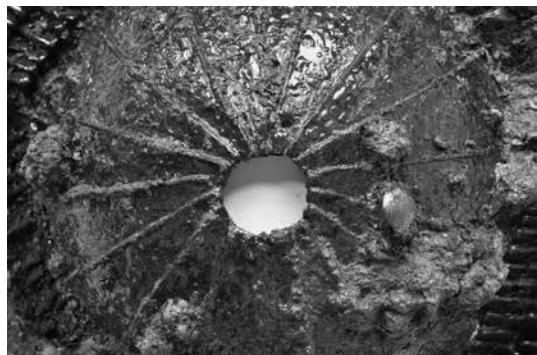


吹返し（右）



祓立





天辺の穴



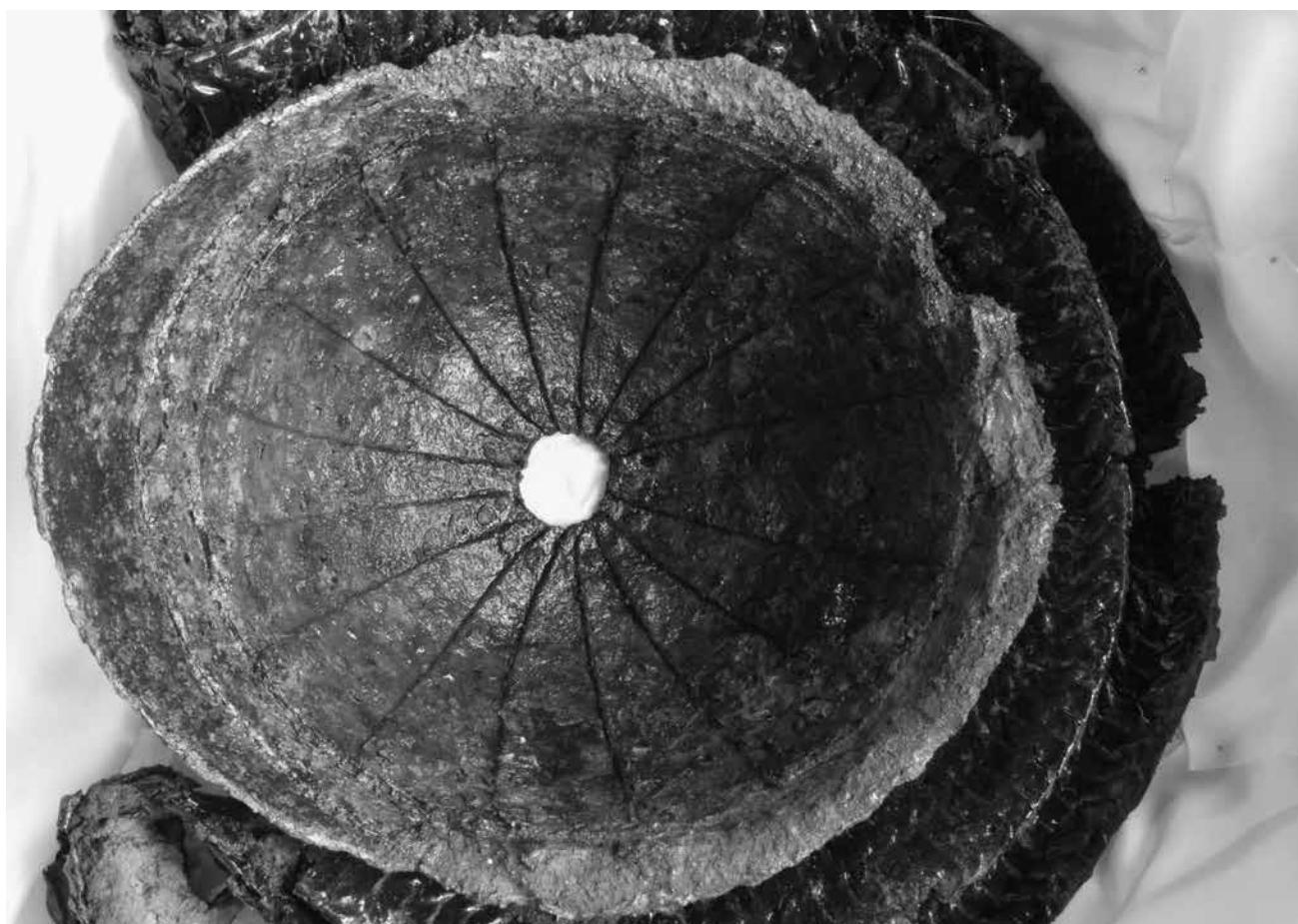
四天鉢（左前）



四天鉢（右後）



四天鉢（右前）



鉢 内面



前正中板



後正中板

鉢 内面



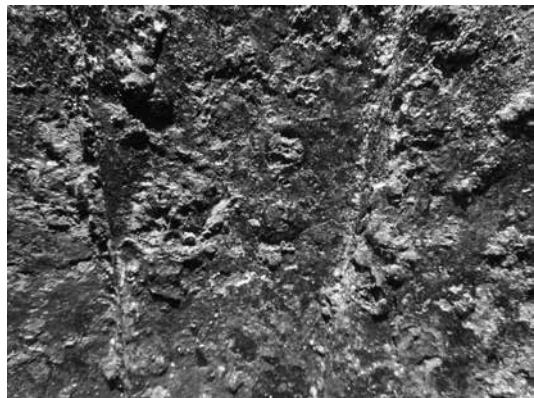
四天鉦・響穴（右前）



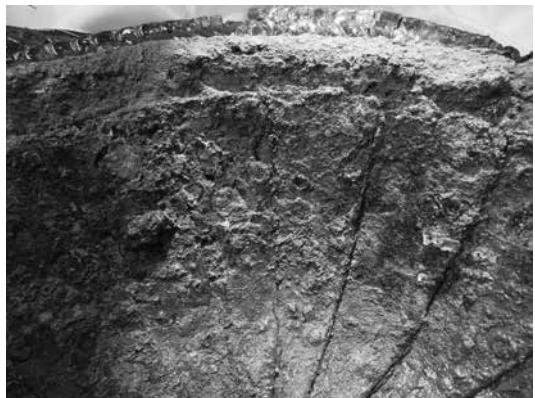
同左 拡大



四天鉦・響穴（右後）



同左 拡大



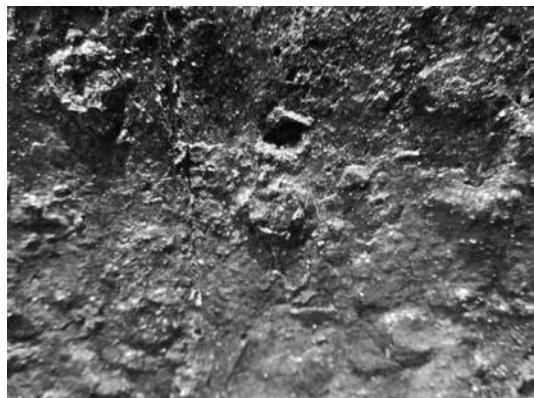
四天鉦・響穴（左後）



同左 拡大



四天鉦・響穴（左前）

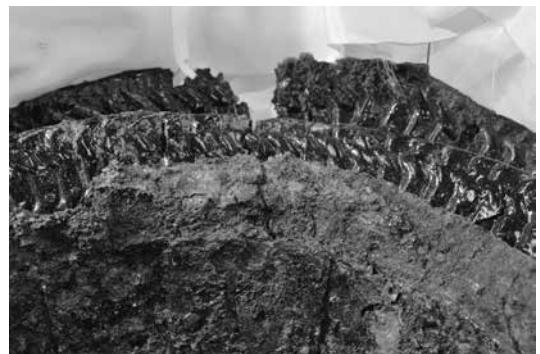


同左 拡大

鉢 内面



腰巻板 前 (継ぎ目なし)



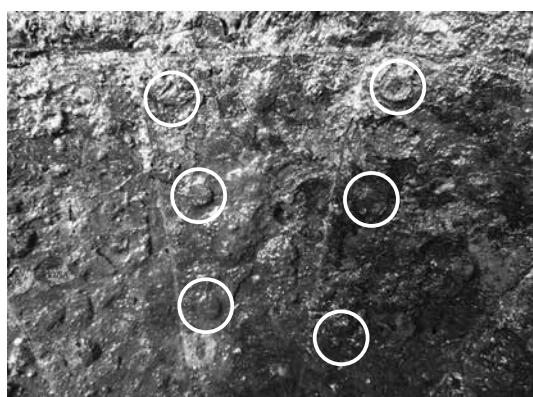
腰巻板 後 (継ぎ目不明瞭)



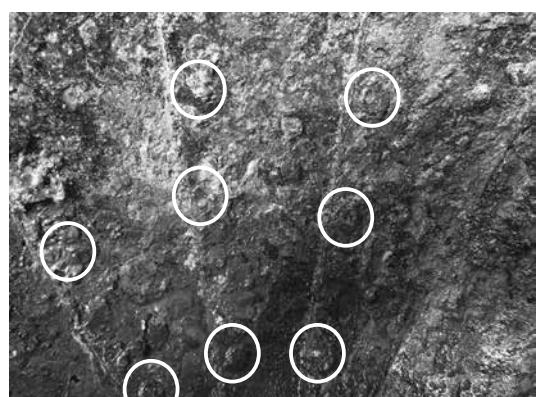
鉢付鉢カ (右前) 第 103 図 3 の (5)



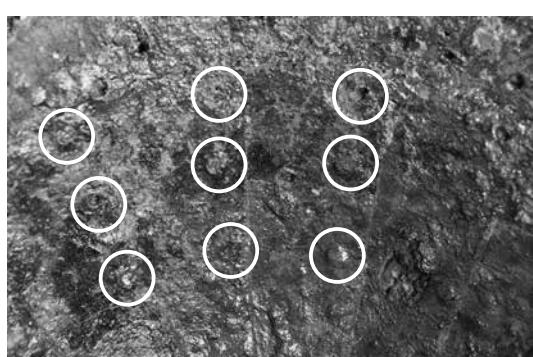
鉢 (不動環カ 第 103 図 3 の (8) 付近)



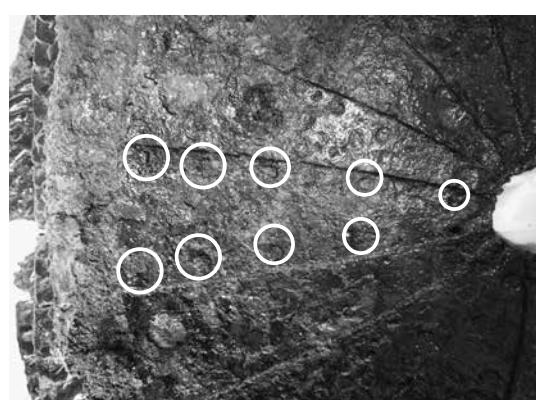
鉢 (右前)



鉢 (右後)



鉢 (左前)



鉢 (後)

鉢 内面



右前



右後

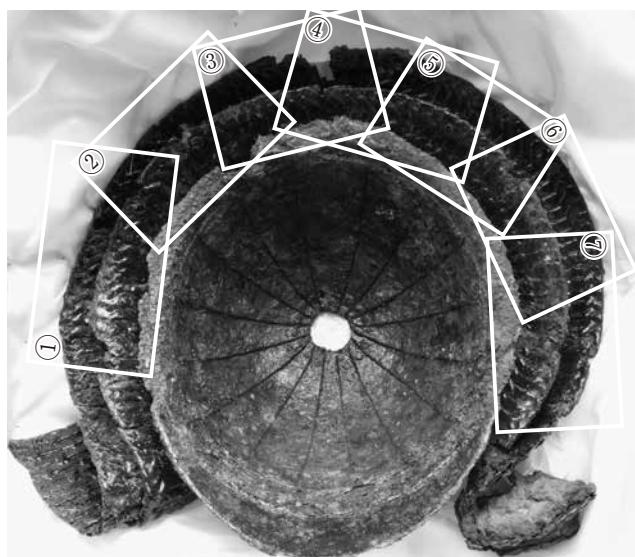


左前



左後

鉢 鞘内面



1



2



3



4



5



6

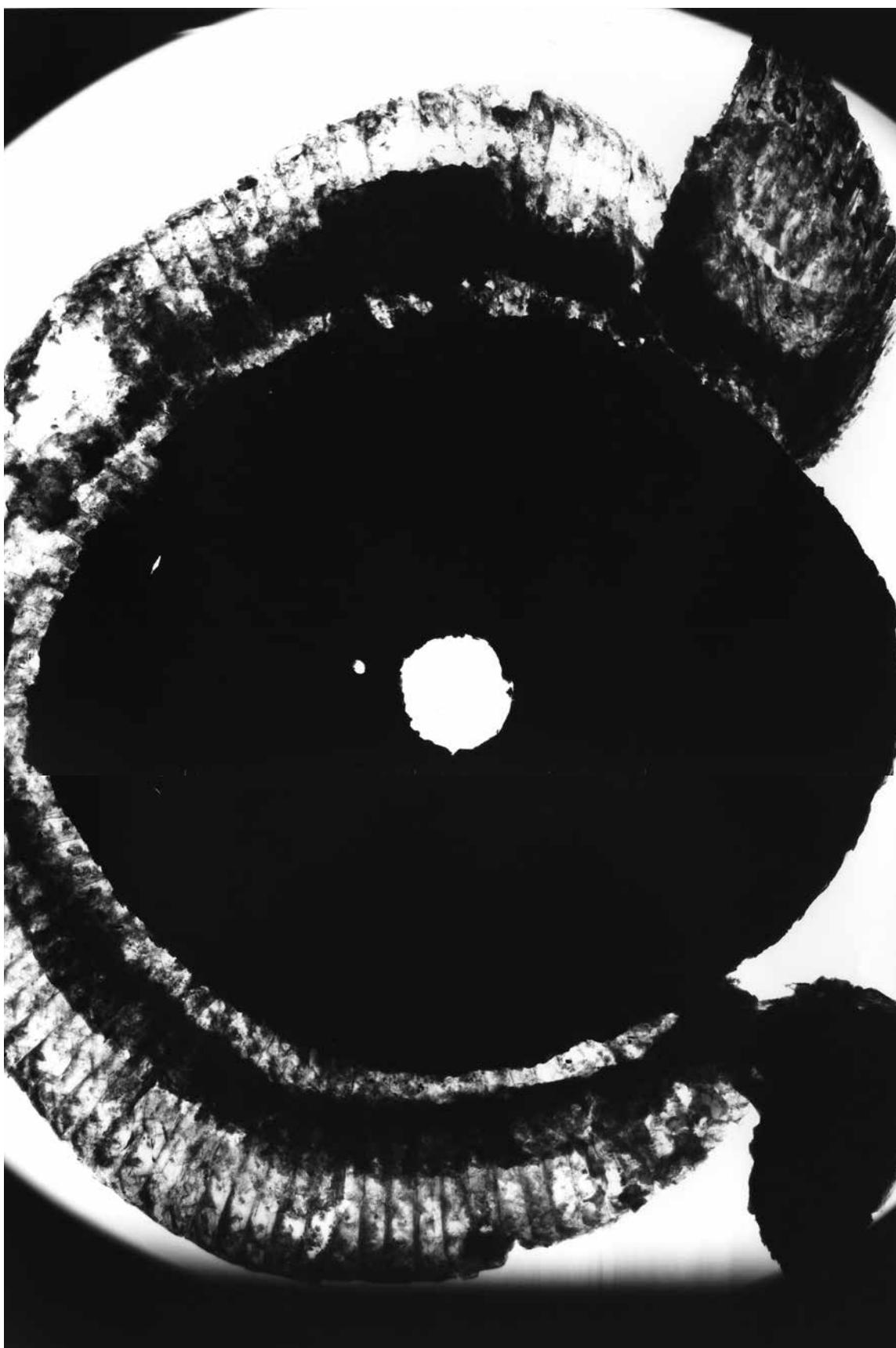


7

鞄 内面



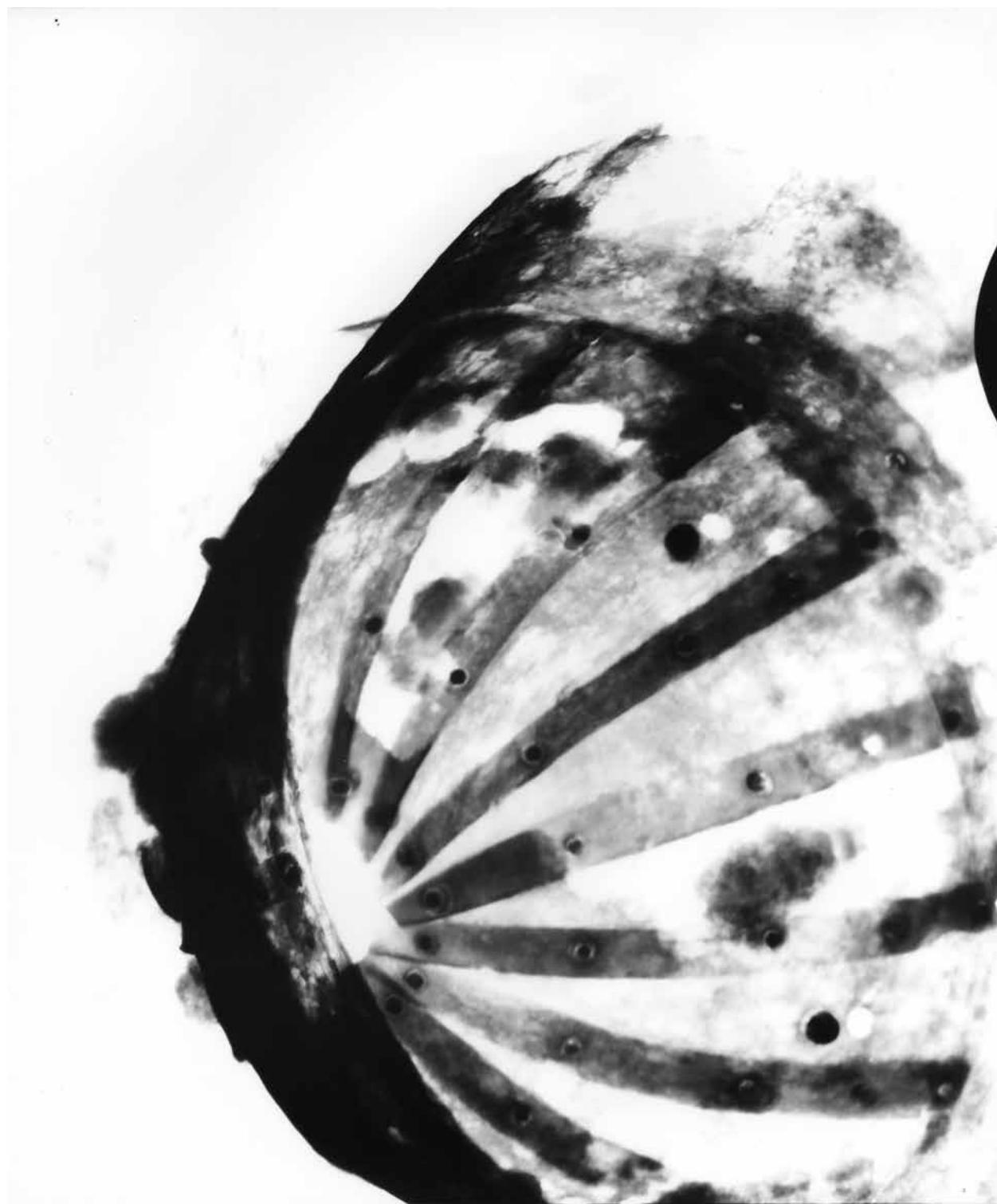
X線写真 上から（下が眉庇）



X線写真 鞠・吹返し 上から



X線写真 前面 鋼 碑立 やや上方から



X線写真 左側面 やや上方から





128



131



130



132



136



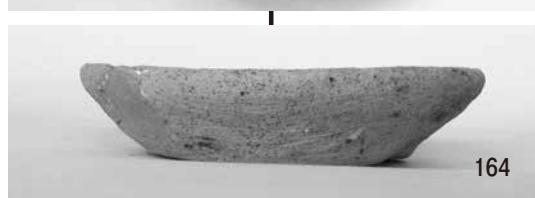
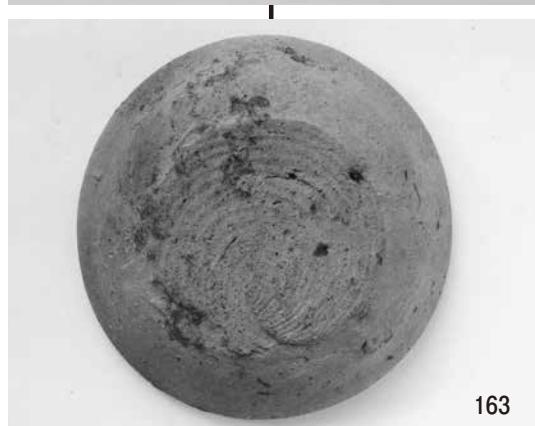
138



134



140







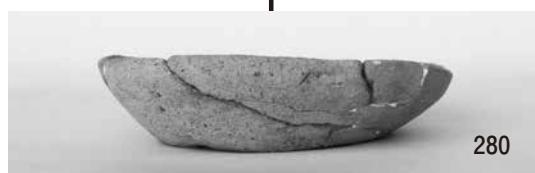
274



277



275



280



297



359

488

489

490

381

491



土製円盤



150



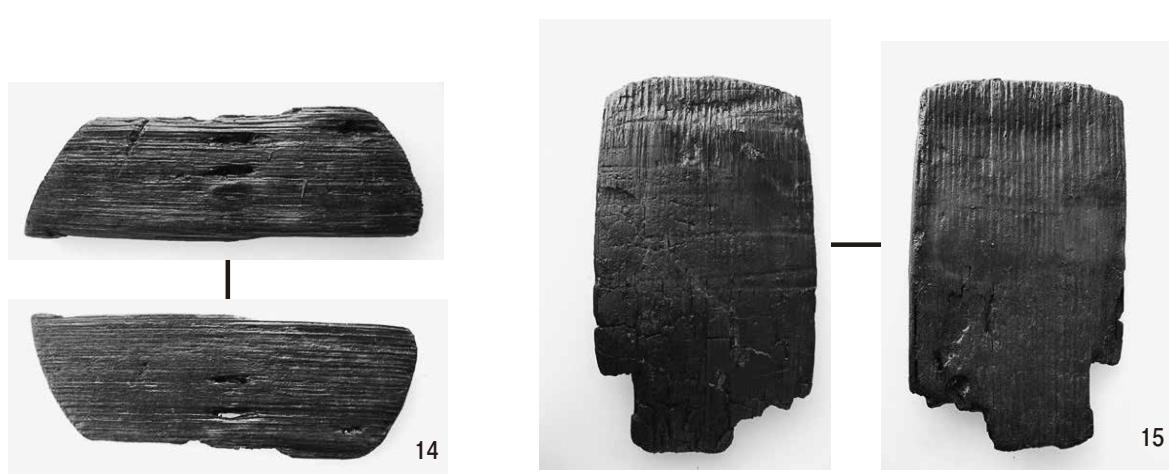
258

在地擂鉢

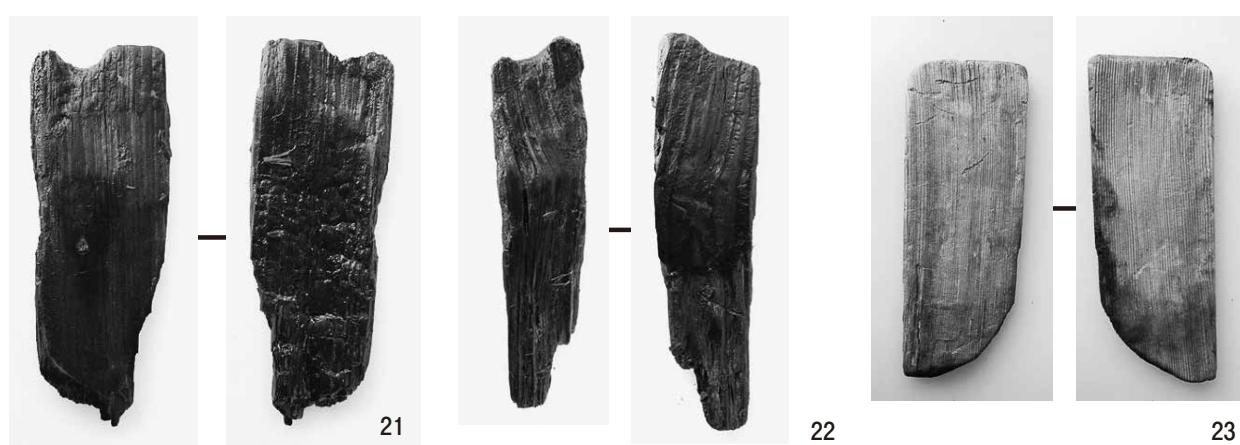
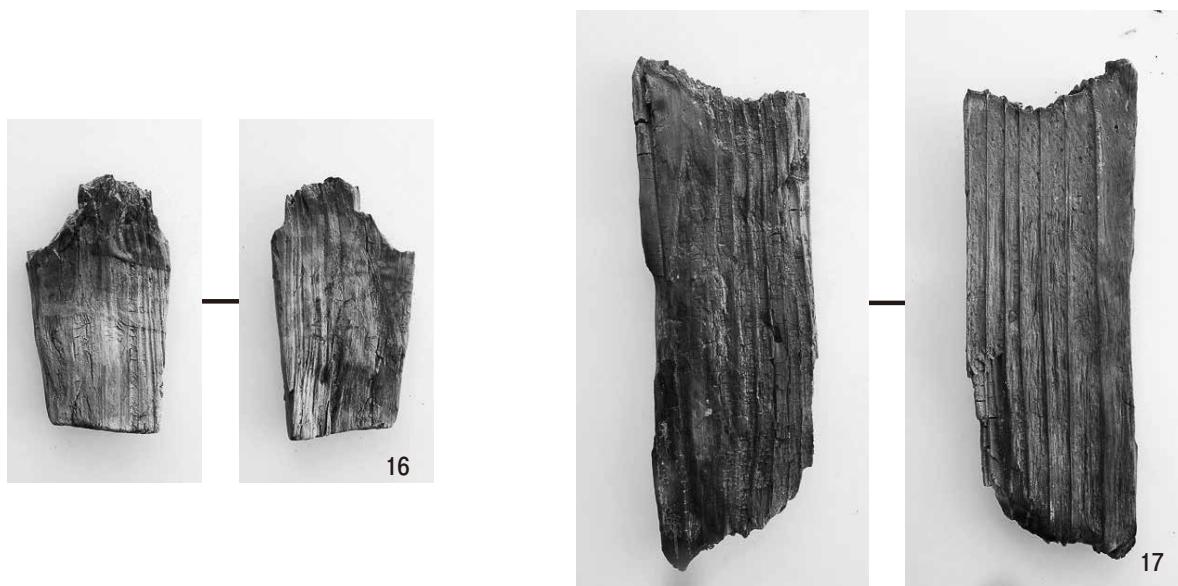


502

ほうろく



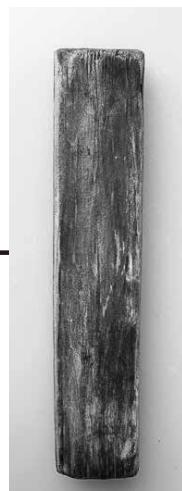
底板



桶一側板



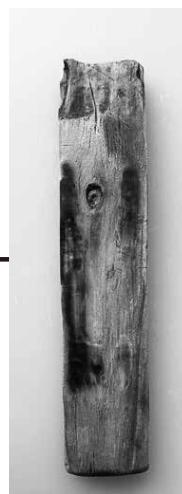
25-2



25-3



25-4



25-5

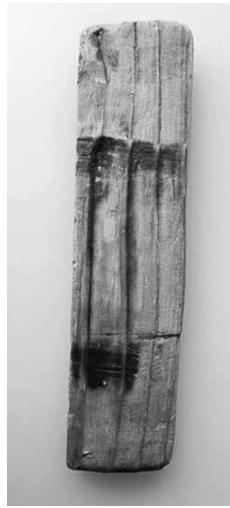


25-6

桶一側板



25-7



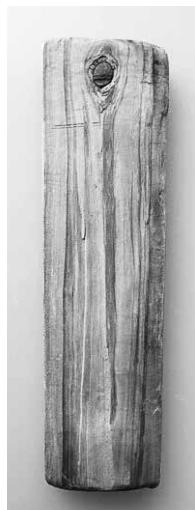
25-8



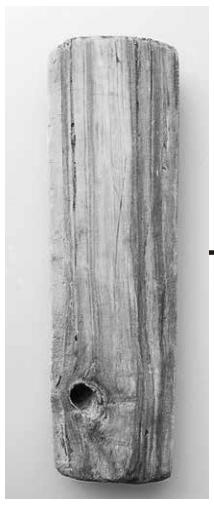
25-9



25-10

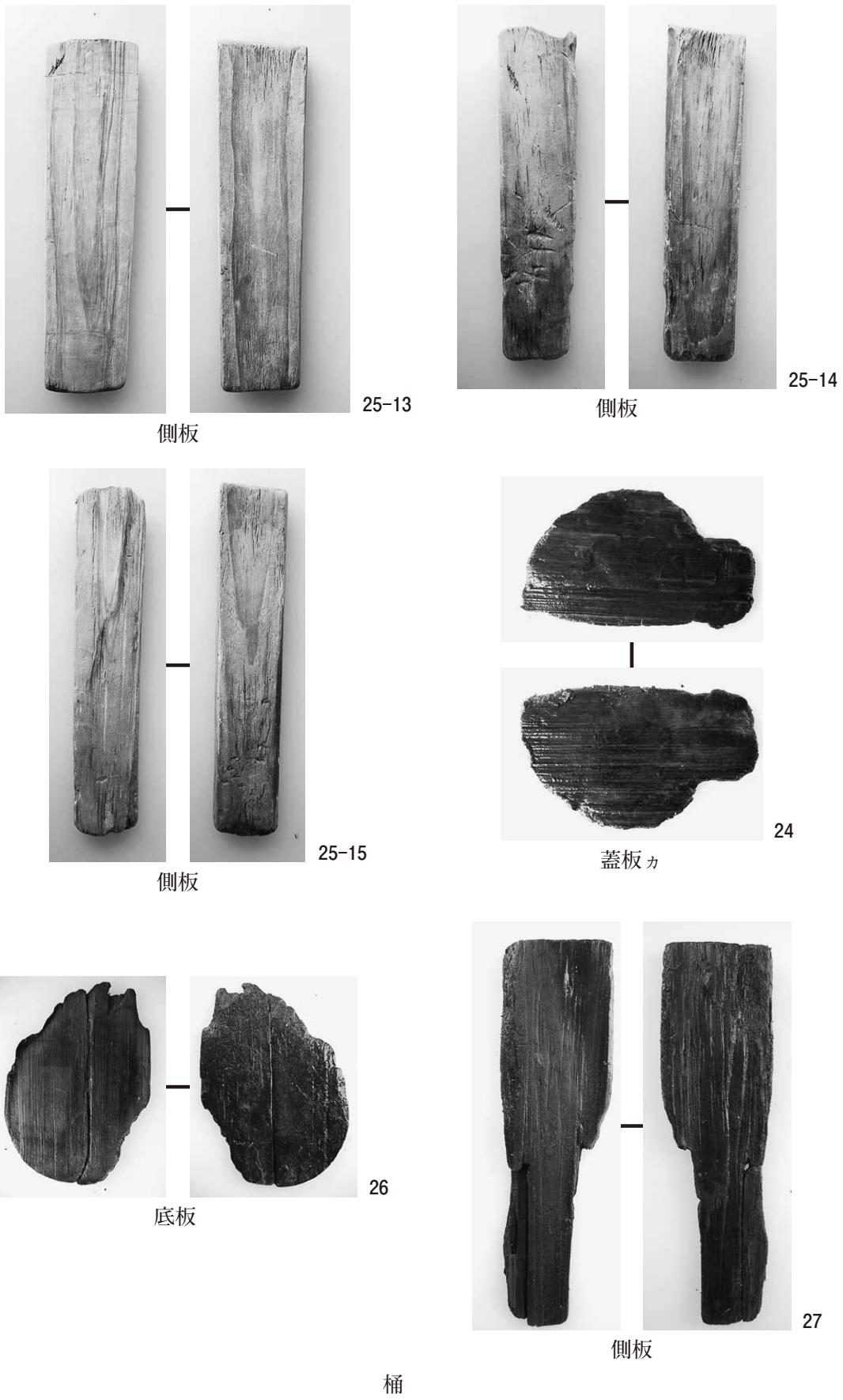


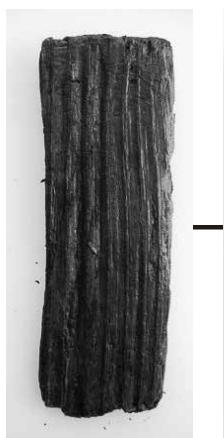
25-11



25-12

桶一側板





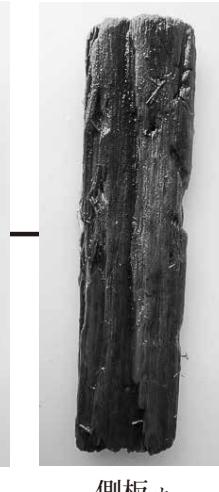
28



29



30

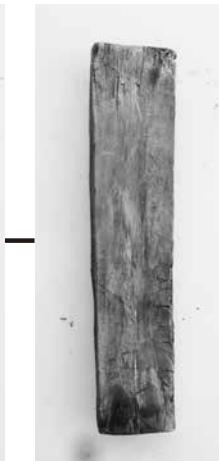


31

側板 カ

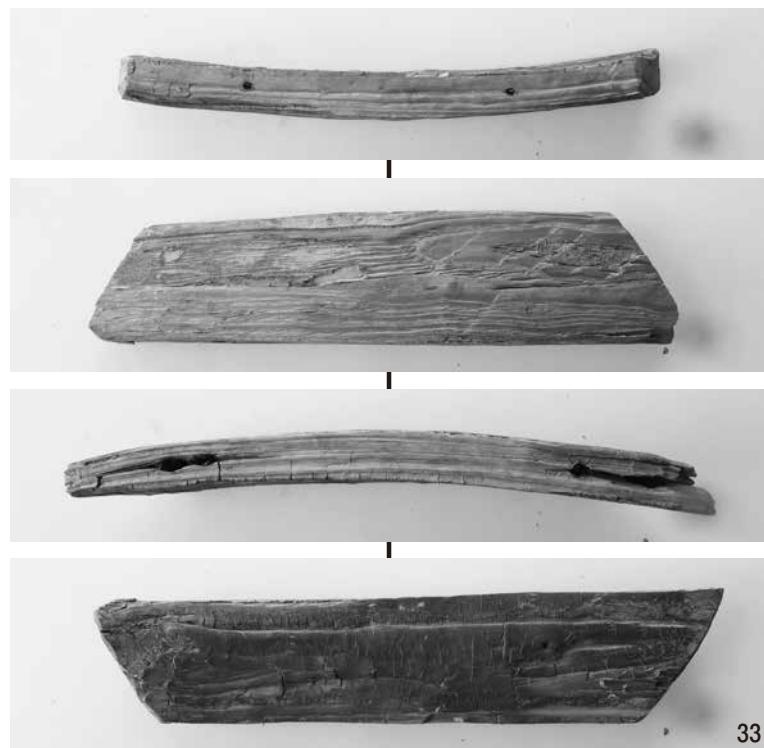


32

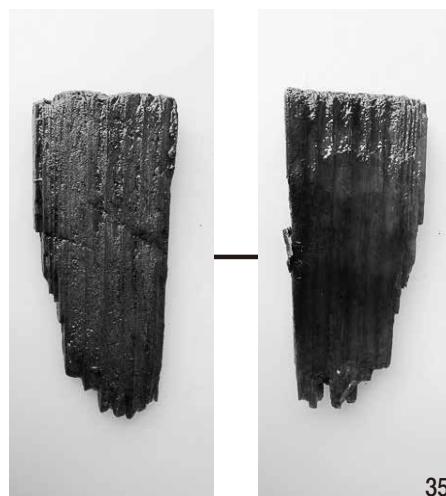


34

桶一側板

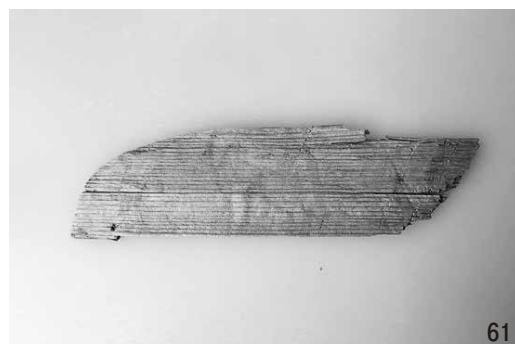


桶一底板



35

桶一側板



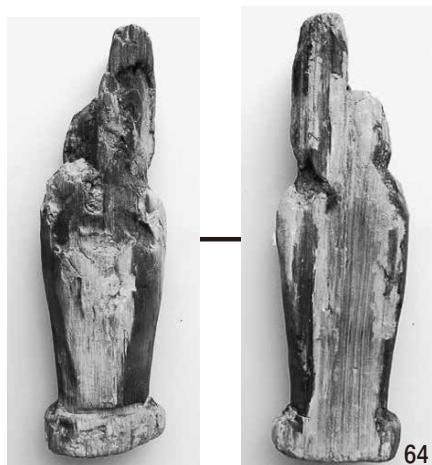
61

折敷一底板 カ



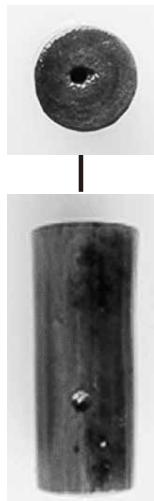
63

付札状製品



柄 カ

64



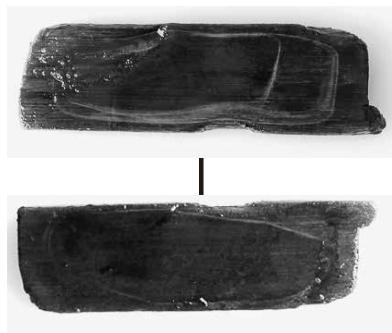
65

木錘 力



66

楕円形製品



67



68

板状製品

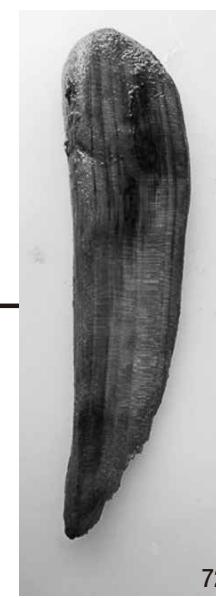
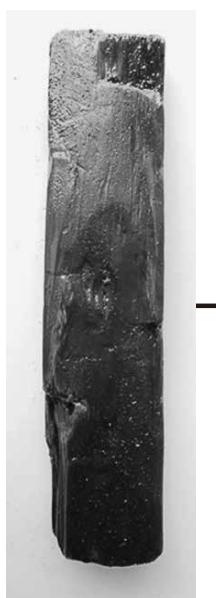


板状製品



材／加工材

70



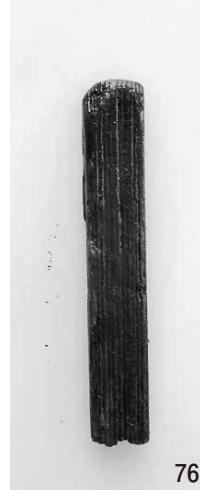
73



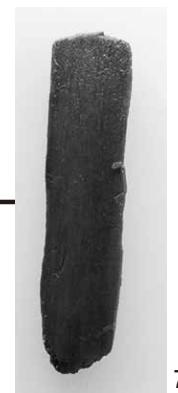
74



75

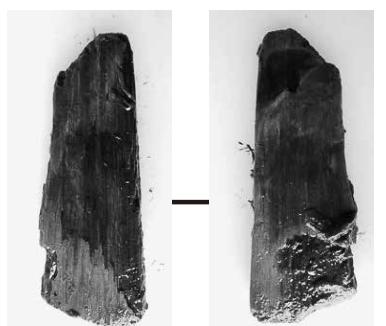


76



77

材／加工材



材／加工材

78



材／丸木材

79



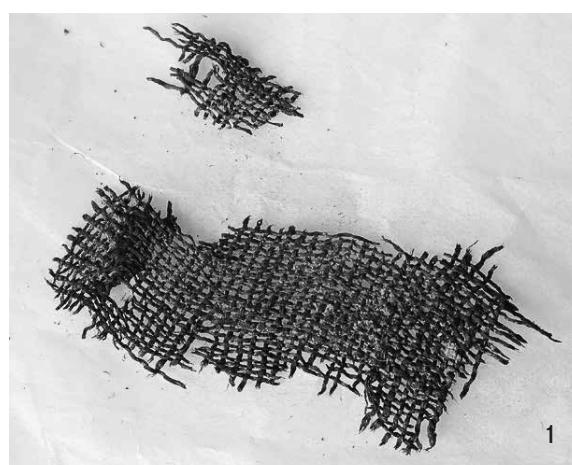
80

材／丸木材



81

材／丸木材片



1

布



2

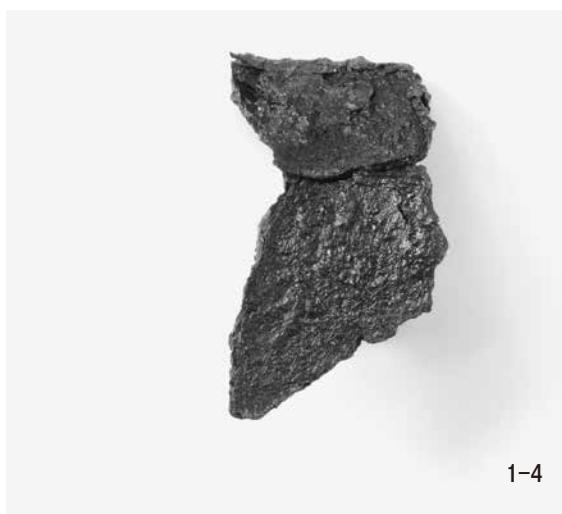
縄



袋入り銭貨



1-1



1-4



1-2



1-5



1-3



1-6

鉄鍋



湯釜



24

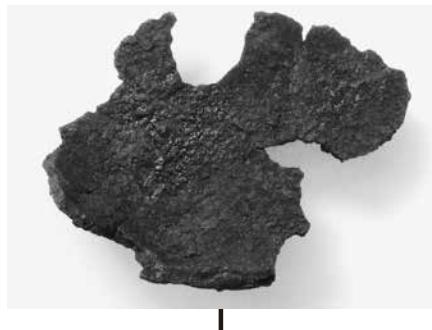


25

薙鎌

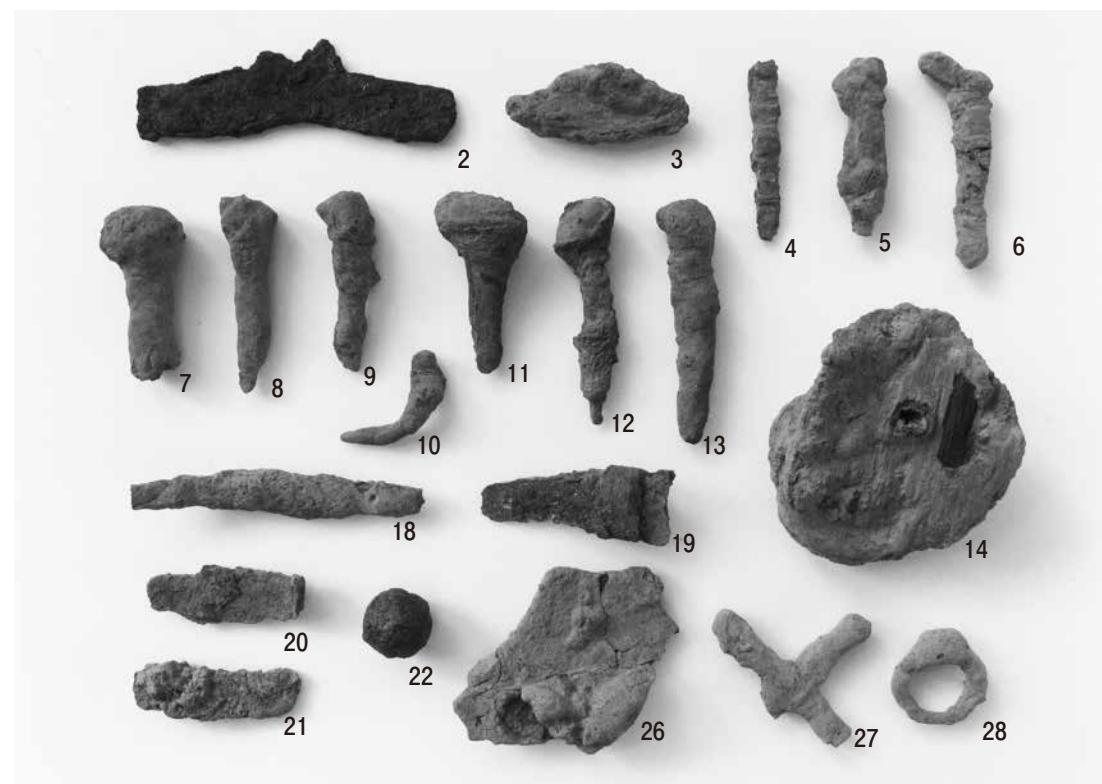


蓋



17

香炉



鉄製品

報 告 書 抄 錄

印刷仕様

【印刷】 オフセット印刷
【製本】 並製本 糸かがり
【組版】 本文写真植字 横組 14級 明朝体 (23字×40行) 段組 2段
【用紙】 紙 質：中性紙
表 紙：レザック66（うすあい）四六判215kg
見返し：色上質 特厚口 アイボリー
扉：上質紙 A判70.5kg
口絵カラー図版：アート A判70.5kg
巻末写真図版：ハイコート A判70.5kg
本文：上質紙 A判57.5kg

加須市埋蔵文化財調査報告書 第15集

騎西城跡

第15区調査

－中近世編－

遺物 1

令和4年3月31日発行

発 行 加須市教育委員会

〒347-8501 埼玉県加須市三俣二丁目1番地1

印 刷 関東図書株式会社